大肥吉竹遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第48集

2004年

日田市教育委員会

日田市埋蔵文化財調査報告書第48集

大肥吉竹遺跡

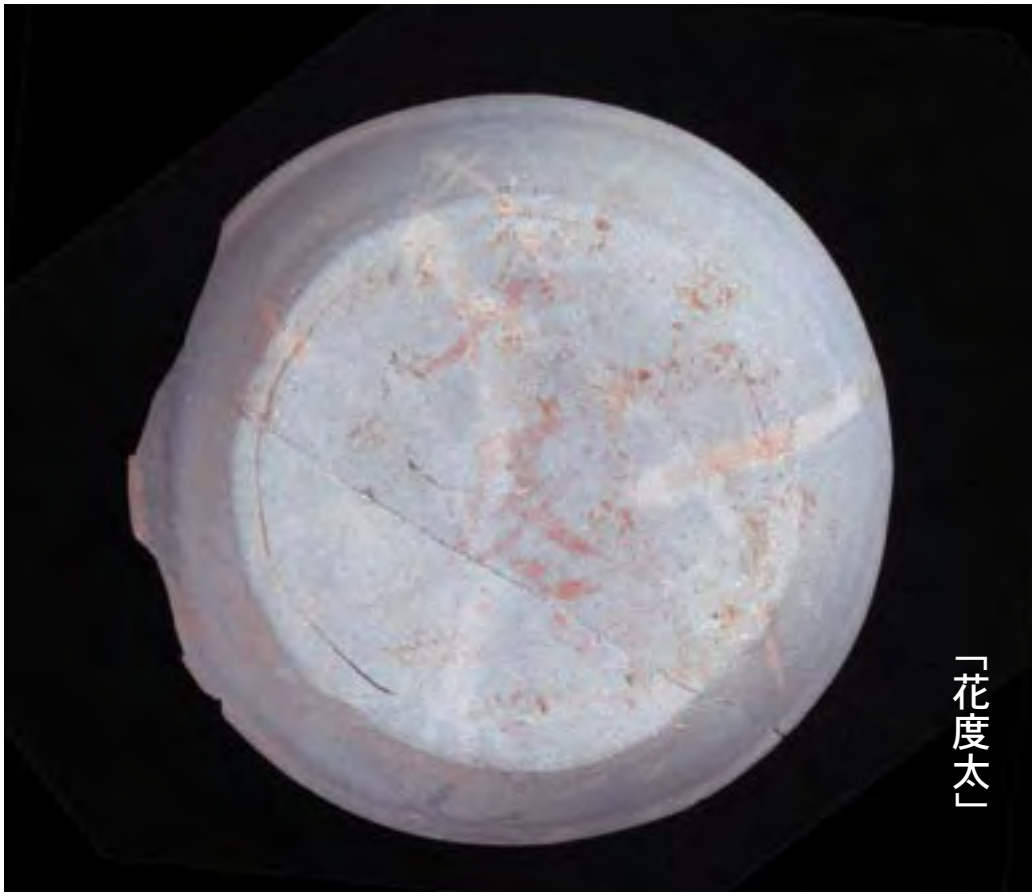
2004年

日田市教育委員会

大肥吉竹遺跡周辺空中写真

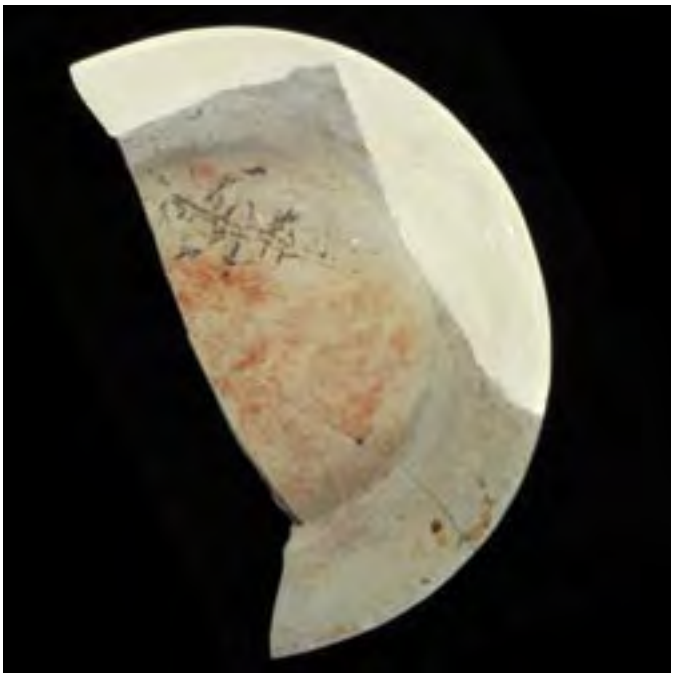
大肥吉竹遺跡遠景

16号竪穴住居跡出土朱墨土器

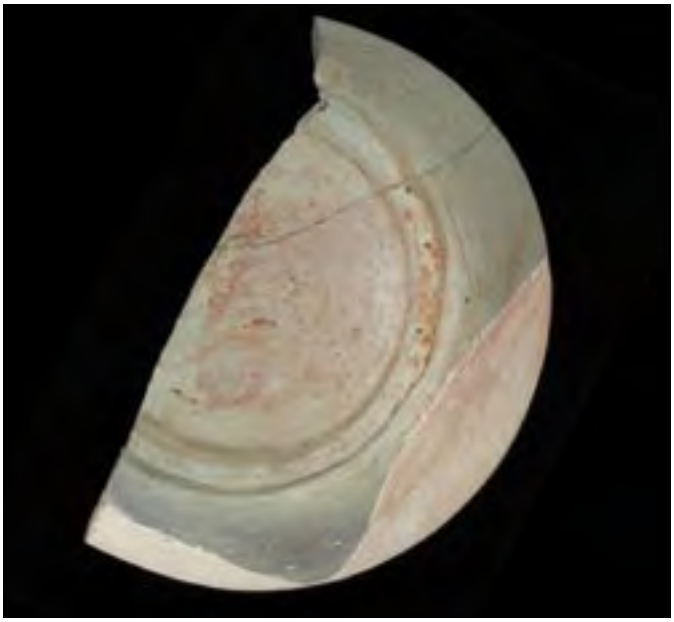


16号竪穴住居跡出土朱墨土器底面〔色調補正後〕

18号竪穴住居跡出土朱墨土器



18号竪穴住居跡出土朱墨土器内面



18号竪穴住居跡出土朱墨土器底面
（色調補正後）

序　　文

古来より九州の交通の要所であった本市には、多くの文化財が市内各所に残されています。

この中でも、市西部の大肥川一帯に広がる谷地は北部九州への玄関口として、数多くの遺跡が分布することが近年明らかになりつつあります。

さて、この地域では平成９年度より大規模な農業基盤整備事業が施工され、工事によってやむなく消滅する埋蔵文化財について、当委員会では事前に発掘調査による記録保存を実施してまいりました。

本書は、そのなかでも平成12～13年度に県営圃場整備事業大明地区吉竹工区に伴って発掘調査を行った、大肥吉竹遺跡の調査内容をまとめたものです。遺跡の調査では、縄文時代の生活跡、古墳時代から古代の大規模な集落跡などが発見されました。

なかでも、古代の集落跡から出土した朱墨土器は、この遺跡を地域の中心集落として位置付けることのできる貴重な資料であるとともに、古代の集落の様子を窺い知ることのできる文字資料として注目されます。

本書が、市民の方々の埋蔵文化財に対する理解と保護につながり、地域の歴史の解明や学術研究等にご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、作業に従事いただきました皆様方や、調査にご協力いただきました関係者の方々に対しまして心から厚くお礼申し上げます。

平成16年３月19日

日田市教育委員会
教育長　**諫　山　康　雄**

例　　言

1　本書は、日田市教育委員会が平成12、13年度に実施した大肥吉竹遺跡の発掘調査報告書である。

2　大明地区一帯は古代の条里跡として周知されてきたため、これまで遺跡名を「大肥条里吉竹地区」として報告してきた。しかし、この一帯での発掘調査の結果、条里跡は確認出来なかったことから、遺跡名称として不適当と判断されるため、本書より『大肥吉竹遺跡』と改めることとする。なお、他の条里地区の遺跡名は契約上の名称でもあるため、今回は変更せずにこれまでの遺跡名として掲載することとする。

3　調査は県営圃場整備事業大明地区に伴い、大分県日田地方振興局の委託業務として、日田市が受託し、日田市教育委員会が事業主体となり実施した。

4　調査にあたっては大分県日田地方振興局耕地課、日田市経済部農政課、大明地区圃場整備組合組合長　森山有男氏の協力を得た。

5　調査現場での写真撮影・実測は渡邉が行い、一部、江上正高（別府大学学生）の協力を得た。また、全体の測量作業を㈱埋蔵文化財サポートシステムの委託により、個別遺構を雅企画有限会社の委託により実施した。

6　本書に掲載した遺物実測は渡邉が行い、一部㈱埋蔵文化財サポートシステムの委託による。遺構･遺物の製図は九州文化財リサーチの委託により実施し、藤野美音（文化課補助員）の多大な助力を得た。

7　空中写真撮影は有限会社スカイサーベイに委託し、その成果品を使用した。

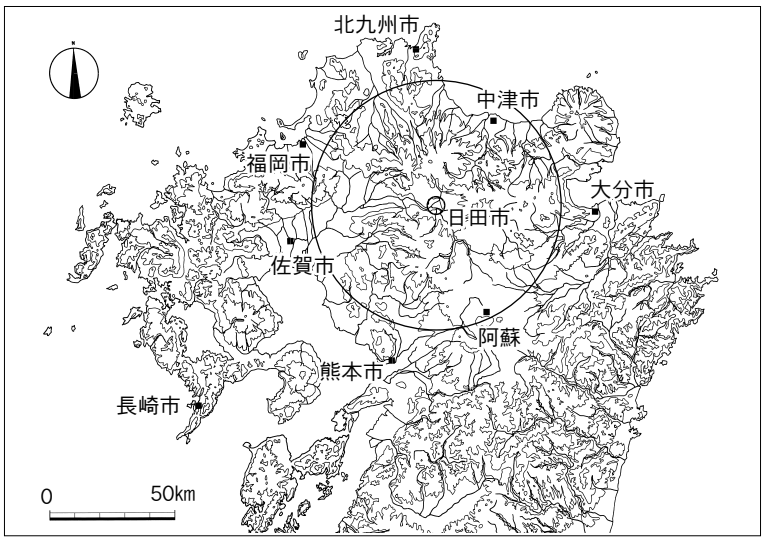
8　遺物の写真撮影は長谷川正美氏（雅企画有限会社）の撮影による。

9　本書に使用した図面中の方位は、全体図が国土座標を使用し、個別遺構は磁北で表示している。

10　写真図版に付している数字番号は挿図遺物番号に対応する。

11　出土遺物および図面、写真類は日田市埋蔵文化財センターにて保管している。

12　本書の執筆編集は渡邉が担当した。



日田市の位置

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 1
⑴　県営圃場整備事業大明地区に伴う発掘調査概要 …… 1
⑵　調査に至る経過 …… 3
⑶　調査経過と調査組織 …… 5

Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 8
⑴　遺跡の位置と地理的環境 …… 8
⑵　歴史的環境 …… 10
⑶　大肥川流域の歴史的環境 …… 11

Ⅲ　調査の内容 …… 21
⑴　調査の概要 …… 21
⑵　基本層序 …… 21
⑶　遺構と遺物 …… 27
１．竪穴住居跡 …… 27
２．掘立柱建物 …… 67
３．溝 …… 83
４．竪穴状遺構 …… 95
５．土坑 …… 102
６．柱穴 …… 113
７．遺物包含層 …… 113
８．その他の遺構出土遺物 …… 121

Ⅳ　考察 …… 123
⑴　各遺構の番号の対照と切り合い関係図 …… 123
⑵　遺構の時期について …… 124
⑶　大肥吉竹遺跡の集落変遷 …… 127
⑷　朱墨土器について …… 129
⑸　大肥吉竹遺跡の位置付け …… 131

Ⅴ　おわりに …… 132

挿　図　目　次

（Ⅰ　はじめに）
第１図　圃場整備事業区域と調査区位置図（1/25,000）…… 2
第２図　試掘調査出土遺物（1/3）…… 3
第３図　調査区位置図（1/3,000）…… 4
（Ⅱ　遺跡の立地と環境）
第４図　大肥吉竹遺跡周辺地形図（1/10,000）…… 9
第５図　主要遺跡分布図（1/40,000）…… 19-20
（Ⅲ　調査の内容）
第６図　水田層出土遺物（1/3）…… 21
第７図　調査区北壁土層図（1/40）…… 22
第８図　遺構配置図（1/400）…… 23-26
第９図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 27
第10図　1号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 27
第11図　2号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 28
第12図　2号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 28
第13図　2号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 29
第14図　3号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 29
第15図　3号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 29
第16図　4号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 30
第17図　4号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 31
第18図　4号竪穴住居跡出土遺物実測図①（1/3）…… 32
第19図　4号竪穴住居跡出土遺物実測図②（1/3）…… 33
第20図　5号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 34
第21図　5号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 35
第22図　5号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 35
第23図　6号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 36
第24図　6号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 36
第25図　6号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 37
第26図　7号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 38
第27図　7号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 38
第28図　7号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 38
第29図　8号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 39
第30図　8号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 39
第31図　8号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 39
第32図　9号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 40
第33図　9号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 40

第34図　9号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 41
第35図　10号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 41
第36図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 41
第37図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 42
第38図　11号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 43
第39図　12号竪穴住居跡実測図（1/30）…… 44
第40図　12号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 44
第41図　13号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 44
第42図　13号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 45
第43図　13号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 45
第44図　14号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 45
第45図　14号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 45
第46図　14号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 46
第47図　15号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 47
第48図　15号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 47
第49図　15号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 47
第50図　16号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 49
第51図　16号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 49
第52図　17号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 50
第53図　17号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 50
第54図　17号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 51
第55図　18号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 52
第56図　18号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 52
第57図　18号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 53
第58図　19号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 53
第59図　20号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 53
第60図　20号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 53
第61図　21号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 54
第62図　23号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 54
第63図　23号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 54
第64図　24号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 55
第65図　24号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 56
第66図　24号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 57
第67図　25号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 58
第68図　25号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 59
第69図　25号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 60
第70図　26号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 61
第71図　26号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 61

第72図　26号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 62
第73図　27号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 63
第74図　27号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）…… 63
第75図　27号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 64
第76図　28、29、30、31号竪穴住居跡実測図（1/60）…… 65
第77図　28、29、30、31号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）…… 66
第78図　1号掘立柱建物実測図（1/60）…… 68
第79図　2号掘立柱建物実測図（1/60）…… 69
第80図　3号掘立柱建物実測図（1/60）…… 70
第81図　4号掘立柱建物実測図（1/60）…… 71
第82図　5号掘立柱建物実測図（1/60）…… 72
第83図　6号掘立柱建物実測図（1/60）…… 73
第84図　7号掘立柱建物実測図（1/60）…… 74
第85図　8号掘立柱建物実測図（1/60）…… 75
第86図　9号掘立柱建物実測図（1/60）…… 76
第87図　10号掘立柱建物実測図（1/60）…… 78
第88図　11号掘立柱建物実測図（1/60）…… 79
第89図　12号掘立柱建物実測図（1/60）…… 80
第90図　掘立柱建物群出土遺物実測図①（1/3）…… 81
第91図　掘立柱建物群出土遺物実測図②（1/3）…… 82
第92図　溝配置図（1/500）…… 84
第93図　1、2、3号溝実測図（1/40、1/80）…… 85-86
第94図　1号溝出土遺物実測図（1/3）…… 87
第95図　2号溝出土遺物実測図（1/3）…… 87
第96図　3号溝出土遺物実測図①（1/3）…… 88
第97図　3号溝出土遺物実測図②（1/3）…… 89
第98図　５、６号溝実測図（1/40、1/80、1/150）…… 90
第99図　７、８号溝実測図（1/80）…… 91
第100図　９、10号溝実測図（1/80）…… 92
第101図　11号溝実測図（1/80）…… 93
第102図　８、10、11号溝出土遺物実測図（1/3）…… 94
第103図　１号竪穴状遺構実測図（1/40）…… 95
第104図　１号竪穴状遺構出土遺物実測図（1/3）…… 96
第105図　２号竪穴状遺構実測図（1/40）…… 96
第106図　２号竪穴状遺構出土遺物実測図（1/3）…… 97
第107図　３号竪穴状遺構実測図（1/40）…… 98
第108図　３号竪穴状遺構出土遺物実測図（1/3）…… 98
第109図　４号竪穴状遺構実測図（1/40）…… 98

第110図　４号竪穴状遺構出土遺物実測図（1/3）…… 98
第111図　５号竪穴状遺構実測図（1/40）…… 99
第112図　５号竪穴状遺構出土遺物実測図（1/3）…… 99
第113図　６号竪穴状遺構実測図（1/40）……100
第114図　７号竪穴状遺構出土遺物実測図（1/3）……101
第115図　１、２、３号土坑実測図（1/30）……103
第116図　４、５、６、７、８号土坑実測図（1/30）……104
第117図　９、10、11、12、13号土坑実測図（1/30）……106
第118図　14、15、16、17、18号土坑実測図（1/30）……107
第119図　19、20、21、22号土坑実測図（1/30）……108
第120図　23、24号土坑実測図（1/30）……109
第121図　土坑出土遺物実測図①（1/3）……111
第122図　土坑出土遺物実測図②（1/3）……112
第123図　柱穴出土遺物実測図①（1/3）……114
第124図　柱穴出土遺物実測図②（1/3）……115
第125図　トレンチ土層実測図（1/40）……116
第126図　遺物包含層グリット実測図（1/100）……116
第127図　遺物包含層グリット出土遺物実測図①（1/3）……117
第128図　遺物包含層グリット出土遺物実測図②（1/3）……118
第129図　鉄器実測図（1/2）……119
第130図　鉄生産関連遺物実測図（1/2）……119
第131図　石器実測図①（1/3）……120
第132図　石器実測図②（1/3）……121
第133図　その他の遺構出土遺物実測図（1/3）……122
（Ⅳ　まとめ）
第134図　遺構時期別変遷図……123

写　真　図　版　目　次

巻頭図版１　上　大肥吉竹遺跡周辺空中写真
　　下　大肥吉竹遺跡遠景
巻頭図版２　上　16号竪穴住居跡出土朱墨土器
　　下　16号竪穴住居跡出土朱墨土器（色調補正後）
巻頭図版３　上　18号竪穴住居跡出土朱墨土器
　　中　18号竪穴住居跡出土朱墨土器内面
　　下　18号竪穴住居跡出土朱墨土器底面（色調補正後）
本文写真　写真１　試掘調査風景
　　写真２　機械作業風景
　　写真３　調査風景
　　写真４　現地説明風景
　　写真５　体験発掘風景
　　写真６　調査区北壁土層
図版１　上　調査区全景（真上から）
　　中　調査区東側（真上から）
図版２　上　調査区中央（真上から）
　　下　調査区西側（真上から）
図版３　上　１号竪穴住居跡（東から）
　　中　１号竪穴住居跡カマド
　　下　２号竪穴住居跡（東から）
図版４　上　２号竪穴住居跡カマド
　　中　２号竪穴住居跡カマド縦土層
　　下　２号竪穴住居跡カマド横土層
図版５　上　３号竪穴住居跡（北から）
　　中　４号竪穴住居跡（東から）
　　下　４号竪穴住居跡遺物出土状況
図版６　上　４号竪穴住居跡カマド
　　中　４号竪穴住居跡カマド縦土層
　　下　４号竪穴住居跡カマド横土層
図版７　上　５号竪穴住居跡（西から）
　　中　５号竪穴住居跡カマド
　　下　５号竪穴住居跡カマド縦土層
図版８　上　５号竪穴住居跡カマド横土層
　　中　６号竪穴住居跡（南から）
　　下　６号竪穴住居跡カマド
図版９　上　６号竪穴住居跡遺物出土状況
　　中　７号竪穴住居跡（東から）
　　下　７号竪穴住居跡カマド
図版10　上　８号竪穴住居跡（東から）
　　中　８号竪穴住居跡カマド
　　下　８号竪穴住居跡カマド土層
図版11　上　９号竪穴住居跡（北から）
　　中　９号竪穴住居跡カマド
　　下　９号竪穴住居跡カマド縦土層
図版12　上　９号竪穴住居跡カマド横土層
　　中　10号竪穴住居跡（南から）
　　下　10号竪穴住居跡カマド
図版13　上　11号竪穴住居跡（北から）
　　中　11号竪穴住居跡遺物出土状況
　　下　13号竪穴住居跡（南から）
図版14　上　13号竪穴住居跡カマド土層
　　中　14号竪穴住居跡（東から）
　　下　14号竪穴住居跡カマド

図版15　上　14号竪穴住居跡カマド縦土層
　　中　14号竪穴住居跡カマド横土層
　　下　15号竪穴住居跡（東から）
図版16　上　15号竪穴住居跡カマド
　　中　16号竪穴住居跡（南から）
　　下　16号竪穴住居跡遺物出土状況
図版17　上　17号竪穴住居跡（南から）
　　中　17号竪穴住居跡カマド
　　下　17号竪穴住居跡カマド縦土層
図版18　上　17号竪穴住居跡カマド横土層
　　中　18号竪穴住居跡（南から）
　　下　18号竪穴住居跡カマド
図版19　上　18号竪穴住居跡カマド縦土層
　　中　18号竪穴住居跡カマド横土層
　　下　19号竪穴住居跡（北から）
図版20　上　20号竪穴住居跡（南から）
　　中　21号竪穴住居跡（南から）
　　下　23号竪穴住居跡（北から）
図版21　上　24号竪穴住居跡（北から）
　　中　24号竪穴住居跡カマド
　　下　24号竪穴住居跡遺物出土状況
図版22　上　25号竪穴住居跡（南から）
　　中　25号竪穴住居跡カマド
　　下　25号竪穴住居跡カマド近景
図版23　上　25号竪穴住居跡カマド崩落石除去後
　　中　25号竪穴住居跡遺物出土状況
　　下　26号竪穴住居跡（東から）
図版24　上　26、27号竪穴住居跡（東から）
　　中　27号竪穴住居跡カマド
　　下　22、28～31号竪穴住居跡（北から）
図版25　上　西側掘立柱建物群（１、８号）
　　下　中央掘立柱建物群
　　（２～６、10～12号）
図版26　上　１号掘立柱建物（真上から）
　　中　２号掘立柱建物（真上から）
　　下　３号掘立柱建物（真上から）
図版27　上　4号掘立柱建物（真上から）
　　中　５号掘立柱建物（真上から）
　　下　６号掘立柱建物（真上から）
図版28　上　８号掘立柱建物（真上から）
　　中　10号掘立柱建物（真上から）
　　下　11号掘立柱建物（真上から）
図版29　上　12号掘立柱建物（真上から）
　　中　１号溝（北から）
　　下　２号溝（北から）
図版30　上　３号溝（北から）
　　中　３号溝土器出土状況
　　下　４号溝（北から）
図版31　①１、２号溝土層
　　②１、３号溝土層①
　　③１、３号溝土層②
　　④３,４号溝土層
　　⑤２号溝土層
　　⑥２号溝土層①
　　⑦２号溝土層②
　　⑧３号溝土層
図版32　上　５号溝（北から）
　　中　６号溝（北から）
　　下　６号溝土層
図版33　上　８号溝（北から）
　　中　９号溝（北から）
　　下　10号溝（北から）
図版34　上　１号竪穴状遺構（南から）
　　中　２号竪穴状遺構（東から）
　　下　２号竪穴状遺構土層
図版35　上　２号竪穴状遺構遺物出土状況
　　中　３号竪穴状遺構（東から）
　　下　４号竪穴状遺構（南から）
図版36　上　４号竪穴状遺構遺物出土状況
　　中　５号竪穴状遺構（南から）
　　下　５号竪穴状遺構遺物出土状況
図版37　上　６号竪穴状遺構（南から）
　　中　７号竪穴状遺構（西から）
　　下　１号土坑（南から）
図版38　上　２号土坑（西から）
　　中　３号土坑（東から）
　　下　４号土坑（東から）

図版39　上　５号土坑（東から）
中　６号土坑（南から）
下　７号土坑（南から）
図版40　上　８号土坑（南から）
中　９号土坑（東から）
下　10号土坑（東から）
図版41　上　11号土坑（南から）
中　12号土坑（東から）
下　13号土坑（東から）
図版42　上　14号土坑（東から）
中　15号土坑（東から）
下　16号土坑（東から）
図版43　上　17号土坑（南から）
中　18号土坑（東から）
下　包含層グリット遺物出土状況
（北から）
図版44　① 水田層土器出土状況
② 包含層土層トレンチ
③ 北壁土層
④ 北壁土層②
⑤ 北壁土層③
⑥ 北壁土層④
⑦ 北壁土層⑤
⑧ 北壁土層⑥
図版45　出土遺物写真
図版46　出土遺物写真
図版47　出土遺物写真
図版48　出土遺物写真
図版49　出土遺物写真
図版50　出土遺物写真
図版51　出土遺物写真
図版52　出土遺物写真
図版53　出土遺物写真
図版54　出土遺物写真
図版55　出土遺物写真
図版56　出土遺物写真
図版57　出土遺物写真
図版58　出土遺物写真
図版59　出土遺物写真
図版60　出土遺物写真
図版61　出土遺物写真
図版62　出土遺物写真
図版63　出土遺物写真
図版64　出土遺物写真
図版65　出土遺物写真
図版66　出土遺物写真
図版67　出土遺物写真
図版68　出土遺物写真

表　目　次

第１表　県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧 …… 1
第２表　出土土器観察表 …… 134～145
第３表　石器観察表 …… 146

Ⅰ　はじめに

⑴　県営圃場整備事業大明地区に伴う発掘調査概要（第１図）

県営圃場整備事業大明地区は、日田市西部に位置する谷地である大明地区一帯の105haを対象として基盤整備を実施すると同時に、共同営農や農産物加工所の建設、農芸工作物生産団地の実施なども含めたモデル営農団地を創設することを目的に平成９年度より事業が実施された。平成９年４月には大明地区全体の工事対象箇所に関する埋蔵文化財の所在についての照会文が提出され、これを受けて事業主体者である大分県日田地方振興局と市教育委員会の両者による埋蔵文化財の取り扱いの協議を実施することとなった。

さて、これらの協議の結果、対象地域が周知の遺跡（大肥条里遺跡）に含まれること、基盤整備工事は全部で14工区（大まかには３工区）に分かれ年度ごとに工区毎の工事を実施する計画であることなどから、各工区毎に事前の試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は平成９年10月から平成14年11月までの各年度に実施され、そのうち遺跡の存在が明らかとなった箇所については、再度、各遺跡の取り扱いについて協議を行った。工法の変更等を検討したものの、遺跡の現状保存が困難である対象箇所に関しては、次年度に記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

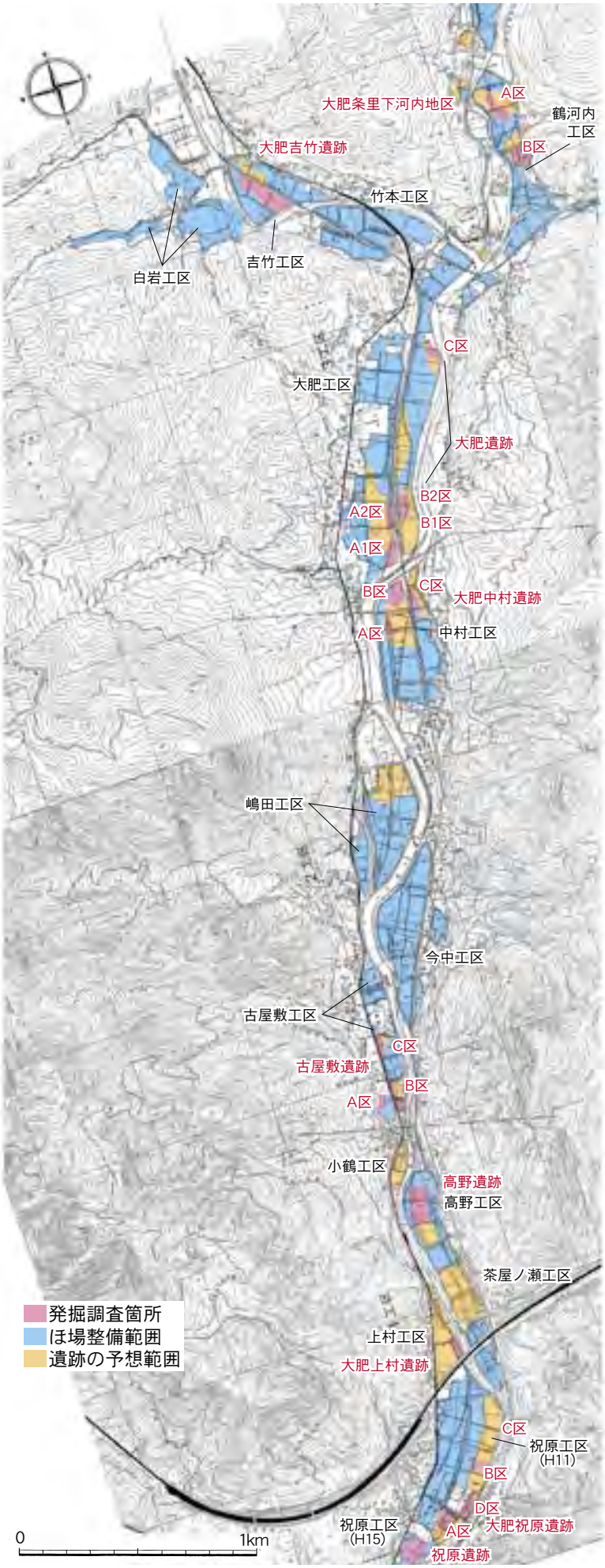
平成10年度には大肥中村遺跡、平成11年度には大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡、平成12年度には大肥条里遺跡下河内地区、平成12～13年度には大肥吉竹遺跡、平成14年度には大肥条里遺跡大肥地区（大肥遺跡）、平成14～15年度には高野遺跡、平成15年度には古屋敷遺跡、祝原遺跡の計９箇所の発掘調査を実施した。

なお、各工区の調査内容については下表のとおりである。

第１表　県営圃場整備事業大明地区に伴う調査一覧

試掘年度	工区名	遺構内容	時代	処置	遺跡名	発掘調査年度	調査期間	調査面積(㎡)	備考
平成９年度	嶋田工区	柱穴、包含層	古代・中世	盛土保存	-	-	-	-	試掘調査のみ
平成９年度	今中工区	なし	-	許可	-	-	-	-	〃
平成９年度	中村工区	住居跡、石棺墓、小児用甕棺墓	弥生時代～中・近世	発掘調査	大肥中村遺跡	平成10年度	98.07.07～98.12.30	10,000	Ａ～Ｃ区、概報
平成10年度	祝原工区	溝・土坑・柱穴	縄文時代～弥生時代	発掘調査	大肥祝原遺跡	平成11年度	99.05.16～00.01.17	5,100	Ａ～Ｄ区、Ａ～Ｃ区は報告済
平成10年度	上村工区	竪穴・溝・土坑・柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	大肥上村遺跡	平成11年度	99.09.28～99.10.29	950	報告済
平成10年度	茶屋丿瀬工区	竪穴、溝、土坑、柱穴	中世	盛土保存	-	-	-	-	試掘調査のみ
平成10年度	小鶴工区	竪穴住居、溝、柱穴	弥生土器	盛土保存	-	-	-	-	〃
平成11年度	鶴河内工区	柱穴、土坑、包含層	縄文時代～中世	発掘調査	大肥条里遺跡下河内地区	平成12年度	00.12.04～01.02.28	5,950	
平成11年度	吉竹工区	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	古墳時代～中世	発掘調査	大肥吉竹遺跡	平成12～13年度	01.01.29～01.05.24	8,270	
平成13年度	大肥工区	竪穴住居、流路、甕棺墓、石棺	弥生時代～古墳時代	発掘調査	大肥遺跡	平成14年度	02.05.27～03.02.13	8,200	Ａ～Ｃ区
平成13年度	竹本工区	なし	-	許可	-	-	-	-	試掘調査のみ
平成14年度	高野工区	竪穴住居、溝、土坑、柱穴	弥生時代～中世	発掘調査	高野遺跡	平成14～平成15年度	03.01.16～03.10.20	9,000	
平成14年度	古屋敷工区	溝、土坑、柱穴	縄文時代～中世	発掘調査	古屋敷遺跡	平成15年度	03.05.19～03.10.19	7,100	Ａ～Ｃ区
平成14年度	祝原工区	溝、土坑、柱穴	中・近世	発掘調査	祝原遺跡	平成15年度	03.05.19～03.08.04	4,500	
平成14年度	白岩工区	-	-	許可	-	-	-		試掘調査のみ

※網掛けは発掘調査実施遺跡



第１図　圃場整備事業区域と調査区位置図（1/25,000）

⑵　調査に至る経過

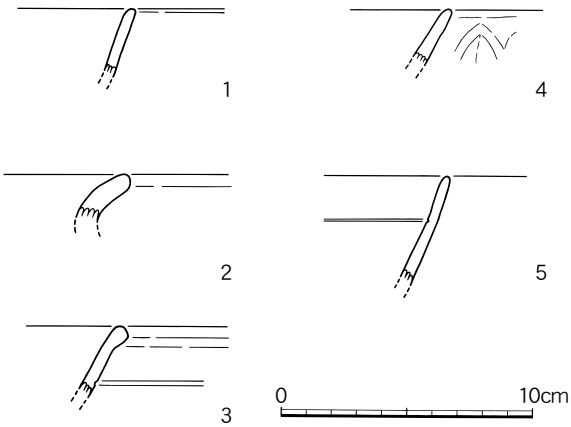
前項に記載したように、県営圃場整備事業大明地区の工事が推進されるなかで、平成11年には吉竹工区（対象面積4.1ha）の試掘調査依頼があり、これを受けて、市教育委員会では平成12年３月24日～31日までの期間試掘調査を実施した。計29本のトレンチを設定し調査を行った結果、遺構の存在が明らかとなった。この結果を受け、遺構の確認された箇所について、大分県日田地方振興局との間で、遺跡の取り扱いについて協議を実施することとなった。そのなかで、協議を実施する直前、双方の確認が不十分であったせいか、対象となる遺跡の一部が調査前に掘削されてしまうという出来事が起こった。そこで、市教育委員会では相手方に厳重な指導を行い、対象地の調査の必要性について十分に説明を行った。それを受けて協議を行った結果、遺構の存在が明らかとなった箇所の内、切土となる箇所を中心として調査を実施することとなった。また遺構面までが現況より数センチと浅く、砂性の地山であり、旧掘削により遺構の残りが悪いこと、盛り土保存する箇所に搬入する土砂が大きな河原石を用いることなどの理由から、遺構の確認された箇所に関しては遺構検出を行い、掘削対象地を中心として完掘を行うこととなった。大分県日田地方振興局長名による埋蔵文化財発掘の通知文が提出され、その後、平成13年１月29日付けで市と大分県日田地方振興局耕地課との間で委託契約を結び、同29日より発掘調査を開始することとなった。

しかし、調査の進展に従って、遺構密度が高く当年度内での調査完了が困難な可能性が見込まれたことから、再度協議を重ね、当年度内で対象となる範囲までの調査を完了し、翌年度に前年度で調査の完了できなかった範囲の契約を結ぶこととなった。そこで、平成13年度は４月２日付けで委託契約を取り交わし再度発掘調査を行った。

なお、その後の整理作業、報告書作成の準備については平成13年度４月２日～平成15年３月19日まで実施し、各年度毎に委託契約を結んだ。

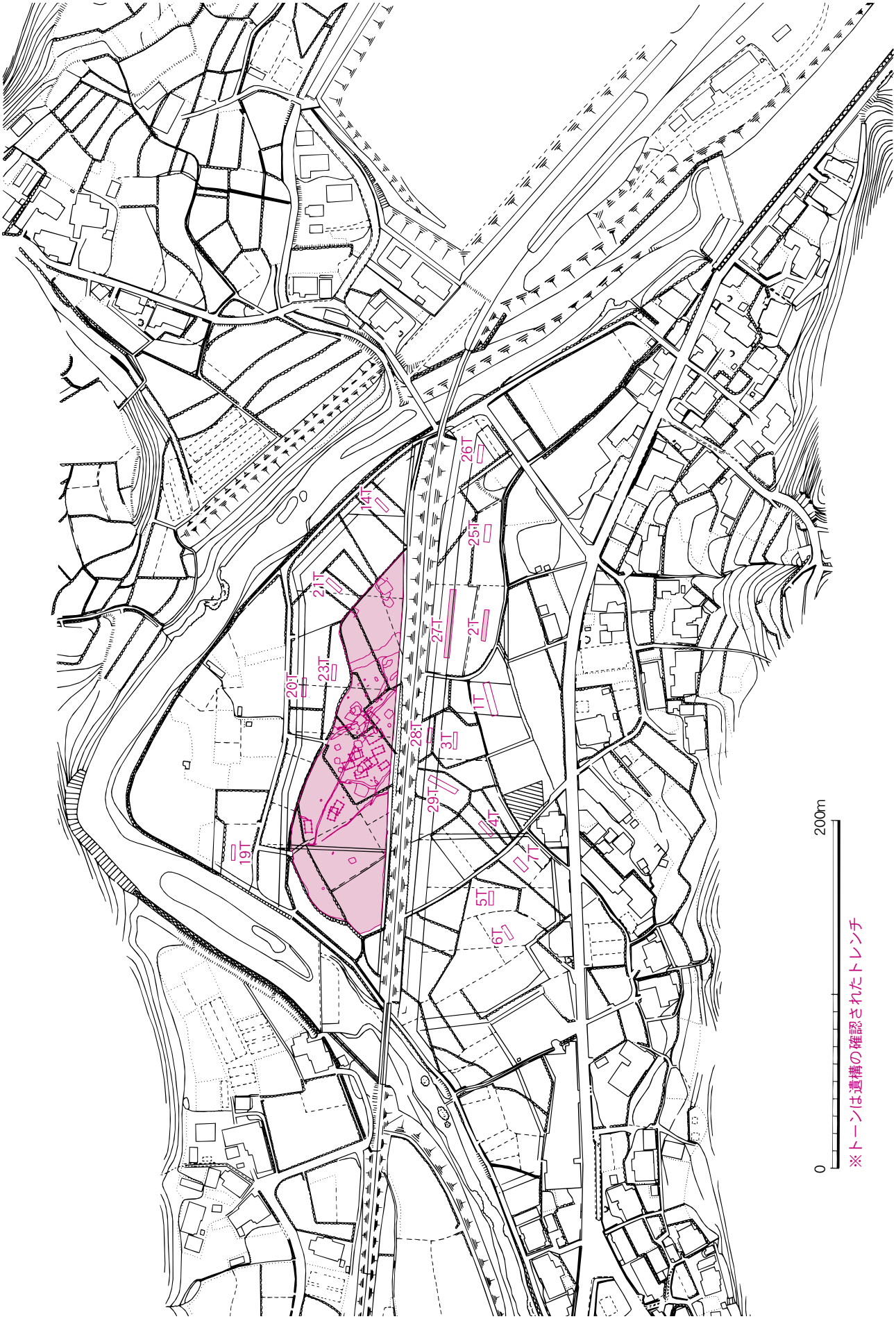
なお、試掘調査で遺構の存在が確認されたが、調査は行わなかったトレンチより出土した遺物について､周辺の遺跡の広がりや今後の開発の参考とするため主なものについて第２図に説明をする。

１は２トレンチより出土した土師器坏である。内外ともに回転ナデ調整である。２は２トレンチより出土した土師器甕の口縁部である。３は２トレンチより出土した青磁碗である。口縁端部は肥厚し、外面に沈線が巡る。４は３トレンチの水田層より出土した青磁碗である。外面に鎬蓮弁文が施される。５は27トレンチより出土した白磁碗である。内面に沈線文が巡る。



第２図　試掘調査出土遺物（1/3）

写真１　試掘調査風景



第３図　調査区位置図（1/3,000）

⑶　調査経過と調査組織

大肥吉竹遺跡の調査経過については、調査日誌に基づき略述する。

１月２９日／機械を使って表土剥ぎを開始する。

２月　３日／作業員を使って、遺構検出を開始する。

２月１６日／西半の竪穴住居跡の掘り下げを始める。

２月２６日／竪穴住居の実測を開始する。

３月　６日／竪穴住居の掘り下げがほぼ完了し、溝、建物、柱穴などの掘り下げを行う。

３月２７日／ 12年度分の遺構の大半の掘り下げが完了する。

３月２９日／実測作業が完了し、機材を片付け、12年度の作業を完了する。

４月　９日／作業員を使って、東半分の遺構検出を開始する。

４月１２日／竪穴住居跡の掘り下げを開始する。

４月１３日／遺構の測量を実施する。

４月２０日／空撮の為、清掃を開始する。

４月２３日／空中写真撮影を実施する。

４月２５、２６日／地元の静修小学校の生徒（117名）に大鶴地区の歴史と大肥吉竹遺跡の解説を行い、体験発掘を実施する。

５月１８日／遺構の掘下げがほぼ完了する。

５月２１日／機材を洗い、撤去する。

５月２４日／測量を行い、調査を完全に終了する。

写真２　機械作業風景

写真３　調査風景

写真４　現地説明風景

写真５　体験発掘風景

なお、調査関係者は以下のとおりです。（職名は当時のままとしている。）

平成12年度（発掘調査、整理作業）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）

調 査 統 括　原田俊隆（同文化課課長）

調 査 事 務　石井英信（同課長補佐兼文化財係長）佐々木豊文（同文化課主査）
江田香織（同文化課臨時職員）

調　査　員　行時志郎（同文化課主任）吉田博嗣（同文化課主任）
若杉竜太（同文化課主事）渡邉隆行（同文化課主事、［調査担当］）

発掘調査員　穴井　昌生、穐本　文雄、池田　貞夫、石井　アヤ子、石井　チエ子、伊藤　一男、伊藤　智恵子、井上　賢信、一ノ宮　嘉蔵、一ノ宮　高喜、一ノ宮　松雄、一ノ宮　森男、梅原　剛志、梅崎　カズ子、江上　正高、岡部　進、梶原　ミズエ、梶原　利夫、北向　サダコ、北向　チズ子、五反田　静子、後藤　孝市、財津　由太、財津　利枝、坂本　サツキ、高倉　美利、高倉　富美子、高倉　由佳、田中　昇、太郎良　開、筒井　英治、中村　邦宏、松岡　初次、室井　キミ子、森山　ミチ子、森山　熊夫、森山　春義、森山　八重子、森山　國雄、平原　知義、平川　クミエ、堀　英子、本田　早苗、本田　忠勝、柳原　貢、山下　勇美子、吉田　勝秋、渡辺　吉之助、和田　フミ子、和田　常次郎

平成13年度（発掘調査、整理作業）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）

調査指導員　下村　智（別府大学助教授）、高橋　徹（大分県文化課職員）

調 査 統 括　原田俊隆（同文化課課長）

調 査 事 務　石井英信（同課長補佐兼文化財係長）島崎誠司（同文化課主査）
園田恭一郎（同文化課主任）原田恭子（同文化課臨時職員）

調　査　員　行時志郎（同文化課主任）吉田博嗣（同文化課主任）
若杉竜太（同文化課主事）渡邉隆行（同文化課主事〔調査担当〕）

発掘調査員　秋吉　ミユキ、穴井　昌生、穐本　文雄、池田　貞夫、石井　アヤ子、石井　チエ子、伊藤　一男、伊藤　智恵子、伊藤　曉子、井上　賢信、一ノ宮　嘉蔵、一ノ宮　高喜、一ノ宮　森男、梅原　剛志、梅崎　カズ子、猪熊　ヨネ、岡部　進、梶原　ミズエ、梶原　利夫、北向　サダコ、北向　チズ子、五反田　静子、後藤　孝市、財津　由太、財津　利枝、坂本　サツキ、高倉　知子、高倉　美利、高倉　富美子、高倉　由佳、高村　笑美子、田中　昇、太郎良　開、筒井　英治、松岡　初次、室井　キミ子、森山　ミチ子、森山　熊夫、森山　八重子、森山　國雄、平原　知義、堀　英子、本田　早苗、本田　忠勝、柳原　貢、山下　勇美子、行村　シヅエ、吉田　勝秋、渡辺　吉之助、和田　フミ子、和田　常次郎

整理作業員　穴井　トヨ子、朝倉　眞佐子、伊藤　弘子、井上　とし子、安元　百合、和田　ケイ子

平成14年度（整理作業）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）

調 査 統 括　後藤　清（同文化課課長）

調 査 事 務　田中伸幸（同文化課文化財管理係長兼埋蔵文化財係長）園田恭一郎（同文化課主査）
酒井　恵（同文化課主事補）

調　査　員　土居和幸（同文化課主査）行時桂子（同文化課主任）
若杉竜太（同文化課主事）渡邉隆行（同文化課主事）

平成15年度（報告書作成）

調 査 主 体　日田市教育委員会

調査責任者　後藤元晴（日田市教育委員会教育長）（～平成15年８月）
諫山康雄（日田市教育委員会教育長）（平成15年９月～）

調 査 統 括　後藤　清（同文化課課長）

調 査 事 務　佐藤　晃（同文化課主幹兼埋蔵文化財係長）園田恭一郎（同文化課主査）
酒井　恵（同文化課主事補）

調　査　員　土居和幸（同文化課主査）行時桂子（同文化課主任）
若杉竜太（同文化課主事）渡邉隆行（同文化課主事）

なお、調査時に来訪され、また出土遺物の整理の際にご指導頂いた方々は以下のとおりである。
小田富士雄（福岡大学教授）、甲元眞之（熊本大学教授）、田中良之（九州大学教授）
下村　智（別府大学助教授）、平川　南（国立歴史民俗博物館副館長）

Ⅱ　遺跡の立地と環境

⑴　遺跡の位置と地理的環境（第４図）

大肥吉竹遺跡は日田市大字大肥に所在し、現在では大鶴町に該当する。

遺跡のある日田市は大分県の西部に位置し、九州のほぼ中央部にあたり、西は福岡県との県境をなす。市の境界は東が福岡県浮羽郡浮羽町や朝倉郡杷木町、同宝珠山村、田川郡添田町と、北は下毛郡山国町と、東は玖珠郡玖珠町や日田郡天瀬町と、南は日田郡大山町や同前津江村とそれぞれ接している。現在の市域は南北24.8㎞、東西22.3㎞、面積約269平方㎞、人口は約62,000人の四方を山々に囲まれた小都市を形成している。

この日田市を中心に西へ向かえば福岡県久留米市や大宰府市、福岡市などの都市圏へと通じ、北へ向かえば北九州市や中津市、宇佐市などの周防灘沿岸部に達し、東へ向かえば湯布院温泉を過ぎ別府市や大分市などの豊後水道へと抜け、南へ向かえば杖立や黒川といった温泉峡を超え阿蘇や竹田市、熊本市へと到達する。こうした各交通ルートは天領地日田として栄えた江戸時代に、江戸幕府が設置した西国郡代（代官所）を中心に筑後国高良山路・久留米城路、筑前国大宰府路・福岡城路、彦山路・小倉城路、豊前国宇佐宮路・中津城路、玖珠郡森営路、直入郡岡城路・肥後国阿蘇山路・隈府路・熊本城路と呼ばれる旧国の主要な地域と結ばれていた道筋でもあり、内陸部の山間にあって文字通り交通上の要衝の地としての役割を果たしていた。

こうした四方へ広がる交通網にあって、特に西の福岡県との結びつきはより深く、現在の市民の大半は大分市へと足を運ぶよりも福岡方面に出向く割合が非常に高い。このことは今始まったことではなく、市内を流れる日本三大河川の一つに数えられる筑後川の上流域に位置することや、西は筑後平野が広がることと対象的に東は九重山などの山岳地形をなしていることなどの地理的な条件が大きく左右している。

近世・近代には先の内陸交通網に加え、筑後川を媒体とした通船や筏流しによる河川交通も栄え、年貢米や材木といった物資が西へ運ばれると同時に、西からの文化を強く受け入れてきた。一方では江戸時代に西国郡代（代官所）が置かれると九州島の政治・経済の中心的な役割を担い、この時代に始まった杉の植林は日本三大美林の一つにも数えられ、日田杉の名称で一大産地として知られるようになると、日田下駄や家具の部材を作る製材所が立ち並ぶ林業の町にへと発展した。

また、豊富な筑後川の水源は、今でこそ「水郷日田」として観光のキャッチフレーズになっているが、遊船や鵜飼、鮎簗といった伝統的な文化を育んできた。さらに、日田市の大きな特徴に自然環境がある。盆地という自然構造は、夏は暑く冬は寒いという典型的な内陸型の気候を生み出している。このように日田市は、弥生時代の稲作の伝播や装飾古墳文化の流入など古代以後、西からの文化の影響を強く受けて発展してきた街で、大分県のなかにあっても伝統や文化などに独自の文化を色濃く残している。

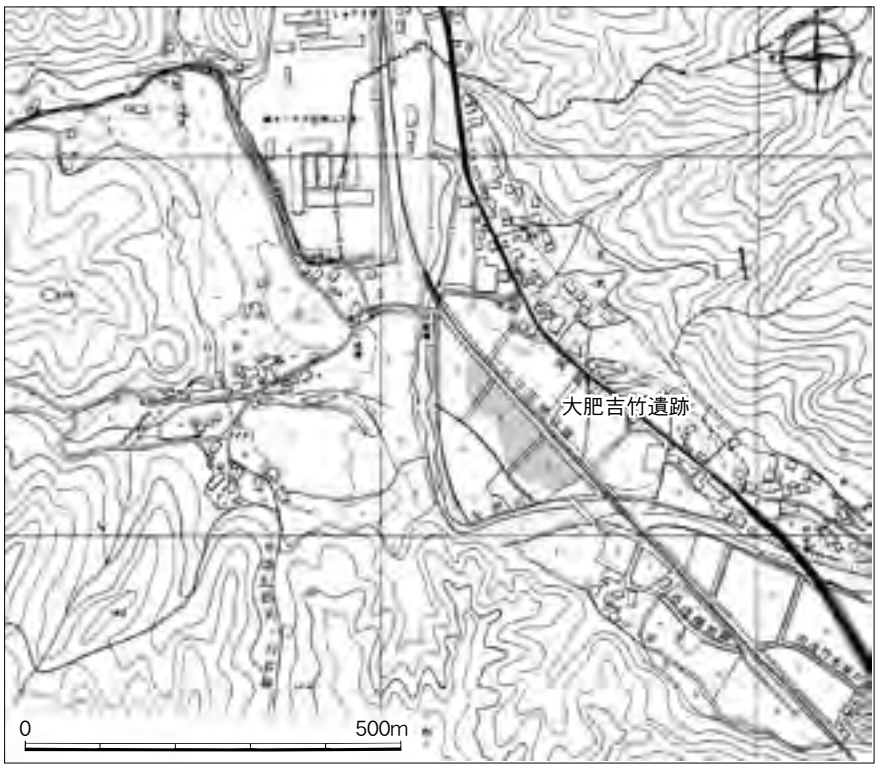
さて、この日田市の地形を概観すると、現在の市街地にあたるのが日田盆地の沖積面で、標高は75～90mを測り、日隈・月隈・星隈と呼称される残丘が盆地内に点々と残っている。この盆地底の沖積面周囲には市内では原（はる）と呼ばれる台地が存在し、代表的なものとしては山田原、吹上原、宮原、葛原、須ノ原、町野原、佐寺原、長者原、上野原、陣ケ原などで、こうした標高約150m前後の阿蘇４火砕流の流出により形成された溶岩台地が盆地周辺を段丘上に巡っている。

こうした台地群の外側には龍体山（345m）、西の山（308m）、片峰（約500m）、大石峠（約400m）などの標高約200～600mの耶馬溪火砕流で形成された溶岩台地が占め、さらにその外輪の市の境界域には岳滅鬼山（1,036m）、大将陣山（909m）、一尺八寸山（707m）、月出山（709m）、五条殿山（834m）、釈迦岳（844m）といった標高400～1,000m級の山々が連なる。さらに遠方には彦山（1,199m）系、久住山（1,786m）系、阿蘇外輪山（900～1,000m）が広がっている。

日田市内には幾つもの小河川が流れ込んでいる。久住山や阿蘇外輪山を源とする玖珠川や大山川は盆地東部で合流し、これに台地の合間を縫うようにして高瀬川、二串川、庄手川、花月川、串川、内河野川といった小河川が盆地内で合わさり九州最大河川である筑後川となり、さらに西流して大肥川が合流すると筑後平野を経て有明海へと注いでいる。こうして流れ込むいくつもの小河川は台地の合間に八手状の長大な谷地を形成している。

こうした自然環境下にある日田盆地の西部大肥川沿いに大肥吉竹遺跡は存在している。大肥川は日田市最北端に位置する岳滅鬼山に源を発する鶴河内川と福岡県小石原村に源を発する小石原川が谷の北部で合流した後、三隈川へと流れ込んでいる。こうした河川の浸食作用によって形成された地形面は、千田　昇氏の分類によれば「中位段丘２面」と呼ばれ、その説明では「中位段丘２面」は阿蘇４火砕流堆積面がさらに開析された時の地形面のこととされる。大肥川などには河岸段丘や高位扇状地として主要な地形面を構成している。

こうして発達した河岸段丘の最奥部に大肥吉竹遺跡は立地しており、小石原川へと向かう谷地の最も広がった場所に位置しており、これより奥は一段と幅の狭い谷を形成している。河岸段丘の標高は約111mで、見た目は平坦であるが、近年の圃場整備により平坦化されていることによるためで、実際は山際に向かって徐々に高まっているものと考えられる。遺跡のすぐ上流で谷は狭くなり、自然の城門のような様相を呈しており、この箇所は上座郡と日田郡との国境となっており、現在でも天保６年に建てられた国境石がその当時の国境の名残を残し、現在の福岡県と大分県との県境ともなっている。遺跡を600mほど下ると鶴河内川との合流地点となり、谷地は南下して広くなっている。この合流地点より南下するほど遺跡の密度は多くなり、大肥遺跡、大肥中村遺跡、高野遺跡など縄文時代から中近世の遺跡が所狭しと所在するのである。



第４図　大肥吉竹遺跡周辺地形図（1/10,000）

（参考文献）

中島　国夫 「日田盆地のなりたち」『日田市30年史』日田市　1974年

千田　昇　「日田・玖珠地域の地形―とくに台地地形について―」『日田・玖珠地域―自然・社会･教育―』大分大学教育学部　1992年

原田良伸ほか 『日田市の歴史と文化財』 日田市教育委員会　1996年

土居　和幸 「第２章　遺跡の立地と環境」『小迫辻原遺跡Ⅰ　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ地区編』大分県教育委員会　1999年

土居　和幸 「第２章　遺跡の立地と環境」『吹上遺跡Ⅰ』日田市教育委員会　2003年

行時　志郎 「２　遺跡の立地と環境」『大肥中村遺跡―発掘調査概報―』 2003年

(2)　歴史的環境

旧石器時代

盆地内での旧石器時代の遺跡は現在20例ほどを数える（註１）が、表面採集や発掘調査での一括資料しかなく、本格的な発掘調査は行われていない現状にある。代表的な遺跡としては吹上遺跡や長者原遺跡などでナイフ形石器などが採集されている（註２）のを始め、片峰遺跡（註３）で台形様石器、草場第二遺跡（註４）でナイフ形石器や台形様石器、三和教田遺跡Ｂ地点（註５）でナイフ形石器など、平島遺跡Ｂ区（註６）や馬形遺跡（註７）では三稜尖頭器、上野第１遺跡（註８）では剥片尖頭器がそれぞれ出土している。

縄文時代

この時代の遺跡は近年の圃場整備事業に伴う発掘調査によって増加傾向にある。竪穴住居を含む遺構は手崎遺跡（註９）で西平式期の円形住、葛原遺跡（註10）で三万田式期の隅丸方形（もしくは長方形）住が確認されており、尾部田遺跡（註11）や求来里平島遺跡Ｃ地区（註12）でも御領式や大石式の竪穴住居が検出されている。また、石ヶ迫遺跡（註13）、上野第１遺跡（註８）、大部遺跡（註９）などでは早期の集石遺構、大肥条里祝原地区（註14）では後期の集石遺構や土坑、大肥条里下河内地区（註15）では前期の集石遺構や土坑、大肥条里吉竹地区（註16）では後期の土坑、古屋敷遺跡（註78）では前期の包含層、森ノ元遺跡（註17）では晩期前半代の埋甕、石ヶ迫遺跡（註13）や有田塚ヶ原遺跡（註18）などでは陥穴遺構が調査されている。このほか、牧原遺跡（註19）や三和教田遺跡Ｃ地点（註20）、隈山遺跡（註21）などでは土偶が発見されている。

弥生時代

遺跡調査例は多く、大規模な集落遺跡が吹上遺跡周辺に集中するように存在している。まず、台地上の遺跡として吹上遺跡の北側に隣接する小迫辻原遺跡（註22）や後迫遺跡（註23）では前期から後期にかけての竪穴住居、土坑、大型成人用甕棺墓、箱式石棺墓、小児用甕棺墓などが調査されている。また朝日宮ノ原遺跡（註24）では中期から後期初めの竪穴住居、土坑、大型成人用甕棺墓、小児用甕棺墓などが調査されている。また、谷ノ久保遺跡（註25）では中期の掘立柱建物が発掘されている。こうした遺跡のある台地下沖積地での調査も進み、庄手川と三隈川に挟まれた微高地上に位置する５次の調査が行われた徳瀬遺跡（註26）では、前期後半から後期後半の竪穴住居、溝、土坑などが発掘されている。盆地内には台地上に拠点的な集落が存在するなかにあって、本遺跡は沖積地での代表的な遺跡の一つである。このほかにも、吹上遺跡南下に立地する今泉遺跡（註27）では後期の竪穴住居、小迫辻原遺跡南下に位置する本村遺跡（註28）でも後期の竪穴住居が発見され、仿製鏡の廃棄が

認められている。いずれの遺跡も吹上遺跡や小迫辻原遺跡との関係が注目される遺跡である。さらに、９次の調査が行われ三和教田遺跡（註５）のＢ地点では環濠集落が発見され、断面逆台形の幅約５m、深さ２mの環濠内に竪穴住居のほか４間×６間の大型建物や１間×２間の掘立柱建物などが配置されていることが確認されている。

有田川や花月川を中心とする盆地北東部には台地や丘陵上に立地する葛原遺跡（註29）、佐寺原遺跡（註30）、祇園原遺跡（註31）や沖積地に位置する平島遺跡（註32）、会所宮遺跡（註33）などがある。葛原遺跡では前期末から中期前半の竪穴住居や土坑などが調査され、対峙する佐寺原遺跡では前期末から後期中頃の竪穴住居、土坑、小児用甕棺墓などが発掘されている。祇園原遺跡では中期後半から後期中頃の竪穴住居、掘立柱建物、小児用甕棺墓、円形周溝遺構などが発掘されている。これらの遺構は３間×６間や３間×７間といった大型の建物を中心にその周囲に竪穴住居が配置されており、さらに竪穴住居の平面は円から不整形な円さらに方形へと変化する過程がみられるなどこの時期の集落構造を考える上で注目される遺跡である。有田川左岸段丘上の平島遺跡（註６・32）では後期後半以後の竪穴住居、掘立柱建物、溝などが調査されており、溝は弧状に巡っている。市内では数少ない環濠集落の一つである。会所宮遺跡では中期前半の集落遺構が発掘されている。

筑後川の南部域には長者原遺跡（註34）、上野遺跡（註８）、惣田遺跡（註35）などがある。盆地南西部の長者原遺跡では後期を中心に竪穴住居や溝が確認され、このうち溝は環濠集落を形成する環濠の一部と見られている。上野第２遺跡では前期末から中期前半の土坑や小児用甕棺墓など、惣田遺跡では後期の溝がそれぞれ発掘されている。

盆地の西部の大肥川沿いでは大肥中村遺跡（註36）や大肥遺跡（註37）、高野遺跡（註79）などで大規模な遺跡が発見されている。大肥中村遺跡は中期の木棺墓や祭祀土坑などが調査されており、大肥遺跡は中期の成人用甕棺墓群や流路が発掘され、流路からは木鎧、三叉鍬などの木製品などが出土している。高野遺跡では弥生時代中期末から後期の竪穴住居跡が調査されている。遺跡のある大肥川流域沿いでのこの時代の様相が明らかとなりつつある。

弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓の調査事例としては草場第二遺跡（註４）、朝日宮ノ原遺跡Ｄ地区（註38）、平島遺跡（註31ｂ・39）、徳瀬遺跡（註26ａ）、牧原遺跡（註19）などがある。草場第二遺跡は方形周溝墓、大型成人用甕棺墓や壷棺墓、箱式石棺墓などの墳墓が約300基発見されており、市内では最も大規模な墓地群である。隣接する小迫辻原遺跡で発掘された居館遺構などと同時期であることから関連性が注目される。朝日宮ノ原遺跡Ｄ地区では後期の大型成人用甕棺墓や壺棺墓とともに土壙墓が、平島遺跡Ｄ区では後期の大型成人用甕棺墓４基がそれぞれ発掘されている。徳瀬遺跡では方形周溝墓５基、箱式石棺墓４基、土壙墓６基などが発掘され、方形周溝墓の主体部である箱式石棺墓には「位至三公鏡」片が副葬されていた。牧原遺跡では方形周溝墓４基、箱式石棺墓１基、土壙墓２基などが発掘され、鉄鏃や刀子などの副葬品が出土している。このほか、上野第１遺跡（註40）や元宮原遺跡（註41）、草場遺跡（註42）などでも偶然に大型成人用甕棺墓が発見されている。

古墳時代

この時代の前期の代表的な集落遺跡には、居館跡が発見された小迫辻原遺跡（註22）がある。吹上遺跡に対峙する辻原台地上に位置し、弥生時代終わりの環濠３基や方形環濠遺構などの遺構で構成され、環濠集落から居館への変遷過程が知りうる遺跡である。近年、この遺跡周辺の沖積地では尾部田遺跡（註11）や本村遺跡（註43）の調査で、先の小迫辻原遺跡の遺構群と同時期にあたる集落が確

認されている。また、手崎遺跡（註９）や夕田遺跡（註44）では布留式土器を伴う竪穴や土壙が散発的に発掘されており、該期の集落例としては数少ない資料である。

中期の遺跡には荻鶴遺跡（註45）や求来里平島遺跡（註12）がある。荻鶴遺跡は５世紀前半から中頃の鍛冶遺構とされる竪穴から鉄床石、鉄滓、高坏転用羽口、鍛造剥片などが出土し、またこの遺構付近からは関連する鉄鋌や手捏土器・石製円盤などの祭祀遺物が集中して発見されている。求来里平島遺跡では、須恵器を伴わない初現期のカマドを有する竪穴住居が検出されている。

後期の集落遺跡例は多く、平島遺跡（註６・32）や長迫遺跡（註46）では竪穴住居や掘立柱建物などが大規模に調査され、長迫遺跡では鍛冶を行っていたと考えられている鉄滓が出土している。さらに、西有田赤ハゲ遺跡（註47）では斜面を削りだして作られた道状遺構が、尾漕遺跡（註48）では河川と並行する道状遺構がそれぞれ調査され、三和教田遺跡Ｂ地点（註５）では水路の一部が発見されている。また、長者原遺跡（註49）では竪穴住居から製塩土器が出土している。このほかにも、大行事遺跡（註50）などがある。

一方、墳墓であるがこれまでのところ日田盆地では古式の古墳や前方後円墳の存在は確認されていない。この時期の墓地遺跡の大半は前代の集落終焉後に墓地化したもので、継続して営まれているようである。前期から中期にかけての古墳としては小迫古墳（註51）、尾漕１・２号墳（註30･52）がある。小迫古墳は４世紀後半から５世紀前半の円墳と考えられ、主体部に粘土槨を採用したなかに木棺（割竹形木棺？）を安置し、珠文鏡、勾玉、管玉、小玉が副葬されていた。尾漕１・２号墳は前者が５世紀初め、後者２号墳が５世紀末の築造とされる。１号墳は組合式の箱式石棺を主体部とし人骨３体と素環頭太刀・刀子・櫛などが副葬されており、２号墳は単室の横穴式石室で須恵器のほか小玉が出土している。このほか、単室の竪穴式石室構造をもち、蛇行剣などが出土した姫塚古墳（註53）や仿製六獣鏡や仿製珠文鏡、玉類などが発見されている有田古墳（註54）、調査は行われていないが円筒埴輪が採集され径30mの円墳である薬師堂山古墳（註55）なども、この時期に築造された古墳である。また、大迫遺跡（註56）では５世紀後半から末の石蓋土壙墓、土壙墓、箱式石棺墓が調査され、３号土壙墓からは県内でも類例の少ない蕨手刀子が出土している。また赤迫遺跡（註57）や元宮遺跡（註58）では箱式石棺墓や石蓋土壙墓などが発掘されている。

後期古墳の調査例は少ないが、朝日天神山古墳群（註59）では継続した確認調査が実施されている。長さ約30mの天満１号墳は社殿建設の際に仿製獣帯鏡・直刀・貝製雲珠などの馬具等の遺物が出土している。日田・玖珠地域最大の古墳である２号墳は長さ約60mの規模で、大型の平底壷などが出土している。この２号墳の調査当初は周溝が剣菱形に巡ると予想されたが、最終的にはこれまで考えられていた前方部と後円部が逆転し、周溝は前方後円形に巡ることが判明した。さらに、市内に４基残る装飾壁画を有する装飾古墳の調査も積極的に行われている。ガランドヤ古墳群（註60）は３基の古墳で構成され、６世紀後半の１号墳は赤と緑を使って複式構造の横穴式石室の玄室奥壁に円文、同心円文、舟、人物、鳥、馬などの多彩な装飾がなされている。須恵器、土師器、馬具、鉄鏃、玉類などが出土している。同じく６世紀後半の２号墳は石室の玄室奥壁に赤を下地に緑を使って同心円文、騎射像、連続山形文などの装飾が施されており、須恵器、珠文鏡、直刀、馬具、鉄鏃、玉類などが出土している。また、法恩寺山３号墳（註61）は独立した丘陵上に展開する７基の古墳群の一つで、６世紀後半築造の径約20mの円墳である。複式構造の横穴式石室の玄室奥壁と右側壁、袖石やまぐさ石などに赤を使って円文、同心円文、馬と人物、鳥などの装飾が描かれている。発掘

調査では須恵器や馬具などが出土している。さらに、穴観音古墳（註64）は複式構造の横穴式石室の玄室奥壁と右側壁、前室の左右側壁に赤と緑を使って円文、同心円文、舟、両手を広げた人物、鳥などの装飾が施されており、なかでも、前室の同心円文は一部を掘り窪めるなど肥後地域の装飾技法の影響が指摘されている。この古墳は近年の調査で周溝が検出され、径約20mの円墳であったことが確認されている。

このほかに調査された後期古墳には有田塚ケ原古墳（註30）や塔ノ本古墳（註31ｂ）などがあり、平島横穴墓群（註63）や羽野横穴墓群（註64）、佐寺横穴墓群（註30）、北友田横穴墓群（註65）、小迫横穴墓群（註51）、夕田横穴墓群（註44）などの横穴墓群の発掘調査も実施されている。こうした調査事例に加え、市内に残る横穴墓群は大半が筑後川の北側に築造されている。

古代

この時期の代表的な遺跡としては小迫辻原遺跡（註66）、三和教田遺跡Ｂ地点（註５）、慈眼山瀬戸口遺跡（註67）、上野第１遺跡（註８）などがある。小迫辻原遺跡では「Ｌ」もしくは「コ」状に配置された掘立柱建物群や竪穴などが検出され、遺構からは「大領」と読める墨書土器が数点出土している。日田の古代豪族日下部氏との関係が指摘される考古学資料である。三和教田遺跡Ｂ地点では７世紀後半から８世紀前半の掘立柱建物が調査され、この時期に伴うと考えられる円面硯が出土している。慈眼山瀬戸口遺跡では８世紀中頃から末の井戸や水汲場状遺構が確認され、これらの遺構からは「門」、「林」などと書かれた墨書土器、曲物、木製品、済櫛などが出土している。８世紀代の井戸は大宰府でも少なく、横板井桁組の井戸枠は官人クラスの住居区に限られ、墨書土器などの遺物の出土から公的施設の存在が指摘されている。上野第１遺跡では８世紀前半から中頃の掘立柱建物、竪穴住居、土坑、道状遺構、粘土採掘土坑、水田などの遺構が調査された。これらの遺構からは「豊馬豊馬」と刻まれた石製品や転用硯などが出土している。遺構はこの時代の豪族館と考えられている。また、その他注目の遺跡としては、大波羅遺跡（註80）で９～10世紀代の建物やそれを区画する溝などが調査され、周辺の包含層や流路から「山」「田」と書かれた墨書土器が出土している。

このほか長者原田迎遺跡（註68）、手崎遺跡（註９）、後迫遺跡（註23ａ）、尾漕遺跡（註31ｂ･48）、長迫遺跡（註46）、石ヶ迫遺跡（註13）、馬形遺跡（註７）、クビリ遺跡（註69）などで掘立柱建物や竪穴住居などが調査されている。なかでも手崎遺跡や長迫遺跡、石ヶ迫遺跡では製塩土器が出土し、長者原田迎遺跡やクビリ遺跡では鉄滓が出土し鍛冶の存在が確認されている。馬形遺跡では市内では数少ない９世紀中頃から後半の２基の土壙墓が発見されている。１号墓は土師器坏に毛抜き、２号墓は木棺が据えられ副葬品に越州系青磁碗、須恵器坏、内黒土器、土師器坏のほか刀子が出土している。

中世

この時期の遺跡例はここ数年間で最も増えてきている。市内にはこの中世期の古文書が散逸などして残っておらず、日田市の中世史を語る上での多くの考古資料が蓄積されつつある。代表的な遺跡には慈眼山瀬戸口遺跡（註67）がある。この遺跡では溝、石垣状の石組、井戸、土坑状遺構などが調査され、多量の土師器、輸入陶磁器、摺鉢、火鉢、渡来銭、硯、石臼、高さ４㎝の十一面観音菩薩などが出土している。この遺跡は中世日田の豪族大蔵氏が本拠としていた場所にあたり、こうした発掘品や遺構は大蔵氏に関連する遺物や施設の一部とみられる。また、この遺跡の背後には同氏の山城が保存されており、各所に関連遺構をみることができ、一部であるが試掘調査（註70）が実施されており、近接した上馬場遺跡（註71）でも関連すると考えられる遺構が検出されている。また、

小迫辻原遺跡(註22)では12～15世紀の屋敷跡が発掘されており、長者原田迎遺跡(註68)、荻鶴遺跡(註45)、尾漕遺跡(註48)でも周囲を溝で囲む環溝屋敷が調査されている。このほか、朝日宮ノ原遺跡(註24)、森ノ元遺跡(註17)、会所宮遺跡(註33)、惣田遺跡(註35)、大行事遺跡(註50)などでは竪穴住居や掘立柱建物、土坑などが発掘されている。

一方、中世墓の調査事例も増加してきている。これまでの発掘例としては小迫辻原遺跡(註22・66)、朝日宮ノ原遺跡(註24)、小迫墳墓群(註51)、尾漕遺跡(註30)、手崎遺跡(註９)、慈眼山瀬戸口遺跡(註67)、寺内遺跡(註72)、徳瀬遺跡(註26ｃ)、森ノ元遺跡(註17)、尾漕遺跡(註48)、川原田遺跡(註73)などである。とくに朝日宮ノ原遺跡４号墓では炭敷きの上に木棺をすえ、被葬者の胸部には念珠を頭部の棺外には青磁碗・合子・湖州鏡・和鋏・竹篦などの副葬品を納めていた。また尾漕遺跡Ａ区２号墓には鉄鍋や300枚を越える六道銭などが副葬されていた。

また、中世の塚の調査も行われている。牧原遺跡内に残る牧原千人塚(註19)は、頂上に高さ約2.8mの四面に梵字が刻まれた角塔婆が立てられた15m×14m四方の高さが約２mの塚であることが確認されている。このほか、市有形文化財の指定を受けている貞和３年（1347）の銘が記された元大原宮の宝筐印塔の調査(註74)が行われ、造立年代を示す遺構や遺物が発見されている。元宮遺跡(註58)の調査では14世紀後半代の笠塔婆が構築されている塚が発掘されている。

近世

この時期の調査例として牧原遺跡(註19)において小国街道の一部の発掘が行われ、後藤家墓地(註75)や祇園原遺跡(註31ａ)では近世墓、山口遺跡(註76)では近世建物の調査が行われている。

また、国史跡咸宜園跡の塾跡の調査(註77)や、江戸幕府が設置した永山布政所（代官所）の調査(註78)も行われ、次第に江戸時代の日田の様子が明らかになりつつある。

⑶　大肥川流域の歴史的概要

この地域は近年の圃場整備に伴う調査によりその概要が明らかになりつつある。この地域で確認される生活の痕跡は縄文時代からである。大肥条里下河内地区(註15)では前期の集石炉などが調査され、古屋敷遺跡(註79)では前期の包含層が確認されている。大肥祝原遺跡(註14)では後期の集石や土坑などが発見されている。

弥生時代では拠点集落が幾つか確認されている。大肥遺跡Ａ-１、Ｂ区(註37)では、前期末から後期の集落跡、成人用甕棺墓、小児用甕棺墓などの墳墓群とそれらを囲むように流れ環濠の役割を果たしていた旧河道などが発見されている。この旧河道からは三叉鍬や杓子、建築部材など大量の木製品が発見されており、特に木甲の存在は注目される。大肥中村遺跡(註36)では、中期から後期の墳墓群が発見され、高野遺跡(註79)では中期末から後期の拠点集落が確認されている。また、大肥祝原、大肥上村遺跡(註81)では中期から後期の土坑などが確認されている。

古墳時代の開始期には大肥遺跡A-１区で前期初頭の流路や土坑などが確認され、水場の祭祀の痕跡が見つかっている。現在のところ中期の遺構は確認されていないが、後期には大肥遺跡Ｃ区で５世紀後半～６世紀中ごろまでの竪穴住居群が確認され、住居跡への流れ込みでやや時代が異なるが、縄蓆文土器など韓国との交流を示す資料も発見されている。また、大肥中村遺跡では６世紀中ごろの住居が確認されている。

古墳時代の墳墓群は現在のところ確認されていないが、中島横穴墓(註82)など周辺の山間部に横

穴墓の存在が知られ、また中村遺跡(註83)では箱式石棺墓の存在が確認されている。未調査である詳細は不明であるが、河岸段丘の周辺の高台などに墳墓群が存在した可能性が考えられる。

古代には、大肥吉竹遺跡にて大規模な集落跡が見つかっているほかには、あまり確認されていない。大肥中村遺跡では８世紀代の住居跡が発見されている。また、この地域は条里地割が残る地域として知られており、周知遺跡名も大肥条里遺跡とされている。しかし、近年の発掘調査ではこれら条里地割の痕跡は確認されず、水田の多くは、近世から近代にかけて大幅に改変されていることが分かってきている。また、『豊後国風土記』によれば、日田郡には５つの郷があり、有田、亘理、父連、石井、夜開の５郷があったと言われており、この地域が夜開郷にあたるのではないかと想定されている。また、1285年に書かれた『豊後国図田帳』によれば、大肥川流域は「大肥荘」と呼ばれ、宇佐宮とならぶ安楽寺に寄進された水田地帯であったことがわかっている。この「大肥荘」は『天満宮安楽寺草創日記』に1032年、喜多院建立の際に寄進されたことが記述されていることから、それ以前には荘園開発が行われていたことのようである。

中世には、大肥中村遺跡で鍛冶工房や建物群、水田などが調査されている。また、中世墓も見つかっており、竜泉窯系青磁合子や湖州鏡などが見つかっており、多彩な中国系遺物を手に入れることの出来る程、鉄器の流通が盛んであったことが窺い知れる。また、高野遺跡では中世の建物群が調査され、古屋敷遺跡では中世建物群や溝跡、祝原遺跡(註79)では水田が見つかっている。大肥荘の時代の賑わいをこれらの遺跡は物語っている。

近世では大肥中村遺跡で江戸時代前期の建物群が見つかっており、祝原遺跡でも建物群が調査されている。

このように近年の調査により、多彩な遺跡の存在が明らかになりつつある大肥川流域は、九州の交通の要所である日田の西の玄関口として、古く縄文時代から現代にいたるまで脈々と生活が営まれ、また日田の歴史を解明する重要な地域となりつつあるのである。

註１）橘昌信編『大分県旧石器時代遺跡分布図』別府大学付属博物館　1986年

註２）吉留秀敏編「第二章　旧石器時代　第三節　大分の旧石器時代遺跡　六　筑後川上流域」『大分県史　先史篇Ⅰ』大分県　1983年

註３）表面採集され、遺物は日田市埋蔵文化財センターに保管されている。

註４）高橋徹編『草場第二遺跡』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（1）大分県教育委員会　1989年

註５）永田裕久編「三和教田遺跡Ｂ地点」『平成６年度（1994年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1996年

註６）行時志郎編『平島遺跡Ｂ区』日田市埋蔵文化財調査報告書第４集　日田市教育委員会　1991年

註７）土居和幸・行時志郎・永田裕久編『馬形遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第16集　日田市教育委員会　1995年

註８）田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査３　上野第１遺跡』一般国道210号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　大分県教育委員会　2001年

註９）田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査２　手崎遺跡・大部遺跡』一般国道210号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ　大分県教育委員会　1998年

註10）土居和幸編「葛原遺跡」『平成８年度（1996年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998年

註11）行時志郎編『日田条里上手地区Ⅲ・高瀬条里永平寺地区・尾部田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第34集　日田市教育委員会　2001年

註12）土居和幸編『求来里平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第38集　日田市教育委員会　2002年

註13）行時志郎編「石ヶ迫遺跡」『平成７年度（1995年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997年

註14）渡邉隆行編「大肥条里祝原地区」『平成11年度（1999年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001年

註15）渡邉隆行編「大肥条里下河内地区」『平成12年度（2000年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001年

註16）若杉竜太編「大肥条里吉竹地区」『平成13年度（2001年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2002年

註17）行時志郎編『森ノ元遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第13集　日田市教育委員会　1998年

註18）行時志郎編「有田塚ヶ原遺跡」『平成７年度（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997年

註19）松下桂子編『牧原遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第12集　日田市教育委員会　1997年

註20）吉田博嗣編『三和教田遺跡Ｃ地点』大分県文化財調査報告書第98輯　大分県教育委員会　1997年

註21）賀川光夫著『大分県の考古学』吉川弘文館　1971年

註22）田中裕介･土居和幸・行時志郎編『小迫辻原遺跡Ⅰ　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区編』九州横断自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書10・日田市埋蔵文化財調査報告書第15集　大分県・日田市教育委員会　2000年

田中祐介編『小迫辻原遺跡Ⅰ　Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ区編』九州横断自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書10　大分県教育委員会　1999年

土居和幸編『小迫辻原遺跡Ⅱ　Ｈ区編』日田市埋蔵文化財調査報告書第15集　日田市教育委員会　2000年

註23）ａ友岡信彦編『後迫遺跡』九州横断自動車道建設関係埋蔵文化財発掘調査報告書18　大分県教育委員会　2001年

ｂ若杉竜太編『後迫遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第35集　日田市教育委員会　2002年

註24）昭和62年度に日田市教育委員会が調査を実施した。（Ａ区）

註25）永田裕久編「谷ノ久保遺跡」『平成６年度（1994年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1996年

註26）ａ土居和幸・行時志郎・松下桂子編「徳瀬遺跡」『平成５年度（1993年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1995年

ｂ稲村博文・玉永光洋編『徳瀬遺跡』大分県文化財調査報告書弟94輯　大分県教育委員会　1996年

ｃ吉田博嗣編『徳瀬遺跡第３次』日田市埋蔵文化財調査報告書第22集　日田市教育委員会　2000年

註27）渡邉隆行編『今泉遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第37集　日田市教育委員会　2002年

註28）若杉竜太、渡邉隆行編「本村遺跡２～４次」『平成11・12年度（2000・2001年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001・2002年

註29）土居和幸編「葛原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』日田市教育委員会　1988年

永田裕久編「葛原遺跡」『平成６年度（1994年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1996年

註30）村上久和・友丘信彦・染谷和徳編『佐寺原遺跡・尾漕遺跡群・有田塚ヶ原古墳群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書⑼　大分県教育委員会　1998年

註31）ａ土居和幸編「祇園原遺跡」『平成８年度（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998年

ｂ若杉竜太編『平島遺跡Ｄ地点・塔ノ本古墳、祇園原遺跡２次、長迫遺跡Ｃ地点、長迫遺跡Ｄ地点、尾漕遺跡６次』日田市埋蔵文化財調査報告書第28集　日田市教育委員会　2001年

註32）土居和幸編『平島遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第３集　日田市教育委員会　1990年

註33）土居和幸・行時志郎・永田裕久編『会所宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第11集　日田市教育委員会　1996年

註34）土居和幸編「長者原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅰ』日田市教育委員会　1986年

渡邉隆行編「長者原遺跡」『平成12年度（2001年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2002年

註35）土居和幸・行時志郎編『惣田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第８集　日田市教育委員会　1994年

註36）若杉竜太編「大肥条里中村地区」『平成10年度（1998年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2000年

行時志郎編「大肥中村遺跡－発掘調査概報－」日田市教育委員会　2003年

註37）渡邉隆行編　「大肥条里大肥地区」『平成14年度（2002年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2003年
渡邉隆行編「大肥遺跡Ⅰ」日田市埋蔵文化財調査報告書第50集　2004年

註38）土居和幸編「朝日宮ノ原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅳ』日田市教育委員会　1989年

註39）土居和幸編「平島遺跡」『平成９年度（1997年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1999年

註40）工事中に発見されている。

註41）農作業中に発見されている。

註42）農作業中に発見されている。

註43）渡邉隆行、若杉竜太編「本村遺跡」『平成12・13年度（2000・2001年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会
2000・2001年

註44）友岡信彦編『夕田遺跡群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（14）大分県教育委員会　1999年

註45）行時志郎編『荻鶴遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第９集　日田市教育委員会　1995年

註46）土居和幸、若杉竜太編「長迫遺跡」『平成８～10年度（1996～1998年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会
1998～2000年

註47）行時志郎編『西有田赤ハゲ遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第７集　日田市教育委員会　1992年

註48）行時志郎編『尾漕遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第30集　日田市教育委員会　2001年

註49）土居和幸編「長者原遺跡」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅱ』日田市教育委員会　1987年

註50）渡邉隆行編『内ノ下遺跡・大行事遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第33集　日田市教育委員会　2002年

註51）小柳和宏編『小迫墳墓群』九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（３）大分県教育委員会　1995年

註52）土居和幸編「尾漕古墳」『平成８・９年度（1996・1997年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998・1999年

註53）土居和幸編「姫塚古墳」『日田地区遺跡群発掘調査概報Ⅲ』日田市教育委員会　1988年

註54）小田富士雄編「古代の日田-日田盆地の考古学-」『九州文化史研究所紀要』第15号　1970年

註55）後藤宗俊編「第3章古墳時代2. 日田地方の古式古墳」『日田市史』日田市　1991年

註56）村上久和・友岡信彦・染谷和徳編『日田条里遺跡群・佐寺横穴墓群・大迫遺跡・白岩遺跡・下綾垣遺跡』
九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（６）大分県教育委員会　1997年

註57）土居和幸・行時志郎・松下桂子編「赤迫遺跡」『平成５年度（1993年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1995年
土居和幸編「赤迫遺跡」『平成８年（1996年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1998年

註58）若杉竜太編『元宮遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書書第25集　2000年

註59）土居和幸、若杉竜太、渡邉隆行編「天満古墳群」『平成９～11年度（1997～1999年）日田市埋蔵文化財年報』
日田市教育委員会　1999～2001年
土居和幸・下村智編『吹上遺跡・天満古墳-範囲確認調査に伴う概要報告-』日田市教育委員会　2000年
平成14年度に日田市教育委員会が最終調査を実施し、古墳名を天満古墳から朝日天神山古墳と改めている。

註60）小柳和宏編『ガランドヤ古墳群』日田市教育委員会　1986年

註61）賀川光夫編『法恩寺古墳』日田市教育委員会　1959年

註62）渋谷忠章・村上久和・小柳和宏編『大分の装飾古墳』大分県文化財調査報告書第92輯　大分県教育委員会　1995年
若杉竜太編「穴観音古墳」『平成13年度（2001年）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2002年

註63）行時志郎編「平島横穴墓群」『平成７年（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997年

註64）渋谷忠章・吉竹学編『日田市羽野横穴墓群発掘調査概報』大分県教育委員会　1985年

註65）玉永光洋編『北友田横穴』大分県教育委員会　1993年

註66）行時志郎編『小迫辻原遺跡発掘調査概報』日田市教育委員会　1990年

註67）坂本嘉弘編『慈眼山瀬戸口遺跡』大分県教育委員会　1992年

註68）行時志郎編『長者原田迎遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第５集　日田市教育委員会　1992年

註69）行時志郎編「クビリ遺跡」『平成７年（1995年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1997年

註70）土居和幸・行時志郎編「慈眼山遺跡」『平成４年度（1992年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　1994年

註71）行時志郎編『上ノ馬場遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第23集　日田市教育委員会　2000年

註72）高橋徹・山本恭弘・松本康弘編『日田市高瀬遺跡群の調査４　寺内遺跡・上野第２遺跡』一般国道210号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　大分県教育委員会　2002年

註73）吉田博嗣編『川原田遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第32集　日田市教育委員会　2001年

註74）渡邉隆行編「元大原宮宝筐印塔の修理・移築」『平成12年(2000年度)日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001年

註75）田中裕介編『日田市高瀬遺跡群の調査１　誠和神社裏遺跡・後藤家墓地・陣ヶ原辻原遺跡・高瀬深ノ田遺跡』一般国道210号日田バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ　大分県教育委員会　1995年

註76）山路康弘編『山口遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第20集　日田市教育委員会　2000年

註77）永田裕久、行時志郎、土居和幸、若杉竜太、渡邉隆行編「史跡咸宜園跡『平成６～11年度（1994～1999）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　199～2001年

註78）土居和幸編　「永山布政所」『平成14年度（2002年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2003年

註79）平成15年度に日田市教育委員会が調査を実施した。

註80）渡邉隆行編『大波羅遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第29集　日田市教育委員会　2001年

註81）若杉竜太編『大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第45集　日田市教育委員会2003年

註82）横穴の開口が確認されている。

註83）「第Ⅰ編　先史・原始」『日田市史』　1990年

1. 大肥吉竹
2. 大肥条里下河内地区
3. 大肥遺跡
4. 中島横穴墓
5. 中村遺跡
6. 大肥中村遺跡
7. 古屋敷遺跡
8. 高野遺跡
9. 大肥上村遺跡
10. 大肥祝原遺跡
11. 祝原遺跡
12. 吹上遺跡
13. 北友田横穴墓群
14. 朝日ヶ丘遺跡
15. 鳥越古墳
16. 今泉遺跡
17. 小迫辻原遺跡
18. 草場第２遺跡
19. 本村遺跡
20. 草場遺跡
21. 後迫遺跡
22. 羽野横穴墓群
23. 小迫横穴墓群
24. 小迫古墳
25. 尾部田遺跡
26. 朝日天神山（天満）古墳群
27. 朝日宮ノ原遺跡
28. 岩崎遺跡
29. 谷ノ久保遺跡
30. 三和教田遺跡
31. 用松中村古墳
32. 葛原遺跡
33. 葛原古墳
34. 縫ヶ迫古墳群
35. 西有田赤ハゲ遺跡
36. 有田古墳
37. 大行事遺跡
38. 内ノ下遺跡
39. 川原田遺跡
40. 日田条里上手地区
41. 夕田遺跡
42. 夕田横穴墓群
43. 佐寺原遺跡
44. 大蔵古城跡
45. 丸山古墳
46. 慈眼山瀬戸口遺跡
47. 上ノ馬場遺跡
48. 中尾原遺跡
49. 大迫遺跡
50. 中尾古墳群
51. 城山古墳
52. 平島遺跡
53. 平島古墳群
54. 祇園原遺跡
55. 長迫遺跡
56. 長漕遺跡
57. 尾漕古墳群
58. 石ヶ迫遺跡
59. クビリ遺跡
60. 平島横穴墓群
61. 有田塚ヶ原古墳群
62. 有田塚ヶ原遺跡
63. 町野原遺跡
64. 亀ノ甲古墳
65. 求来里平島遺跡
66. ガニタ古墳群
67. 馬形遺跡
68. 森ノ元遺跡
69. 元宮遺跡
70. 東寺原遺跡
71. 東寺横穴墓群
72. 法恩寺山古墳群
73. 会所山遺跡
74. 会所宮古墳
75. 後山古墳
76. 鳥羽塚古墳
77. 会所宮遺跡
78. 大波羅遺跡
79. 薬師寺山古墳
80. 赤迫遺跡
81. 月隈横穴墓群
82. 永山布政所跡
83. 史跡咸宜園跡
84. 日田条里飛矢地区
85. 日隈古墳
86. 柳ノ本遺跡
87. 牧原千人塚（牧原遺跡）
88. 大部遺跡
89. 千人塚古墳群
90. 手崎遺跡
91. 口ヶ原遺跡
92. 惣田遺跡
93. 惣田塚古墳
94. 陣ヶ原遺跡
95. 姫塚古墳
96. 銭淵遺跡
97. 上野第１遺跡
98. 上野第２遺跡
99. 寺内遺跡
100. 護願寺古墳群
101. 長者原遺跡
102. 穴観音古墳
103. 津辻古墳群
104. 隈山遺跡
105. ガランドヤ古墳群
106. 徳瀬遺跡
107. 日田条里郷四郎地区
108. 荻鶴遺跡
109. 星隈横穴墓群
110. 三郎丸古墳
111. 穴原遺跡

第５図　主要遺跡分布図（1/40,000）

Ⅲ　調査の内容

⑴　調査の概要（第8図）

調査区はＪＲ線路を挟んだ工事予定区域内のうち南側に位置し、川側から比べると一段高くなっている。北西－南東方向に長く伸びており、最長約212m、最大幅56m、面積8,270㎡を測る。大肥川筋に向かって緩やかに傾斜しており、調査区内での比高差は約1.2mを測る。川側の工事区域は大きく削平されて段差が形成されており、本来緩やかに川へと傾斜していたものと思われる。

調査区南東は水田造成の際に削平を受けており、ピットの中には近年の攪乱や石の抜取などが見られたが、住居跡などの痕跡は見られなかったことから、川へと傾斜するにしたがって遺構の密度は低くなるものと考えられる。調査区中央付近のやや高い位置に住居跡などの遺構が密集し、また北西側へと川へ向かうにしたがって遺構の密度は低くなるようである。なお、この北西側は盛り土保存されるとのことであったことから、遺構検出にとどめている。

検出された遺構面は黄褐色砂質土で、この面を掘り込む形で遺構が検出された。検出された遺構の埋土は暗褐色土、灰褐色土がみられ、古代の遺構に前者、古墳時代の遺構に後者が多く見られた。なお、縄文時代の土坑も確認され、遺物も包含層中や柱穴などから確認されていることから、この遺構検出面の下層には縄文時代の遺構が存在している可能性が考えられる。

なお、検出された主な遺構は、竪穴住居跡31軒、掘立柱建物12棟、竪穴状遺構７基、溝11条の他、土壙多数、柱穴多数が検出された。主な出土遺物は土師器、須恵器、朱墨土器、製塩土器、石鏃、石匙、スクレイパー、鉄器、紡績車、砥石､玦状耳飾などである。遺構の大半は完掘しており、一部北側の遺構が確認にとどめている。遺構番号は第８図に示すとおりである。

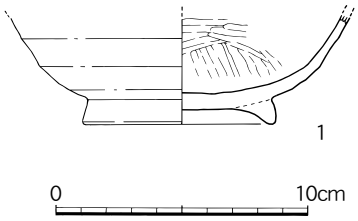
⑵　基本層序

この北西側には流路などが見られ、砂性の土が幾重にも堆積（第７図）している包含層が確認された。この堆積した砂性の土（23層～27層、39～42層）には、ローリングを受けた土器が包含されていたことから、相当回数の河川の氾濫によって流された可能性が高いようである。ただし、この面の上面（15層）には住居跡などが確認されたことから、氾濫後に集落が形成されたものと考えられる。またこの遺構の上面には水田層（13～17層）が形成されており、基盤土と考えられる14層中からは土師器坏（第６図）が出土していることから、古代時期の集落を廃絶した後に水田を形成したものと考えられる。なお､12層より上層は中世以降に水田を作り変えた跡と考えられる。

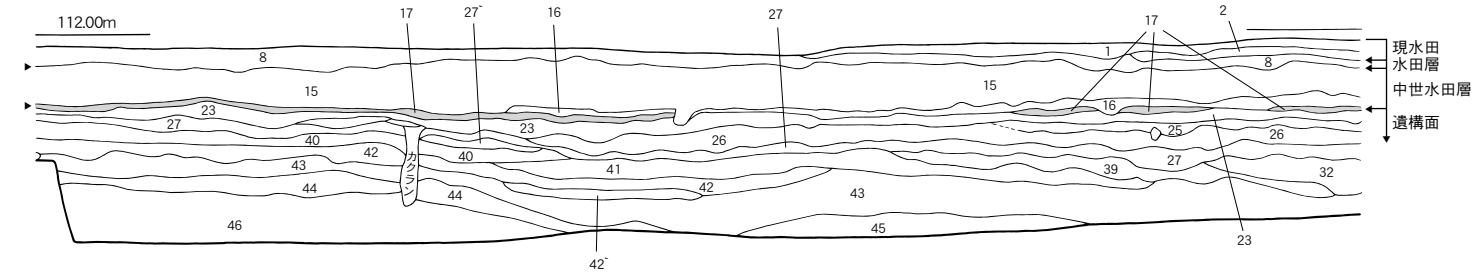
写真６　調査区北壁土層

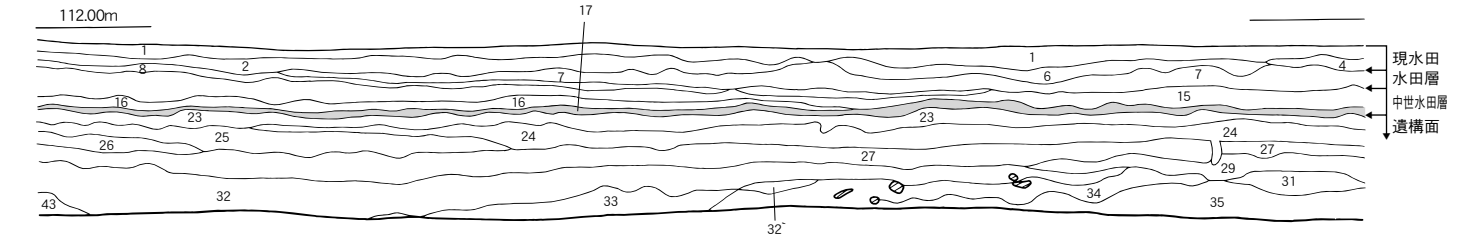
水田層出土遺物（第６図、図版44、68）

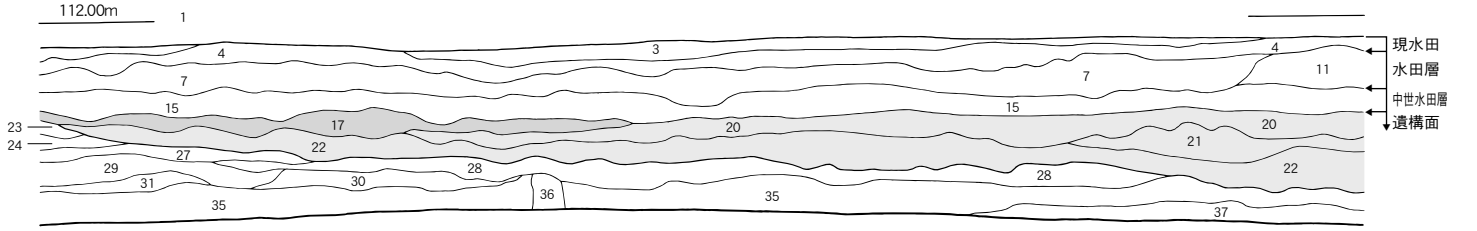
１は土師器の坏である。底面はやや丸みをもち、口縁部にかけて丸みを持ち緩やかに立ち上がる。内面は黒色でミガキがかけられ、外面は回転ナデ調整の内黒土器である。

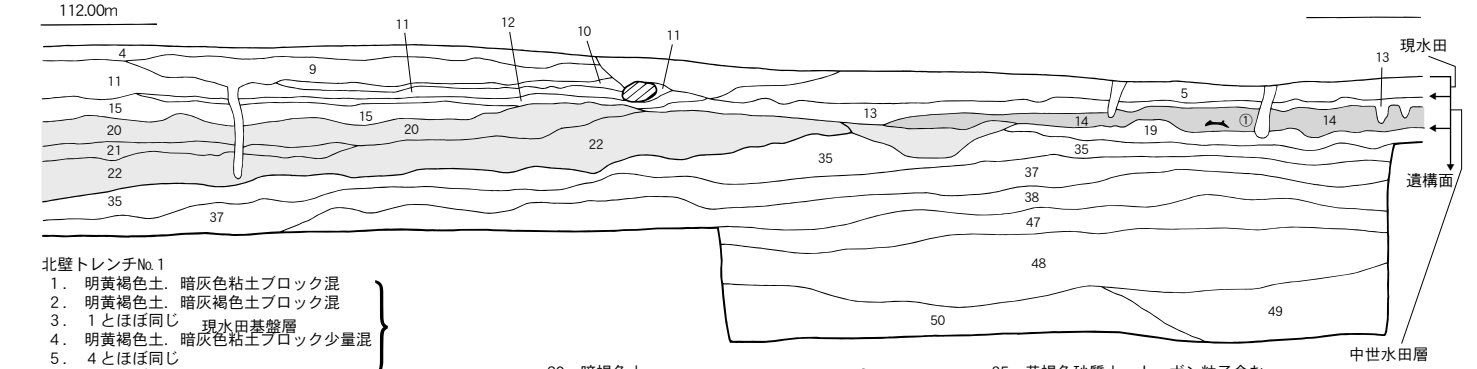


第６図　水田層出土遺物（1/3）









北壁トレンチNo.1

1．明黄褐色土．暗灰色粘土ブロック混
2．明黄褐色土．暗灰褐色土ブロック混
3．１とほぼ同じ
4．明黄褐色土．暗灰色粘土ブロック少量混
5．４とほぼ同じ
6．２とほぼ同じ
} 現水田基盤層

7．暗灰褐色土．黄褐色粘土ブロック少量混
8．暗黄褐色土．暗灰褐色ブロック混
9．暗黄褐色土．暗灰褐色ブロック少量混
10．暗黄褐色土．暗灰褐色ブロック混
11．黄褐色土．黄褐色ブロック混
12．黄褐色土．暗灰褐色ブロック混
} 前水田基盤層

13．暗灰褐色土．カーボン粒子少量混
14．黄褐色土．カーボン粒子少量混
15．暗灰褐色土．黄褐色土．カーボン粒子混
16．暗灰褐色土．黄褐色土混
17．暗黄褐色土．暗灰褐色土少量混
} 中世水田層か？

18．淡褐色土．黄褐色砂質土粒子混．カーボン粒子混
19．淡灰褐色土．カーボン粒子混
20．暗褐色土
21．暗褐色土．黄褐色ブロック少量含む
22．淡黒褐色土．黄褐色ブロック少量含む
} 大流路

23．暗灰褐色砂質土
24．淡褐色砂質土．黄褐色砂質土ブロック混
25．淡灰褐色砂質土
26．淡灰褐色砂質土．黄褐色砂質土ブロック混
27．暗黄褐色砂質土．淡灰色粒子．鉄分含む
27′淡灰褐色砂質土
28．暗黄褐色土．淡灰色砂質土多く含む．鉄分含む
29．淡灰褐色砂質土．鉄分含む
30．淡灰色砂質土．褐色砂質土ブロック混
31．30にほぼ同じ
32．淡灰黄褐色砂質土．黄褐色土均一に混じる
32′淡灰褐色砂質土
33．淡灰黄褐色．砂質土．カーボン粒子混
34．淡褐色砂質土（遺構検出面）
35．黄褐色砂質土．カーボン粒子含む
36．暗灰褐色砂質土．ブロックか？
37．暗黄褐色砂質土層
38．淡灰黄褐色砂質土層
39．灰色砂質土ブロック
40．暗灰褐色砂質土層
41．暗灰黄褐色砂質土層．鉄分含む
42．黄褐色砂質土層
42′淡褐色砂質土層
43．褐色砂質土層．黄褐色砂質土多く混
44．淡灰色砂質土
45．灰白色砂質土
46．明黄褐色砂質土
47．灰黄褐色砂質土層
48．淡褐色砂質土層．粘性あり．小石少量含む
49．褐色砂質土層．やや粘性あり．小石、礫を含む
50．暗黄褐色砂質土層．やや粘性あり．小石、礫を多く含む

0　1m

※濃いトーンは水田層、薄いトーンは11号溝埋土

第７図　調査区北壁土層図（1/40）

第８図　遺構配置図（1/400）

⑶　遺構と遺物

先述した遺構面より検出された各遺構とそれより出土した遺物について以下に説明を加える。

１．竪穴住居跡

竪穴住居跡は31軒検出され、うち24軒について完掘を行っている。古墳時代から古代までのものが多く、そのほとんどがカマドを持つものであった。特に古墳時代に比べて古代の住居跡の方が小型のものが多く、２m前後の大きさが多く見られた。カマドの方向は東カマドが見られず、各方向に構築されていた。

１号竪穴住居跡（第９、10図、図版３、４）

調査区中央にて検出され、上面は大幅に削平を受けている。２号溝を切って構築されており、確認面での規模は南北方向で約2.7m、東西方向で約2.4m、床面までの深さ約５㎝を測る。やや東側に広がる正方形プランを呈している。床面には灰褐色土の貼床が貼られており、主柱穴は確認出来なかった。

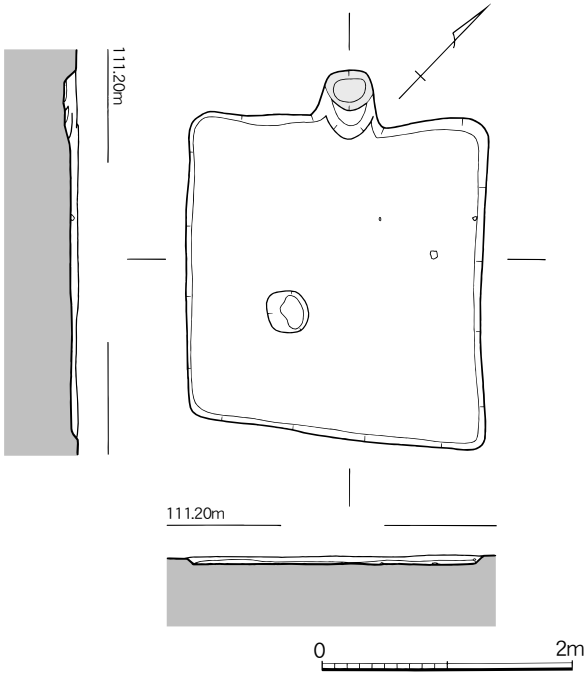
カマドは北西壁中央に付設されており、住居跡の外に張り出すように作り出されている。床面は被熱により赤褐色に変色し硬化しているが、壁面は被熱を受けていなかった。カマド埋土は硬化面上面に焼土が堆積している状況であったため、廃棄の状況は確認出来なかった。

出土遺物は土師器須恵器の小破片が出土しているが、実測可能な遺物の出土は見られなかった。

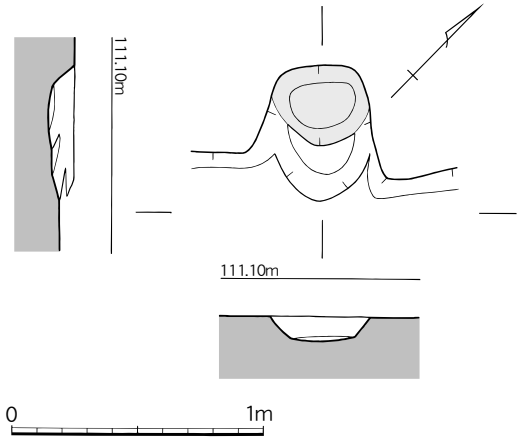
２号竪穴住居跡（第11、12図、図版３、４）

調査区中央にて検出され、上面は削平されている。確認面での規模は南北方向で約3.3m、東西方向で約3.1m、深さ約20㎝を測る。南東側にやや広がる正方形プランを呈し、深さ５～10㎝程度の壁周溝が全周している。床面には灰褐色の貼床が貼られており、主柱穴は確認出来なかった。北東コーナー付近には浅いピットがあり、中には焼土が含まれていた。あるいは屋内土坑としての利用も考えられる。埋土は暗褐色土である。

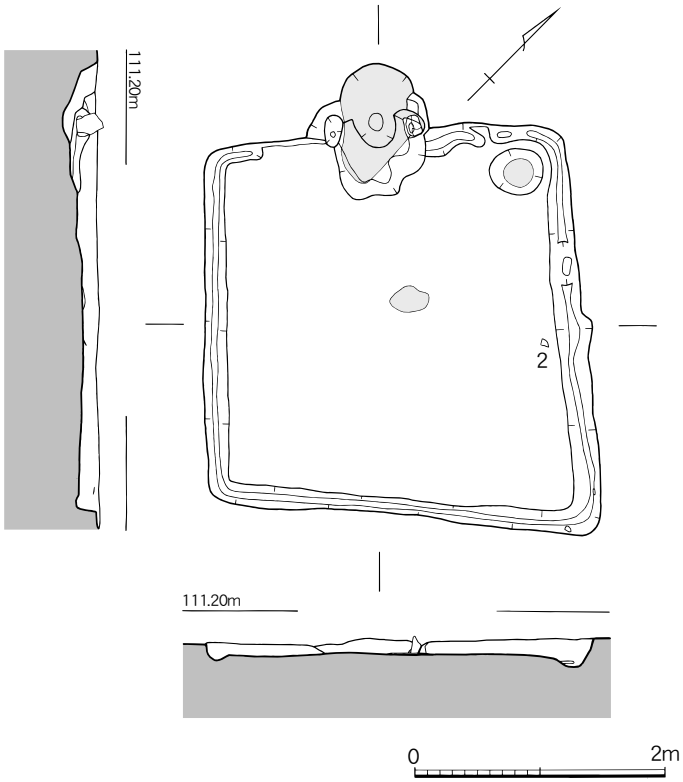
カマドは北西壁中央に付設されており、住居跡の外に張り出すように作り出されている。床面を



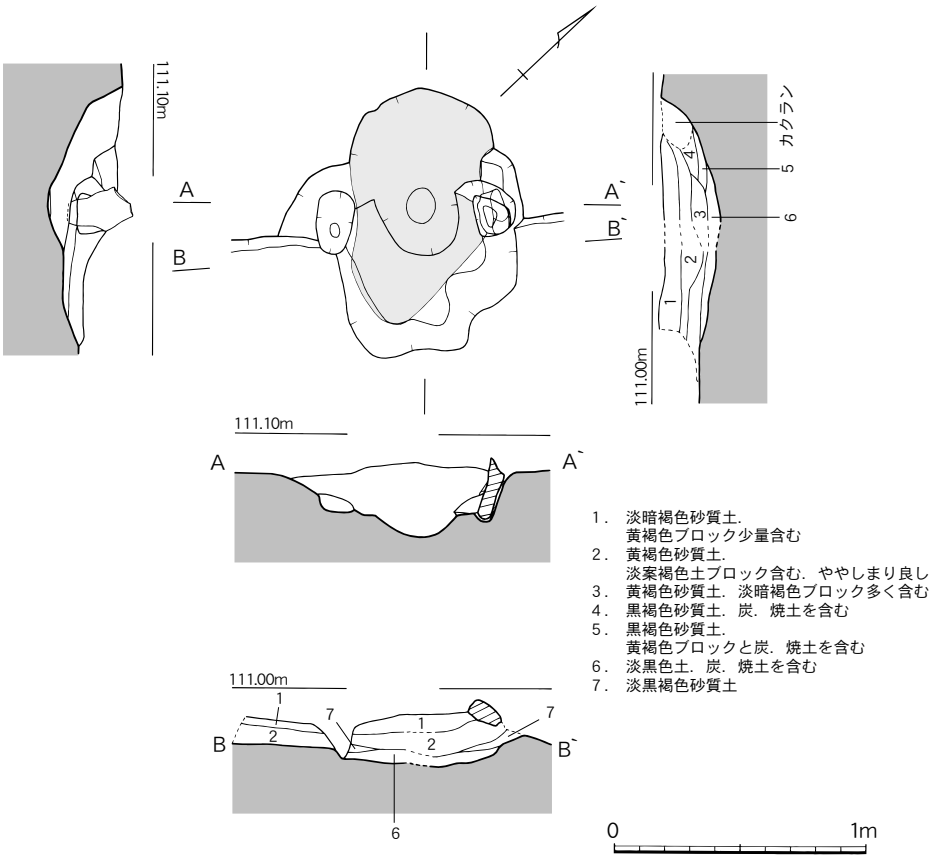
第９図　１号竪穴住居跡実測図（1/60）



第10図　１号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第11図　２号竪穴住居跡実測図（1/60）



第12図　２号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

窪ませており、右側袖に花崗岩製の袖石が確認され、左側には抜取痕が確認された。床面は被熱により、赤褐色に変色し、硬化していた。カマド埋土を確認すると６層がカマド使用時の炭と焼土の堆積と考えられ、その上面に３、５層といった黄褐色土の埋土、およびブロックの入った層位が確認され、その上面に１層のような住居埋土と類似する暗褐色砂質土が堆積していた。おそらく、3、5層などは袖、天井部の崩落層であることから、廃棄後すぐにカマドは破壊されカマド祭祀が行われたのち、１層が堆積したものと考えられる。

出土遺物（第13図、図版45）

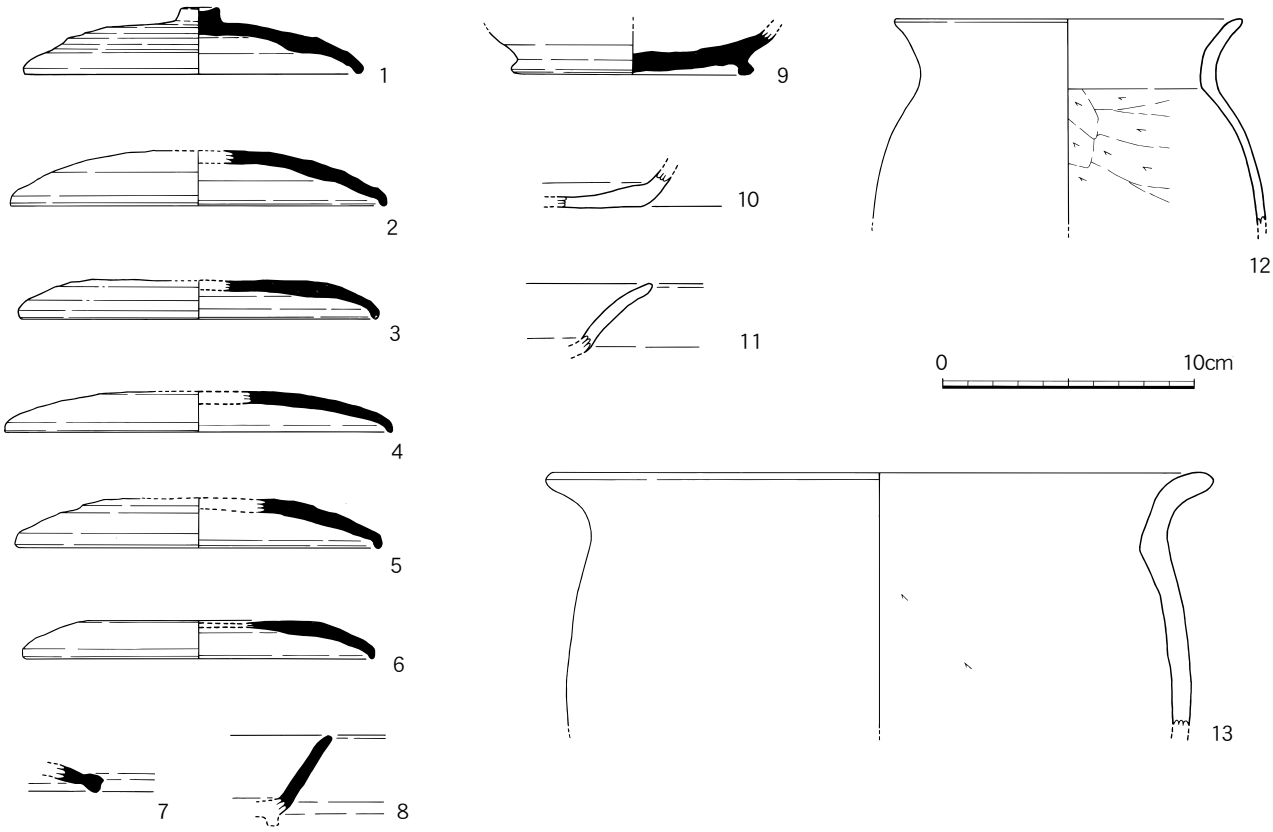
１～７は須恵器蓋である。１、７はカマドより出土し、２、５は床面より出土している。１には宝珠状ツマミが残り、端部がやや丸みを帯びて小さく下方に下がる。２～６は端部が下方に折れ曲がる。７は断面三角形状の口縁端部を呈している。８～９は須恵器坏身である。８は床面より出土した。８はやや直立気味に口縁部が立ち上がり、９は底面がやや下がり、広大は若干外側に開く。

10は土師器坏身である。11は土師器高坏で、やや緩やかに外反する。12、13は土師器甕である。12は小型の甕で口縁部や緩やかに外に開く。13はカマドより出土し、口縁部は端部にかけて大きく外反する。

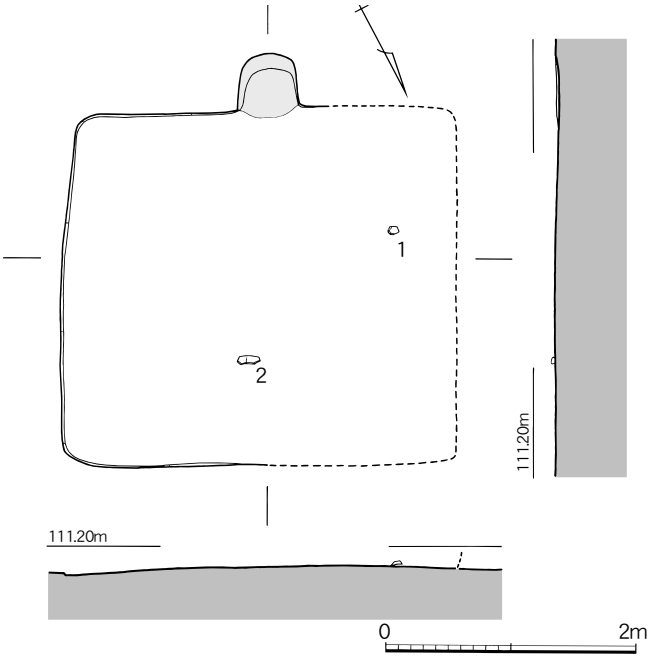
３号竪穴住居跡（第14図、図版5）

調査区中央部で検出され、大部分が削平を受けている。西半分は貼床面が残存している状態であった。確認面での規模は南北軸で約2.8m、東西軸で推定約3.1m、深さ約２㎝を測り、正方形プランを呈する。床面には灰褐色粘質土の貼床が貼られ、主柱穴は確認出来なかった。

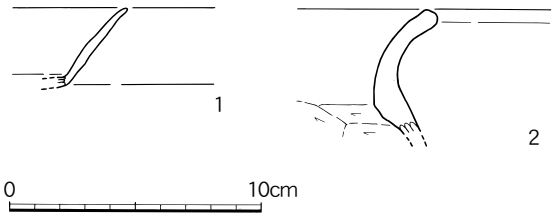
カマドは南側壁中央に付設され、外に張出すように作り出される。床面は被熱により赤褐色に変色し硬化していた。カマド埋土は硬化面上面に焼土が堆積している状況であったため、廃棄の状況は確認出来なかった。



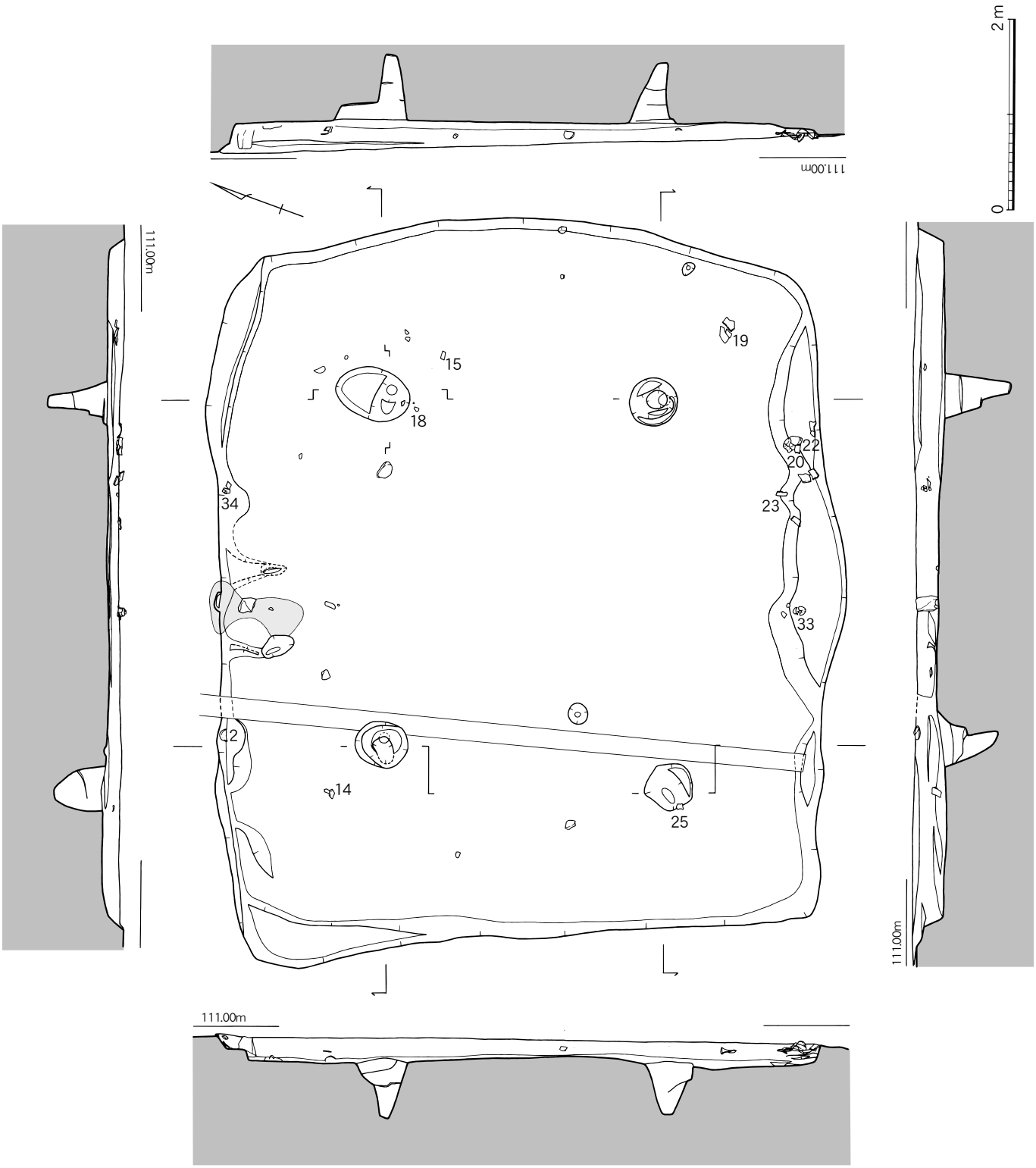
第13図　２号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



第14図　３号竪穴住居跡実測図（1/60）



第15図　３号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



第16図　４号竪穴住居跡実測図（1/60）

出土遺物（第15図、図版45）

１は土師器高坏である。口縁部にかけて直立する。２は土師器甕である。口縁部は外側に外反する。いずれも床面より出土した。

４号竪穴住居跡（第16、17図、図版５、６）

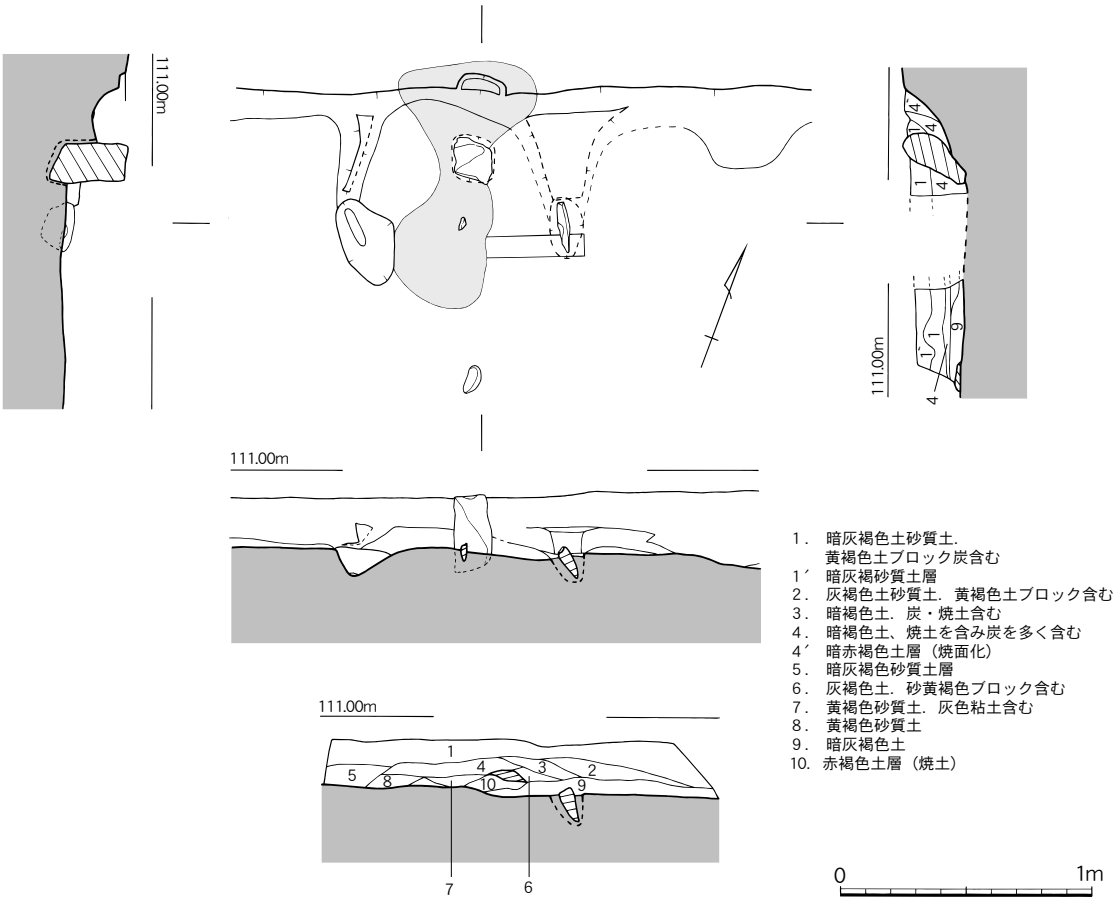
調査区東側で検出され、４号溝に切られ、本遺跡内では最大規模の竪穴住居跡である。確認面での規模は南北軸約6.6m、東西軸約7.8m、深さ約30㎝を測る方形プランを呈する。床面には灰褐色

粘土で貼床が貼られており、主柱穴は４本確認された。主柱穴の深さはおおよそ60～70㎝を測り、段落ち状を呈する。北西コーナー、南壁中央部にはテラス状の段が作り出される。

カマドは北壁中央に付設されており、住居跡内部に付設される。一部煙道と思われる段差が奥に確認されている。右側には袖石の残骸が残り、左側には抜取痕が確認され、支脚に用いられた石も確認された。石はいずれも凝灰岩を用いており、右袖石は上面が折られた状態であった。袖は袖石から奥壁までの間に灰色粘土で形成されて残存していたが、残りが悪く、一部掘り間違えてしまった。（図面上では確認時の線を復元表示している）床面は被熱により、薄い赤褐色に変色し、やや硬化していた。カマド埋土を確認すると９、10層がカマド使用時の炭と焼土の堆積と考えられ、その上面に６～８層といった灰褐色粘土、黄褐色ブロックの入った層位が確認され、その上面に１～５層のような住居埋土と類似する土が堆積している。おそらく６～８層は袖、天井部の崩落層であることから、廃棄後すぐにカマドは破壊され、カマド祭祀が行われたのち、自然に堆積したものと考えられる。

出土遺物（第18、19図、図版45、46）

１、２は須恵器坏蓋である。口縁部にかけて下方に下がっている。２は口縁端部を尖らせ、端部を内湾させる。３～５は須恵器坏身である。３は床面より出土した。体部は緩やかに湾曲し、逆刺を持つ。口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。６は須恵器無頸壺である。７は須恵器高坏の脚部である。貼床より出土した。８は須恵器高坏である。口縁部はやや直立ぎみである。９は須恵器甕で口唇部を肥厚させる。口唇部外面下部には波状文が施される。10は土師器坏である。頸部に段を持つ。11～17は土師器高坏で、13～16は床面より出土した。12、13は坏部で口縁部は外に開きながら外反する。」14～17は脚部である。17は端部にかけてやや外に開く。18は土師器広口壺



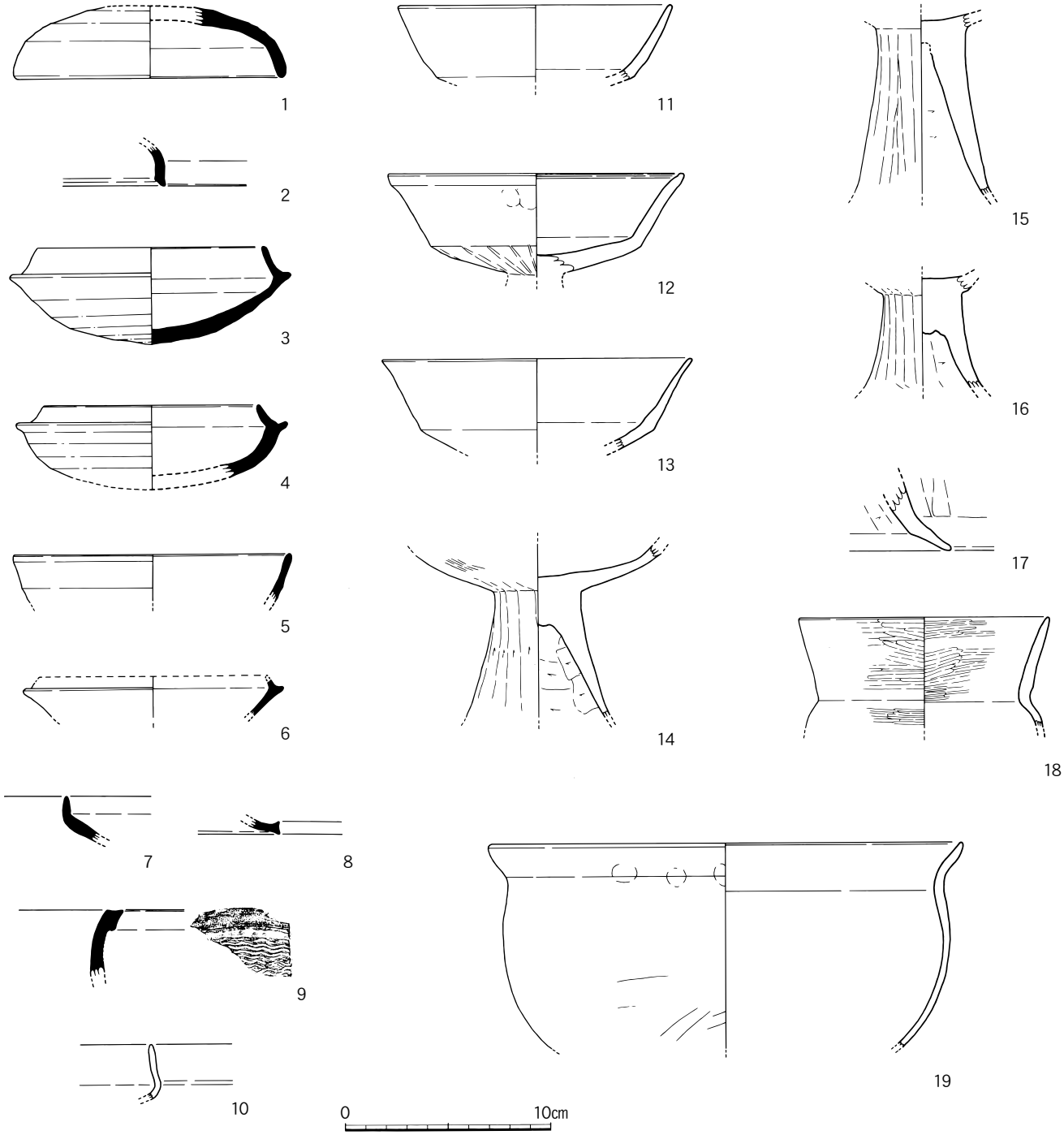
第17図　４号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

で床面より出土した。口縁部は直立ぎみで、内外ともにミガキが施される。19は土師器鉢で、床面より出土した。口縁部は緩やかに外傾しながら、端部にかけて内湾する。

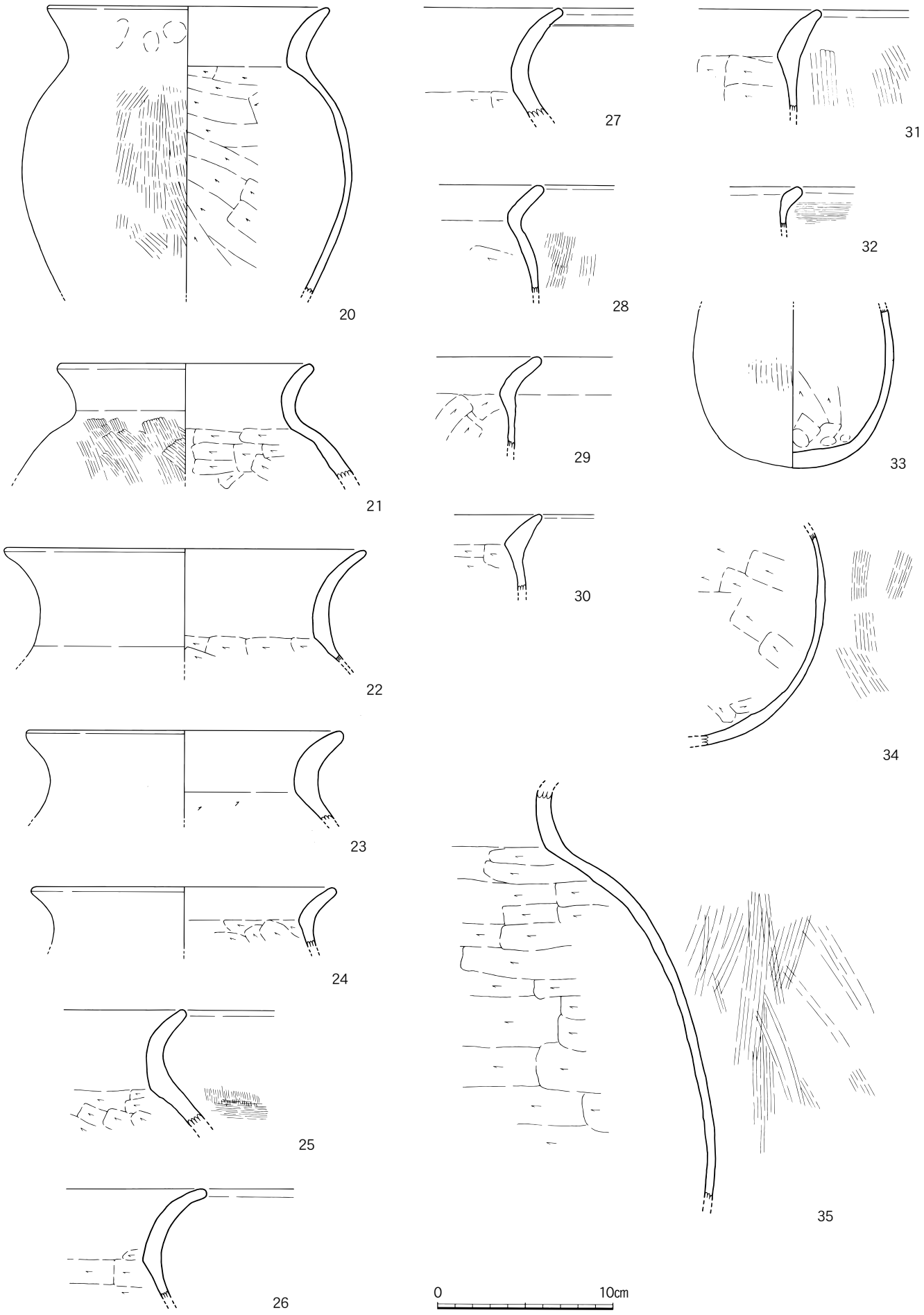
20～35は土師器甕である。20、22、23、25、33、34は床面より出土し、24、26、35はカマドより出土した。20、21、25はやや頸部がすぼまり口縁部は外湾する。22～27は口縁部が緩やかに外反する。28～30、32は小型甕の口縁部か。口縁部は小さく外反する。31は甑である。33は小型甕の胴部である。35はやや大型の甕の胴部である。

５号竪穴住居跡（第20、21図、図版７、８）

調査区東側で検出され、６号竪穴住居跡、４、５号掘立柱建物を切る住居跡である。確認面での規模は東西軸約3.1m、南北軸約3.4m、深さ約10㎝を測る正方形プランを呈する。床面には灰褐色粘土で貼床が貼られており、主柱穴は確認出来なかった。深さ約５㎝の壁周溝がほぼ全周する。



第18図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図①（1/3）

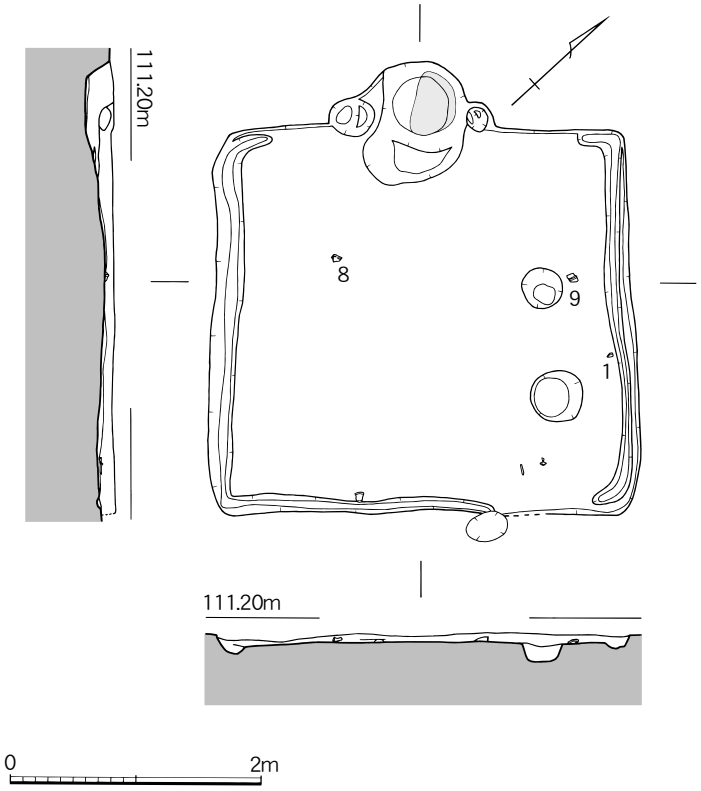


第19図　４号竪穴住居跡出土遺物実測図②（1/3）

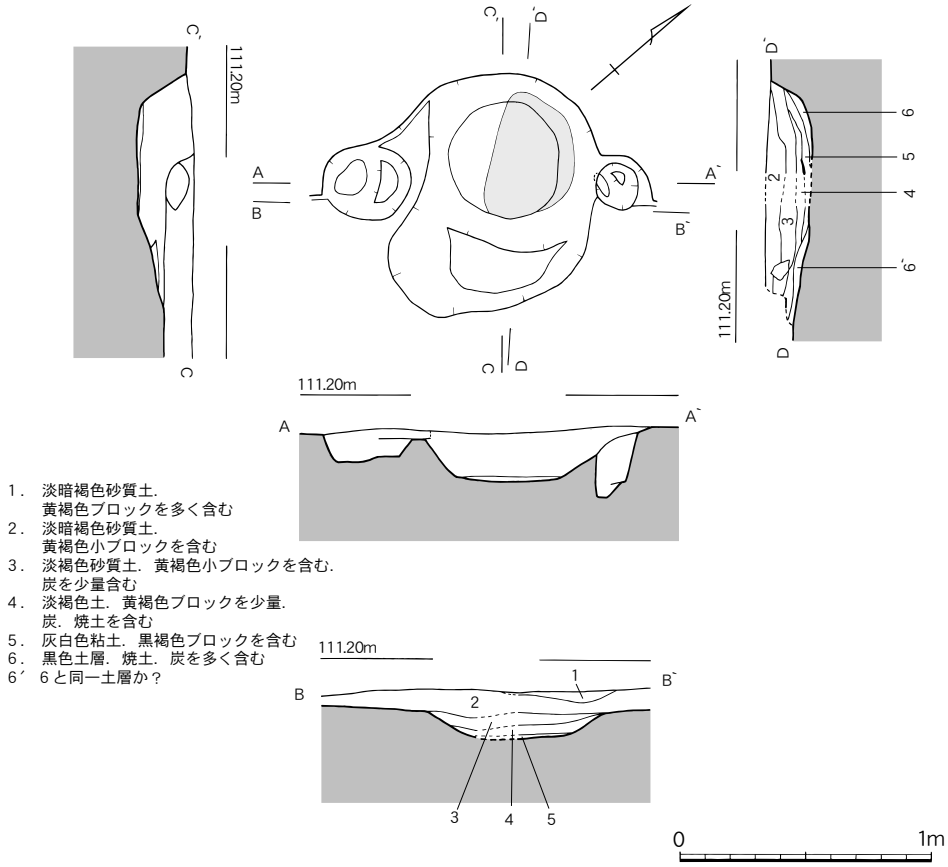
カマドは西壁中央に付設されており、外に張出すように作り出される。床面を窪ませており、両側には袖石の抜取痕が確認された。床面は被熱により、赤褐色に変色し、やや硬化していた。カマド埋土を確認すると６層がカマド使用時の炭と焼土の堆積と考えられ、その上面に灰白色粘土、黄褐色ブロックを含む４、５層が堆積し、その上面に１～３層のような住居埋土と類似する土が堆積している。おそらく５層は袖、天井部の崩落層であることから、廃棄後すぐにカマドは破壊され、カマド祭祀が行われたのち、自然に堆積したものと考えられる。

出土遺物（第22図、図版47）

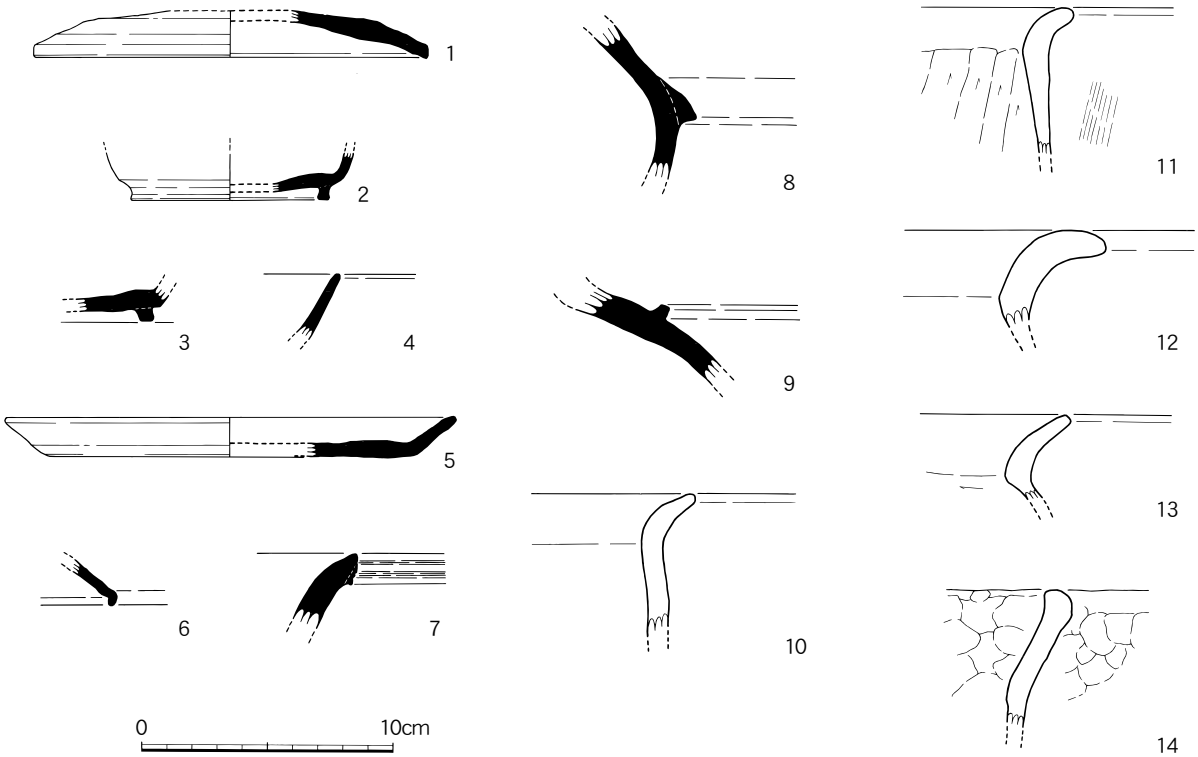
１は床面より出土した須恵器坏蓋である。口縁部はやや下方にツマミ下げる。２～４は須恵器坏身である。高台はやや内側に付けられる。５は須恵器皿である。口縁部は外側に開いている。６は須恵器高坏か。端部は下方に折下がる。７は須恵器甕である。口唇部には沈線文が巡る。８は床面より出土した須恵器壺の胴部である。断面三角形状の突帯が付される。９は床面より出土した須恵器壺の頸部である。断面台形状の突帯が付される。10～13は土師器甕である。10は床面、12はカマドより出土した。10、11は胴部が直立気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外湾する。12は口縁部が丸みを帯びながら外湾する。13は頸部がすぼまり、口縁部は外傾する。14はカマドより出土した手捏ね土器である。口縁部はやや肥厚し胴部下半で屈曲する。



第20図　５号竪穴住居跡実測図（1/60）



第21図　５号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第22図　５号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

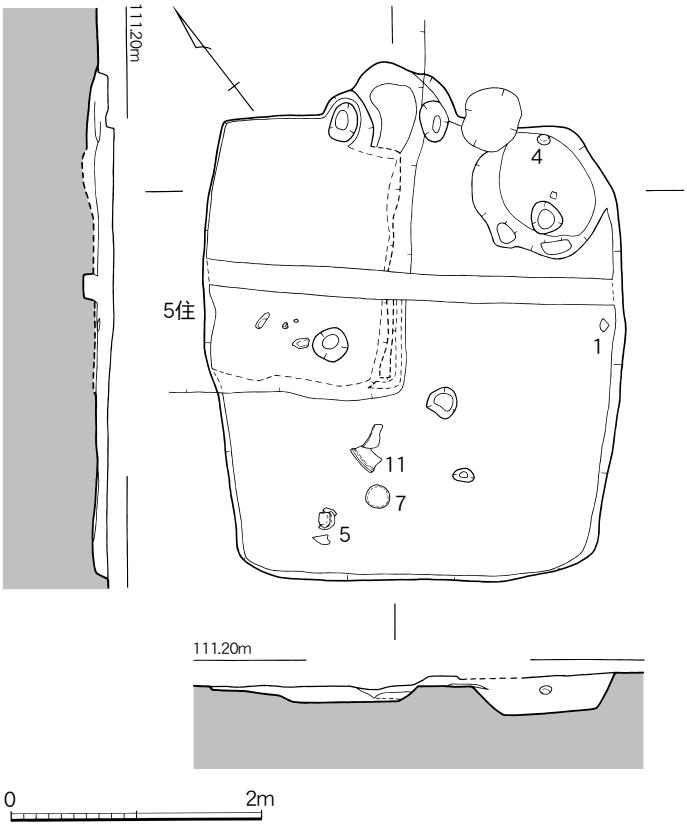
６号竪穴住居跡（第23、24図、図版8）

調査区東側で検出され、全体の１/４を５号竪穴住居跡に切られる。４号掘立柱建物と切りあい関係にあると考えられるが、５号竪穴住居跡に床面が削平されていたため、前後関係は不明である。確認面での規模は南北軸約3.7m、東西軸約3.3m、深さ約10㎝を測り、やや丸みを帯びる方形プランを呈する。焼失住居であると考えられ、床面直上には炭層が堆積していた。床面には灰褐色粘土で貼床が貼られており、主柱穴は確認出来なかった。北東コーナーには屋内土坑が付設されていた。

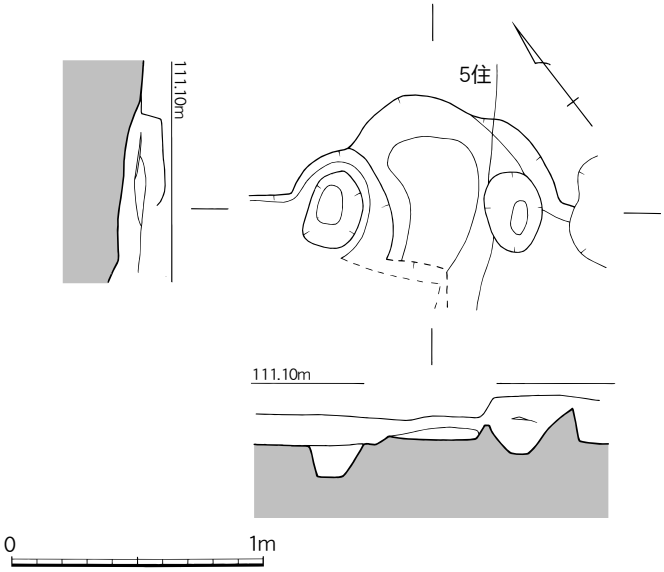
カマドは北壁中央に付設されており、外に張出すように作り出される。大部分を５号住居跡に壊されていたが、床面はかろうじて残存していた。床面を窪ませており、両側には袖石の抜取痕が確認された。床面は削平のためか硬化面を確認できなかった。埋土の大半は残存していないため廃棄の状況は確認出来なかった。

出土遺物（第25図、図版47）

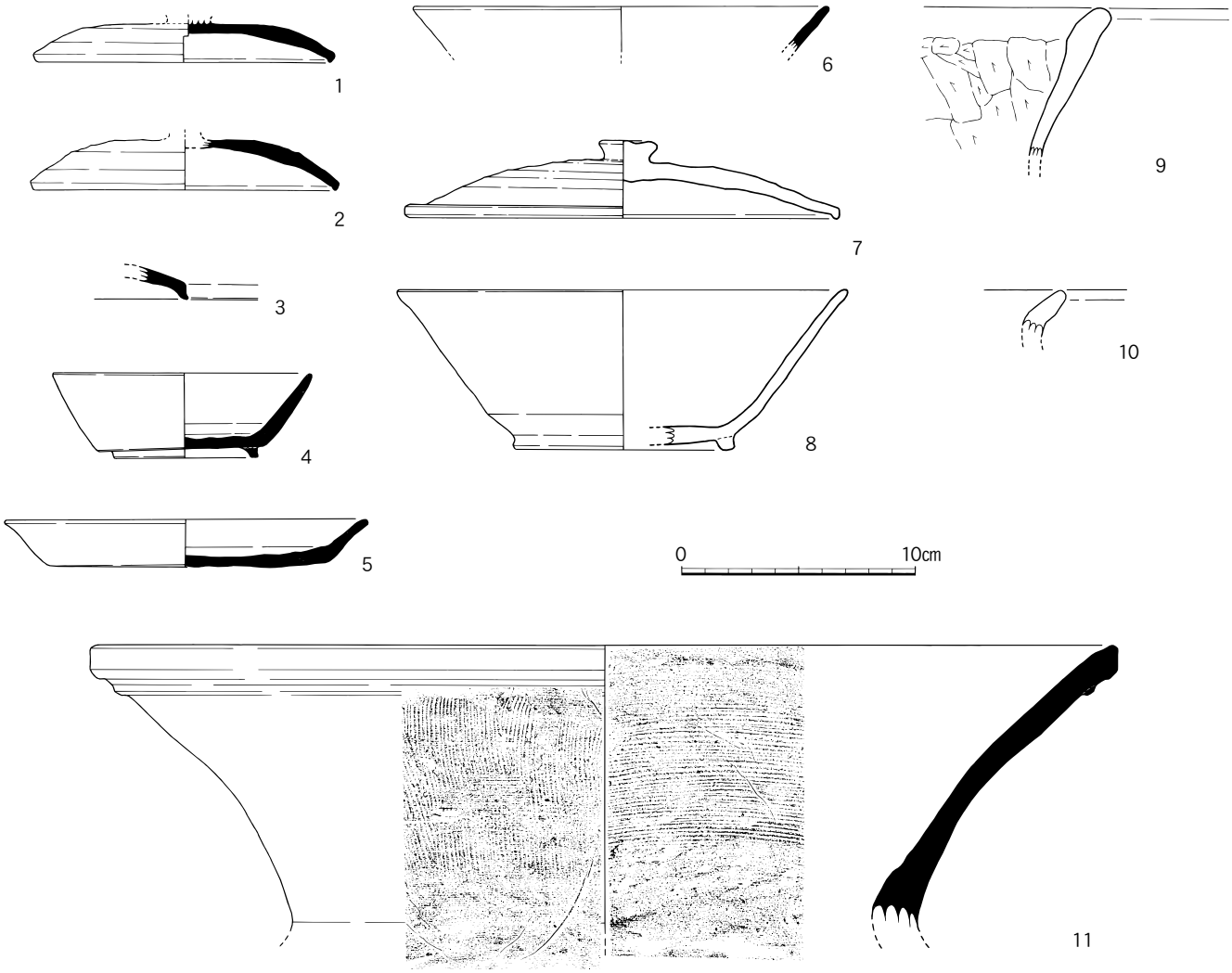
１～３は須恵器坏蓋である。１は床面より出土し、端部はややツマミ下げる。天井部にはツマミの痕跡が残る。２は端部をツマミ下げ、６はやや端部が外側に開く。４は床面より出土した須恵器坏身である。口縁部はやや外側に開く。５は床面より出土した須恵器皿である。口縁部は緩やかに外側に開き、外反する。６は須恵器の坏か。口縁部しか残存していないため皿の可能性もある。坏だとするとやや大型のものか。７は床面より出土した土師器坏蓋である。宝珠状ツマミを持ち、口縁端部は下方にツマミ下げる。８は床面より出土した土師器坏身である。口縁部は大きく外に開き、高台は底部外側に付けられる。９は土師器甑である。10は土師器小甕の口縁部である。11は須恵器甕である。口唇部はやや肥厚し、下部に突帯が巡る。



第23図　６号竪穴住居跡実測図（1/60）



第24図　６号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第25図　６号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

７号竪穴住居跡（第26、27図、図版９）

調査区中央にて検出され、上面は大幅に削平を受けて、床面のみが残存していた。８、11号竪穴住居跡を切っている。確認面での規模は東西軸で約3.6m、南北軸で約3.7m、床面までの深さ約１㎝を測る。やや南側に広がる正方形プランを呈している。床面には灰褐色土の貼床が貼られており、主柱穴は確認出来なかった。

カマドは西壁中央に付設されており、住居跡の外に張り出すように作り出されている。床面を窪ませており、被熱により赤褐色に変色し硬化していた。カマド埋土は硬化面上面に焼土が堆積している状況であったため、廃棄の状況は確認出来なかった。

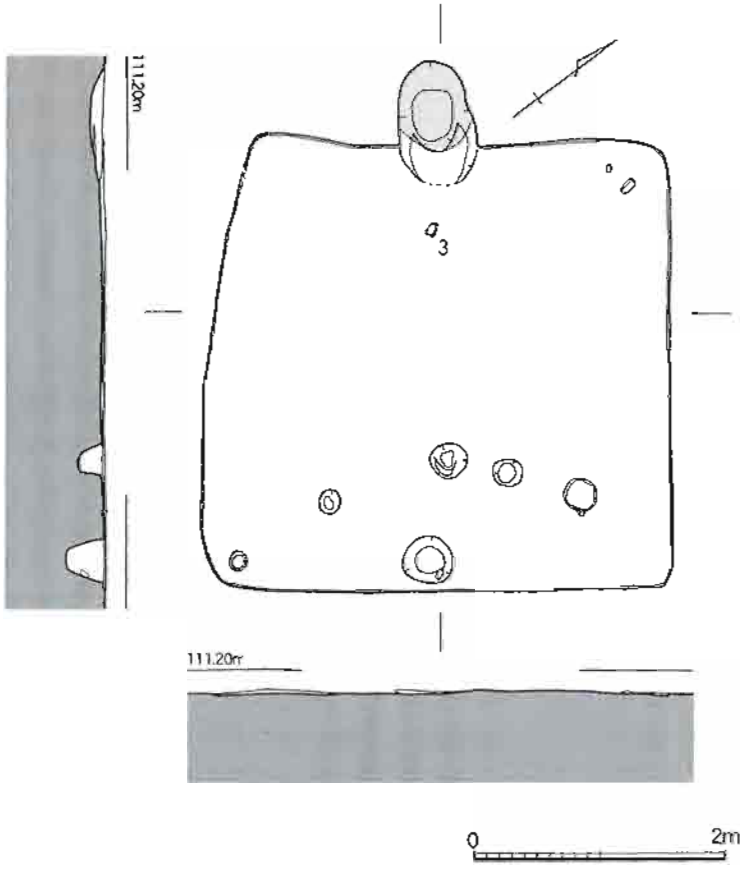
出土遺物（第28図、図版48）

１はカマドより出土した須恵器坏身である。２はカマドより出土した土師器坏である。口縁下部に稜が形成される。３、５はカマドより出土した土師器甕である。３は小甕で、口縁部はやや緩やかに外湾する。４は口縁部を外に大きく湾曲させる。５は口縁部を肥厚させる。６は床面より出土した土師器の製塩土器である。外面は指頭圧痕が残り、内面には部分的に布痕が残存している。

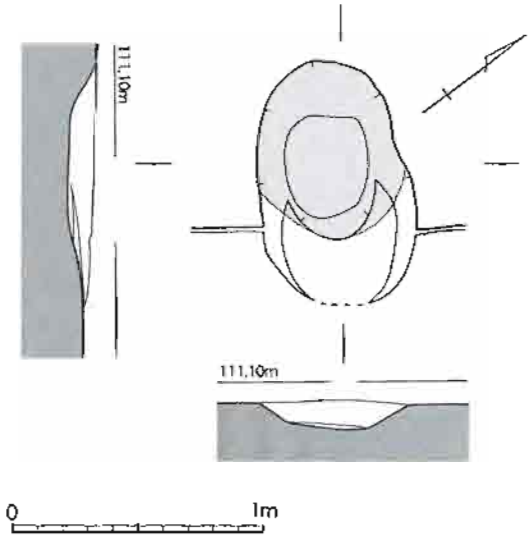
8号竪穴住居跡（第29、30図、図版10）

調査区中央にて検出され、本遺跡内で最も小さな竪穴住居跡である。7号竪穴住居跡に切られ、10、11号竪穴住居跡、3号掘立柱建物、2号溝を切っている。確認面での規模は東西軸で約2.3m、南北軸で約2.1m、床面までの深さ約15cmを測る。正方形プランを呈している。床面には灰褐色土の貼床が貼られており、主柱穴は確認出来なかった。

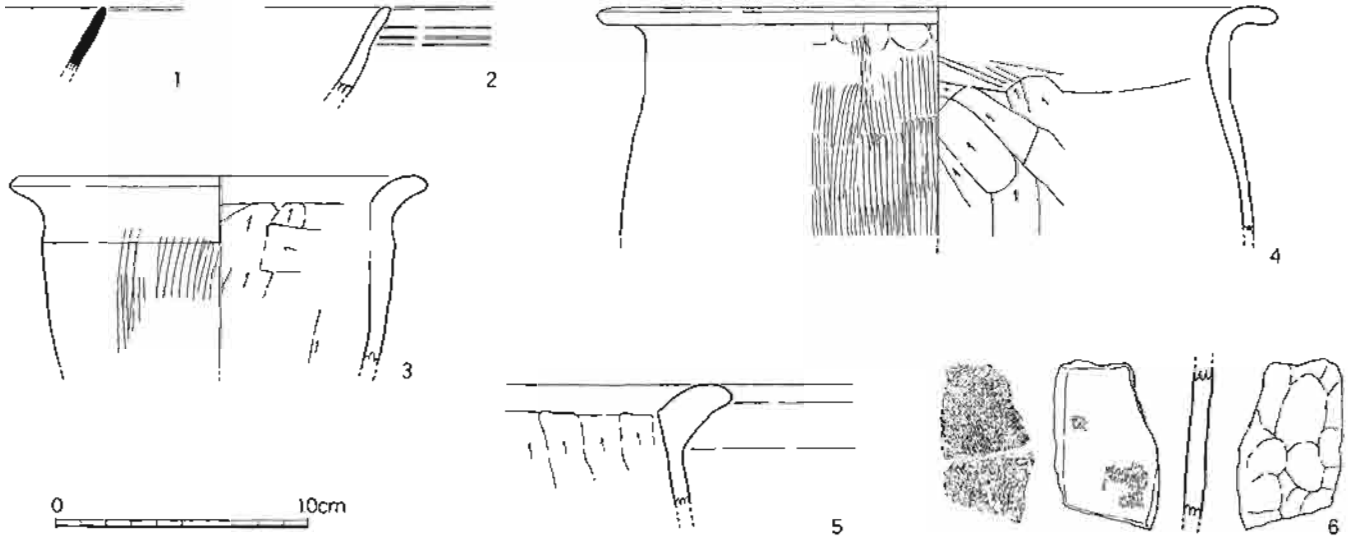
カマドは西壁やや北よりに付設されており、住居跡の外に張り出すように作り出されている。床



第26図　7号竪穴住居跡実測図（1/60）

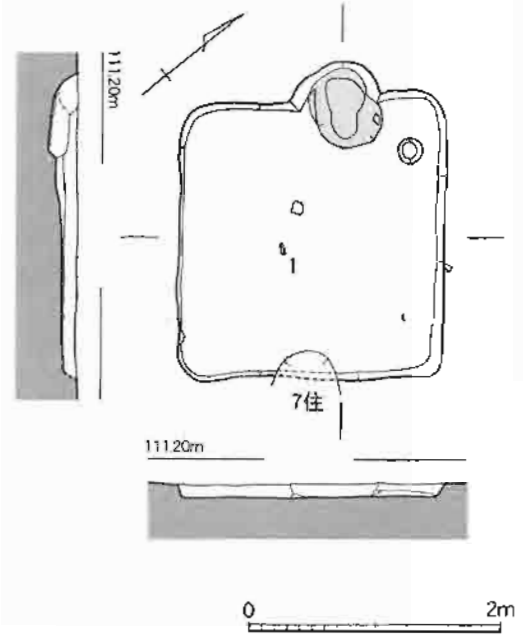


第27図　7号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

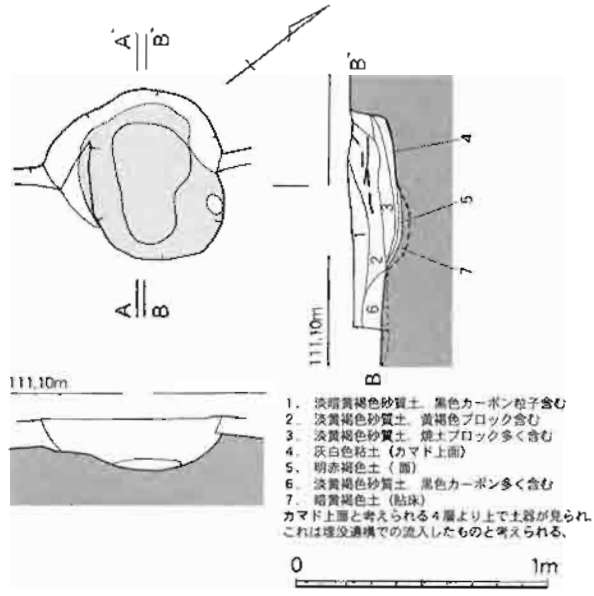


第28図　7号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

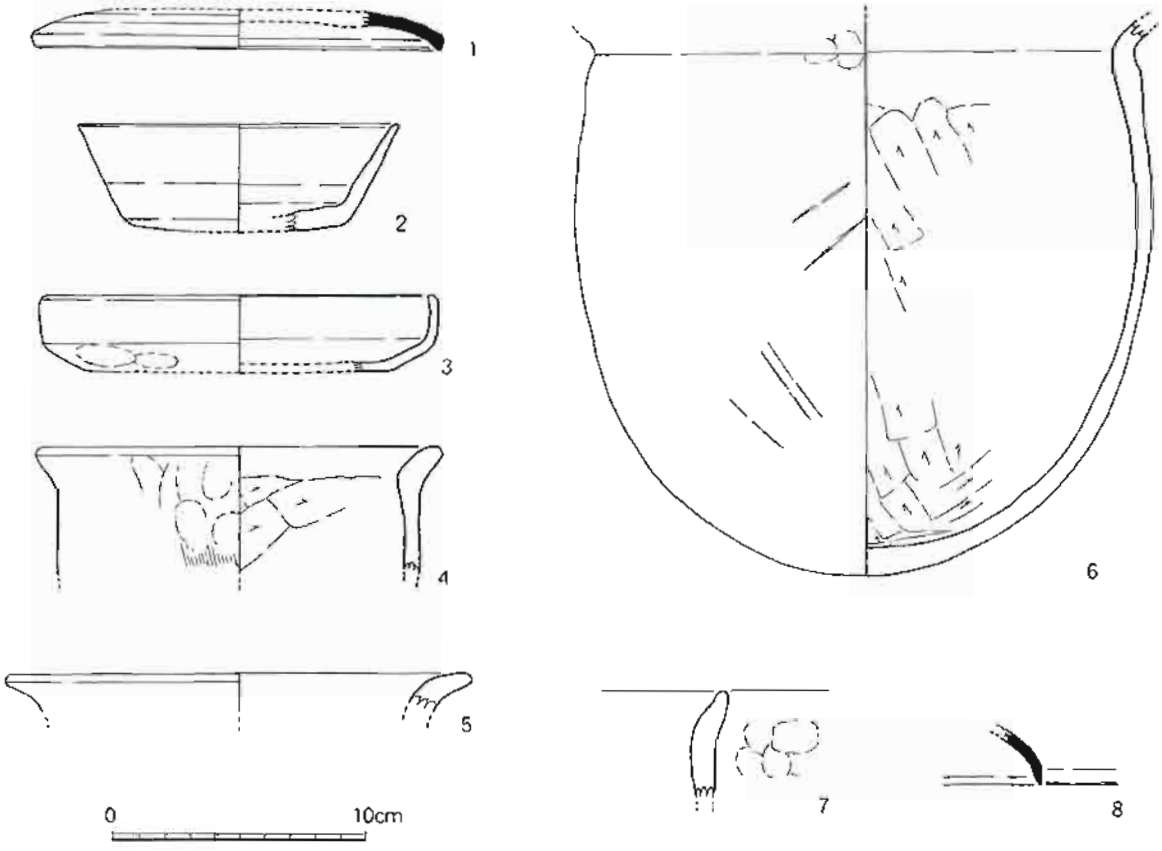
面を窪ませており、被熱により全体が赤褐色に変色し硬化していた。特にカマド奥壁部分の硬化は著しく、長期間の使用が窺える。カマド埋土を観察すると、５層がカマド使用時の埋土であり、その上面に灰白色粘土層の４層があり、その上に住居跡埋土に類似する１～３層が堆積していた。おそらく４層はカマド袖や天井部の崩落土層であることから、廃棄後すぐにカマドは破壊されカマド祭祀が行われたのち、１～３層が堆積したものと考えられる。



第29図　８号竪穴住居跡実測図（1/60）



第30図　８号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第31図　８号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/60）

出土遺物（第31図、図版48）

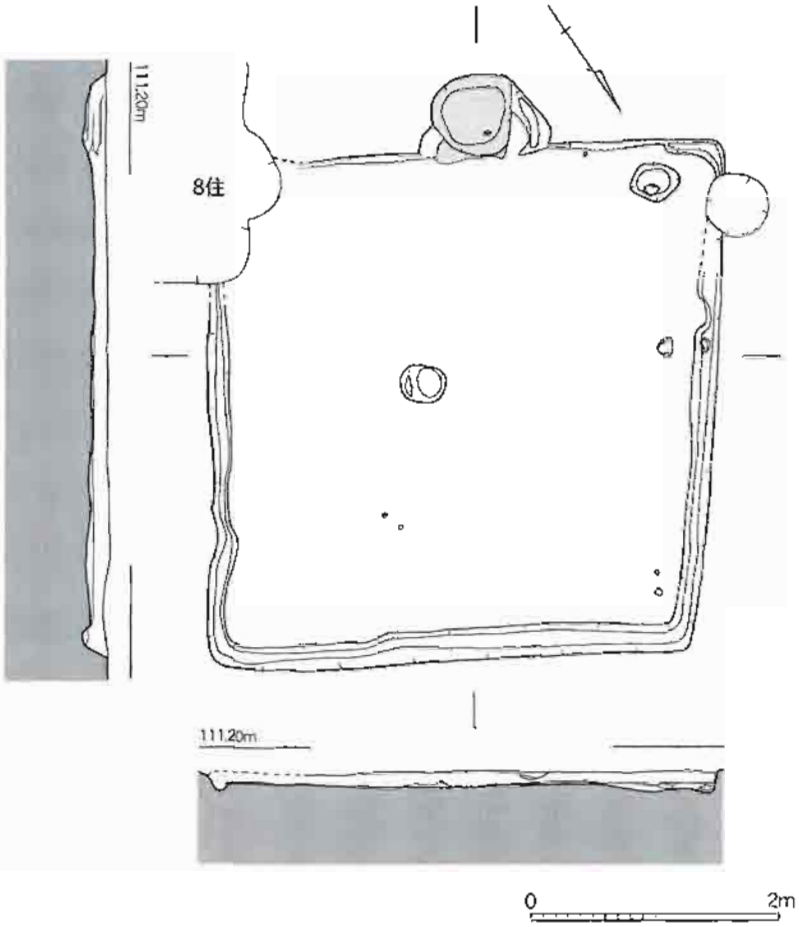
1はカマドより出土した須恵器坏蓋である。端部をややツマミ下げる。2はカマドより出土した須恵器坏身である。口縁部はやや開きながら立ち上がる。3は床面より出土した土師器皿である。口縁部はやや内傾する。4～6は土師器甕で、4、6はカマドより出土した。口縁部はやや外反する。7はカマドより出土した手捏ね土器である。8は須恵器蓋である。おそらく下面の11号竪穴住居跡の遺物が混入したものと考えられる。

9号竪穴住居跡

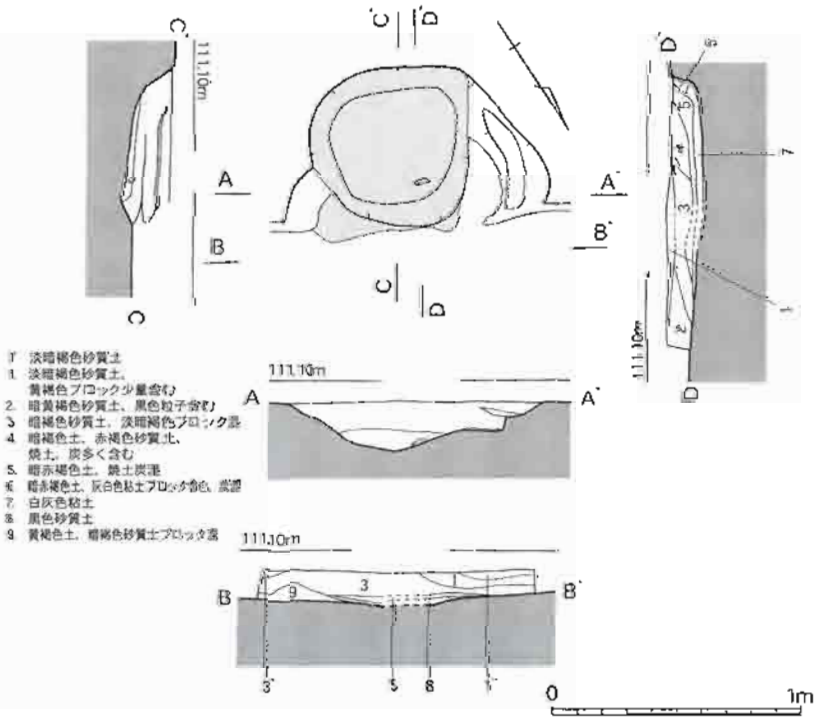
（第32、33図、図版11）

調査区中央にて検出され、8号竪穴住居跡に切られ、10号竪穴住居跡、2号溝を切っている。確認面での規模は南北軸で約4.2m、東西軸で約4.1m、床面までの深さ約15cmを測り、正方形プランを呈している。床面には灰褐色土の貼床が貼られており、主柱穴は確認出来なかった。住居全面を深さ約7cmの壁周溝が巡る。

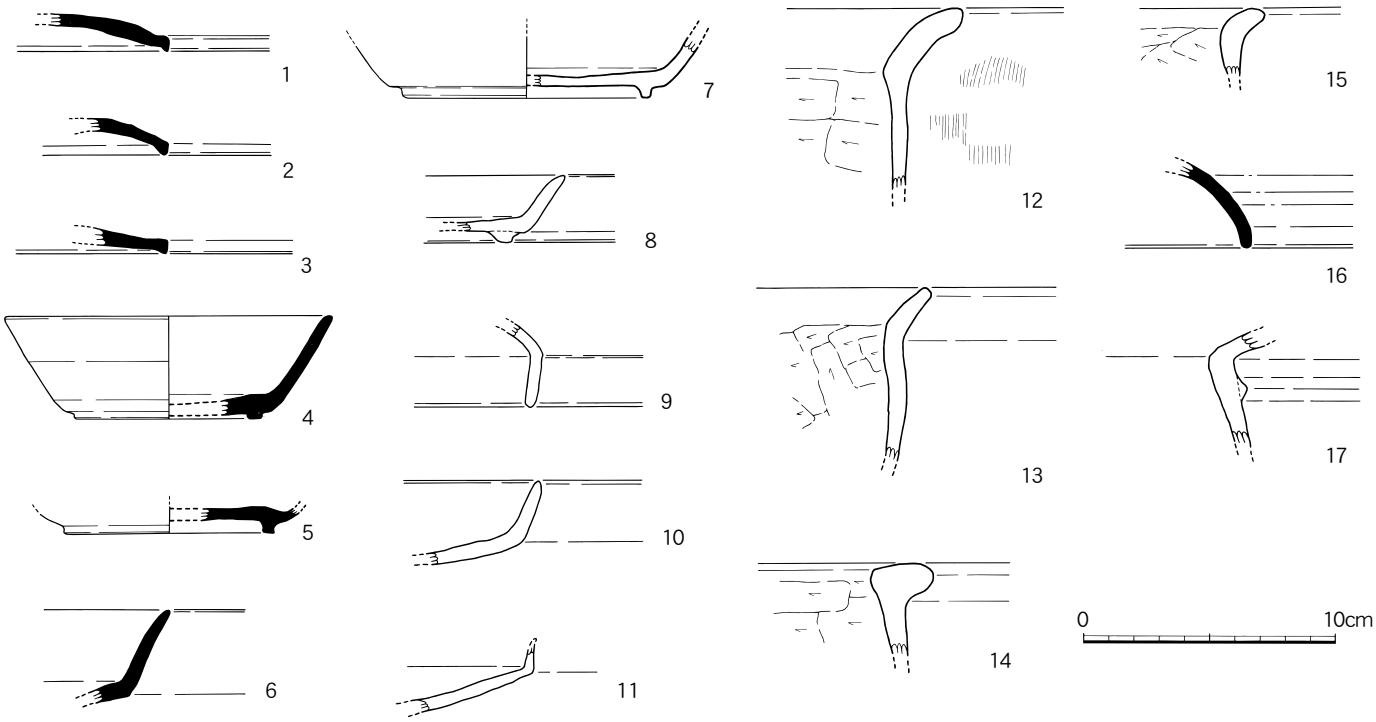
カマドは南壁中央に付設されており、住居跡の外に張り出すように作り出されている。床面を窪ませており、被熱により全体が赤褐色に変色し硬化していた。特にカマド奥壁部分の硬化も見られ、長期間の使用が窺える。カマド埋土を観察すると、8層がカマド使用時の埋土であり、その上面に灰白色粘土層の7層が堆積した後、5層にて再度焼土層が見られ、その上に1～4層が堆積したものと考えられる。おそらく7層はカマド袖や天井部の崩落土層であるが、その上面に5層のような焼土層が



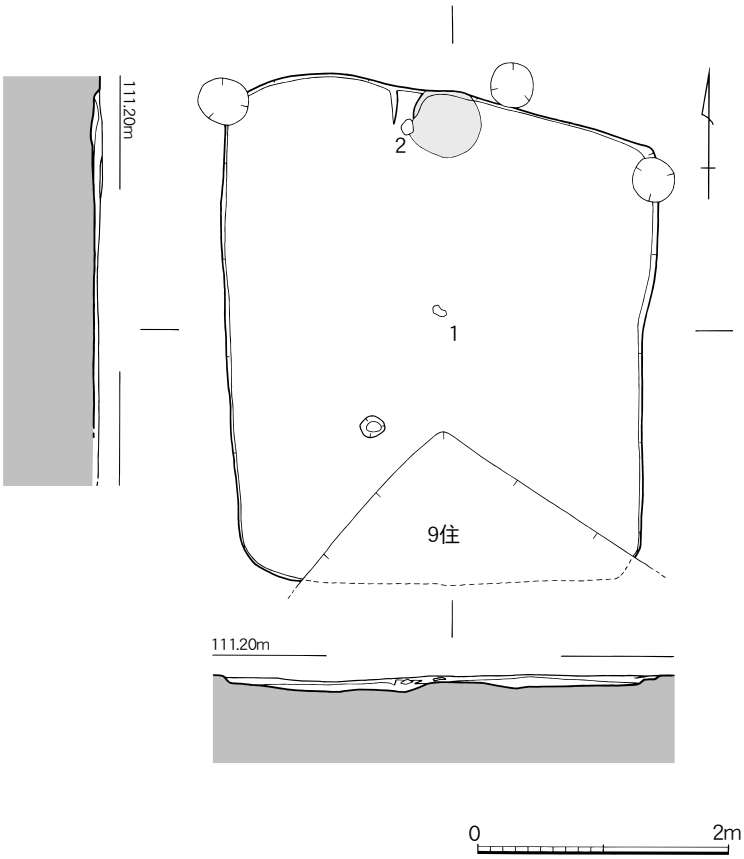
第32図　9号竪穴住居跡実測図（1/60）



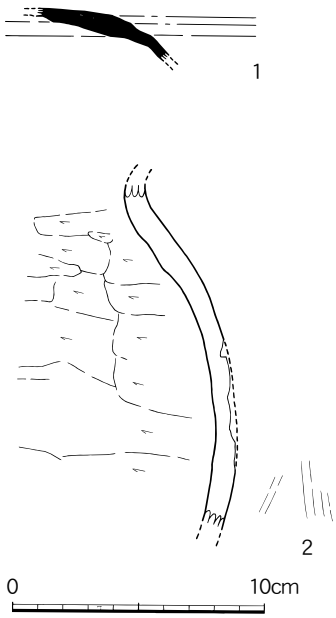
第33図　9号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第34図　９号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



第35図　10号竪穴住居跡実測図（1/60）



第36図　10号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

見られることから、カマド再構築の痕跡かあるいはカマド祭祀時の埋土の可能性が考えられる。

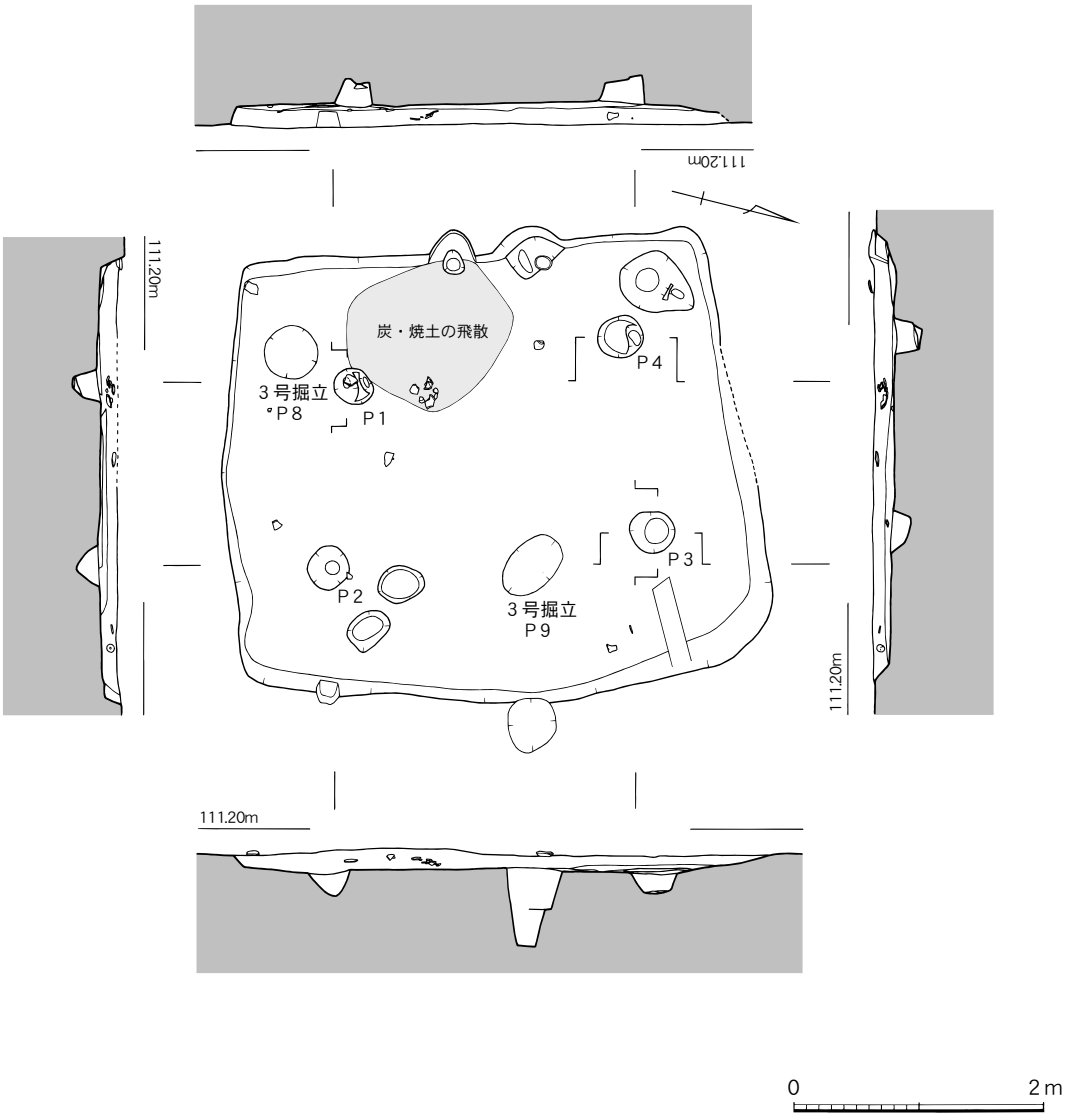
出土遺物（第34図、図版49）

１～３は須恵器坏蓋である。口縁部端部を下方にツマミ下げる。４～８は須恵器坏身である。５がカマドより出土した。９は土師器の坏蓋か。10は土師器椀である。11は土師器高坏である。12～15は土師器甕である。12、13は口縁部をやや外反させる。14は口縁部を肥厚させ外に張出す。15はやや外反する。16は貼床より出土した須恵器坏蓋で、10号住居からの混入と考えられる。17は弥生土器の破片で、流れ込みと考えられる。頸部下部に断面三角形状の突帯を貼っている。

10号竪穴住居跡（第35図、図版12）

調査区中央にて検出され、８号竪穴住居跡に切られ、10号竪穴住居跡、２号溝を切っている。確認面での規模は南北軸で約4.0m、東西軸で約3.4m、床面までの深さ約５㎝を測り、方形プランを呈している。床面には灰褐色土の貼床が貼られており、主柱穴は確認出来なかった。

カマドは北壁中央に付設されており、住居内部に作り出されている。床面を窪ませており、被熱



第37図　11号竪穴住居跡実測図（1/60）

により全体が薄く赤褐色に変色していた。削平が著しく、カマドの大半が削平を受けているため、明確なプランを確認出来なかったが、左側に袖と考えられる痕跡が一部確認できたが、袖石の抜取痕跡などは確認出来なかった。

出土遺物（第36図、図版49）

１はカマド付近より出土した須恵器坏蓋である。２は床面より出土した土師器甕である。

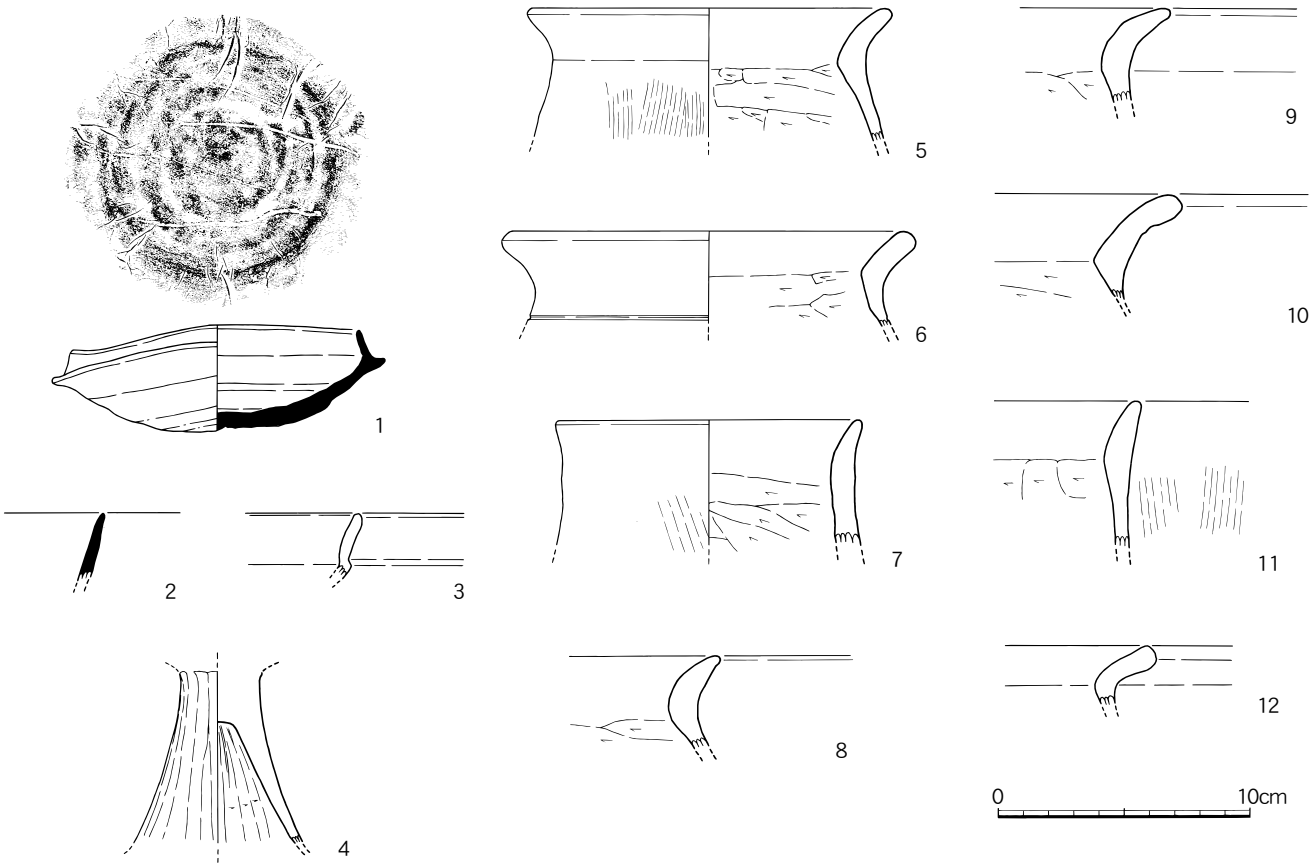
11号竪穴住居跡（第37図、図版13）

調査区中央にて検出され、7、8、9号竪穴住居跡、3号掘立柱建物に切られ、2号溝を切っている。確認面での規模は東西軸で約3.6m、南北軸で約4.3m、床面までの深さ約15㎝を測り、方形プランを呈している。床面には貼床が貼られていなかった。主柱穴は４本確認された。深さは約20㎝程度と浅く、東側に開いている。頭初、Ｐ５が主柱穴になり、方形を呈すると考えられたが、深さが５㎝程度と浅く、主柱穴としては不適当と判断した。

カマドは西壁中央に付設されていたと考えられるが、その大部分が破壊されており、僅かに焼土と炭の飛散が確認された。図中に示す範囲にカマドがあったと考えられる。

出土遺物（第38図、図版49）

１は床面よりやや上面より出土した須恵器坏身である。全体に歪みが著しく、内面にヘラ記号が施される。口縁部は逆刺を持ち、やや内傾する。２は須恵器坏かもしくは高坏か。３は土師器坏である。頸部に段を持ち、口縁部は外反しながらやや内傾する。４は土師器高坏の脚部である。５～10は土師器甕である。５、６、８～10は口縁部が外反する。７は口縁部が立ち上がり、やや緩やかに外湾する。11は土師器甑である。12は弥生土器の口縁部で口縁端部がやや跳ね上がる。



第38図　11号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

12号竪穴住居跡（第39図）

調査区中央にて検出され、２号溝を切っている。旧畦畔での区画の直下であり、そのほとんどが近年の削平を受けていたことから、プラン等は検出されず、焼土の硬化のみが確認された。果たして住居跡であったかも不明であるが、焼土の硬化の具合からすると竪穴住居跡の可能性が高いのではないかと判断したため、竪穴住居跡として報告する。

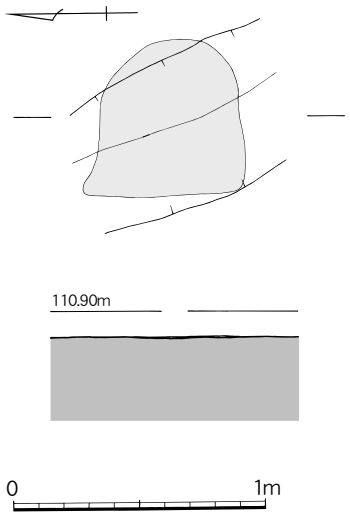
出土遺物（第40図、図版50）

土師器甕の胴部破片である。焼土内より出土した。

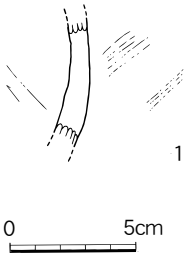
13号竪穴住居跡（第40、41図、図版13、14）

調査区中央より北側にて検出され、２号溝を切っている。その大半が水田構築の際に削平を受けており、カマド部分のみがややマウンド状に残存していた。おそらく石が残存していたことから削平を一部断念しその周辺部を下げたものと思われる。あるいは一部プランが残存していた可能性もあるが、大部分が削平のため掘り下げの段階でとばしてしまったおそれがあるため、プラン等は不明であった。ただ、カマド周辺に住居跡に伴う可能性のある柱穴が３穴存在していたため、主柱穴として報告する。ただ、これが主柱穴とすると、２号溝上に本来柱穴が存在していたと考えられるが、調査時には確認できず、掘り間違ってしまった可能性も考えられる。

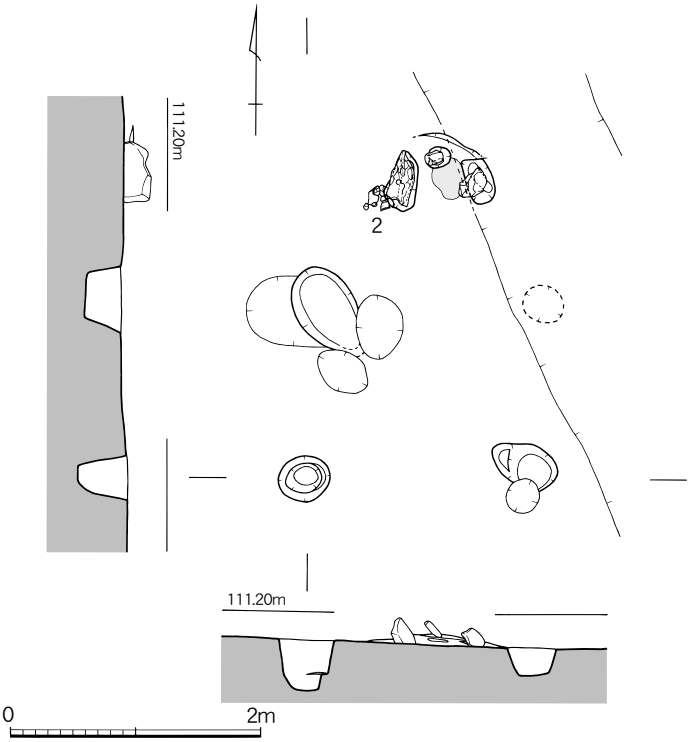
カマドは北壁に付設されていたと考えられ、床面は窪まずやや緩やかに奥壁へと立ち上がり、被熱により全体が薄く赤褐色に変色していた。カマド部分の残りはよく、両袖石、支脚ともに倒れた状態で残存していた。特に袖石の上面は折れた状態で出土した。袖石は凝灰岩を使用しており、支脚には安山岩が使われていた。袖の残存は確認できず、カマド奥壁の立ち上がりが一部確認できた。



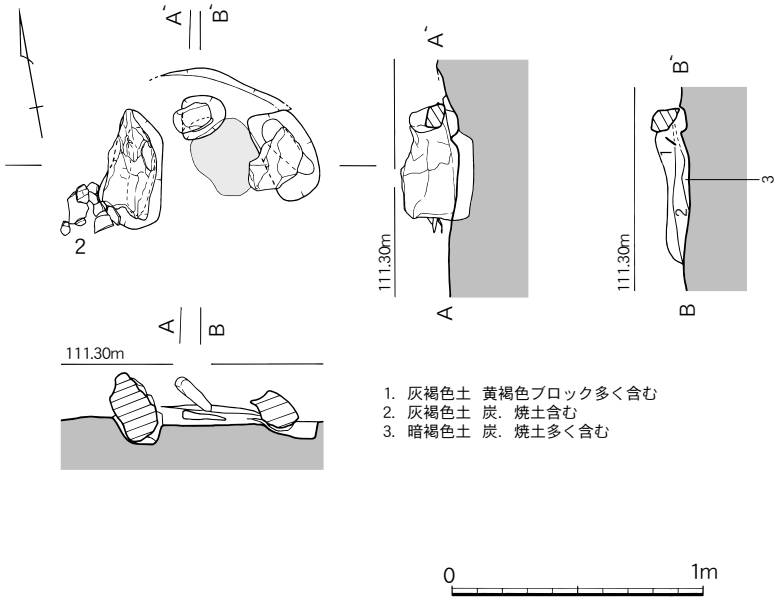
第39図　12号竪穴住居跡実測図（1/30）



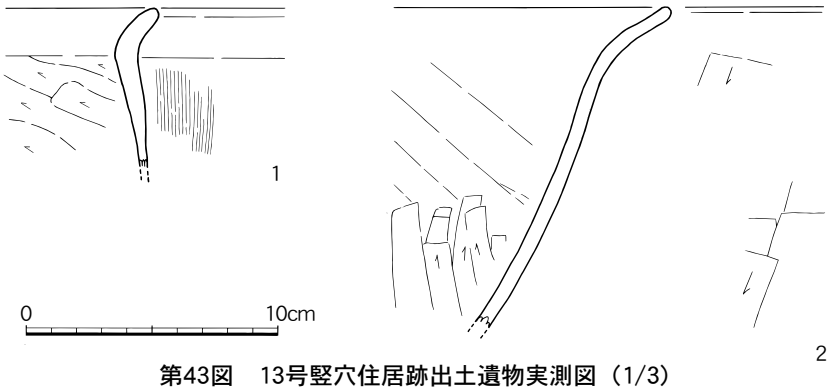
第40図　12号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



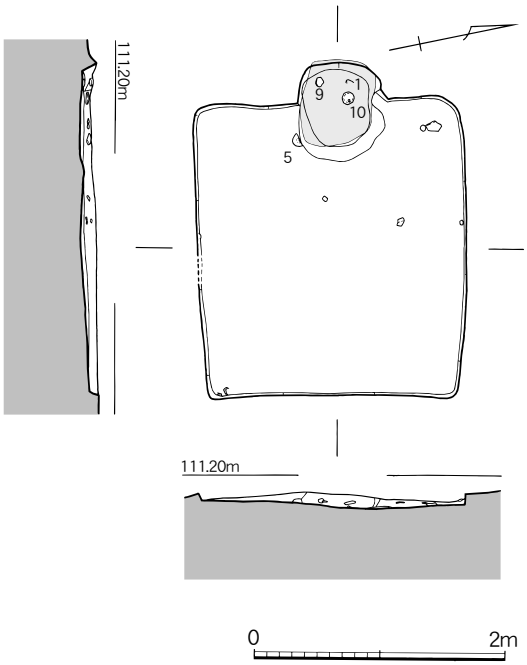
第41図　13号竪穴住居跡実測図（1/60）



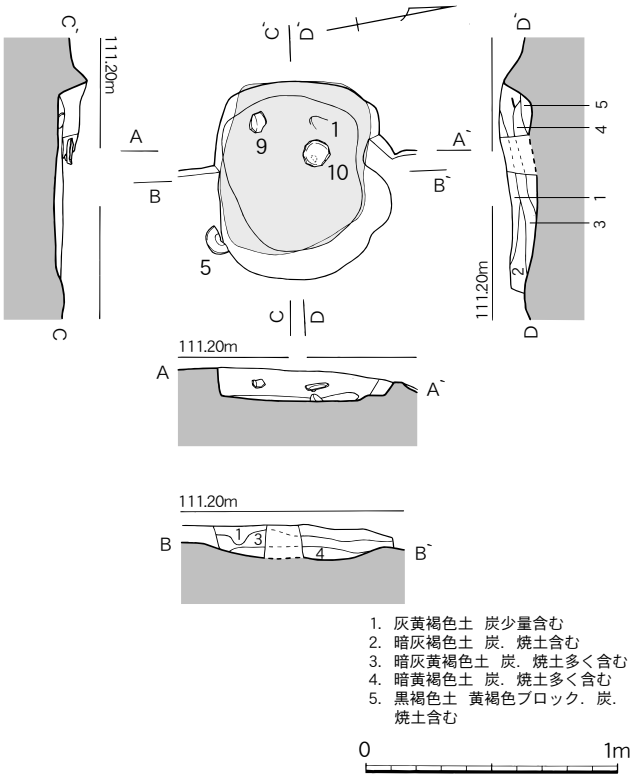
第42図　13号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



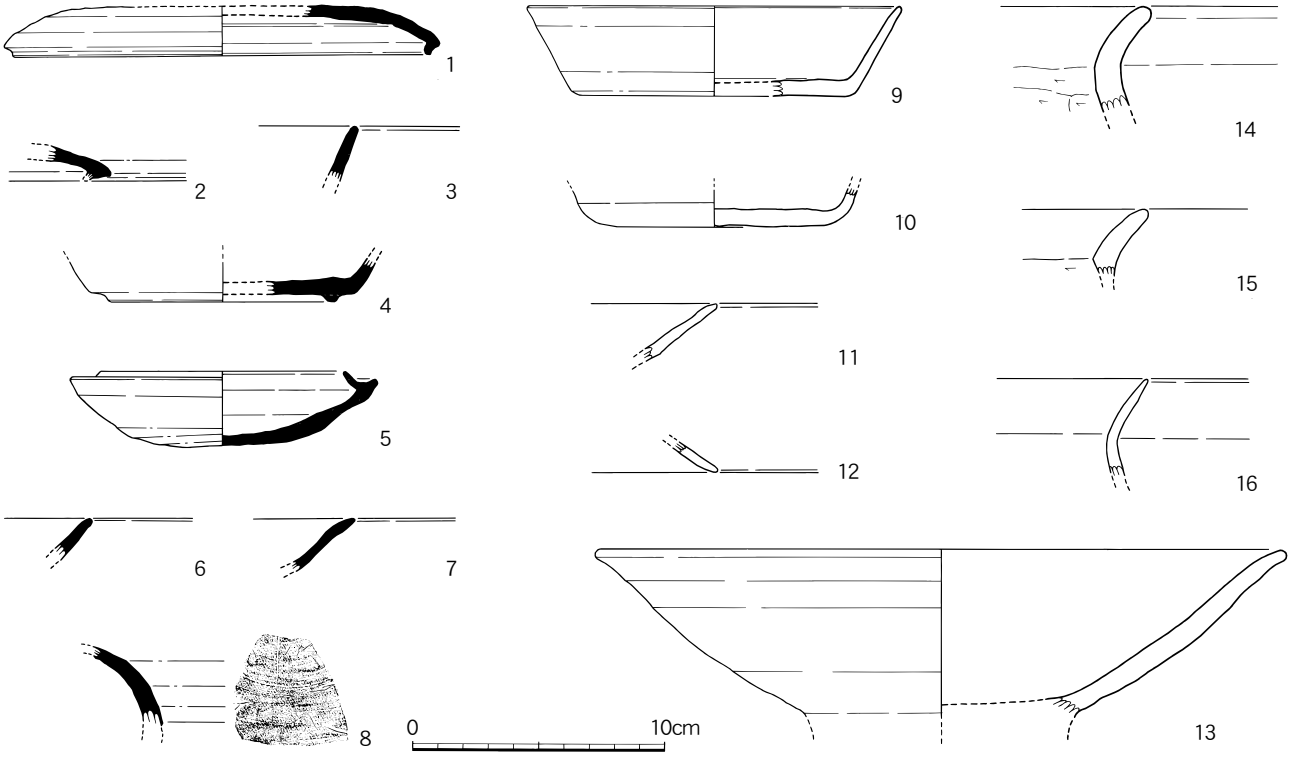
第43図　13号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



第44図　14号竪穴住居跡実測図（1/60）



第45図　14号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第46図　14号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

左袖石側には土器がまとまって捨てられており、カマド祭祀に伴う可能性がある。土層を確認すると、カマド使用時の埋土と考えられる２、３層上面に天井部に使用されていた可能性のある黄褐色土のブロックが確認されたことから、廃棄後直ぐに破壊されたものと考えられる。

出土遺物（第43図、図版50）

１は土師器甕である。口縁部は緩やかに外反する。２は袖石側より出土した土師器鉢である。胴部は緩やかに外に開き、口縁部は緩やかに屈曲して外反する。

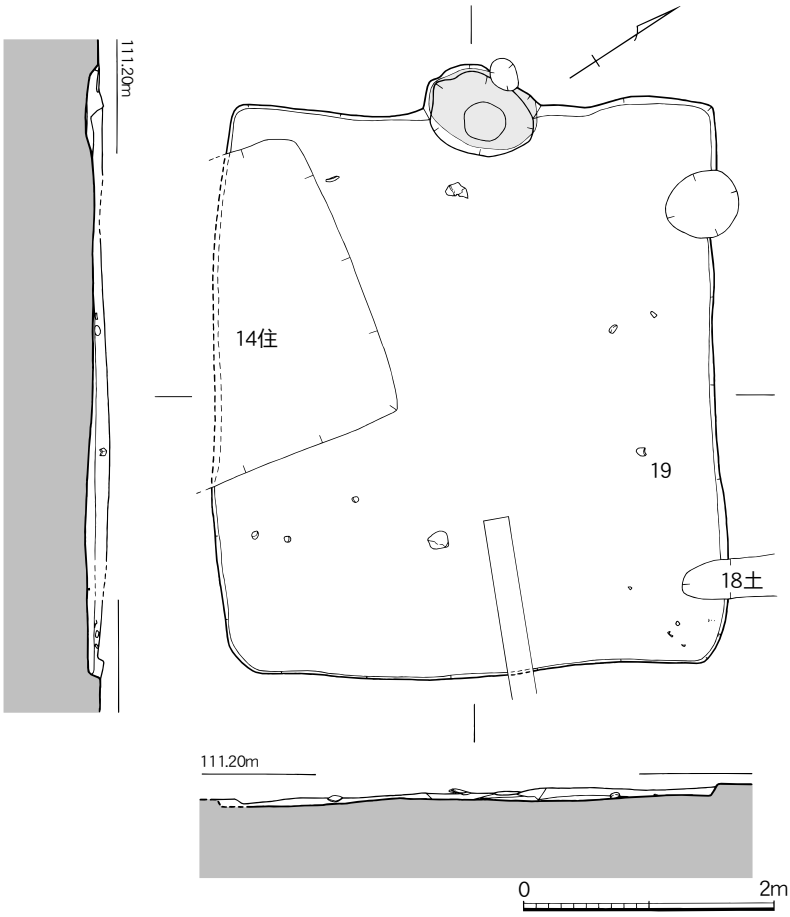
14号竪穴住居跡（第44、45図、図版14）

調査区中央より北西側にて検出された小型の住居跡である。15、16、25号竪穴住居跡を切っている。確認面での規模は東西軸で約2.3m、南北軸で約2.1m、床面までの深さ約10㎝を測り、やや東側がすぼまる方形プランを呈している。床面には貼床が貼られておらず、主柱穴は確認出来なかった。

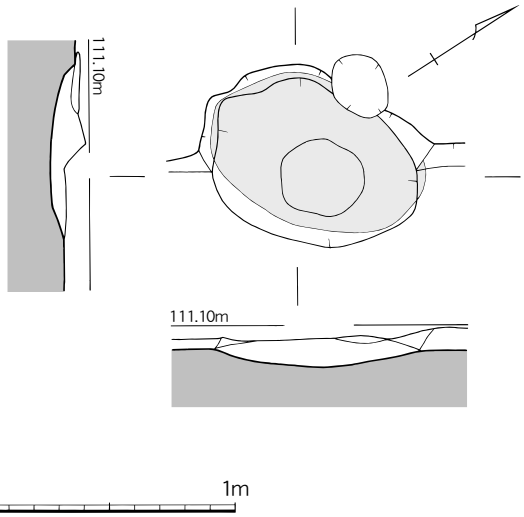
カマドは西壁中央に付設されており、外に出して作られている。床面を窪ませ、全体が被熱により赤褐色に変色し、特に奥壁部まで硬化は及んでいることから、長期間の使用が窺える。土層を観察すると４、５層がカマド使用時の埋土であり、３層には灰黄褐色土の埋土、その上面に住居埋土と類似する１、２層が堆積していた。３層の灰黄褐色土はおそらく天井部に使用された粘土の可能性があることから、カマドは廃棄後直ぐに破壊され、カマド祭祀の可能性が考えられる。そのことを示す様にカマド内、および周辺には坏などの大きな破片が廃棄されていた。

出土遺物（第46図、図版50）

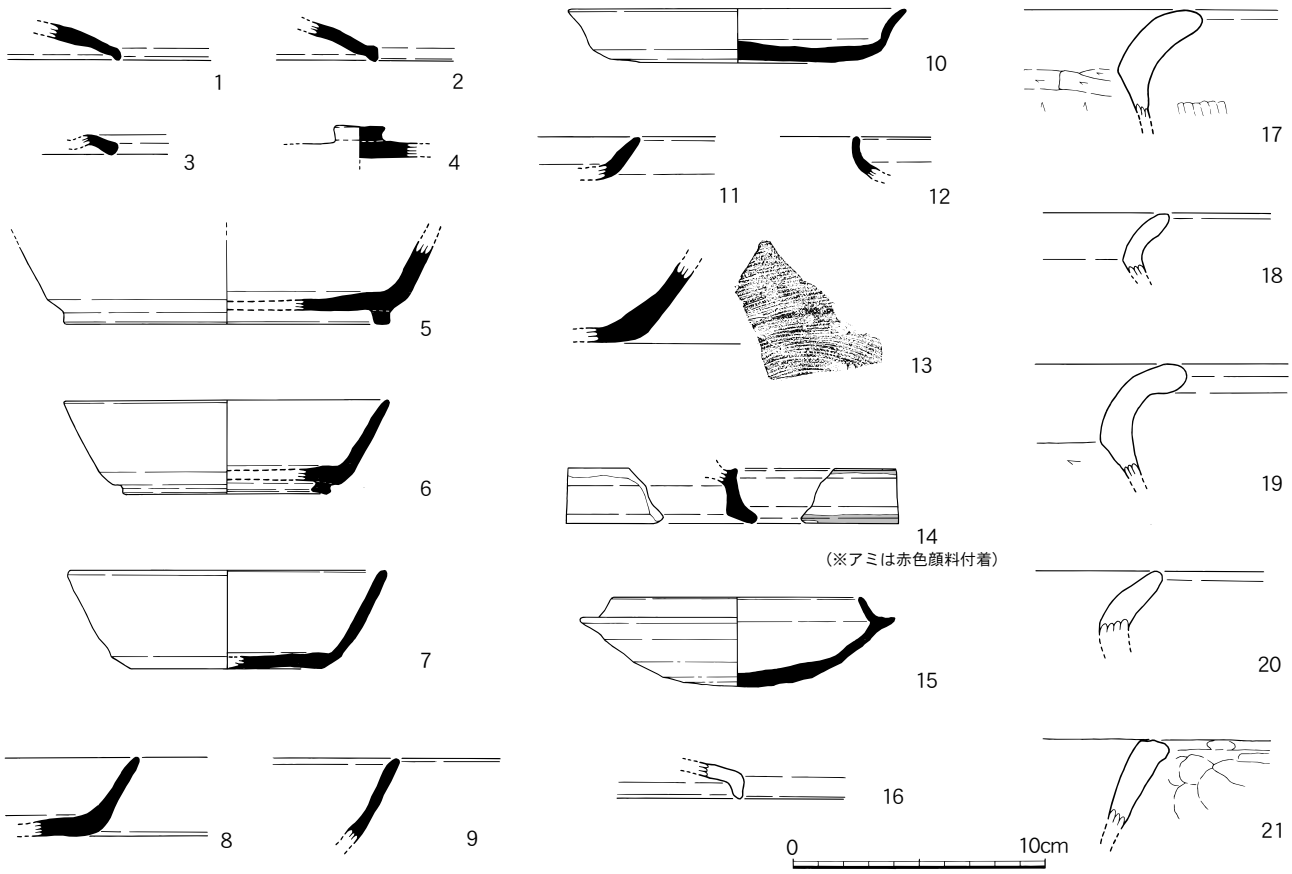
１は床面より出土した須恵器坏蓋で、口縁部を下方に折り曲げる。逆刺の痕跡と考えられ、屈曲部はやや外に張り出す。２はカマドより出土した須恵器坏蓋でかなり退化した逆刺を持つ。逆刺は小さく下方に下がる。３～６は須恵器坏身である。口縁部はあまり開かずに立ち上がり、底部の屈



第47図　15号竪穴住居跡実測図（1/60）



第48図　15号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第49図　15号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

曲も明瞭である。高台はやや底部内側につけられる。５は床面より出土した須恵器坏身である。あるいは坏蓋かも知れないが、身として報告する。逆刺を持ち、口縁部は内傾しながら立ち上がる。他の須恵器との共伴とするにはやや古い型式であるため、下にある25号住居跡の遺物が埋土中に混入した可能性がある。７は須恵器皿である。外側に開きながら、口縁部はやや外湾する。８は須恵器の壺か。胴部上面にヘラ記号が施される。９はカマドより出土した土師器坏身である。10はカマドより出土した土師器坏身である。底部の屈曲は明瞭ではなく、口縁部にかけてやや直立気味に立ち上がる。11はカマドより出土した土師器高坏である。12はカマドより出土した土師器高坏脚部である。13はカマドより出土した土師器脚付の坏である。口縁部は外側に開き、端部にかけてやや外湾する。14～16はカマドより出土した土師器甕である。口縁部は頸部で屈曲し外反する。

15号竪穴住居跡（第47、48図、図版15、16）

調査区中央より北西側にて検出された住居跡で、14号住居跡に切られ、16、25号竪穴住居跡、６号竪穴を切っている。確認面での規模は東西軸で約4.5m、南北軸で約4.1m、床面までの深さ約10㎝を測り、やや南側に長い方形プランを呈している。床面には貼床が貼られておらず、主柱穴は確認出来なかった。

カマドは西壁中央に付設されており、外に出して作られている。床面を窪ませ、全体が被熱により赤褐色に変色していた。土層は、大部分が焼土の堆積であったことから、埋没過程を確認出来なかった。

出土遺物（第49図、図版51）

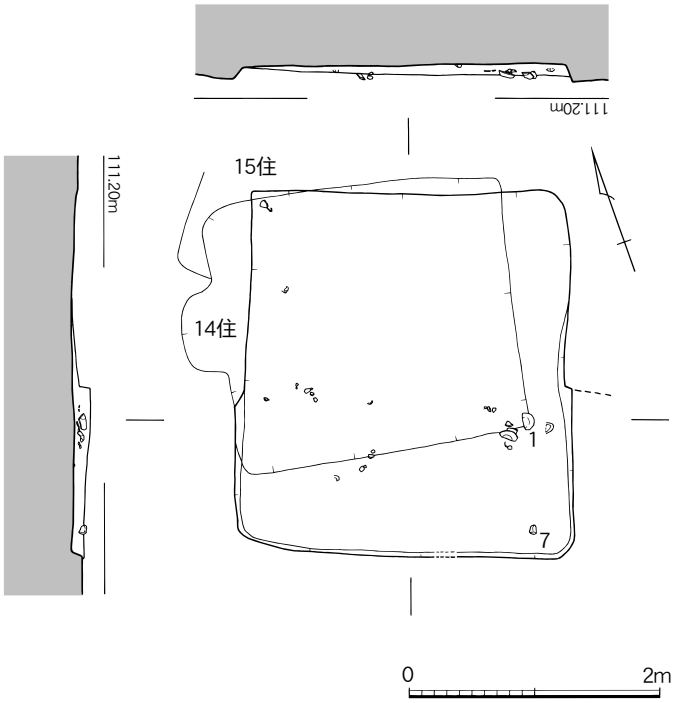
１～４は須恵器坏蓋である。１～３は口縁部破片で、端部をツマミ下げる。４は宝珠状ツマミである。５～９は須恵器坏身である。口縁部はやや直立気味に立ち上がり、底部はやや明瞭に屈曲する。高台は底部やや内面に貼り付けられる。10は須恵器皿である。底部を明瞭に屈曲させ、口縁部は外湾しながら外に開く。11は須恵器皿である。12は須恵器無頸壺である。13は須恵器壺である。外面にはカキ目が施される。14は須恵器で、脚部のような作りをしている。脚端部は折れ曲がって外に開き、立ち上がり上面に屈曲部をもつ。屈曲部付近は薄く赤色になっていることから、赤色顔料の付着の可能性がある。その形態から器種を特定出来なかったが、円面硯の脚部の可能性が考えられる。15は須恵器坏身である。逆刺を持ち口縁部は内傾する。下にある25号住居の遺物の混入か。16は土師器坏身である。端部を下方に折り曲げる。17～20は土師器甕である。口縁部はやや長く伸び外反する。21は土師器手捏ね土器である。

16号竪穴住居跡（第50図、図版16）

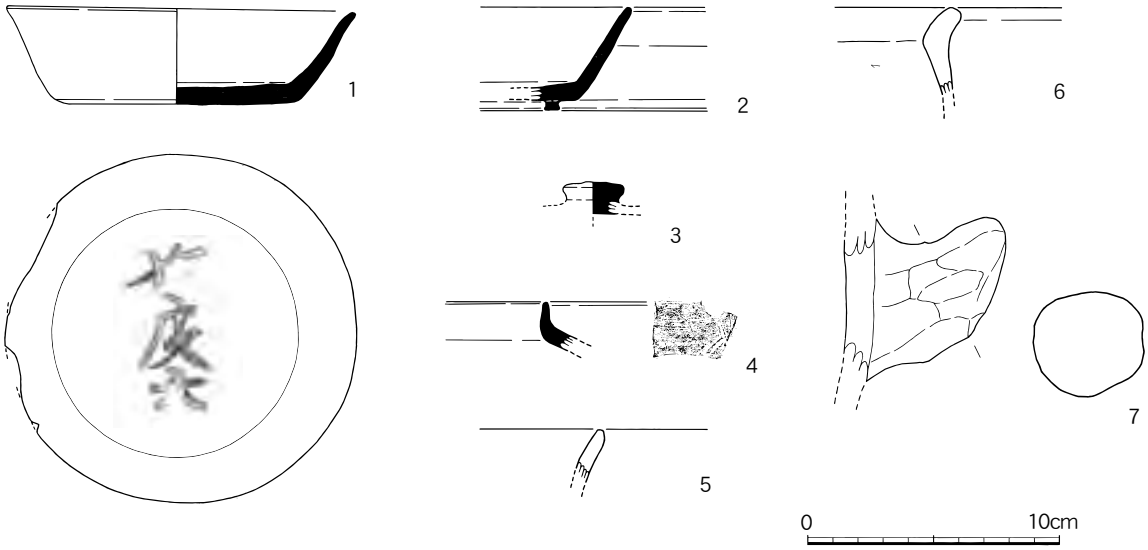
調査区中央より北西側にて検出された住居跡である。15、16号竪穴住居跡に切られ、25号竪穴住居跡、6号竪穴を切っている。住居の半分以上を15、16号竪穴住居跡に破壊されているため北壁の立ち上がりを確認することは出来ず、床と思われる硬化面にて住居の範囲を確認した。また、カマドは破壊を受けており、確認することが出来なかったが、住居跡北側の15号住居跡の床面に焼土の飛散が一部確認されたことから、北壁に本来カマドは存在し、15号住居跡構築の際に破壊を受け、焼土が住居床面構築の際に混じったものと考えられる。確認面での規模は南北軸で約2.9m、東西軸で約2.7m、床面までの深さ約10㎝を測る。床面には貼床が貼られておらず、主柱穴は確認出来なかった。また、住居跡南東コーナー付近には朱墨土器などやや大きな土器片が残存していた。

出土遺物（第 51 図、図版 51）

１は住居跡南東コーナー床面付近より出土した須恵器坏身である。底部は明瞭に立ち上がり口縁部はやや外湾する。底面には朱書きで３文字が書かれている朱墨土器である。一番上の文字と一番下の文字が明瞭ではないため判別が困難であったが、「□度大」もしく「□度太」と考えられる。朱は非常に薄く、顔料の種別は不明である。２は床面より出土した須恵器坏身である。口縁部はやや直立ぎみに立ち上がる。底部は明瞭に屈曲し、高台は底部やや内側に付けられる。３は須恵器坏蓋の宝珠状ツマミの破片である。４は須恵器無頸壺である。口縁部外面にヘラ記号が施される。５、６は土師器甕である。口縁部が外反する。７は土師器把手である。甑か甕と思われる。



第50図　16号竪穴住居跡実測図（1/60）

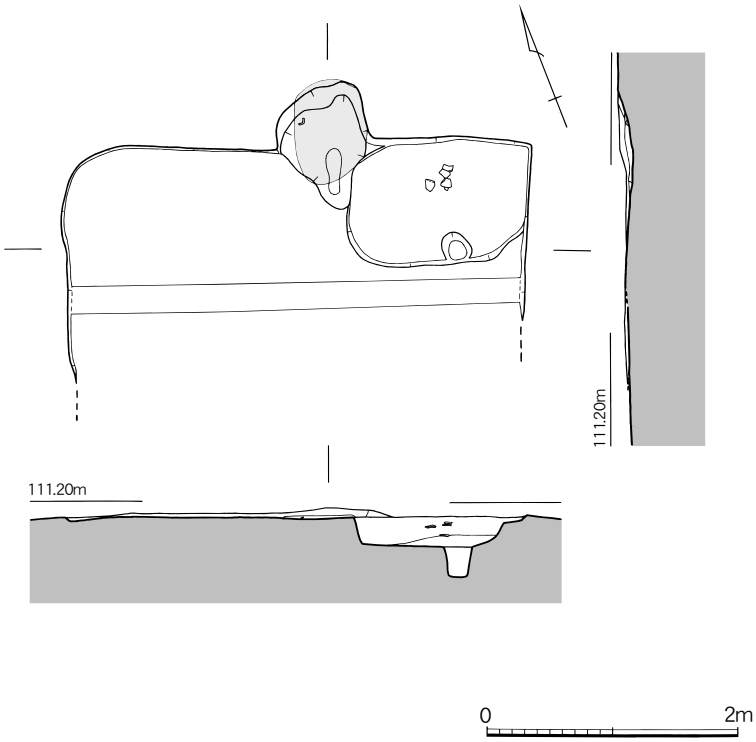


第51図　16号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

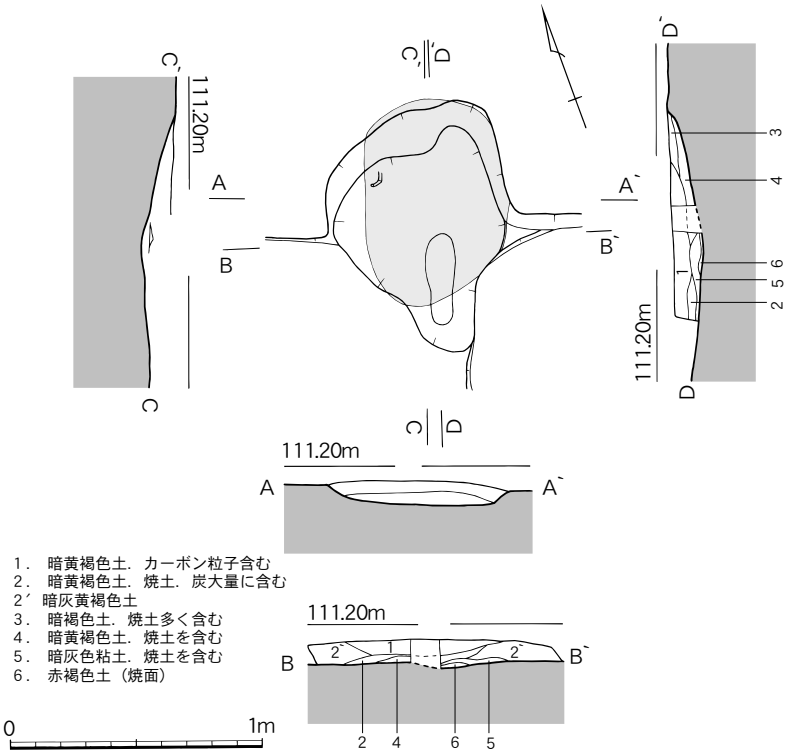
17号竪穴住居跡（第52、53図、図版18）

調査区中央より北西側にて検出された住居跡で、５号竪穴を切っている。住居跡南半分が大きく削平を受けていた。確認面での規模は東西軸で約3.7m、床面までの深さ約３㎝を測る方形プランを呈している。床面には灰褐色の貼床が貼られており、主柱穴は確認出来なかった。住居跡北東コーナーには屋内土坑が付設されており、その中から手捏ね土器が出土した。

カマドは北壁中央に付設されており、外に出して作られている。床面を窪ませ、全体が被熱によ



第52図　17竪穴住居跡実測図（1/60）



第53図　17号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

り赤褐色に変色し、特に奥壁部まで硬化は及んでいることから、長期間の使用が窺える。土層を観察すると６層がカマド使用時の埋土であり、５層には暗灰色粘土の埋土、その上面に住居埋土と類似する１～４層が堆積していた。５層の暗灰色粘土はおそらく天井部に使用された粘土の可能性があることから、カマドは廃棄後直ぐに破壊され、カマド祭祀の可能性が考えられる。

出土遺物（第54図、図版52）

１はカマドより出土した土師器坏である。２は床面より出土した土師器皿である。３はカマドより出土した土師器皿である。底部は湾曲し、口縁部はやや上方に立ち上がる。４、５は床面より出土した土師器甕である。口縁部は外反する。６～８は手捏ね土器である。７は屋内土坑、８は床面より出土した。

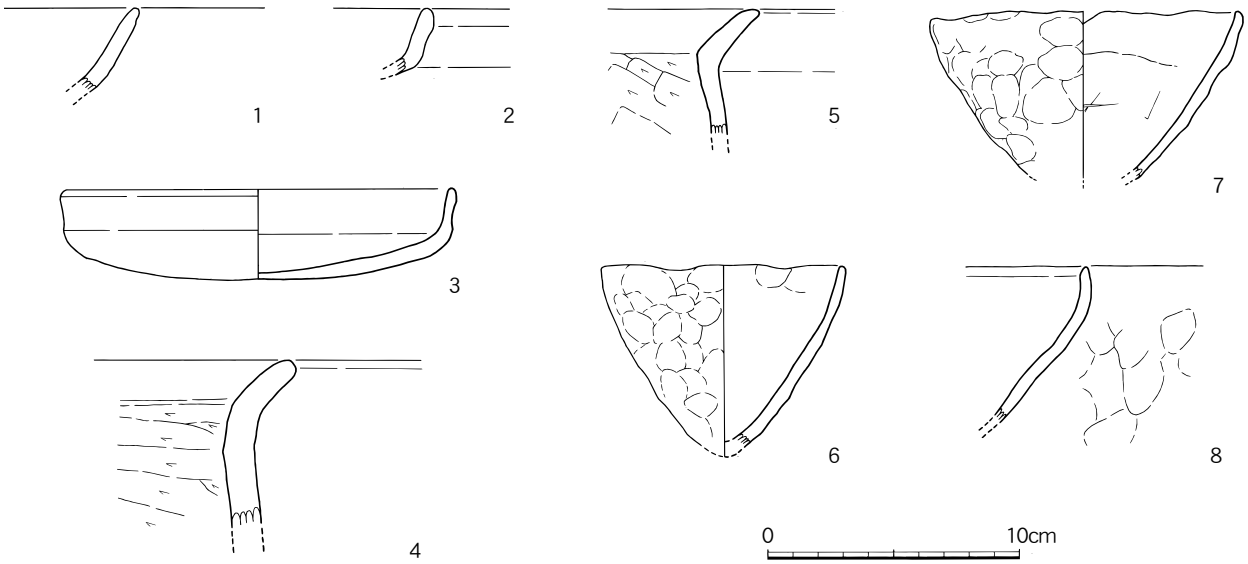
18号竪穴住居跡（第55、56図、図版18、19）

調査区中央北側にて検出された住居跡で、上面が大きく削平を受けてカマドと貼床のみが残存していた。カマド袖石は引き倒された状態で、マウンド状にカマド付近のみが削平を免れていた。住居壁面は残存しておらず、貼床範囲でプランを確認している。確認面での規模は南北軸で約4.1m、東西軸で4.1m、床面までの深さ約１㎝を測る正方形プランを呈している。床面には灰褐色の貼床が貼られており、主柱穴は確認出来なかった。住居跡北東コーナーにはピットが確認され、屋内土坑の可能性も考えられる。

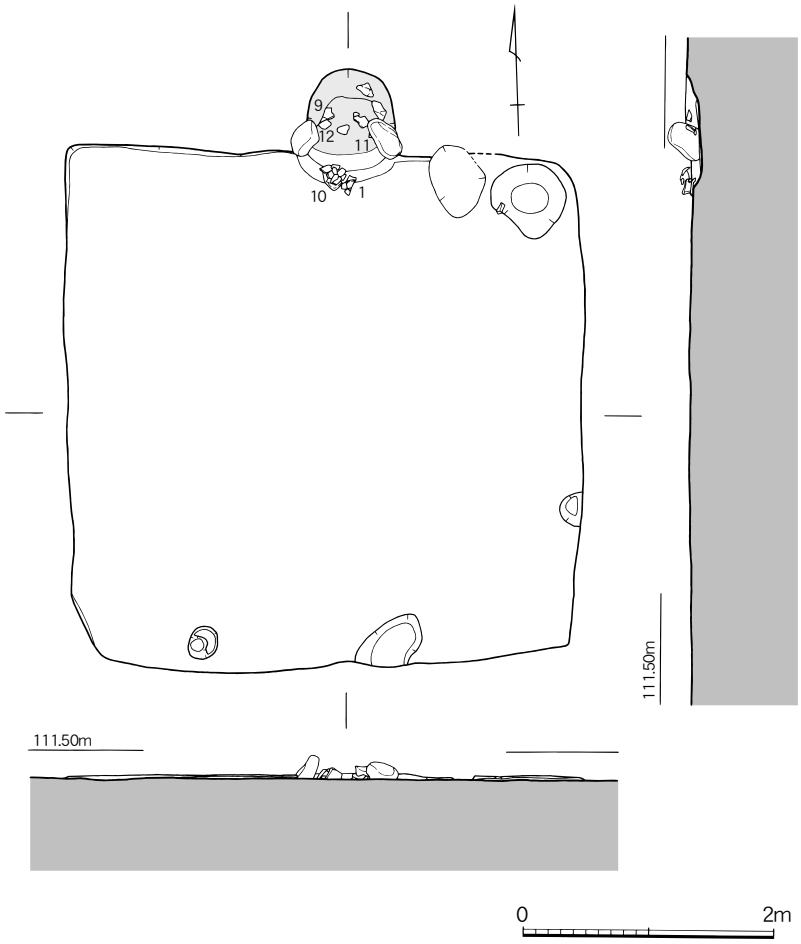
カマドは北壁中央に付設されており、外に出して作られている。安山岩製の袖石が両側に引き倒された状態で確認された。床面を窪ませ、全体が被熱により赤褐色に変色し、特に奥壁部まで硬化は及んでいることから、長期間の使用が窺える。土層を観察すると１、２層がカマド使用時の埋土であり、その上面に３層が堆積していた。天井部の崩落層は確認出来なかったものの、カマド内部には大型の土器片が多数残存しており、カマド廃棄時の祭祀行為の存在を窺わせる。

出土遺物（第57図、図版52）

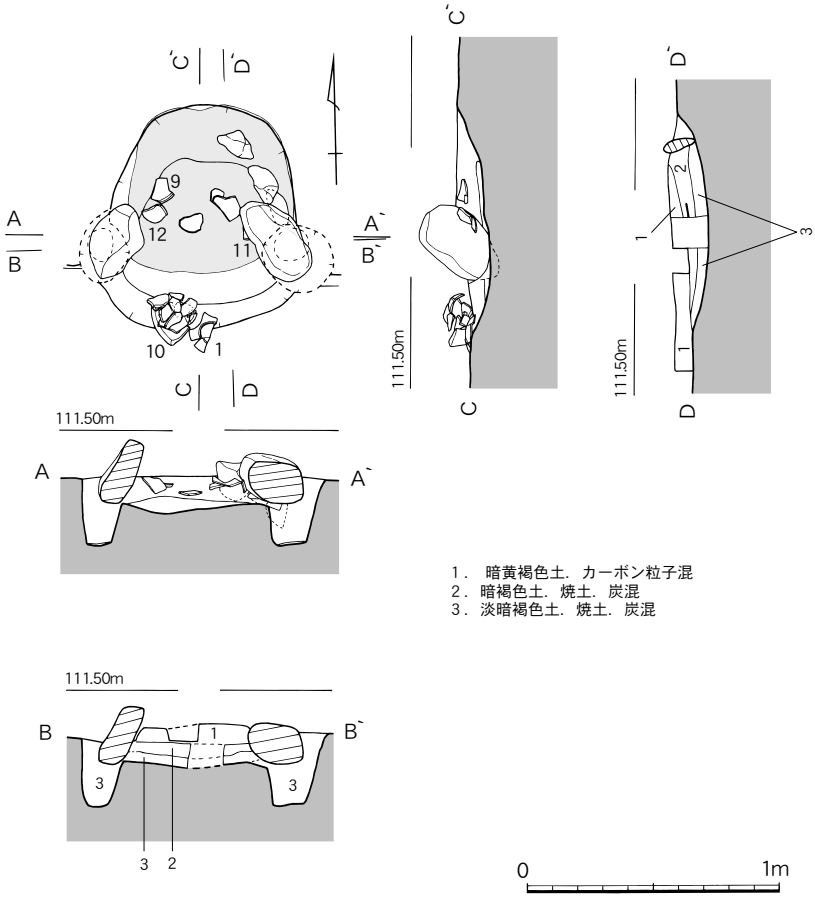
１はカマドより出土した。須恵器坏身である。口縁部はやや外に開き、底部は明瞭に屈曲する。高台は底部外よりに付けられる。底面には朱書きで３文字が書かれている朱墨土器である。朱の残存状態が悪いため、３文字とも判別が肉眼では困難であった。色調補正により赤を強調すると真ん中の文字が16号住居出土朱墨土器に似ており、「度」の可能性があるが、現時点では文字不明と言わざるを得ない。また、内面には朱が一面に残存しており、硯として利用された可能性が考えられ



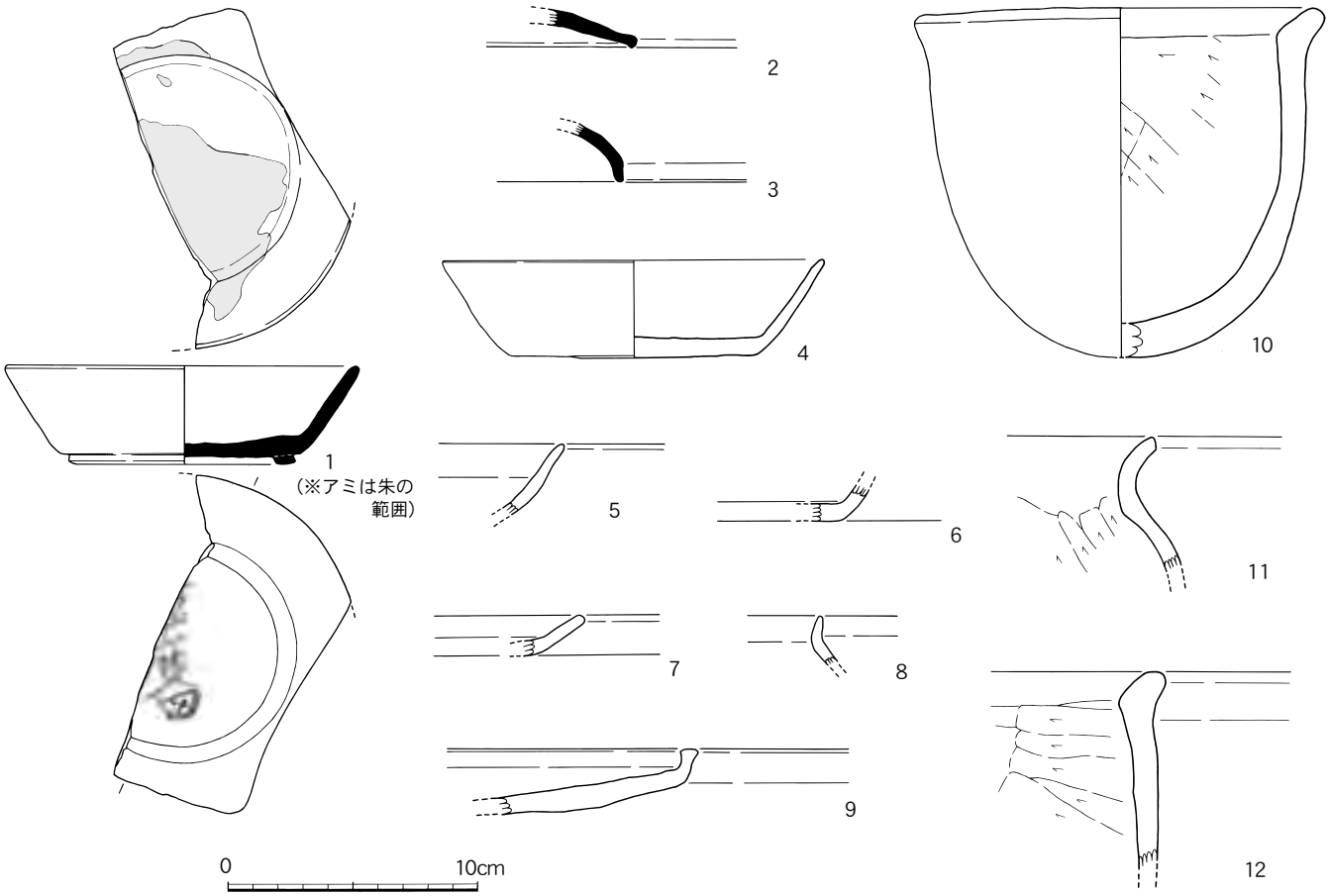
第54図　17号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



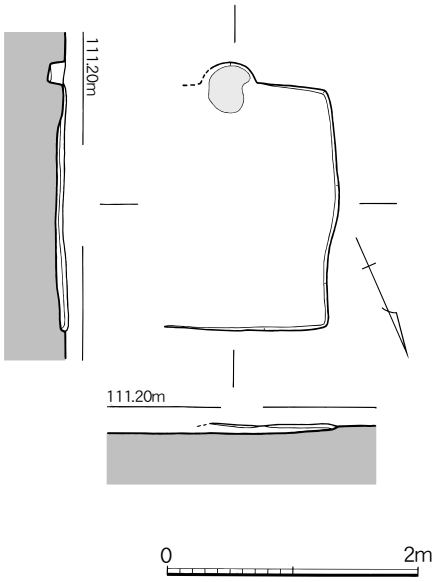
第55図　18号竪穴住居跡実測図（1/60）



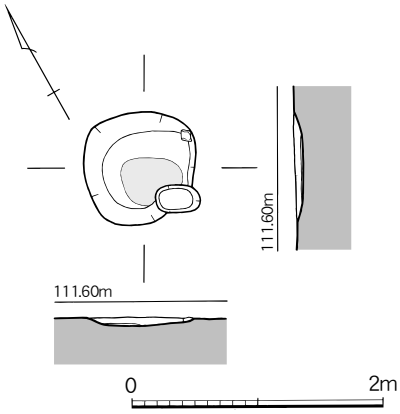
第56図　18号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



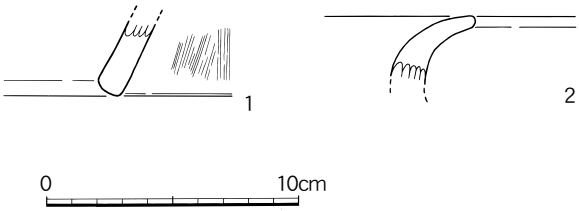
第57図　18号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



第58図　19号竪穴住居跡実測図（1/60）



第59　20号竪穴住居跡実測図（1/60）



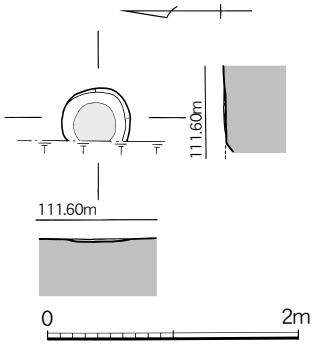
第60図　20竪穴住居跡出土遺物実測図（1/60）

る。２はカマドより出土した須恵器坏蓋である。口縁部はツマミ下げる。３は須恵器坏蓋である。カマドより出土したが､流れ込みの可能性がある。４は須恵器坏身である。口縁部はやや外に開き、底部は明瞭に屈曲する。５は土師器坏か。やや口縁部は外に開く。６は土師器坏の底部である。７は土師器皿である。口縁部が大きく外へ開く。８は土師器無形壺か。９はカマドより出土した土師器高坏である。口縁部は体部より明瞭に屈曲して立ち上がり、口唇部を肥厚させる。10～12はカマドより出土した土師器甕である。10は全体に器壁が厚く、口縁部は小さく外反する。11は頸部がすぼまり、口縁部は外湾して立ち上がる。12は口縁部が小さく外反する。

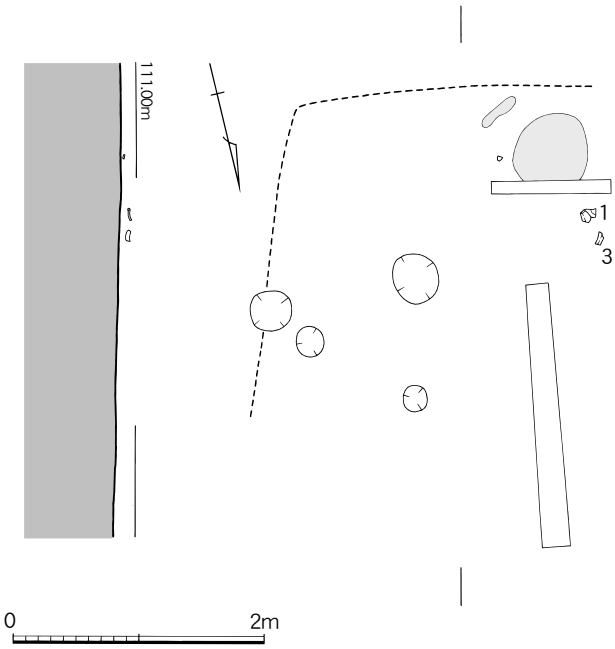
19号竪穴住居跡（第58図）

調査区中央より西側にて検出された住居跡である。住居跡東半分が大きく削平を受けていた。確認面での規模は南北軸で約1.9m、床面までの深さ約３㎝を測る方形プランを呈しておりかなり小型である。床面には貼床は貼られておらず、主柱穴は確認出来なかった。

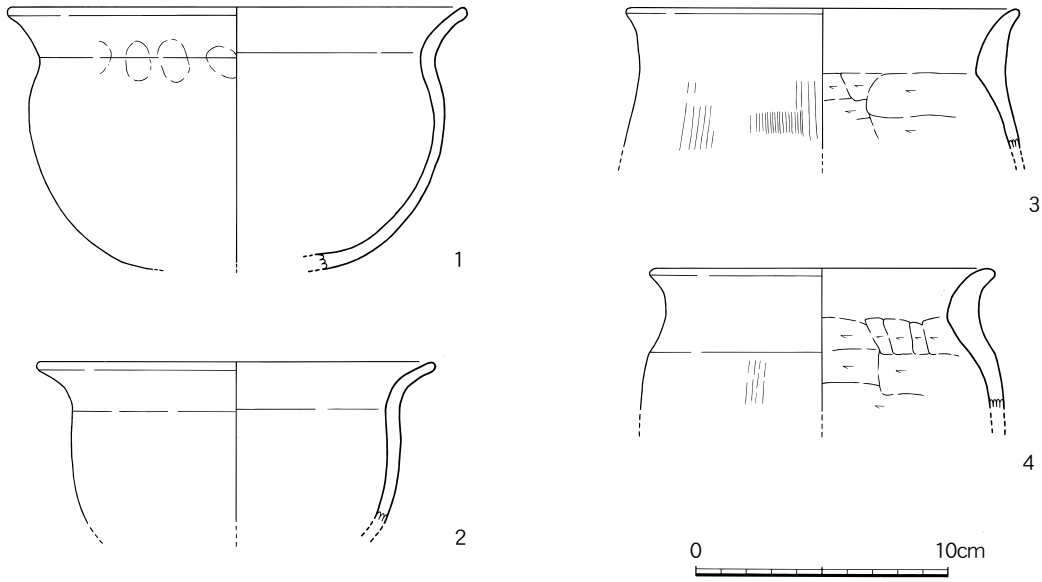
カマドは南壁中央に付設されており、外に出して作られている。被熱により硬



第61図　21号竪穴住居跡実測図（1/60）



第62図　23号竪穴住居跡実測図（1/60）



第63図　23号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

化していた。

遺物の出土はなかった。

20号竪穴住居跡（第59図、図版19）

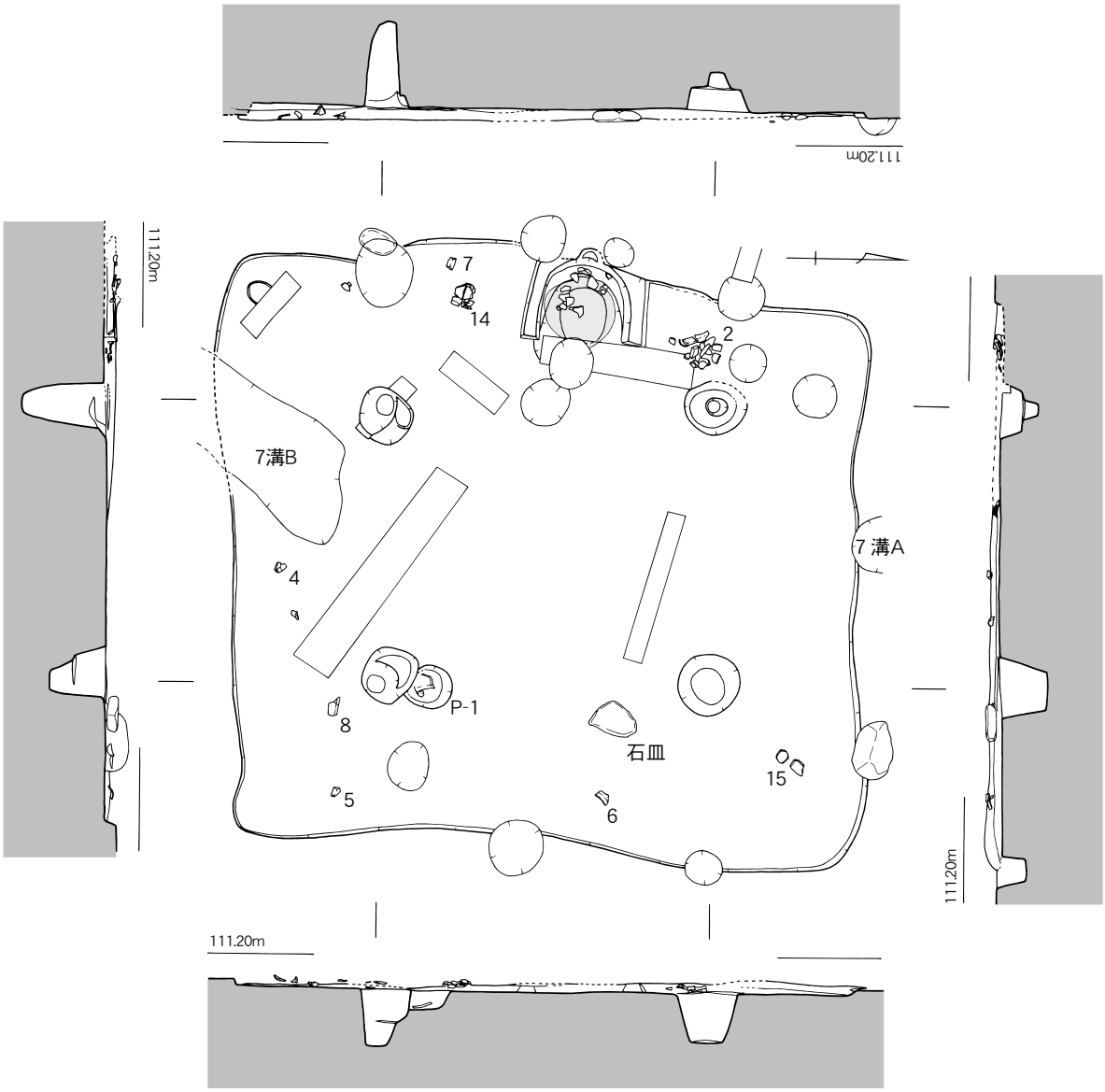
調査区北側にて検出された住居で、カマドのみが残存していた。カマドは被熱により赤褐色に硬化しており、床面を窪ませている。住居の方向などは全くの不明である。

出土遺物（第60図、図版52）

１は土師器甑である。２は土師器甕である。口縁部は緩やかに外湾する。

21号竪穴住居跡（第61図、図版20）

調査区北側にて検出された住居で、カマドのみが残存していた。さらに、このカマドも削平を受けていた。カマドは被熱により赤褐色に硬化しており、床面を窪ませている。住居の方向などは全くの不明である。遺物の出土は見られなかった。



0　2m

第64図　24号竪穴住居跡実測図（1/60）

22号竪穴住居跡（第76図）

調査区北側で28～31号竪穴住居跡周辺にて検出され、焼土痕跡のみが確認された。この箇所は盛土と言うこともあり、検出のみを行ったが、カマドらしきプランは検出できたが、住居跡のプラン等は確認できなかった。削平を受けている可能性が考えられることから、竪穴住居跡として報告することとする。遺物の出土は見られなかった。

23号竪穴住居跡（第62図、図版20）

調査区中央部西側にて検出された住居跡である。焼土痕跡が確認された。カマドの掘方は検出されなかったが、住居跡の床面らしき硬化面が一部確認されたことから、竪穴住居跡として報告する。プラン等は不明であるが、硬化面の範囲からすると南側にカマドは付設されていたものと考えられる。また、このカマド周辺には土器の破片が散乱していた。

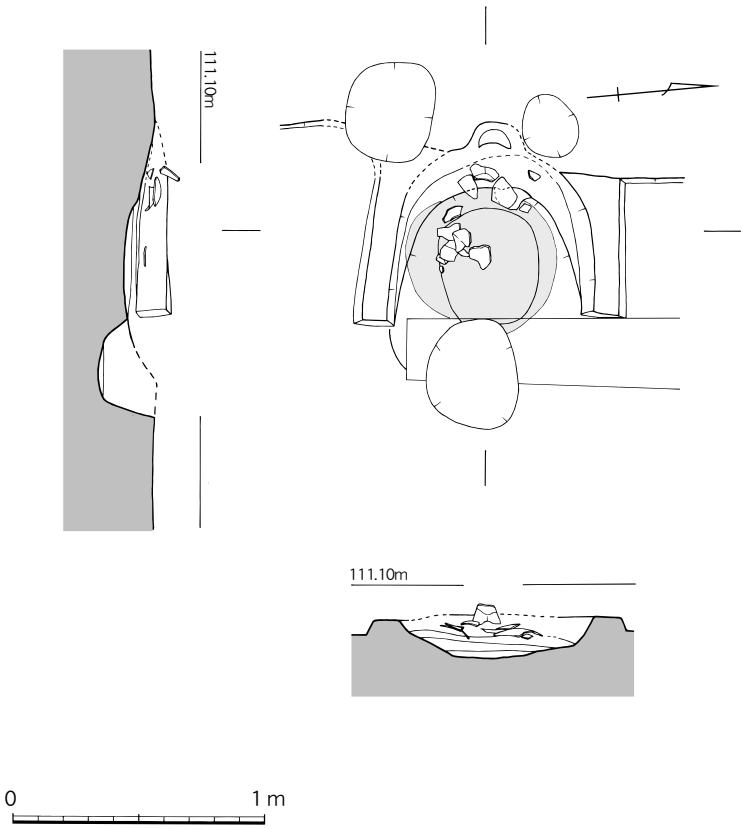
出土遺物（第63図、図版53）

全ての遺物がカマド周辺より出土した。１は土師器鉢である。胴部はやや外に張り出し、頸部は屈曲し、口縁部は外反する。２は土師器鉢で、胴部は張り出さず、口縁部は緩やかに外反する。３は土師器甕で頸部はやや肥厚し、口縁部は細くなりながら外反する。４は土師器甕で頸部がややすぼまり、口縁部は小さく外湾する。

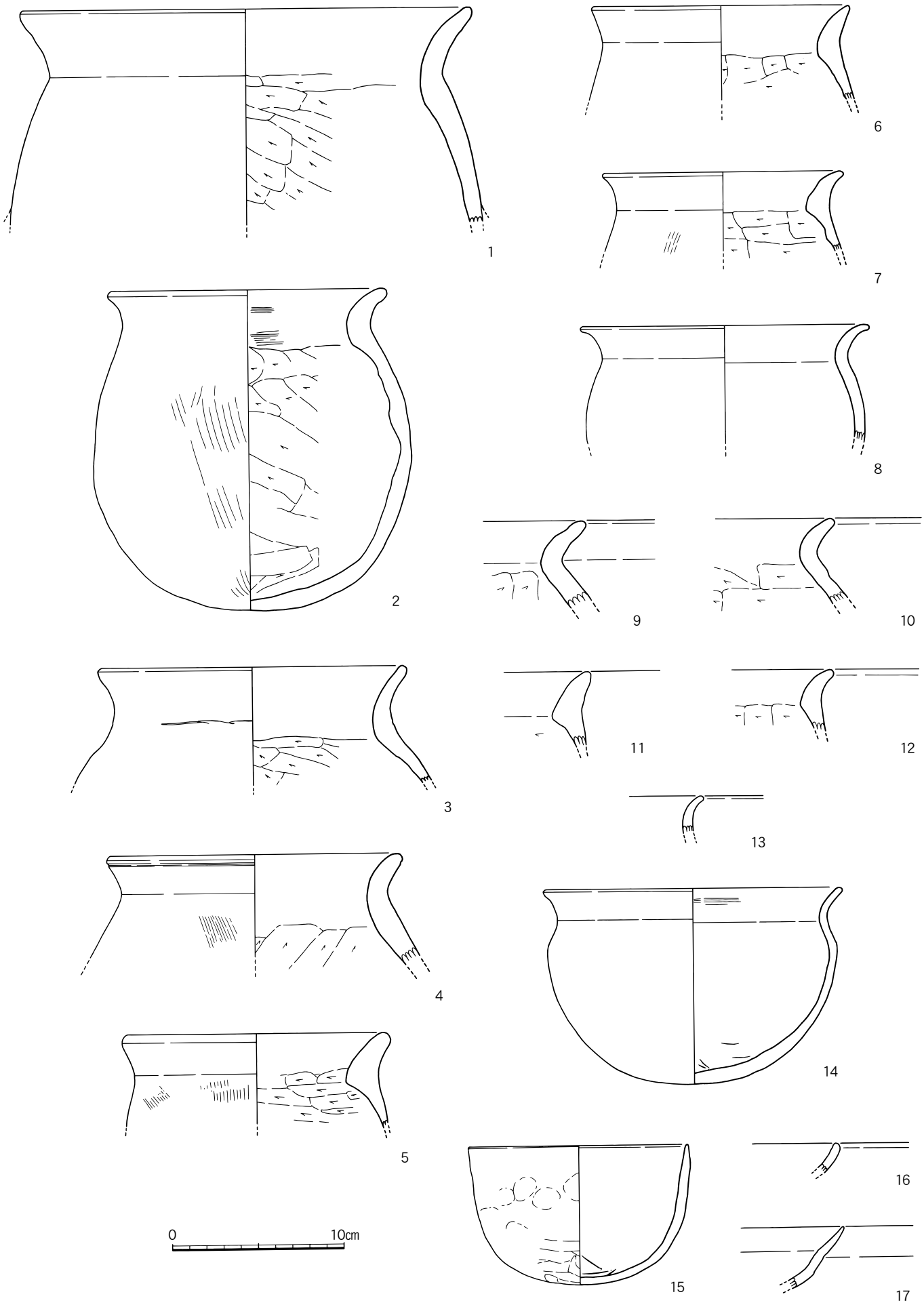
24号竪穴住居跡（第64、65図、図版21）

調査区中央より北西側にて検出された住居跡で、３号竪穴、７号溝に切られ、６号竪穴を切っている。住居跡上面の埋土が地山と非常に類似していたため、当初この住居跡は確認できておらず、やや掘り下げた段階でカマドの存在を確認したことから存在を認めることが出来た。そのためプラン検出の際に上面をかなり掘り下げており、実際の検出面はもっと高かったはずである。カマドもかろうじて袖が検出できた状態であり、埋土の確認等は充分に行うことが出来なかった。。確認面での規模は東西軸で約5.3m、南北軸で約5.6m、床面までの深さ約10㎝を測る方形プランを呈している。床面には灰褐色の貼床が貼られており、主柱穴は４本確認された。主柱穴の深さは30～70㎝とまちまちであるが、プランに対して方形を呈している。

カマドは西壁中央に付設されており、両袖がかろうじて検出できた。袖は黄褐色土で作られており、袖石の痕跡は確認できなかった。床面を窪ませ、全体が被熱により赤褐色に変色していた。土層は、大部分が焼土の堆積であったことから、埋没過程を確認出来なかった。ただ、カマド周辺には土器の大きな破片が残存していたことから、カマド祭祀の可能性も考えられる。



第65図　24号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



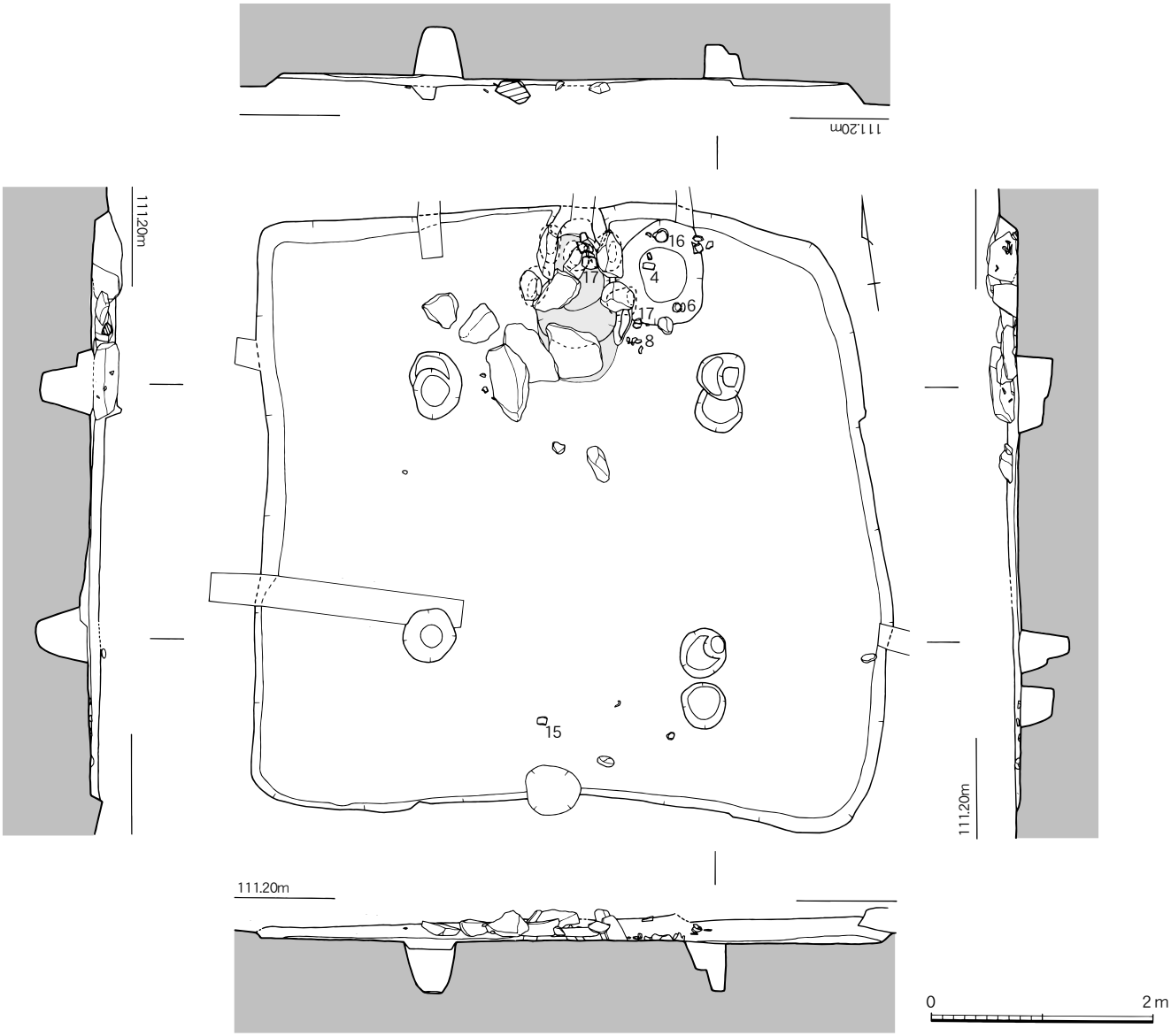
第66図　24号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（第66図、図版53）

１～13は土師器甕である。１、３がP-１、２、５～８が床面より出土した。１はやや大型の甕で口縁部は緩やかに外反する。胴部下端には把手貼り付け痕跡が残る。２は小甕で胴部はやや張り出し、口縁部は小さく外湾する。３、４、８～10は口縁部を緩やかに外反させ、５～７、11、12は頸部でやや肥厚し小さく外反する。13は土師器甕である。14は床面より出土した土師器鉢である。頸部はややすぼまり、口縁部は緩やかに外反する。15は床面より出土した土師器椀か。口縁部は垂直気味に立ち上がる。16、17は確認用のサブトレを掘り下げた際に出土した。16は土師器椀である。17は土師器椀か。胴部より緩やかに立ち上がり、一旦稜をもちつつ、口縁部は内湾する。

25号竪穴住居跡（第67、68図、図版22、23）

調査区中央より北西側にて検出された住居跡で、14、15、16号竪穴住居跡に切られている。住居跡上面の埋土が地山と非常に類似していたため、当初この住居跡は確認できておらず、カマドの石の散乱が確認されている状況であった。石の周辺にトレンチを入れたところカマドの存在を確認できたことから、プランの検出のために幾つかのトレンチを任意に設定し掘り下げた。その結果、

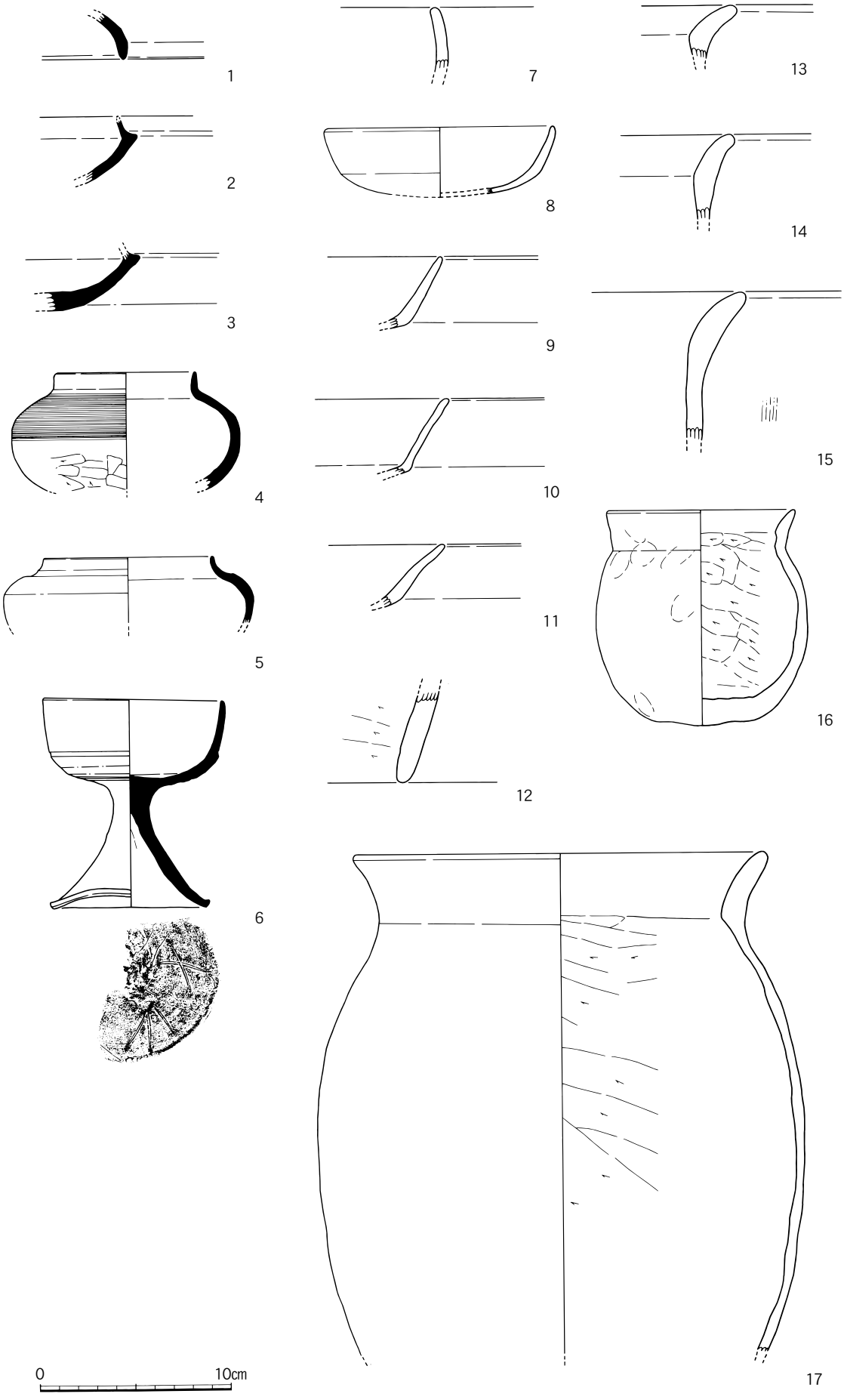


第67図　25号竪穴住居跡実測図（1/60）

壁面が検出され、プランを確認することができた。プラン検出の際に上面を任意に掘り下げており、実際の検出面は５㎝ほど高い。確認面での規模は南北軸で約5.6m、東西軸で約5.7m、床面までの深さ約20㎝を測る正方形プランを呈している。床面には灰褐色の貼床が貼られており、主柱穴は４本確認された。主柱穴は30～45㎝で、プランに対して方形を呈している。また、カマド右側には屋内土坑が付設されており、内部より完形の須恵器高坏など多数の土器破片が出土した。

カマドは北壁中央に付設されており、住居内側に構築される。両袖の残りも良好であったが、引き倒された状態であった。袖は黄褐色粘土で作られており、壁面より20㎝程度手前の箇所より２列袖石を並べ、その間粘土を充填していた。支脚は奥の袖石の間に倒れた状態で出土した。右側袖の手前の石から20㎝ほど袖が伸びていることが確認できたことから、本来カマドは1.2m以上の長さがあったものと思われる。カマド内部は若干窪ませた状態であり、焚口部は焼土の硬化より落ち込み部分と判断される。落ち込みやや手前には炭の掻きだし痕跡が残存していた。カマド内部には天井石に使用していたと考えられる大きな石が落ちており、また、カマド焚口部左側にも天井石と考えられる大石が多数散乱していた。石はどれも凝灰岩を使用していた。堆積状況についてはカマド内外に大きな石が崩落しており、またプラン確認時のトレンチにより一部破壊してしまった事から、土層確認が困難であると判断した。ただ、大石を除去する際に観察した限りでは、カマド床面

第68図　25号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）



第69図　25号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

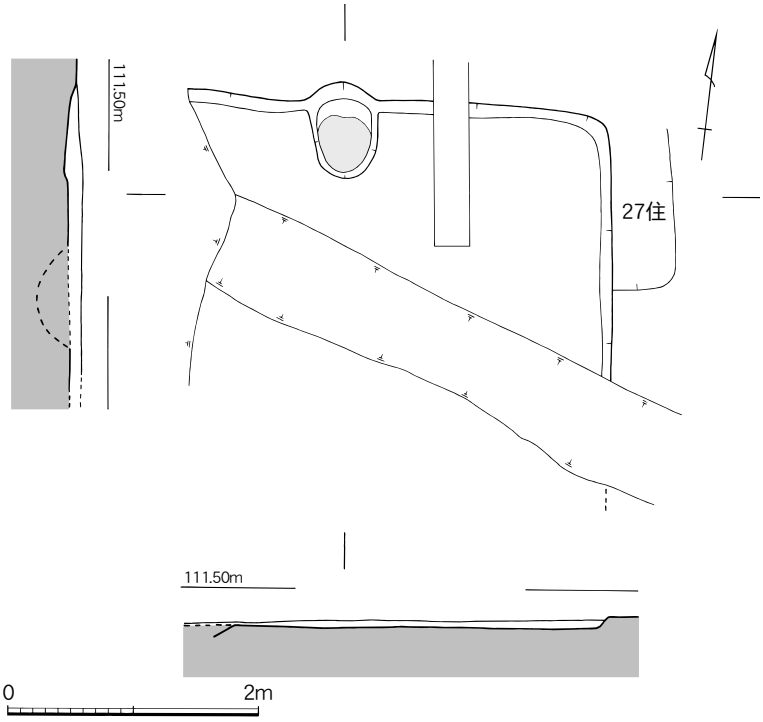
の上には炭、焼土が堆積し、その上面に住居跡埋土と類似する土が堆積し、粘土の崩落は確認できなかった。周辺の大石が天井石とすると、天井部にほとんど粘土を使用していなかった可能性もあり、カマドの破壊時の状況は確認できなかった。ただし、天井石を手前に引き倒して破壊し、カマド内部からも大型の土器破片が出土したことから、祭祀行為があった可能性が考えられる。

出土遺物（第69図、図版54）

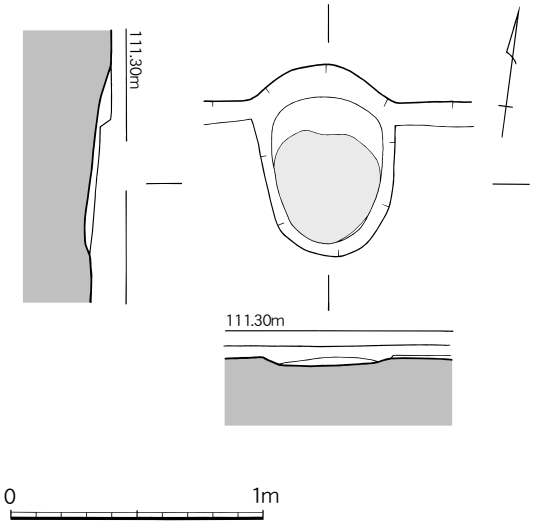
１は坏蓋である。２～３は須恵器坏身である。口縁部には逆刺を持ち、口縁はやや内傾しながら立ち上がる。４、５は須恵器無頸壺である。４は屋内土坑より出土し、口縁部はやや上方に立ち上がる。胴部上面にはカキ目が施される。５は口縁部がやや内傾する。６は屋内土坑より出土した須恵器高坏である。ほぼ完形の状態である。口縁部はやや垂直気味に立ち上がり、胴下半部にて稜を形成する。脚部はやや外に開き端部をツマミ上げる。底部にやや歪みがある。底部内面にはヘラ記号が施される。７は土師器椀である。やや口縁部は内傾する。８はカマドそばから出土した土師器椀である。口縁部はやや外に開く。９～11は土師器高坏である。10、11は床面より出土した。いずれも坏部で、胴下半部に明瞭な屈曲を持ち、口縁部はやや外に開く。12は土師器甑である。端部がやや尖る。13～17は土師器甕である。16、17はカマドより出土した。13～15、17は頸部に屈曲を持ち、口縁部が外反する。16は小甕で底部はやや平底気味で、口縁部はやや垂直気味に立ち上がる。

26号竪穴住居跡（第70、71図、図版23）

調査区西側にて検出された住居跡で、27号竪穴住居跡を切っている。住居跡真ん中を近年の用水路によって削平を受けており、その中から遺物の出土が見られたことから、その存在が明らかとなった。住居跡の埋土が地山と非常に類似していたため、プランの検出に非常に苦労をしたが、トレンチ等で確認したところ、若干しまりのよわい土を埋土として認識し、掘り下げを行った。ただ、住居南側は明確なプランを検出できず、やや下がっていることから、削平されている可能性がある。確認面での規模は不明で、床面までの深さ約５㎝を測る方形プランを呈している。床面には貼床が



第70図　26号竪穴住居跡実測図（1/60）



第71図　26号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

貼られておらず、やや硬化した面が床と考えられる。主柱穴は確認出来なかった。

カマドは住居跡北壁中央付近に付設され、やや外側に張り出している。床面をやや窪ませており、硬化面はやや手前に見られた。硬化面上には焼土、炭層が堆積しており、崩落粘土の痕跡は確認できなかった。

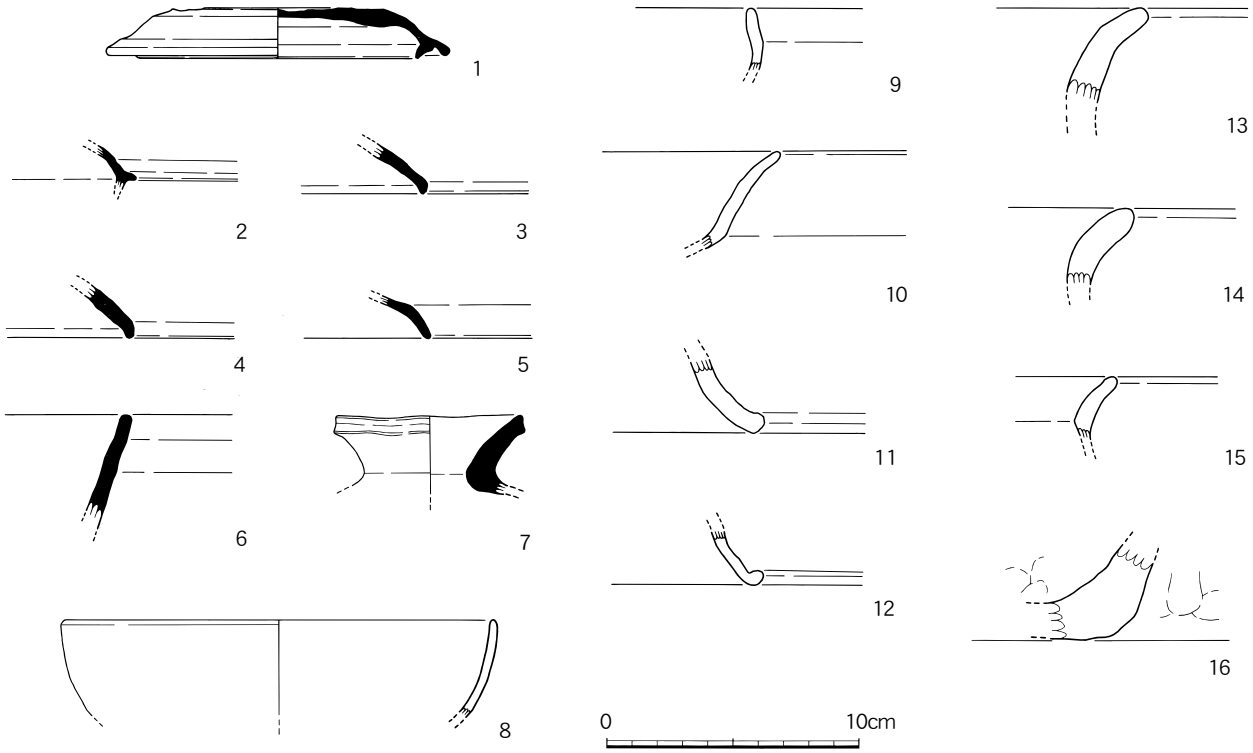
出土遺物（第72図、図版55）

１～５は須恵器坏蓋である。１、２は逆刺を持ち、口縁部は内傾しており、受け部端部と高さがほとんど変わらない。３、４は口縁部を下方に折り曲げており、５は口縁部上面にて屈曲させる。６は須恵器壺か坏である。径がやや大きい。７は須恵器壺で口縁部を外面に張り出し端部をやや窪ませる。８は土師器椀である。９は土師器椀である。口縁部がやや内傾する。10は土師器高坏である。口縁部下面に段を持ち、緩やかに外湾しながら外に開く。11は土師器高坏脚部か。12は土師器高坏脚部である。端部を上方に折り曲げ、外に開く。13～15は土師器甕である。口縁部が緩やかに外に開く。15は小甕と思われる。16は土師器甕の底部である。底面はやや平坦になっており、内外ともに指頭圧痕が残る。

27号竪穴住居跡（第73、74図、図版24）

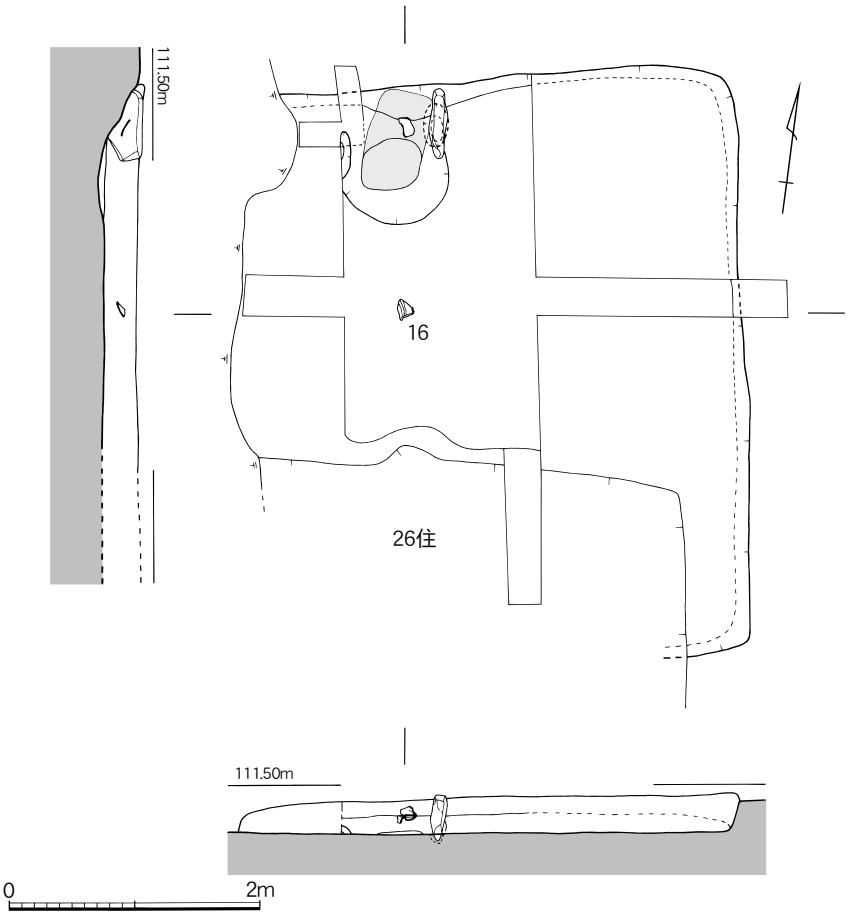
調査区西側にて検出された住居跡で、26号竪穴住居跡に切られている。26号竪穴住居跡のプラン検出時に袖石の埋没が確認できたことから、その存在が明らかとなった。住居跡の埋土が地山と非常に類似していたため、プランの検出に非常に苦労をしたが、トレンチ等で確認したところ、若干しまりのよわい土を埋土として認識し、掘り下げを行った。ただ、この一帯は盛り土保存されるということで、カマドを中心とした範囲を掘り下げ、それ以外の箇所はトレンチと遺構面の検出に留めることとした。確認面での規模は南北軸で約4.7m、床面までの深さ約20㎝を測る正方形プランを呈している。床面には貼床が貼られておらず、やや硬化した面が床と考えられる。主柱穴は確認出来なかった。

カマドは住居跡北壁中央付近に付設され、やや外側に張り出している。床面をやや窪ませており、

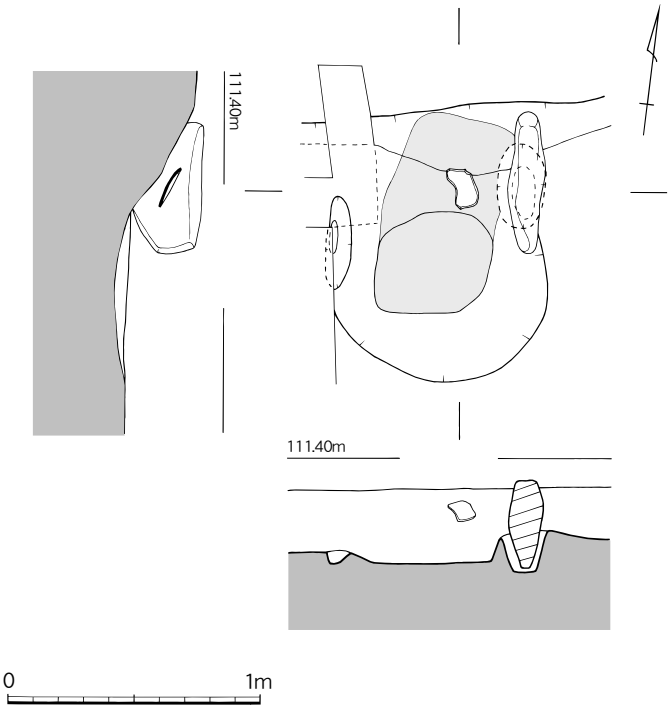


第72図　26号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

硬化面は袖石の間に見られた。凝灰岩製の右袖石が残り、左袖石は抜取痕が確認できた。硬化面上には焼土、炭層が堆積し、その上面には住居埋土が堆積しており、崩落粘土の痕跡は確認できなかった。



第73図　27号竪穴住居跡実測図（1/60）



第74図　27号竪穴住居跡カマド実測図（1/30）

出土遺物

（第75図、図版55）

１、２は須恵器坏蓋である。口縁部には逆刺を持ち、受け部端部が口縁部より垂れ下がっている。３は須恵器蓋で口縁部上面より折り曲げ、下方に垂れ下がる。端部はやや平坦に仕上げられる。４は須恵器坏蓋である。周辺部からの流れ込みか。５は土師器壺か口縁部は垂直気味に立ち上がる。６は土師器無頸壺か。口縁部はやや外に開く。７は土師器高坏である。胴部より緩やかに屈曲させ、口縁部はやや外湾しながら外反する。８は土師器高坏の脚部である。内面に稜をもち外に開く。９～16は土師器甕である。９～11、15は頸部を肥厚させ端部を尖らせながら外に開く。12は口縁端部にかけてやや尖らせる。13は頸部を肥厚させ、口縁部は小さく外に開く。14は弥生土器の甕か。端部を平坦に仕上げる。16は頸部より外湾しながら外に開く。

28号竪穴住居跡（第76図、図版24）

調査区北西端にて検出された住居跡である。22号住居の焼土が確認されたことから周辺部の遺構検出を行った結果、その存在が明らかとなった。ただ、この付近が盛り土保存されることから、28～31号竪穴住居跡はトレンチで立ち上がりを確認し、平面プランの確認に留めている。住居埋土は地山の堆積層と非常に類似していることから、検出は困難を極めた。暗黄褐色土が住居埋土であり、地山とは若干のしまりからプランを確認している。確認面での規模は東西幅約5m、南北幅約6.6mを測り、深さは約10㎝である。

出土遺物（第77図、図版55）

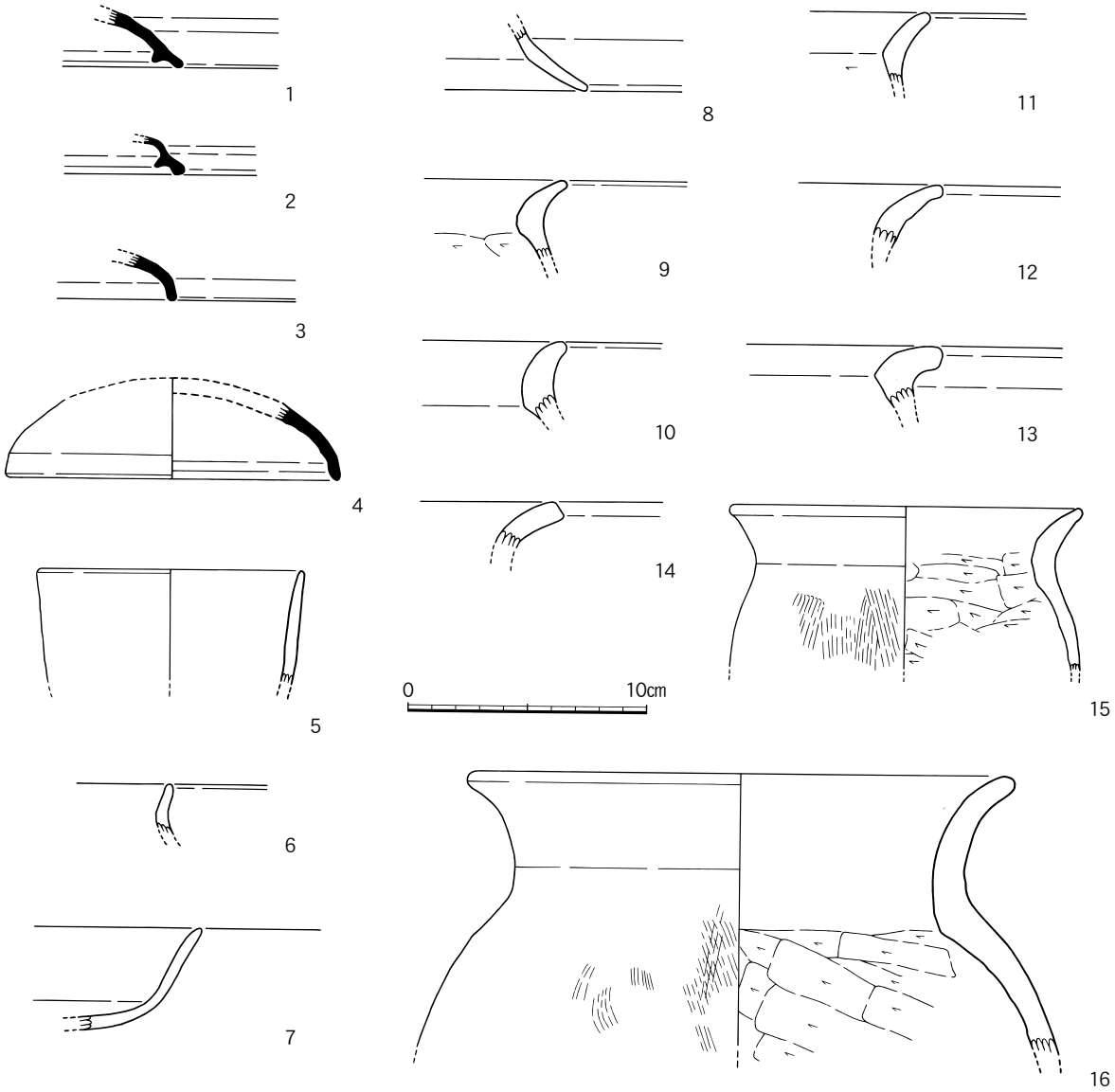
遺構面より採取した遺物である。1は土師器高坏である。2は土師器甕である。口縁部は外に開く。

29号竪穴住居跡（第76図、図版24）

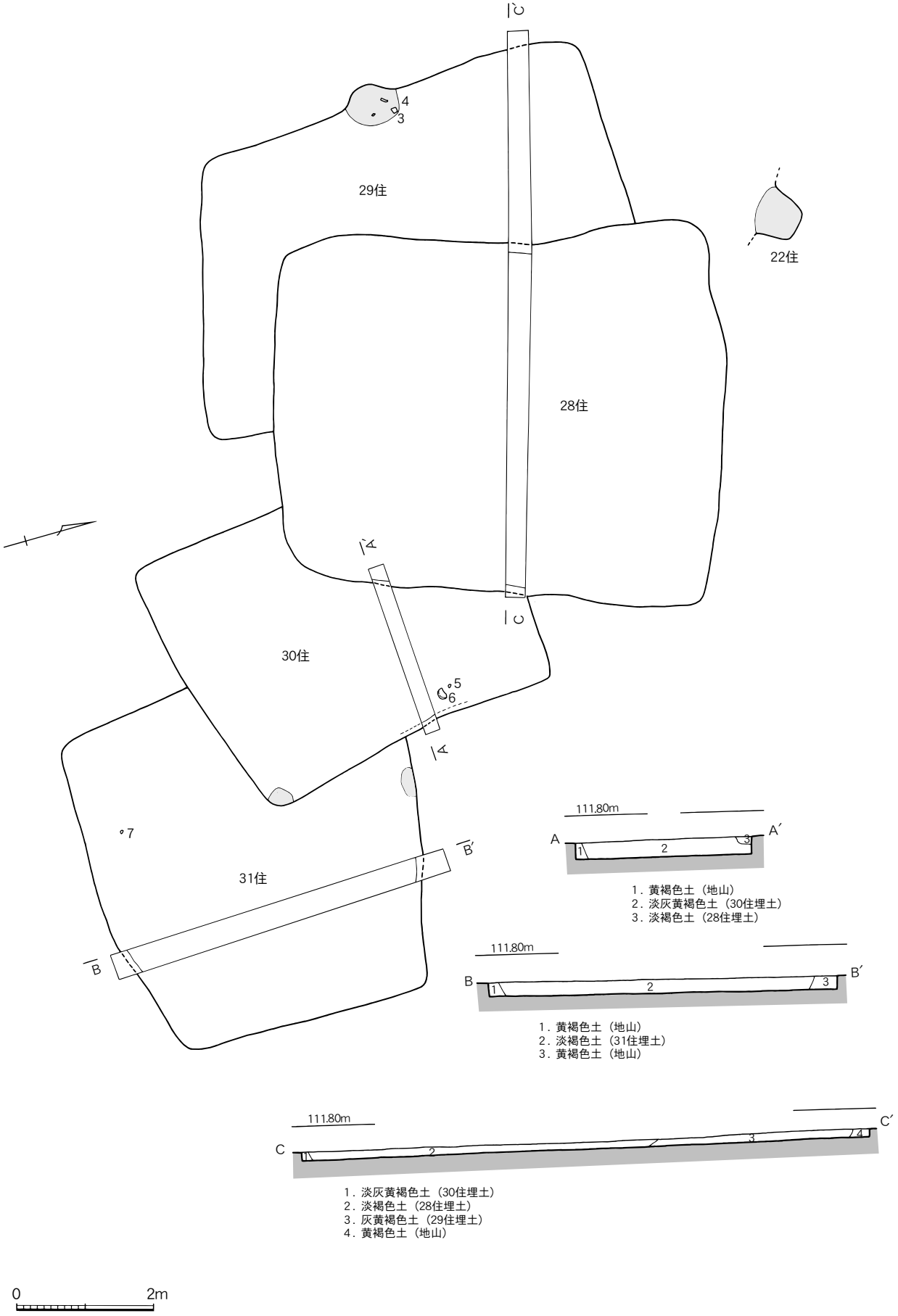
28号竪穴住居跡に切られる住居跡である。確認面での規模は東西幅約６m、南北幅約4.2mを測り、深さは約10㎝である。カマドは住居跡西壁に付設されており、やや外に張り出す。

出土遺物（第77図、図版55）

３、４は土師器甕である。胴部がやや張り出し、口縁部端部はやや尖り、外反させる。



第75図　27号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）



第76図　28、29、30、31号竪穴住居跡実測図（1/60）

30号竪穴住居跡（第76図、図版34）

28号竪穴住居跡に切られ、31号竪穴住居跡を切っている。確認面での規模は南北幅約4.8m、東西幅約3.8mを測る。床面までの深さは約10㎝を測る。焼土痕跡が住居跡南東コーナーに検出されている。

出土遺物（第77図、図版56）

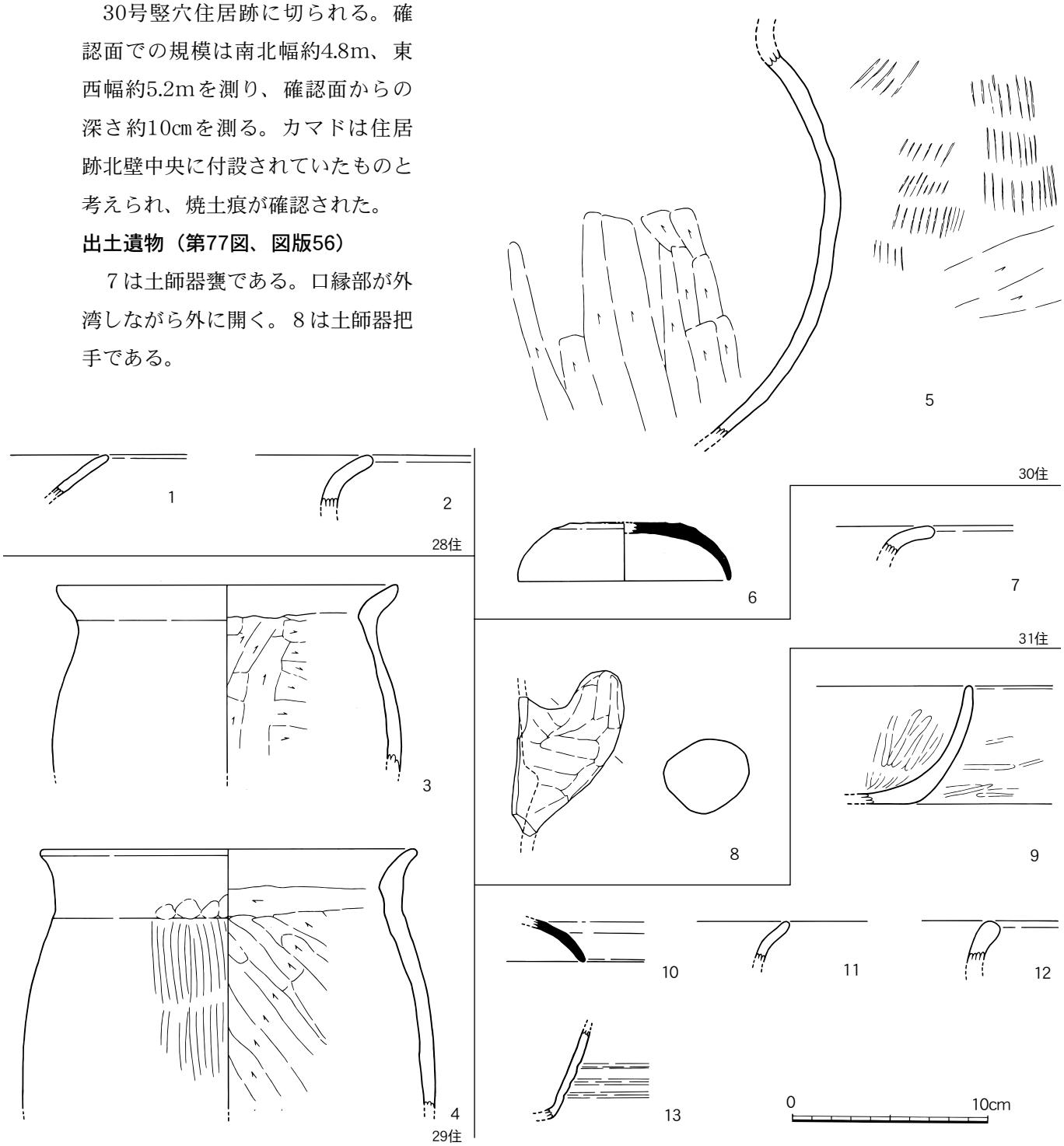
５は土師器甕の胴部である。やや外に張り出す。６は須恵器坏蓋である。口縁部は緩やかに下方に折れ下がる。

31号竪穴住居跡（第76図、図版24）

30号竪穴住居跡に切られる。確認面での規模は南北幅約4.8m、東西幅約5.2mを測り、確認面からの深さ約10㎝を測る。カマドは住居跡北壁中央に付設されていたものと考えられ、焼土痕が確認された。

出土遺物（第77図、図版56）

７は土師器甕である。口縁部が外湾しながら外に開く。８は土師器把手である。



第77図　28、29、30、31号竪穴住居跡出土遺物実測図（1/3）

28～31号トレンチ出土遺物（第77図、図版56）

住居跡群の立ち上がり確認用トレンチより出土した遺物であるが、どの住居跡に伴うのか不明であることからまとめて紹介する。９～11がCトレンチより出土した遺物で、28、29号住居跡に伴うものと考えられる。９は土師器椀で底部は平坦で口縁部は緩やかに内湾する。10は須恵器坏蓋である。11は土師器甕である。12、13がAトレンチより出土し、29、30号竪穴住居跡に伴うものと考えられる。12は土師器甕の口縁部である。13は土師器椀か胴部に沈線が３条施される。

２．掘立柱建物（図版25）

掘立柱建物は全部で12棟検出された。ただ、調査区内には柱穴が無数に確認され、あまりの柱穴の多さに建物として確認することの出来なかった可能性がある。３穴の柱穴が並ぶ箇所は多く見られたが、その展開を把握することが出来なかった箇所も多くあるため、調査中に確実に確認することの出来た住居跡について報告することとする。

特に調査区中央付近の住居跡の密集する付近に多く見られた。建物軸は南北方向のものが多く見られ、一部東西方向のものも検出された。規則的配置のような状況は現状では確認出来なかった。軸方向や位置から分けると大きく２群に分けられ、それぞれ１、８、９号掘立柱建物、２～６、10～12号掘立柱建物に分かれる。７号掘立柱建物はやや軸が異なるがその位置関係から後者のグループに含まれるものと考えられる。

１号掘立柱建物（第78図、図版26）

調査区東側にて確認された南北方向に軸を取る２間×４間の建物である。８号建物と重複しているがその前後関係は不明である。梁行方向の柱穴間の距離は約1.8m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.3mを測り、心々距離で南北長軸約7.1m、東西短軸約4.6mを測る。検出面での柱穴の掘方は約30～45㎝の円形を呈し、深さは深いもので約40㎝を測る。

2号掘立柱建物（第79図、図版26）

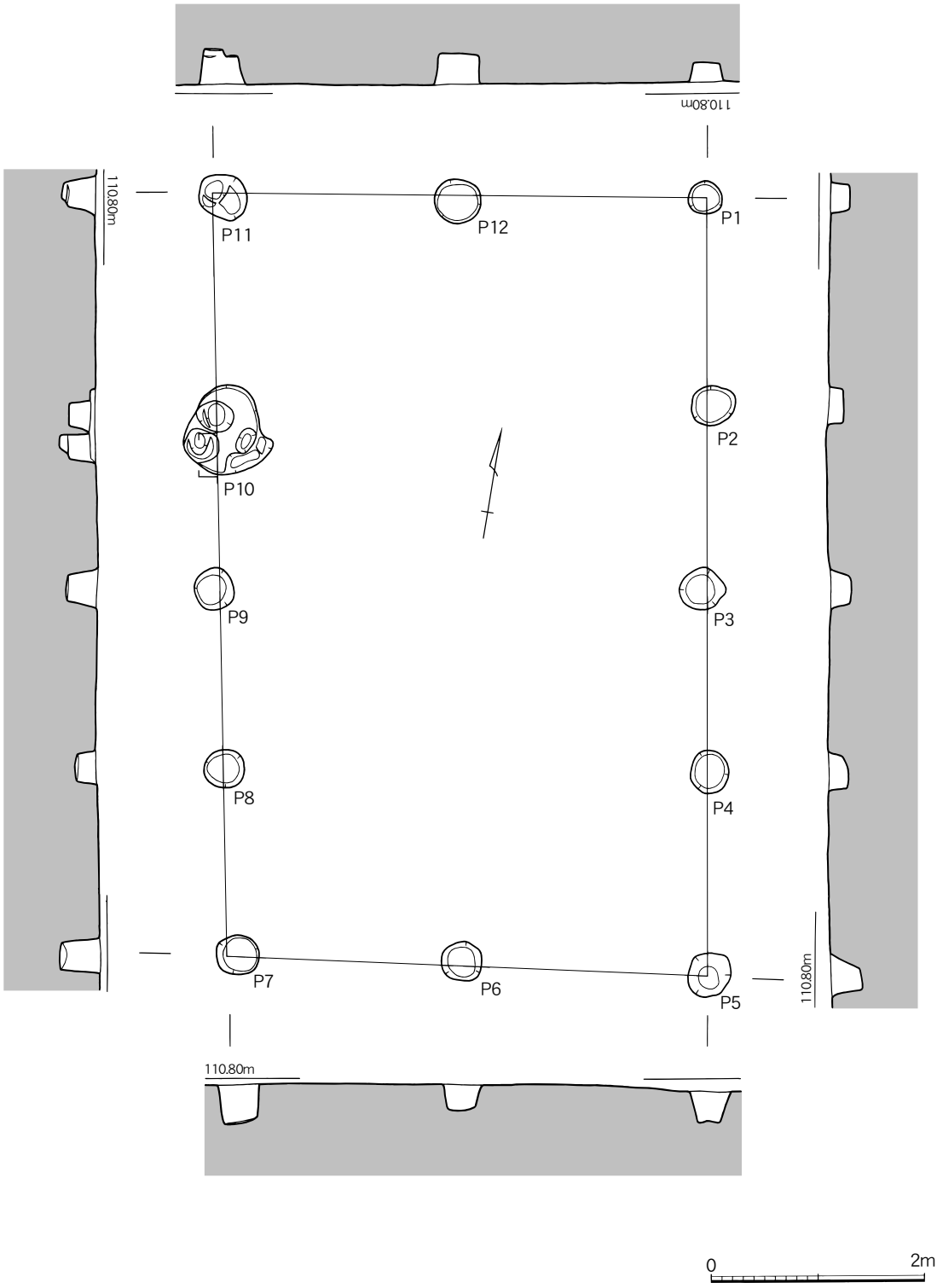
調査区中央にて確認された南北方向よりやや東よりに軸を取る２間×４間の建物である。２号溝を切っており、３号建物と重複しているがその前後関係は不明である。梁行方向の柱穴間の距離は約1.6m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.1mを測り、心々距離で南北長軸約6.3m、東西短軸約4.2mを測る。検出面での柱穴の掘方は約20～50㎝の円形を呈し、深さは深いもので約50㎝を測る。

３号掘立柱建物（第80図、図版26）

調査区中央にて確認された南北方向よりやや東よりに軸を取る２間×３間の建物である。８号竪穴住居に切られ、11号竪穴住居跡、２号溝を切っており、３号建物と重複しているがその前後関係は不明である。梁行方向の柱穴間の距離は約2.5m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.1mを測り、心々距離で南北長軸約7.5m、東西短軸約4.2mを測る。検出面での柱穴の掘方は約35～60㎝の円形を呈し、深さは深いもので約65㎝を測る。

４号掘立柱建物（第81図、図版27）

調査区中央にて確認された南北方向よりやや東よりに軸を取る２間×３間の建物である。６号竪穴住居跡に切られており、５号建物と重複しているがその前後関係は不明である。梁行方向の柱穴間の距離は約2.3m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.1mを測り、心々距離で南北長軸約7.3m、東西短軸約4.2mを測る。検出面での柱穴の掘方は約30～60㎝の円形を呈し、深さは深いもので約50

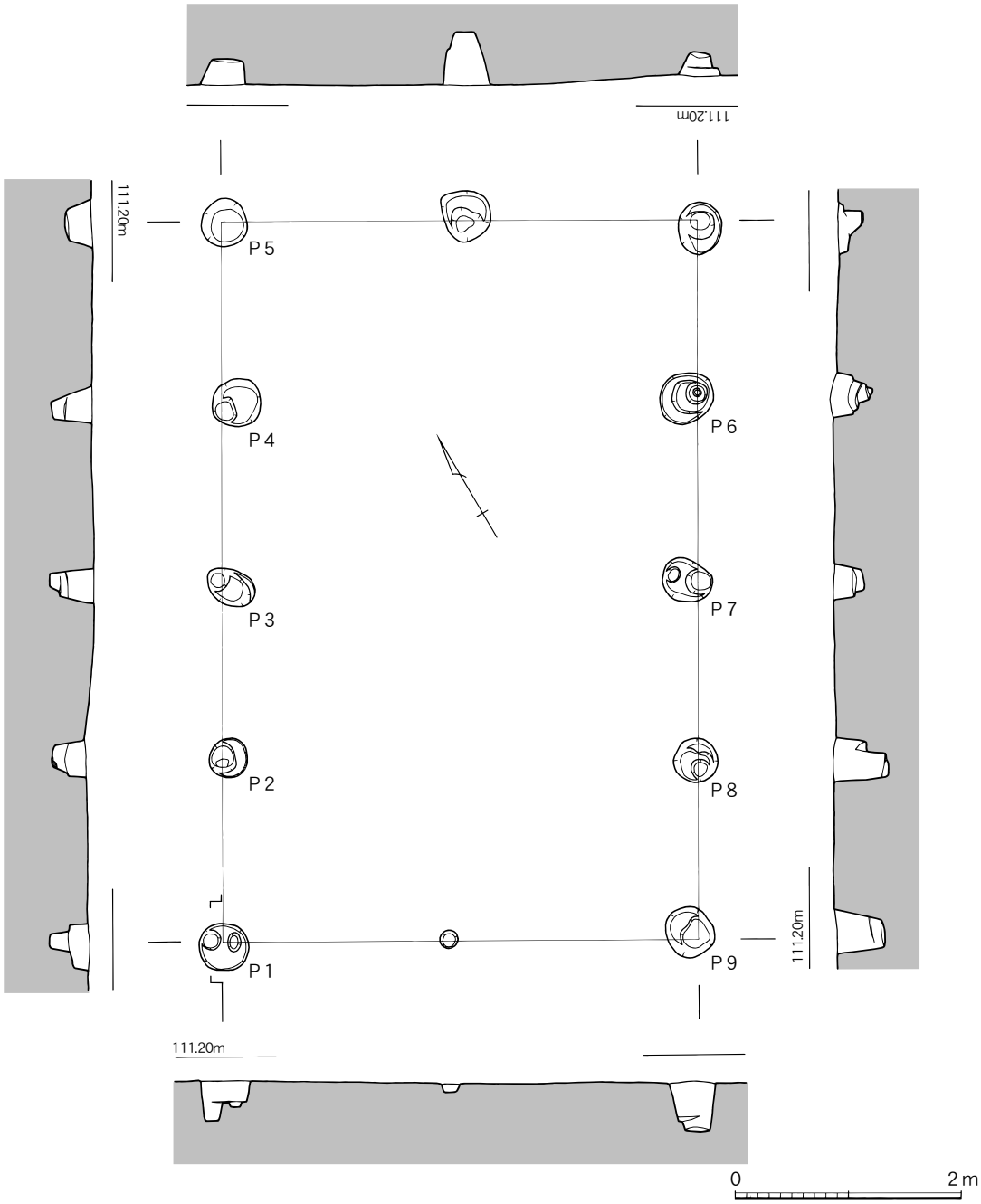


第78図　１号掘立柱建物実測図（1/60）

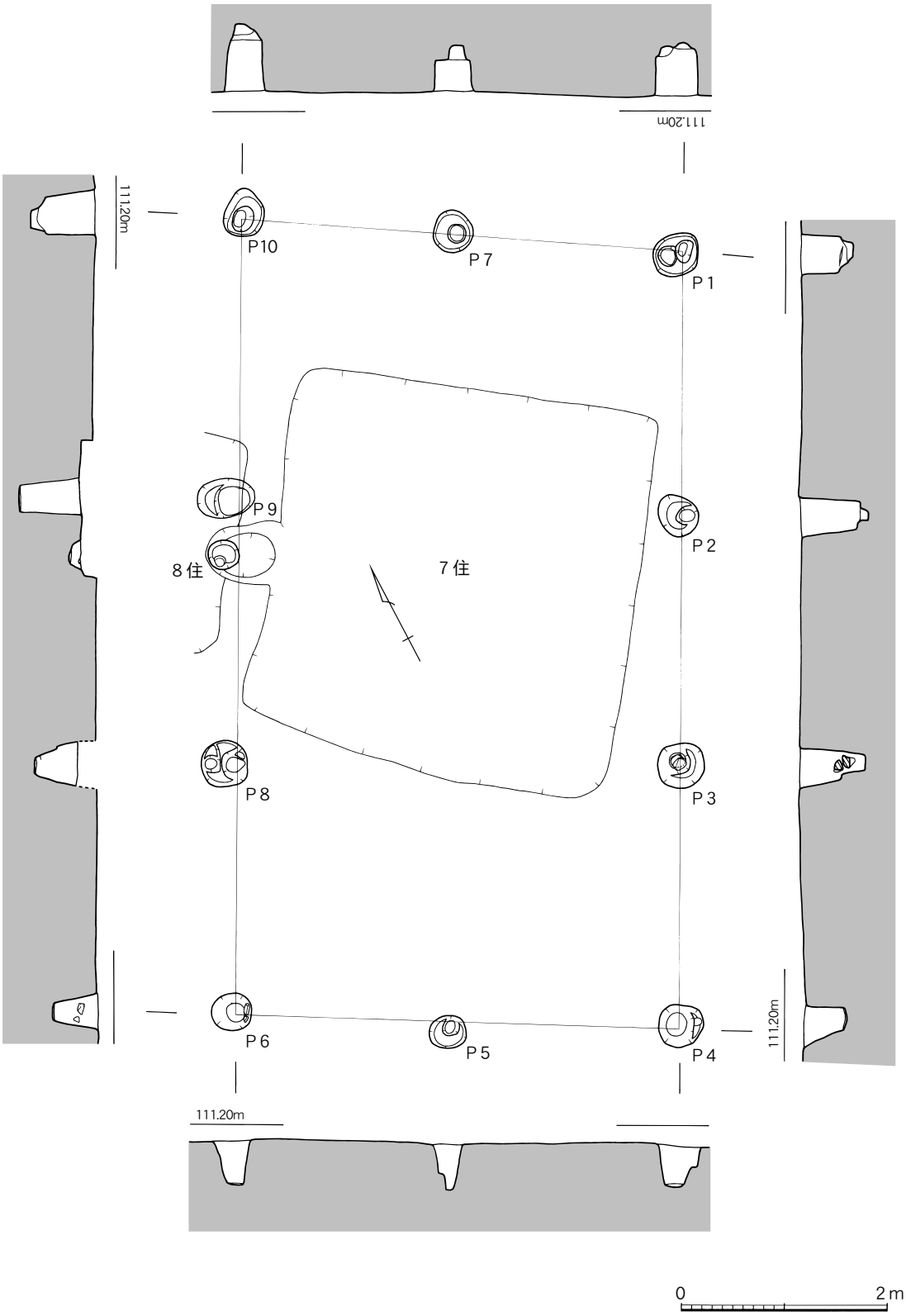
㎝を測る。

５号掘立柱建物（第82図、図版27）

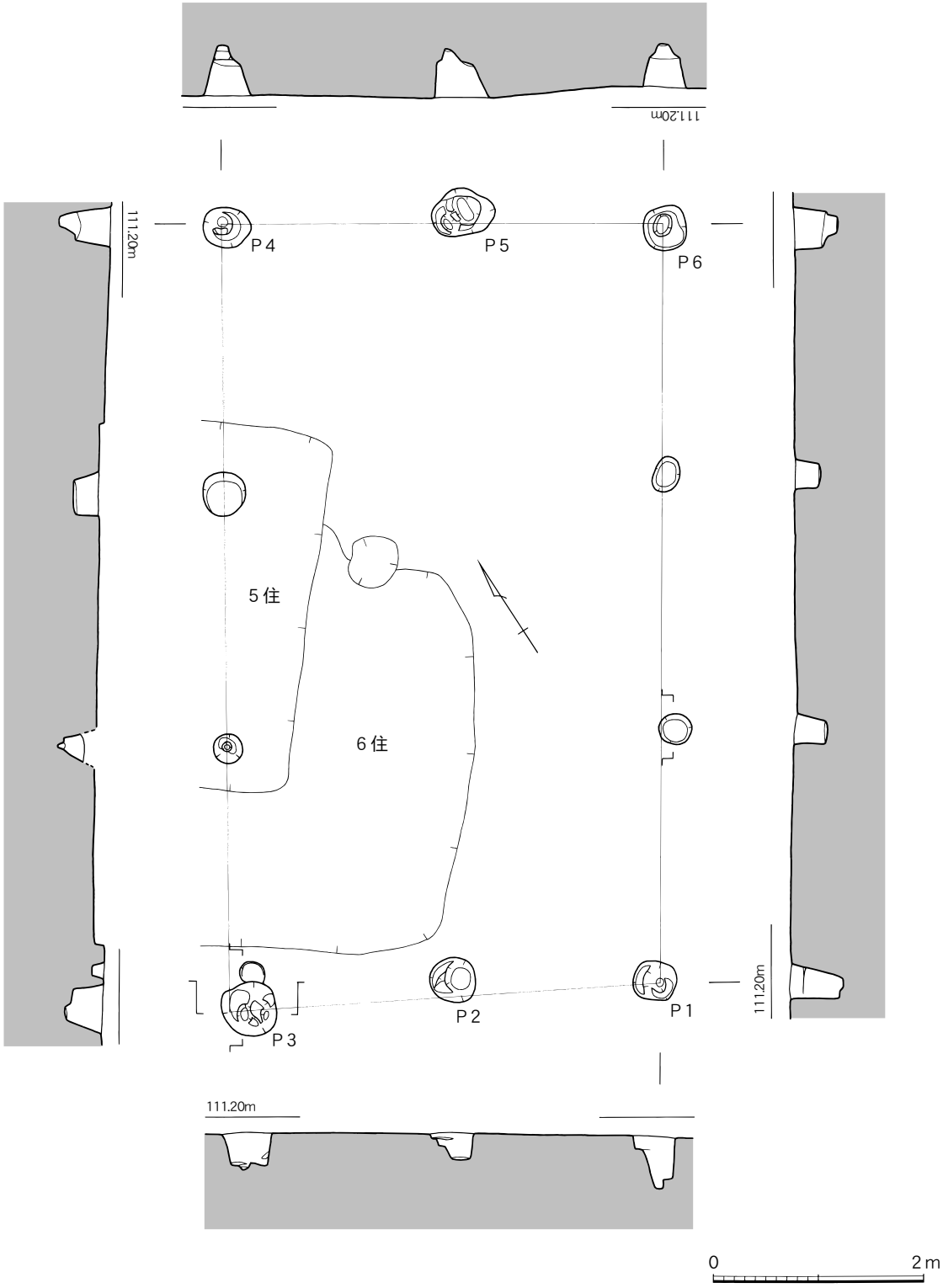
調査区中央にて確認された南北方向に軸を取る２間×４間の建物である。５号竪穴住居跡に切られており、４、10号建物と重複しているがその前後関係は不明である。梁行方向の柱穴間の距離は約1.8m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.3mを測り、心々距離で南北長軸約7.2m、東西短軸約4.6mを測る。検出面での柱穴の掘方は約35～80㎝の円形を呈し、深さは深いもので約60㎝とかなり大型である。南側の桁行中心の柱穴は住居跡に削平を受けているせいか検出することが出来なかった。



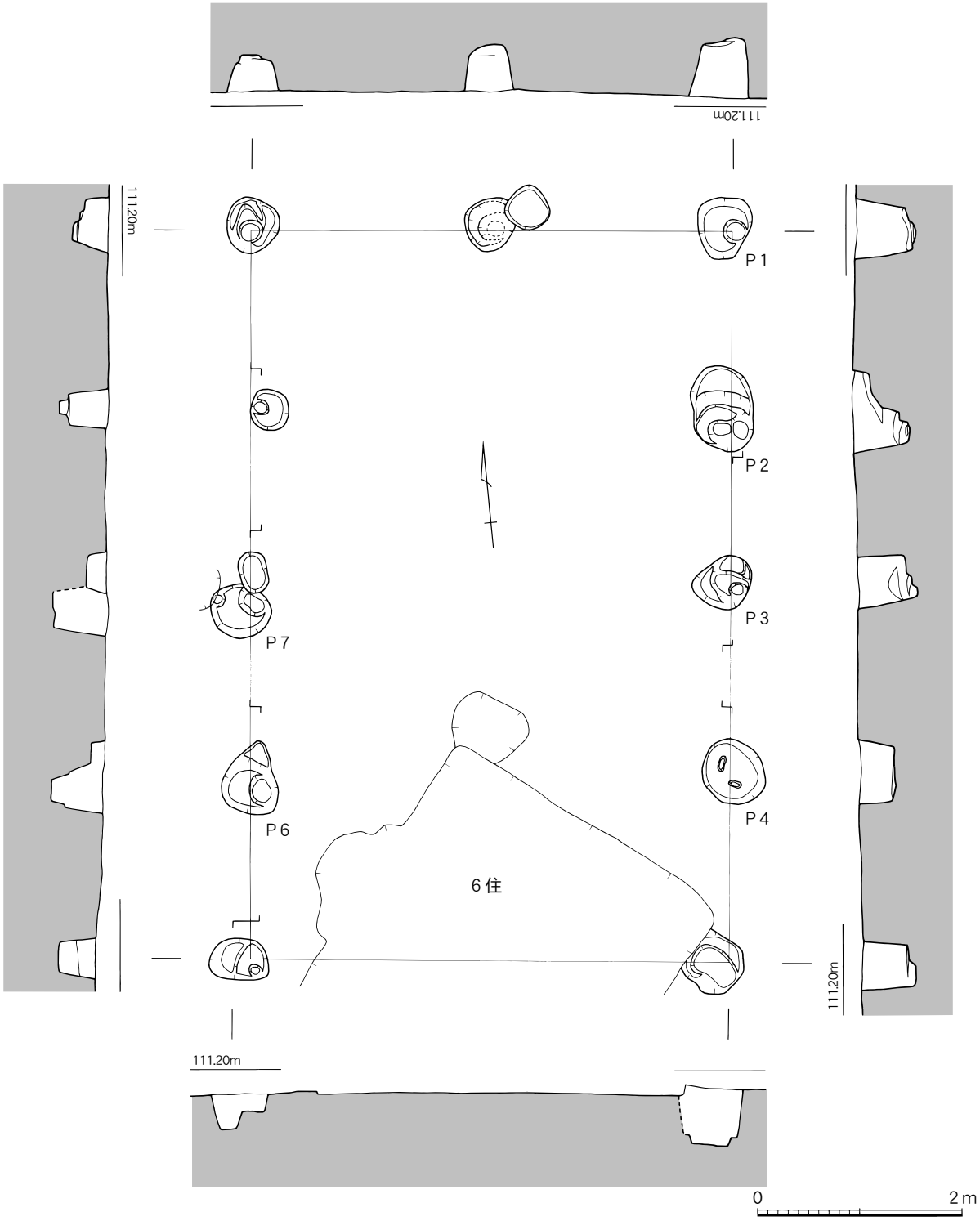
第79図　２号掘立柱建物実測図（1/60）



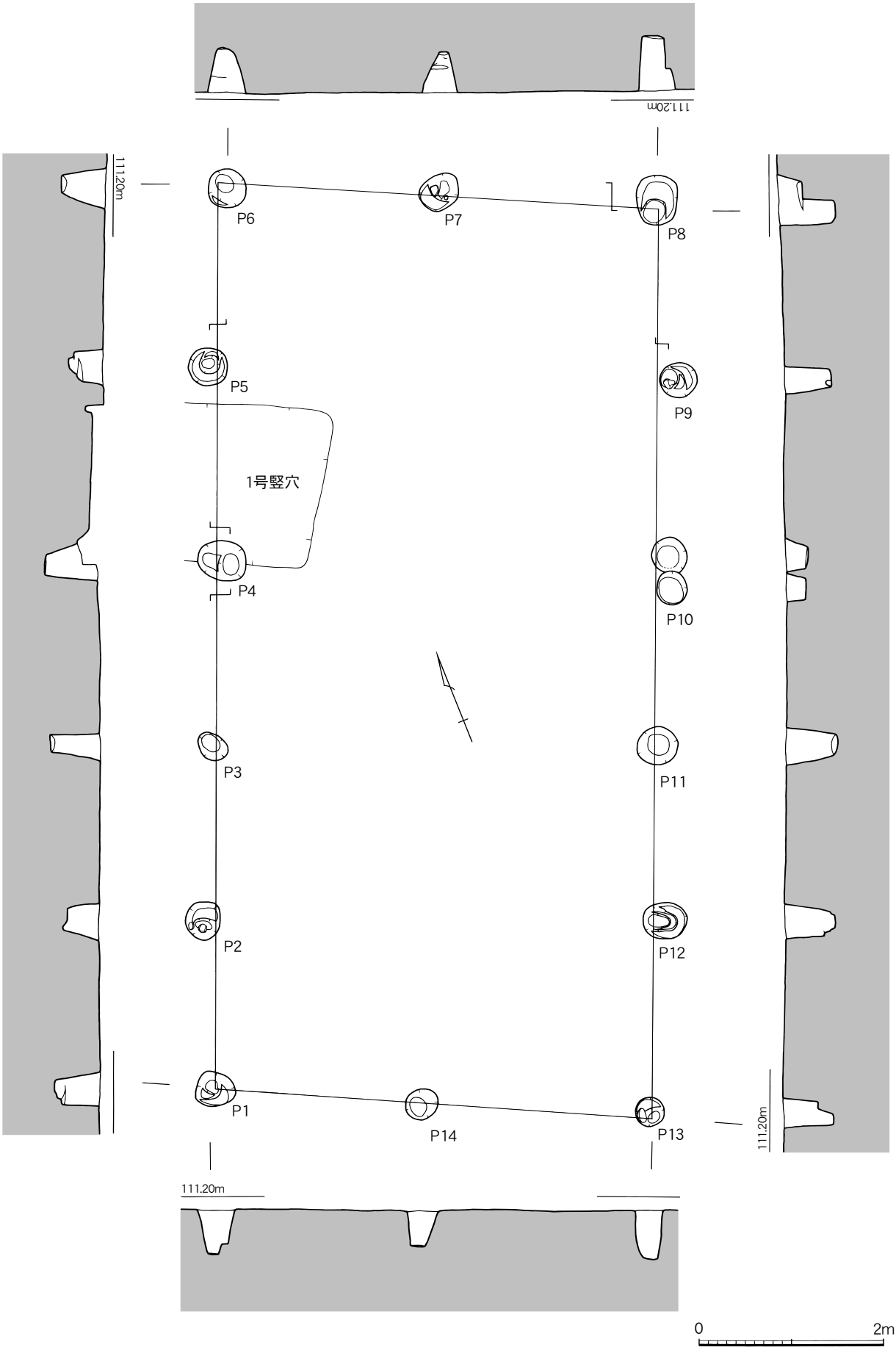
第80図　3号掘立柱建物実測図（1/60）



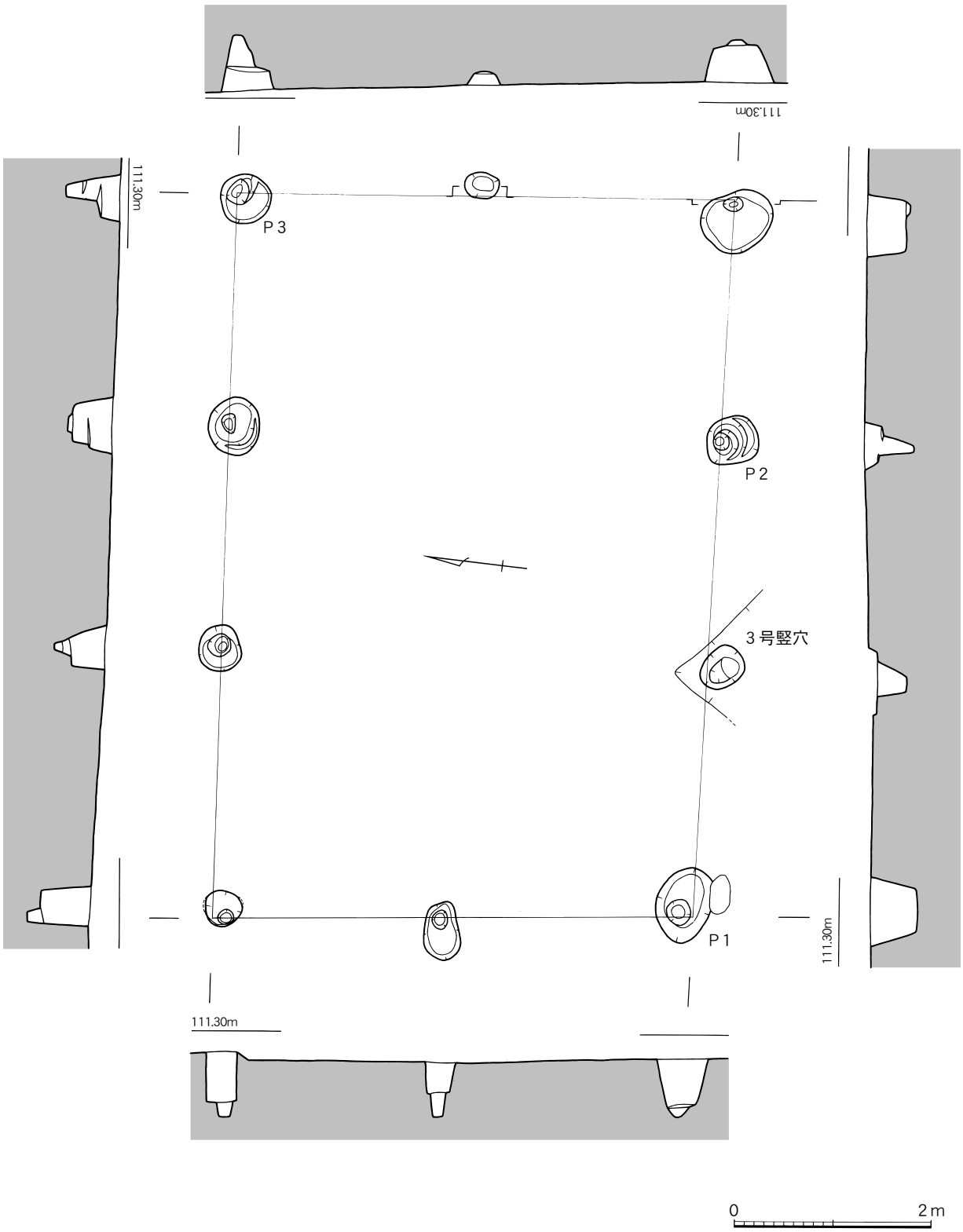
第81図　４号掘立柱建物実測図（1/60）



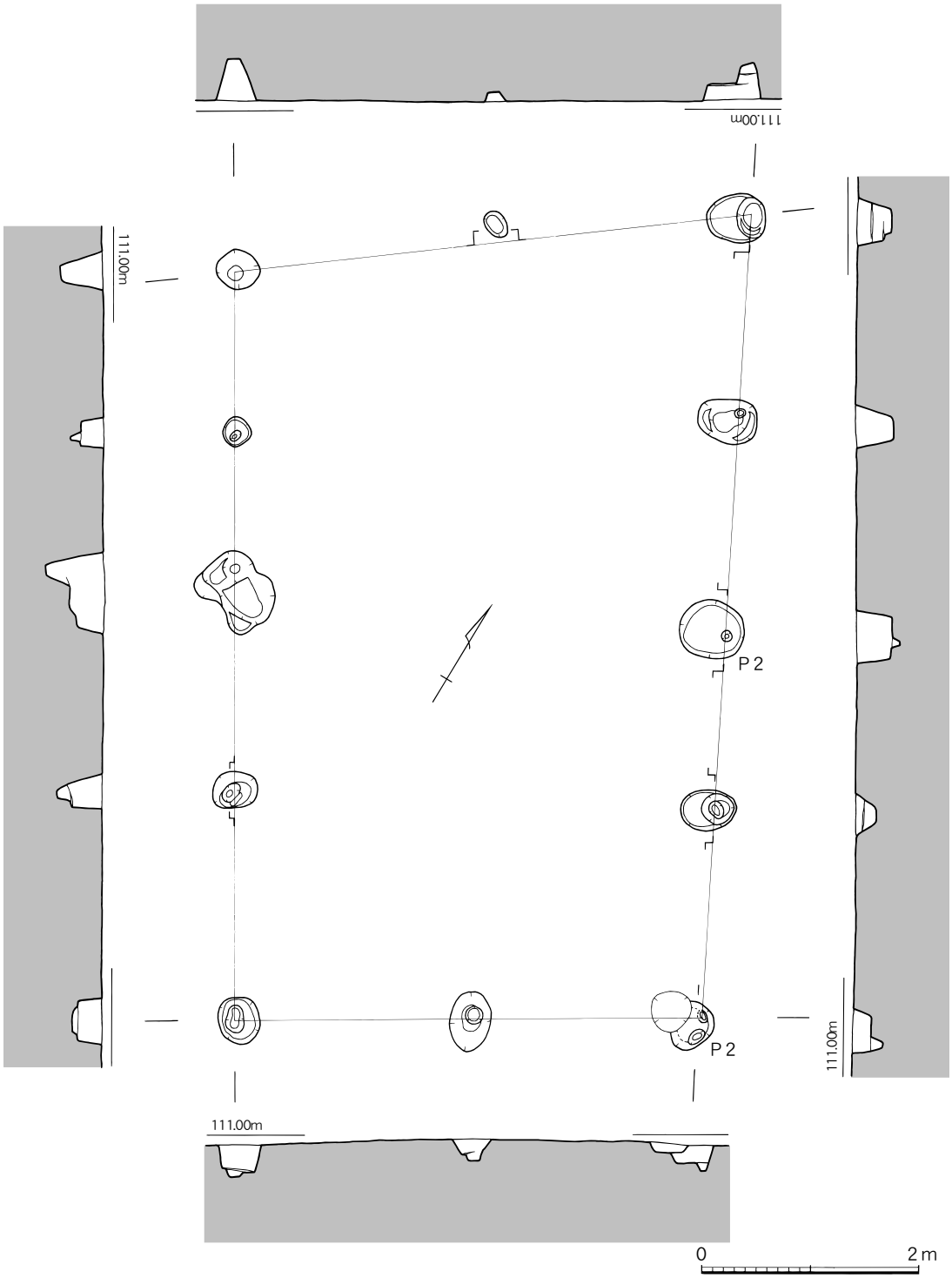
第82図　５号掘立柱建物実測図（1/60）



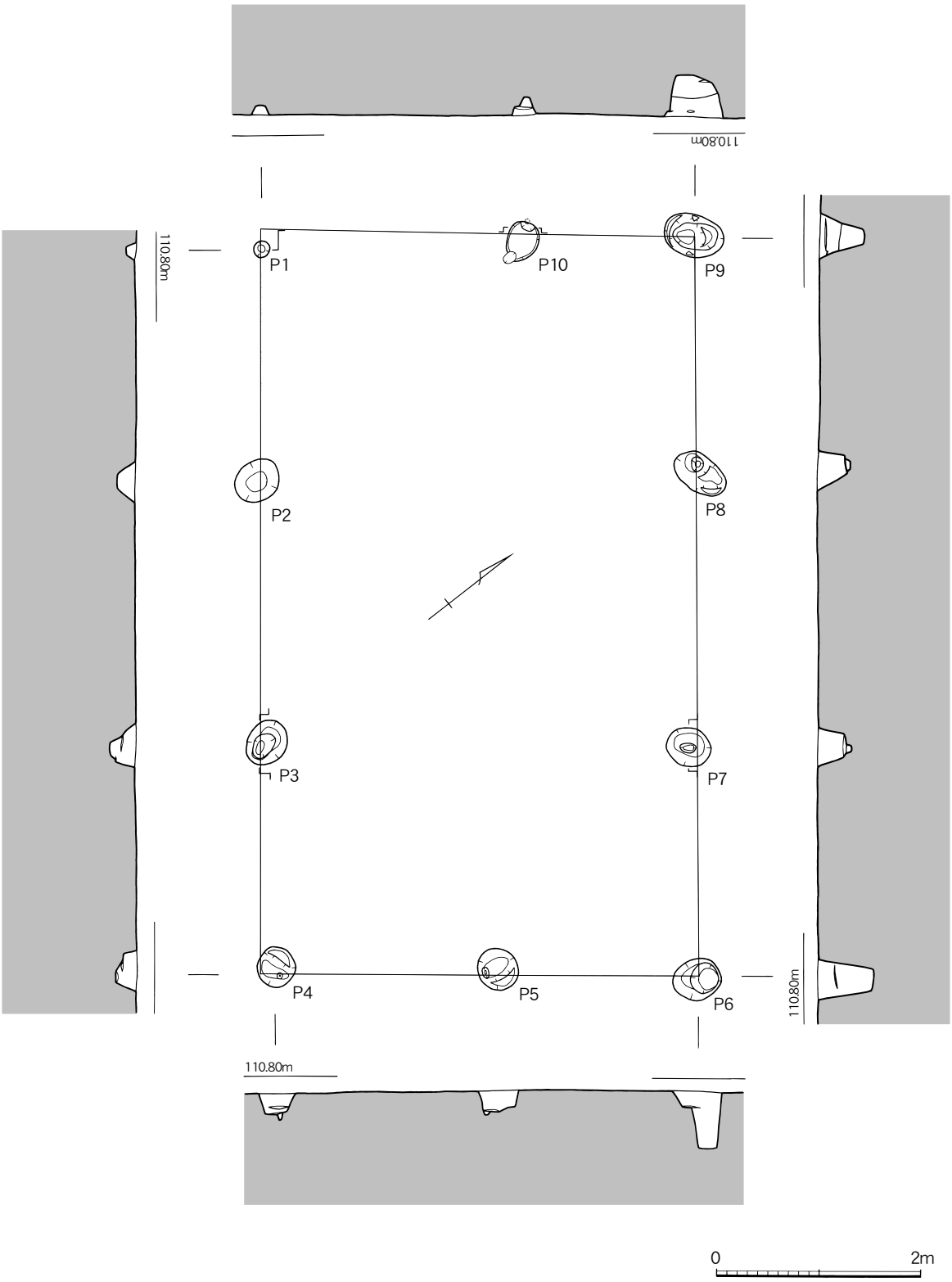
第83図　6号掘立柱建物実測図（1/60）



第84図　７号掘立柱建物実測図（1/60）



第85図　８号掘立柱建物実測図（1/60）



第86図　9号掘立柱建物実測図（1/60）

６号掘立柱建物（第83図、図版27）

調査区中央よりやや西に外れて確認された南北方向よりやや東よりに軸を取る２間×５間の大型建物である。１号竪穴状遺構に切られている。梁行方向の柱穴間の距離は約2.1m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.3mを測り、心々距離で南北長軸約9.7m、東西短軸約4.6mを測る。検出面での柱穴の掘方は約35～55㎝の円形を呈し、深さは深いもので約60㎝を測る。

７号掘立柱建物（第84図）

調査区中央より西側にて確認された東西方向に軸を取る２間×３間の建物である。２号溝を切っており、３号竪穴状遺構に切られている。梁行方向の柱穴間の距離は約2.3m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.5mを測り、心々距離で南北長軸約7.3m、東西短軸約5.0mを測る。検出面での柱穴の掘方は約35～80㎝の円形を呈し、深さは深いもので約65㎝を測る。

８号掘立柱建物（第85図、図版28）

調査区東側にて確認された南北方向よりやや東よりに軸を取る２間×４間の建物である。２号溝を切っており、３号建物と重複しているがその前後関係は不明である。梁行方向の柱穴間の距離は約1.6m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.1mを測り、心々距離で南北長軸約7.2m、東西短軸約4.2mを測る。検出面での柱穴の掘方は約20～60㎝の円形を呈し、深さは深いもので約50㎝を測る。

９号掘立柱建物（第86図）

調査区西側にて確認された南北方向より西に90度ほど触れた方向に軸を取る２間×３間の建物である。建物群からは大きく離れた位置にある。梁行方向の柱穴間の距離は約2.3m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.1mを測り、心々距離で南北長軸約7.0m、東西短軸約4.2mを測る。検出面での柱穴の掘方は約30～60㎝の円形を呈し、深さは深いもので約55㎝を測る。北西方向の桁行中心の柱穴が確認出来なかった。

10号掘立柱建物（第87図、図版28）

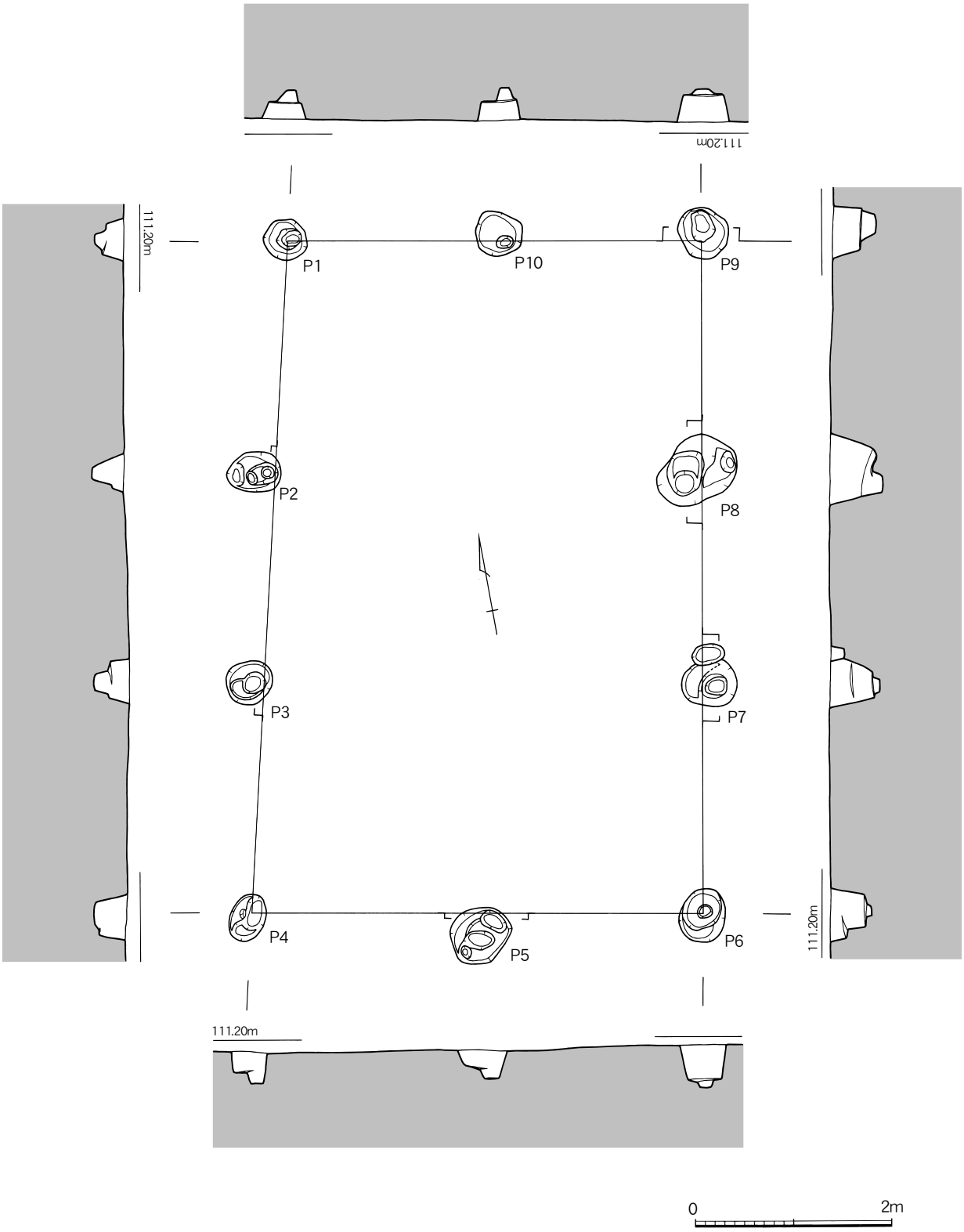
調査区中央にて確認された南北方向よりやや東よりに軸を取る２間×３間の建物である。５号建物と重複しているがその前後関係は不明である。梁行方向の柱穴間の距離は約2.3m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.1mを測り、心々距離で南北長軸約7.0m、東西短軸約4.4mを測る。検出面での柱穴の掘方は約40～60㎝の円形を呈し、深さは深いもので約55㎝を測る。

11号掘立柱建物（第88図、図版28）

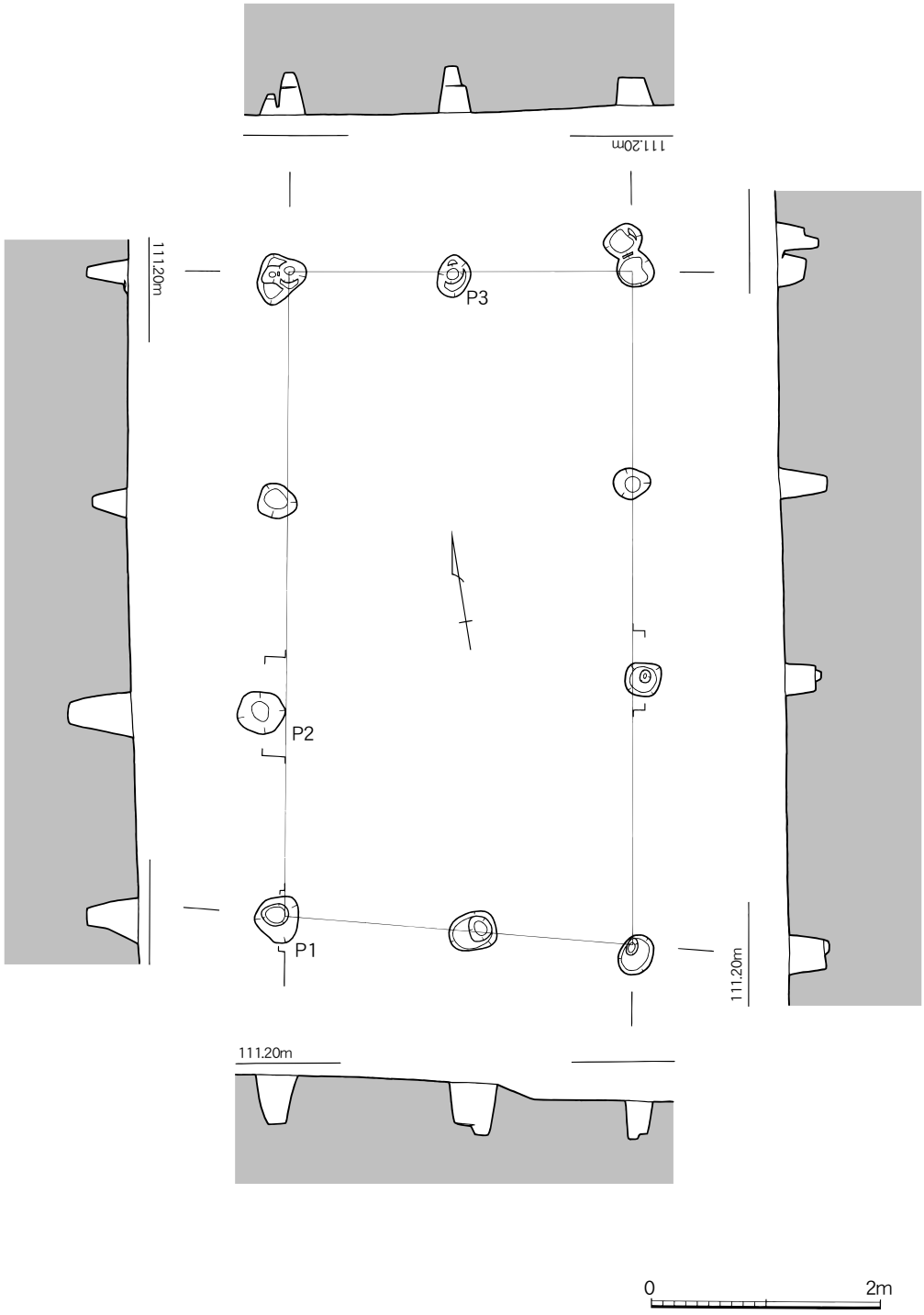
調査区中央にて確認された南北方向よりやや東よりに軸を取る２間×３間の小型の建物である。梁行方向の柱穴間の距離は約1.8m、桁行方向の柱穴間の距離は約1.5mを測り、心々距離で南北長軸約5.7m、東西短軸約3.0mを測る。検出面での柱穴の掘方は約30～50㎝の円形を呈し、深さは深いもので約50㎝を測る。

12号掘立柱建物（第89図、図版29）

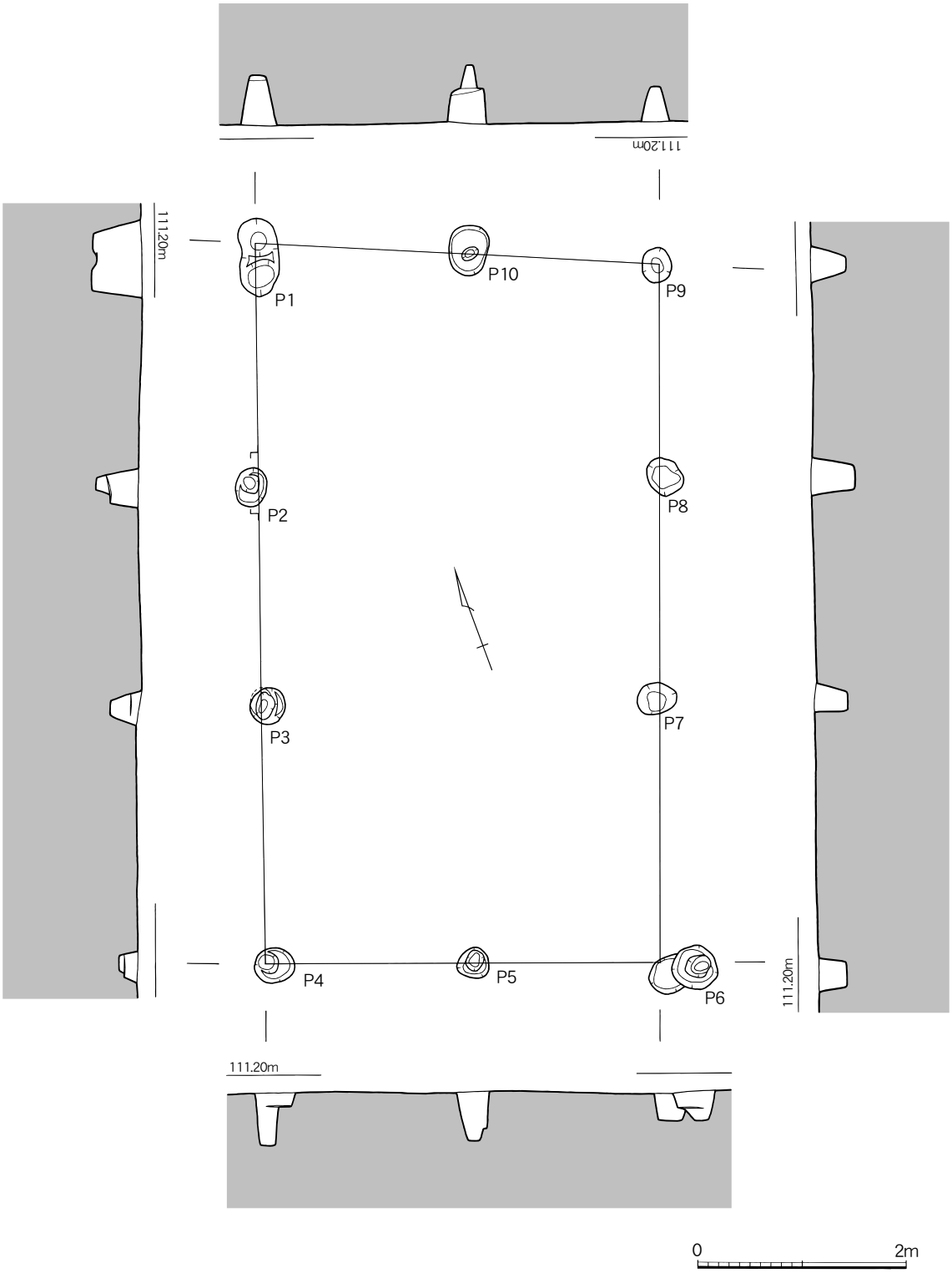
調査区東側にて確認された南北方向よりやや東よりに軸を取る２間×３間の建物である。10号建物P-１にP-６が切られている。梁行方向の柱穴間の距離は約2.2m、桁行方向の柱穴間の距離は約2.4mを測り、心々距離で南北長軸約6.8m、東西短軸約4.8mを測る。検出面での柱穴の掘方は約30～70㎝の円形を呈し、深さは深いもので約50㎝を測る。



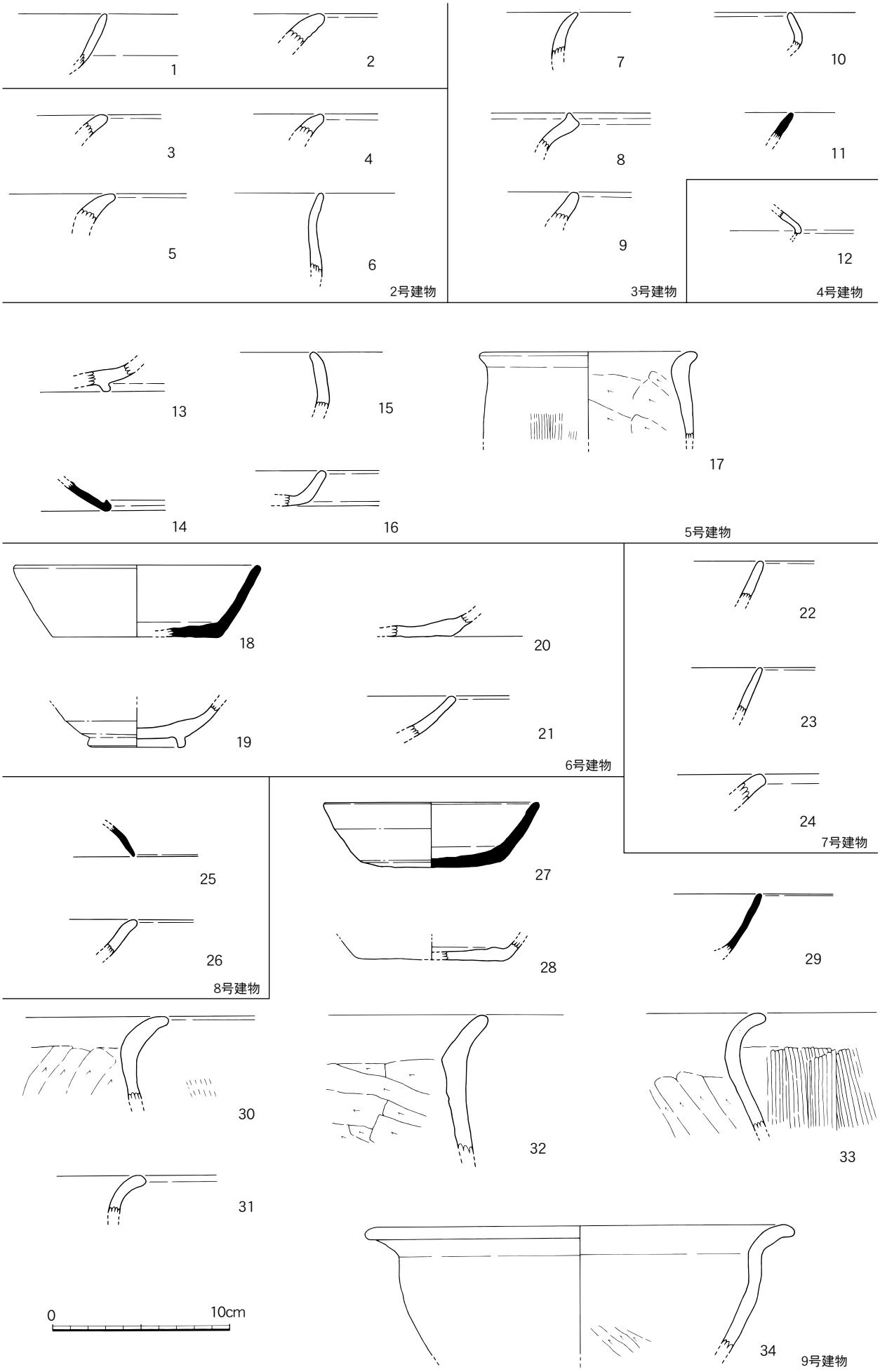
第87図　10号掘立柱建物実測図（1/60）



第88図　11号掘立柱建物実測図（1/60）



第89図　12号掘立柱建物実測図（1/60）

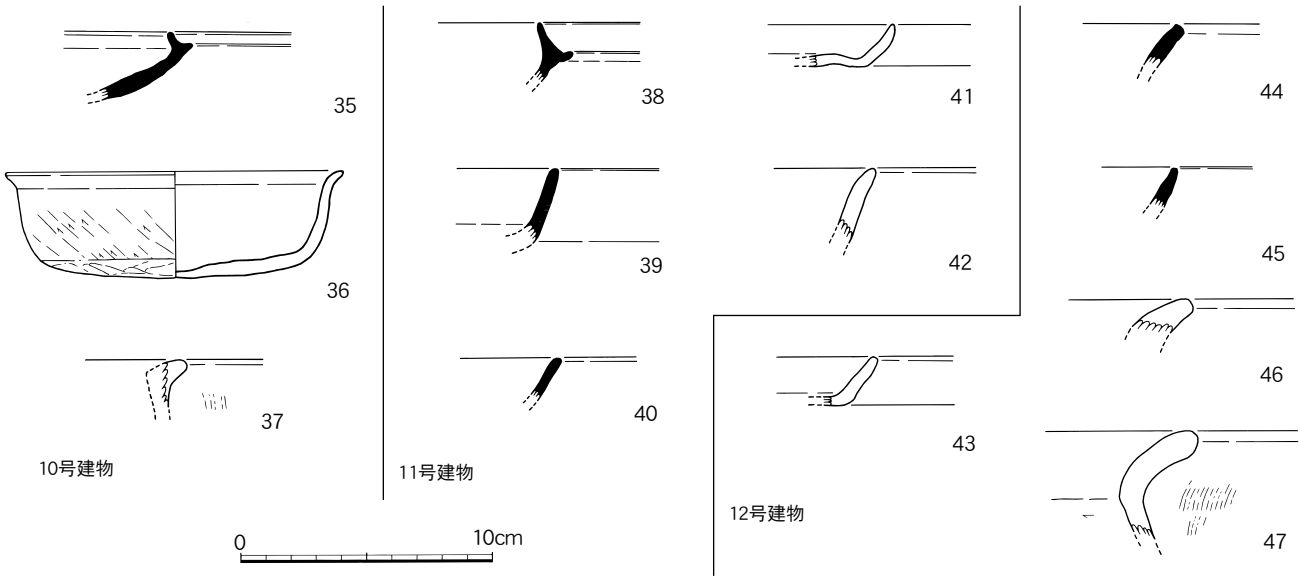


第90図　掘立柱建物群出土遺物実測図①（1/3）

掘立柱建物出土遺物（第90、91図、図版57）

建物より出土した遺物をまとめて報告する。１～２が１号建物、２～６が２号建物、７～11が３号建物、12が４号建物、13～17が５号建物、18～21が６号建物、22～24が７号建物、25、26が８号建物、27～34が９号建物、35～37が10号建物、38～42が11号建物、43～47が12号建物の柱穴より出土した。以下説明を加える。

１は１号P-11より出土した土師器高坏口縁部である。２は１号P-５より出土した土師器甕である。３は２号P-１より出土した土師器甕である。４、５はP-３より出土した土師器鉢か。７は３号P-８より出土した土師器甕である。８は３号P-５より出土した土師器甕である。口縁部をツマミ上げる。９は３号P-６より出土した土師器甕である。10は３号P-６より出土した土師器椀である。11は３号P-２より出土した須恵器坏である。12は４号P-３より出土した土師器坏蓋か。13は５号P-４より出土した土師器坏身である。14は５号P-７より出土した須恵器高坏脚部である。端部をやや上方にツマミ上げる。15は５号P-７より出土した土師器椀である。16は５号P-２より出土した土師器皿である。17は５号P-２より出土した土師器甕である。口縁部を小さく外反させる。18は６号P12より出土した土師器坏である。口縁部はやや外に開く。19は６号P-３より出土した土師器坏である。底部は緩やかに湾曲し、高台がつく。20は６号P-１より出土した土師器皿である。21は６号P-１より出土した土師器皿である。22は７号P-１より出土した土師器坏である。23は７号P-３より出土した土師器坏である。24は７号P-２より出土した土師器甕である。25は８号P-１より出土した須恵器坏蓋である。26は８号P-２より出土した土師器高坏である。27は９号P-７より出土した土師器坏である。口縁部はやや外に開く。28は９号P-３より出土した土師器坏である。29は９号P-３より出土した須恵器坏身である。30は９号P-４より出土した土師器甕である。口縁部が外湾する。31は９号P-９より出土した土師器甕である。32は９号P-４より出土した土師器甕である。33は９号P-９より出土した土師器甕である。胴部にかけてやや張り出し口縁部は外湾しながら外に開く。34は９号P-９より出土した土師器鉢である。口縁部は外反し、端部をやや垂れ下げる。35は10号P-３より出土した須恵器坏蓋である。あるいは坏身か。口縁部に逆刺をもち口縁部は内傾する。36は10号P-１より出土した土師器椀である。口縁部はやや垂直気味に立ち上がり、端部を外に外反させる。37は10号P-６より出土した土師器甕である。38は11号P-１より出土した



第91図　掘立柱建物群出土遺物実測図②（1/3）

須恵器坏身である。逆刺を持ち、口縁部はやや内傾しながら立ち上がる。39は11号P-１より出土した土師器椀である。40は11号P-２より出土した須恵器坏である。41は土師器皿である。口縁部は外に開く。42は11号P-２より出土した土師器甕の口縁部か。43は12号P-８より出土した土師器皿である。44は12号P-１より出土した須恵器壺か。45は12号P-８より出土した須恵器壺か。46は12号P-２より出土した土師器甕である。47は12号P-９より出土した土師器甕である。口縁部は頸部で屈曲し外反する。

３．溝（第92図）

溝状の遺構は多数検出されたが、部分的な落ち込みと判断されるものが見られ、その水流などが確認され、遺物の出土が見られたものに関して溝として報告する。特に調査区中央部を南北に縦断する、２、３号溝は平行して作られており、それを斜めに切るようにして１号溝が走る。また、２号溝よりやや西側にて東西方向に走る５号溝が検出された。これらの溝はその他の溝と比べて掘方がしっかりとしており、集落に伴う用水路あるいは区画溝の可能性がある。埋土も類似しており、ほぼ同時期の可能性が考えられる。さらに、１号溝より東側には住居跡、建物も確認出来ず、土坑、ピットに遺構は限られ、また、時期は不明であるが風倒木痕と考えられる落ち込みが多数検出されたことも注目される。４号は２と３号を結んでいるがやや埋土が明灰褐色粘土と新しく、水田耕作土に類似する。掘方も浅く畦畔の残骸などと考えられる。６～10、および11号溝は流路か。砂性の埋土が多く、この一帯の氾濫の痕跡を示している。溝として報告する。

１号溝（第93図、図版29、31）

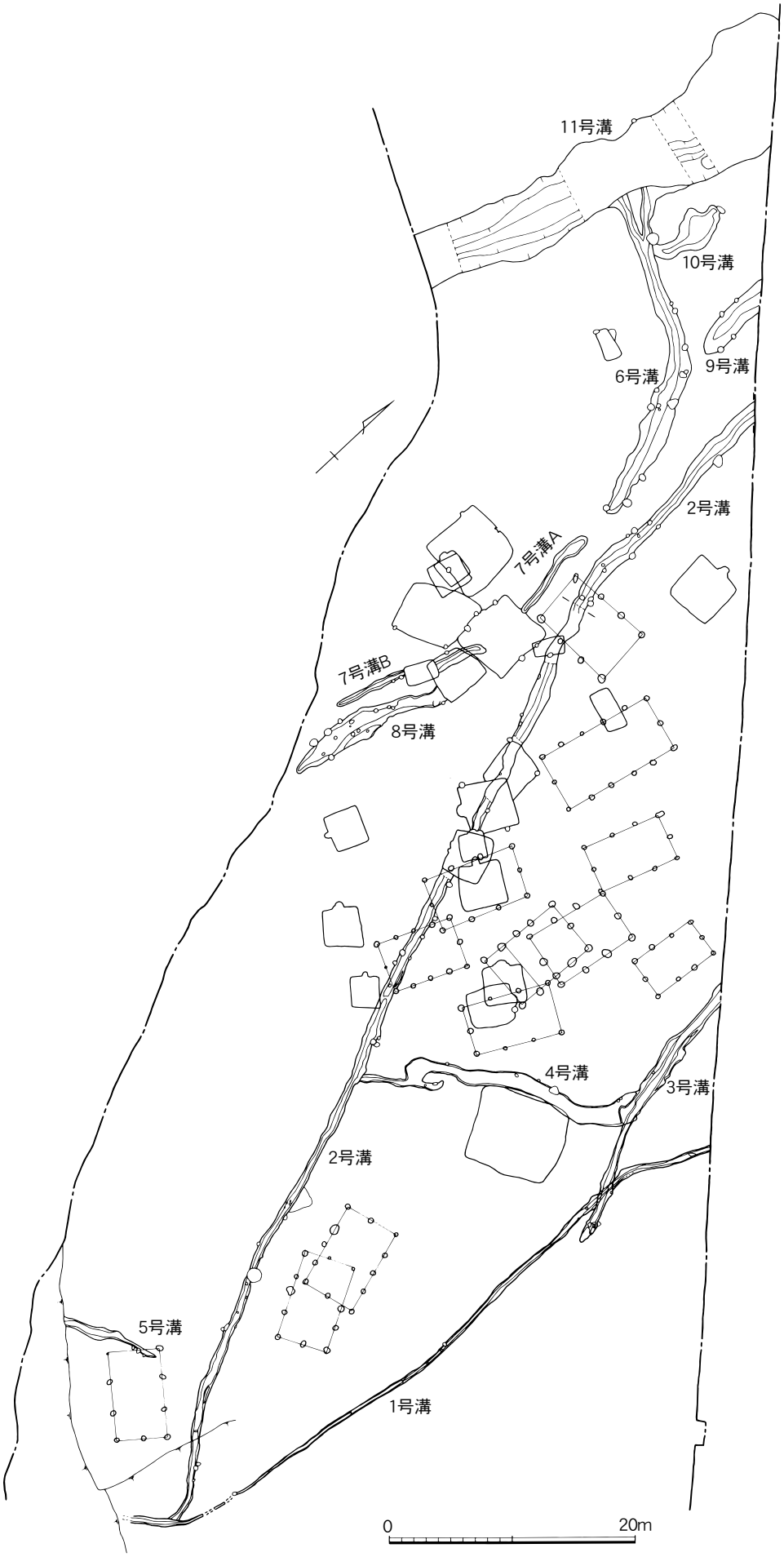
調査区を北から南へと流れる溝である。南側は削平を受けており、浅くなっている。調査区北からやや蛇行しながら南へと流れ、３号溝に切られ、10号土坑を切り、調査区南側では２号溝を切りながら大きく南西側へと曲がる。調査区内での長さ約56m、検出面での幅は大きなところで80㎝、北側での深さは約70㎝、南側では20㎝を測る。断面形は逆台形状を呈し、北側の埋土は暗褐色砂質土、南側では暗黄褐色土を呈する。砂性の埋土が多くみられるものの、水流を示す砂の堆積や鉄分の沈殿などは確認出来なかったことから、長期間の水流があったとは考えにくい。砂性埋土が水の流れを示すものの、粘性も低く、仮に水が流れていたとしても流れは速かったものと思われる。

出土遺物（第94図、図版57）

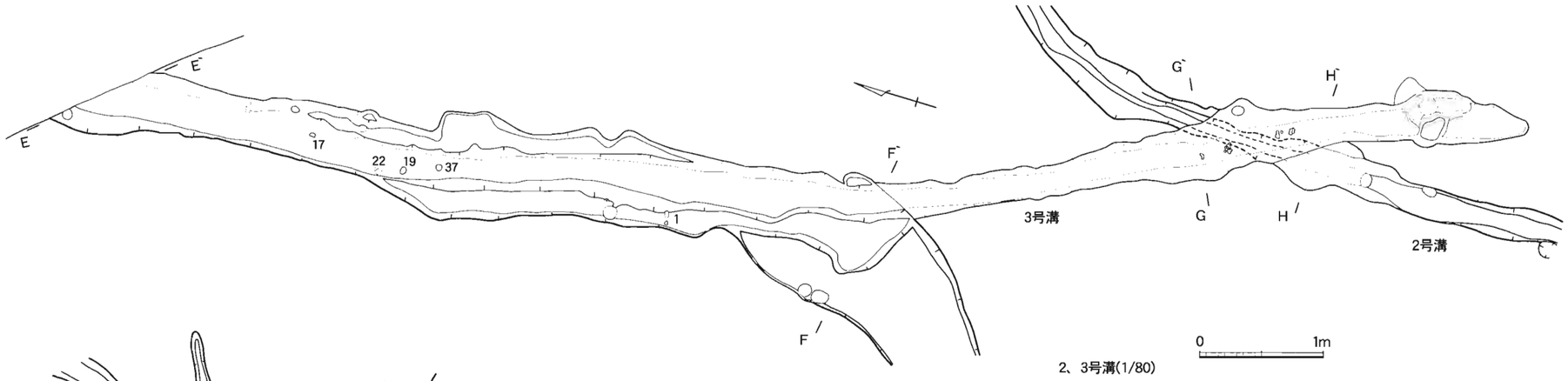
１は縄文土器の深鉢である。船元式土器の口縁部と考えられる。流れ込みと考えられる。２は土師器甕の口縁部片である。内面にはケズリが施される。

２号溝（第93図、図版29、31）

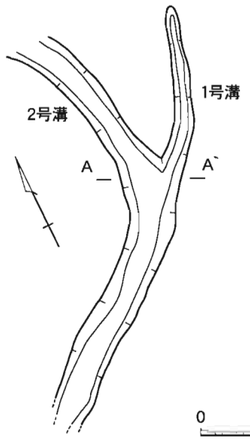
調査区を北から南へと流れる溝である。南側は削平を受けており、やや浅くなっている。調査区北からやや蛇行しながら１、８、９、10、11、12、13号竪穴住居跡、２、３、７号掘立柱建物、５号土坑に切られ、南側では１号溝に切られる。ただ、この１号溝とは埋土がやや異なるものの、合流する形で蛇行していることからほぼ同時期の使用の可能性が考えられる。調査区内での長さ約101m、検出面での幅は大きなところで1.4m、北側での深さは約80㎝、南側では20㎝を測る。断面形はU字形を呈し、北側の埋土は暗灰褐色砂質土、南側では暗褐色土を呈する。砂性の埋土が多くみられるものの、水流を示す砂の堆積や鉄分の沈殿などは確認出来なかったことから、長期間の水流があったとは考えにくい。砂性埋土が水の流れを示すものの、粘性も低く、仮に水が流れてい



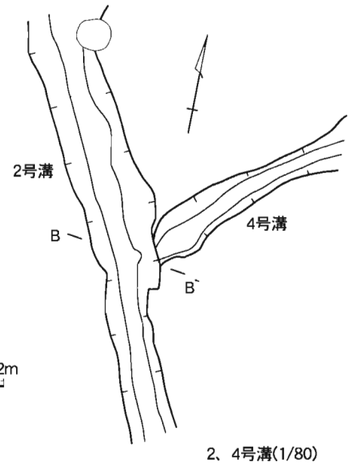
第92図　溝配置図（1/500）



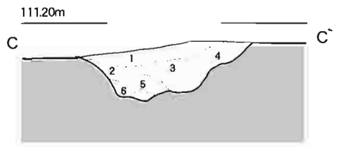
2、3号溝(1/80)



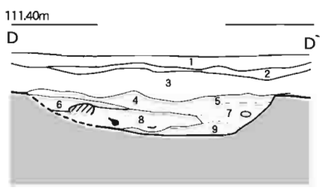
1、2号溝(1/80)



2、4号溝(1/80)



1. 淡灰褐色砂質土
2. 暗灰褐色砂質土
3. 暗褐色砂質土
4. 暗黄褐色砂質土
5. 暗灰色砂質土
6. 暗黄褐色砂質土，やや粘土

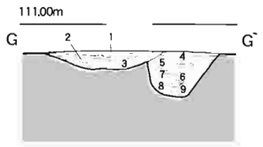


1. 灰色粘土質
2. 明黄橙色粘質土
3. 暗黄橙色粘質土，カーボン粒子混
4. 暗灰黄褐色粘質土，カーボン粒子混
5. 暗黄褐色粘質土，カーボン粒子混
6. 暗黄褐色粘質土，カーボン粒子少量混
7. 暗灰褐色砂質土
8. 淡灰褐色砂質土，カーボン粒子少量含む
9. 暗灰褐色砂質土
10. 暗灰褐色砂質土
11. 淡灰褐色砂質土
12. 暗灰黄褐色砂質土
13. 暗灰黄褐色砂質土，やや粘質土，カーボン粒子少量含む
14. 黄褐色砂質土，褐色ブロック混じる
15. 黄褐色砂質土，まれにカーボン粒子含む

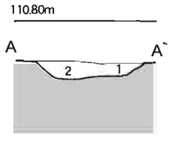
} 水田基盤層

} 地山

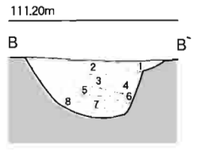
0 1m



1. 淡暗黄褐色土（基盤層の残り）
2. 暗褐色砂質土層
3. 暗褐色砂質土層，黄褐色ブロック，カーボン混
4. 黄褐色砂質土層，暗褐色ブロック，多く含む
5. 暗褐色砂質土層，黄褐色ブロック，含む
6. 暗褐色砂質土層，カーボン少量混
7. 黄褐色砂質土層，暗褐色ブロック混
8. 暗褐色砂質土層，黄褐色小ブロック混
9. 淡暗褐色砂質土層，黄褐色小ブロック混



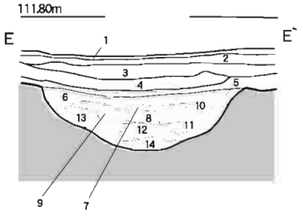
1. 暗黄褐色土　黒色カーボン、暗褐色ブロック混
2. 暗褐色土　黒色カーボン、黄褐色ブロック混



1. 淡暗灰褐色，褐色カーボン混
2. 淡暗灰褐色，褐色カーボン多く混
3. 暗灰褐色，褐色カーボン多く混
4. 淡褐色砂質土
5. 淡褐色粘質土
6. 淡暗褐色粘質土
7. 暗灰褐色粘質土
8. 暗灰褐色粘質土，黄褐色砂質土（地山）ブロック混
9. 黄褐色砂質土（地山）

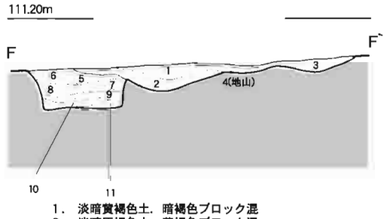
} ほぼ同一土層かも

0 1m

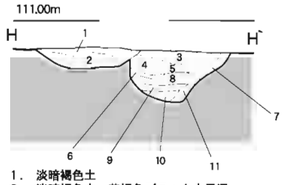


1. 黄橙色土，灰褐色粘土混
2. 黄橙色土，灰褐色粘土混，小ブロック混
3. 淡暗灰褐色土，黒色カーボン，黄橙色ブロック混
4. 灰褐色土，黄褐色小ブロック混，大きめの砂粒混
5. 淡灰褐色土，黄褐色ブロック混
6. 暗灰褐色土，黄褐色ブロック
7. 暗灰褐色土，黒色カーボン，黄褐色土小ブロック混
8. 淡灰褐色土，黒色カーボン，多く混
9. 暗灰褐色土，黄褐色土大ブロック混

} 水田盤土



1. 淡暗黄褐色土，暗褐色ブロック混
2. 淡暗灰褐色土，黄褐色ブロック混
3. 淡暗灰褐色砂質土，黄褐色ブロック混
4. 黄褐色石灰質砂質土（地山）
5. 淡暗褐色土，黄褐色土ブロック混
6. 暗褐色土，黄褐色土ブロック混
7. 暗褐色土，黄褐色土ブロック混
8. 暗褐色土，黄褐色土小ブロック少量混
9. 淡暗灰褐色土，黄褐色土ブロック混
10. 暗灰褐色土
11. 暗褐色土，黄褐色ブロック混



1. 淡暗褐色土
2. 淡暗褐色土，黄褐色ブロック少量混
3. 暗褐色土砂質土
4. 暗褐色土砂質土，黄褐色ブロック混
5. 淡暗褐色砂質土
6. 暗褐色土層
7. 淡暗褐色砂質土層，黄褐色ブロック混
8. 暗褐色砂質土層，黄褐色ブロック含む
9. 暗褐色砂質土層，黄褐色小ブロック混
10. 黄褐色砂質土層，暗黄褐色ブロック混
11. 淡暗褐色砂質土層，黄褐色ブロック混

0 1m

第93図　1、2、3号溝実測図（1/40、1/80）※土層は1/40

たとしても流れは速かったものと思われる。遺物の出土は非常に少なかった。

出土遺物（第95図、図版57）

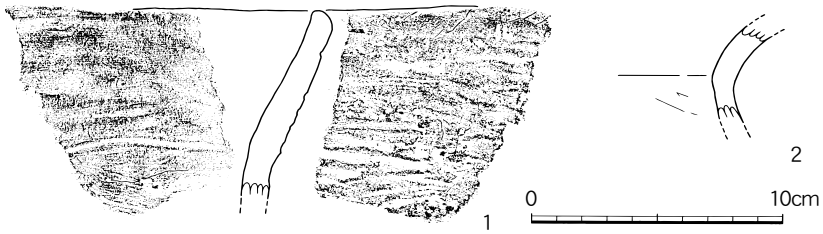
１は土師器甕である。外面にハケ目を施す。２は土師器甕である。口縁部は外に開く。

３号溝（第93図、図版30、31）

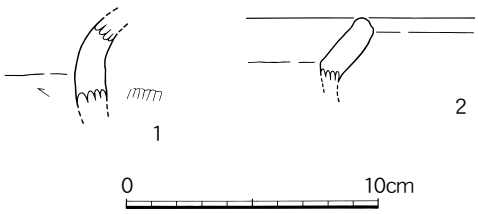
調査区を北から南へと流れる溝で、１号溝との交差部分より先で水流が止まっている。調査区北からやや蛇行しながら南へと流れ１号溝を切っている。ただ、この１号溝とは深さがやや異なるものの、埋土も類似し、合流する形で交差していることから同時期の使用の可能性が考えられる。調査区内での長さ約23m、検出面での幅は大きなところで1.5m、北側での深さは約60㎝、南側では30㎝を測る。断面形は浅いＵ字形を呈し、北側の埋土は暗灰褐色砂質土、南側では暗褐色土を呈する。砂性の埋土が多くみられるものの、水流を示す砂の堆積や鉄分の沈殿などは確認出来なかったことから、長期間の水流があったとは考えにくい。砂性埋土が水の流れを示すものの、粘性も低く、仮に水が流れていたとしても流れは速かったものと思われる。遺物は大量に出土し、とくに底の部分に完形に近い土器が廃棄され、高坏の出土も多くみられたことから、祭祀行為の可能性も考えられる。

出土遺物（第96、97図、図版57、58）

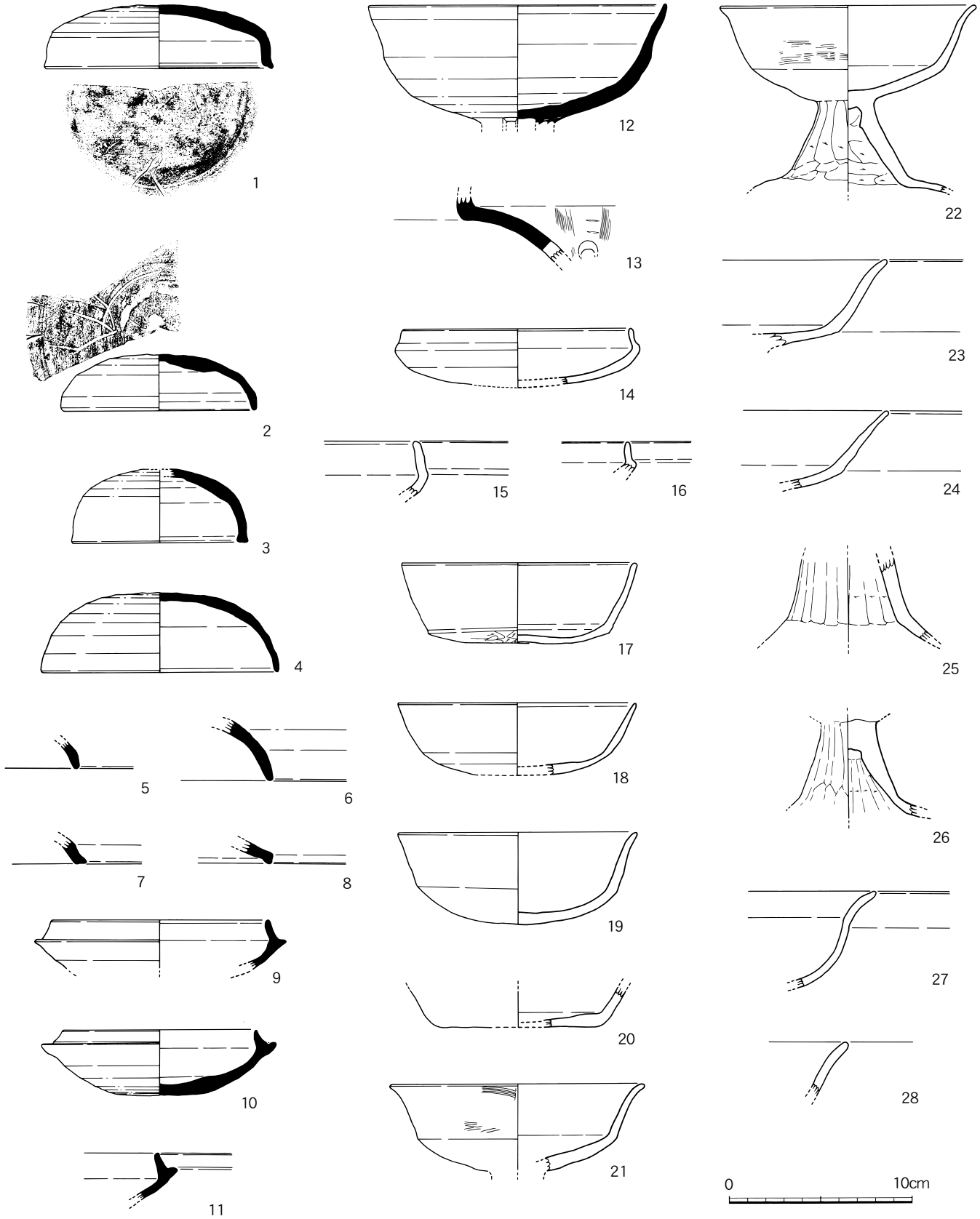
底の部分から出土したのは１、17、19、21、22、29、37である。ある程度間隔を置いて遺物が出土している。１～８は須恵器坏蓋である。１は口縁部を体部より下方に屈曲させ、端部内側に稜を持つ。内面にはヘラ記号が施される。２は須恵器坏身で体部が緩やかに屈曲する。外面にはヘラ記号が施される。３、５、６は口縁部が緩やかに下がり、４、７は端部を平坦に仕上げる。８は須恵器坏蓋で端部をやや下方にツマミ下げる。上面よりの柱穴の掘り込みを検出できず、一緒に掘り下げたことから、取り上げの際に混入した遺物と考えられる。９～11は須恵器坏身である。逆刺をもち口縁部はやや内傾する。12は須恵器高坏である。口縁部は緩やかに立ち上がり脚部には透しが施される。13は須恵器瓲である。胴部に穿孔がみられる。14～16は土師器坏身で、口縁部下部を屈曲させて段を形成し、口縁部は内傾する。17～20は土師器坏である。底部はやや丸みを帯び口縁部は外に開く。20は底部が平坦に調整されていることから、あるいは古代のものか。８と同様の混入の可能性がある。21～26は土師器高坏である。口縁部下部は明瞭に屈曲し、口縁部は緩やかに外湾しながら外に開く。底部は明瞭に屈曲して外にひらく。27、28は土師器鉢か。口縁部下部で屈曲し外に開く。29～34は土師器甕である。頸部は明瞭に屈曲し外に開く。31はやや頸部を肥厚させ、34は口縁部がやや上方に立ち上がる。35は土師器把手である。36、37は土師器小甕である。口縁部は小さく外に開き、胴部を若干張り出させる。底部は丸底を呈する。38は土師器甑である。



第94図　１号溝出土遺物実測図（1/3）



第95図　２号溝出土遺物実測図（1/3）



第96図　3号溝出土遺物実測図①（1/3）

４号溝（第92図）

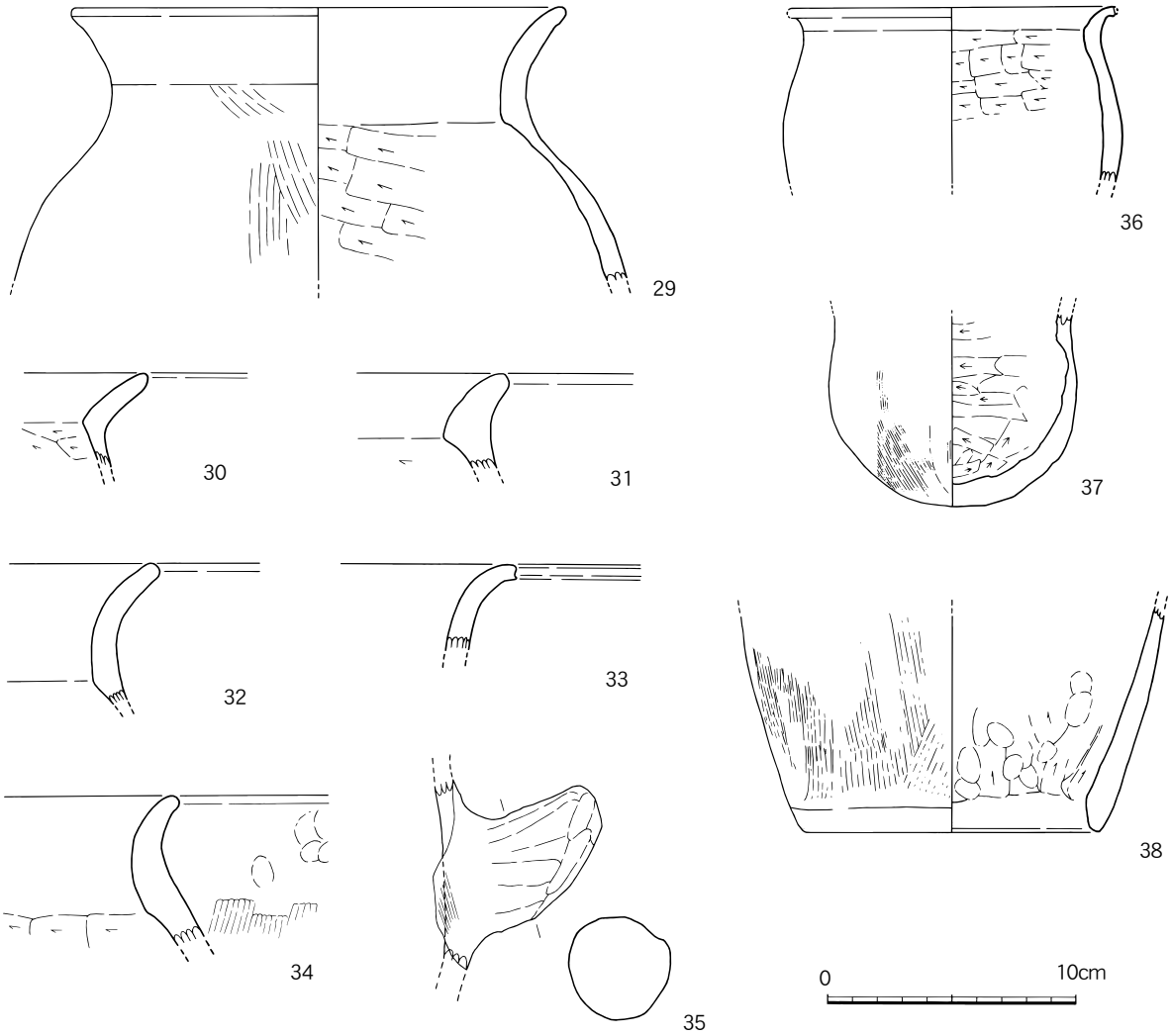
調査区中央付近で検出され、２、３号溝に直行する溝で、両者を切り、４号竪穴住居跡を切っている。調査区内での長さ約22m、検出面での幅は大きなところで約1.7m、深さは約15㎝を測る。プランも不整形であり、暗灰褐色にブロックが多く含まれたことから、近代のものと考えられる。遺物の出土は見られなかった。

５号溝（第98図、図版32）

調査区南側にて検出された溝で、２号溝から４mほど離れ、直行する東西方向に流れる。９号掘立柱建物と重複しているが、その前後関係は不明である。東側ほど浅く、西側になると深くなる。調査区内での長さ約8.1m、検出面での幅は大きなところで約1.1m、深さは約15㎝を測る。埋土は暗褐色土を呈しており、その方向などから１、２、３号溝と同時期の可能性も考えられる。遺物の出土は見られなかった。

６号溝（第98図、図版32）

調査区北西側にて検出された溝である。大きく蛇行しながら西側に流れ、10号溝を切り、11号溝に切られる。その先には溝は流れておらず、おそらく11号溝に流れ込むものと考えられる。調査区内での長さ約26.5m、検出面での幅は大きなところで約2.5m、深さは約25㎝を測る。断面形

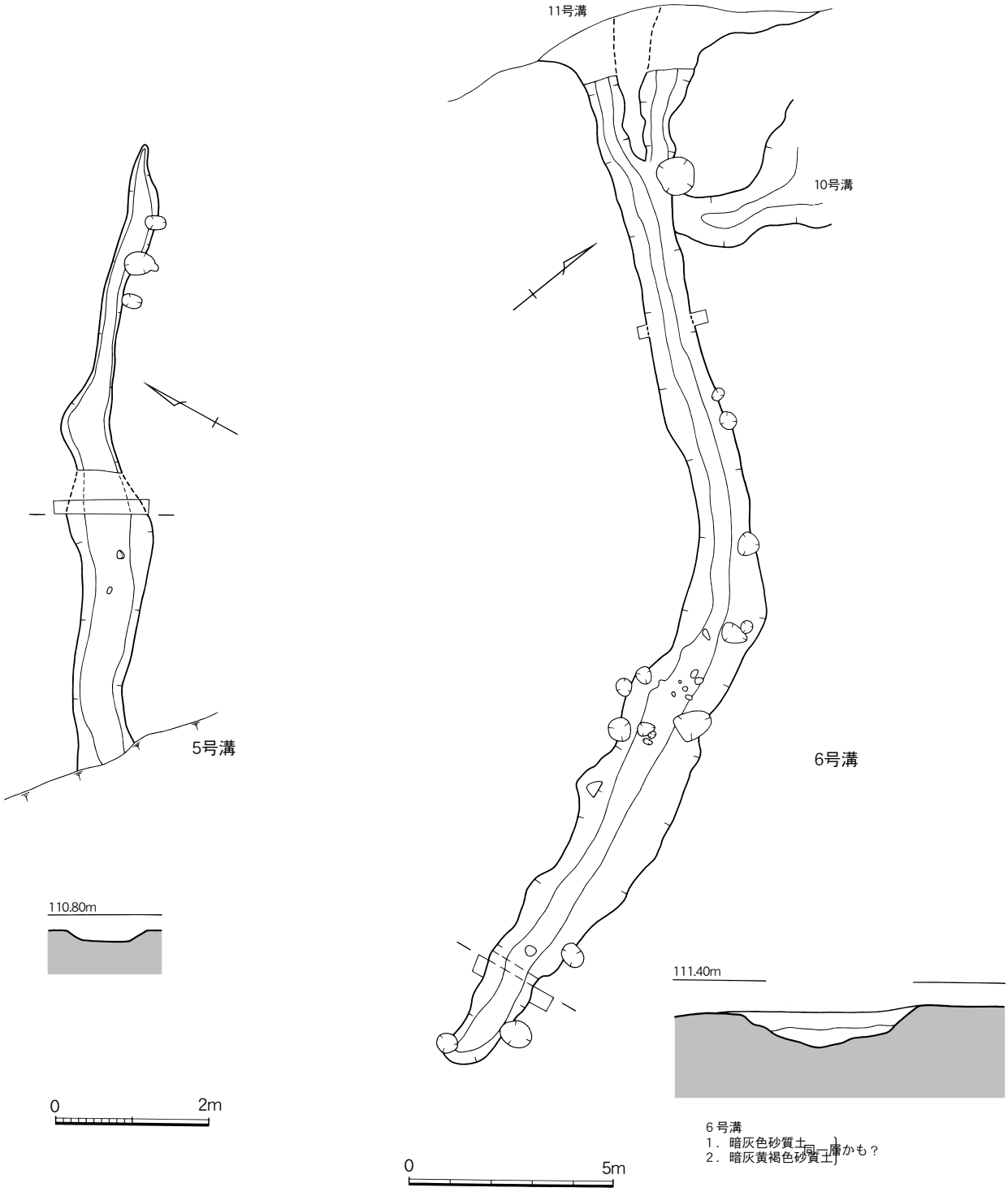


第97図　３号溝出土遺物実測図②（1/3）

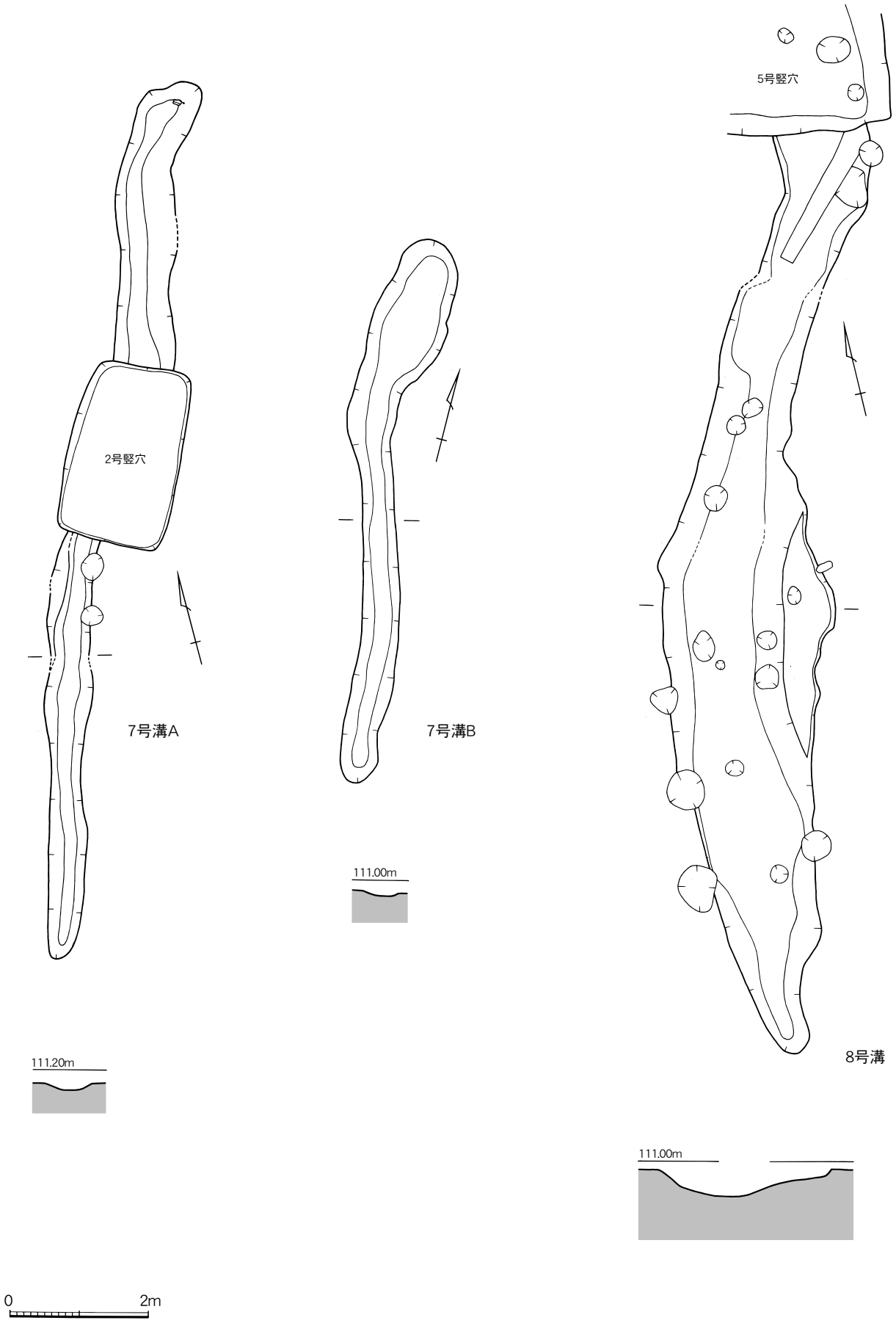
は浅いU字形を呈し、埋土はしまりの薄い砂質土であることから流路と思われる。遺物の出土は見られなかった。

７号溝（第99図）

調査区中央にて検出された溝で、南北方向に流れる。２号竪穴に切られ、24号竪穴住居跡、５号竪穴を切っている。24号住居付近で一旦途切れ、５号竪穴付近で流れ出す。調査区内での長さは、途切れを含めて2.4m、幅約90㎝、深さは約５㎝を測る。埋土は灰色砂質土であり、流路と考えられる。遺物の出土は見られなかった。



第98図　５、６号溝実測図（1/40、1/80、1/150）※５号は1/80、６号は1/150



第99図　7、8号溝実測図（1/80）

８号溝（第99図、図版33）

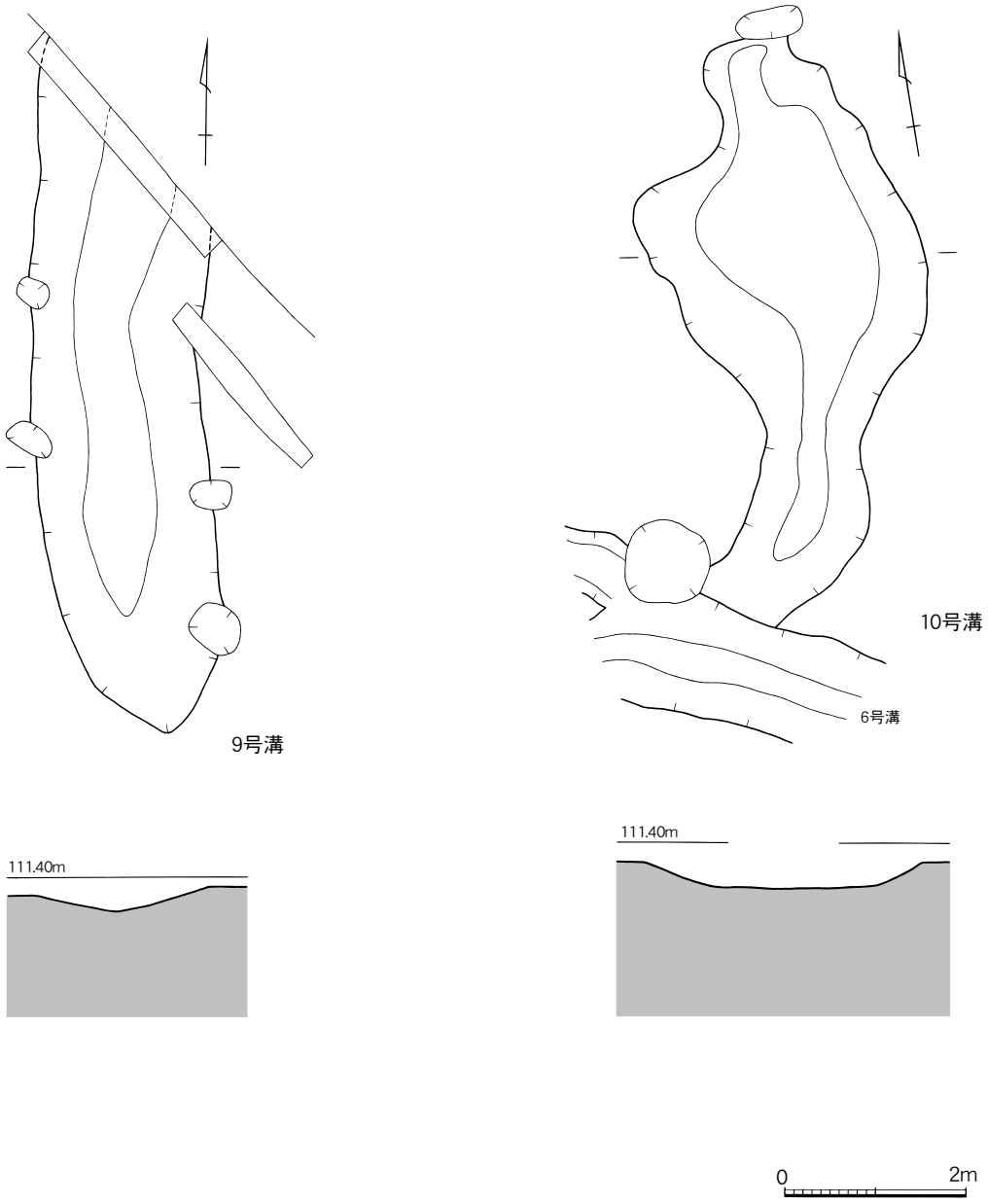
調査区中央にて検出された溝で、７号溝と平行して南北に流れる。５号竪穴に切られており、北側は先には続いていない。調査区内での長さ約13.4m、検出面での幅は大きなところで約2.5m、深さは約35㎝を測る。埋土は灰色砂質土であり、流路と考えられる。

出土遺物（第102図）

１は土師器甕の口縁部である。頸部に明瞭に屈曲部を持ち、口縁部は外反する。

９号溝（第100図、図版33）

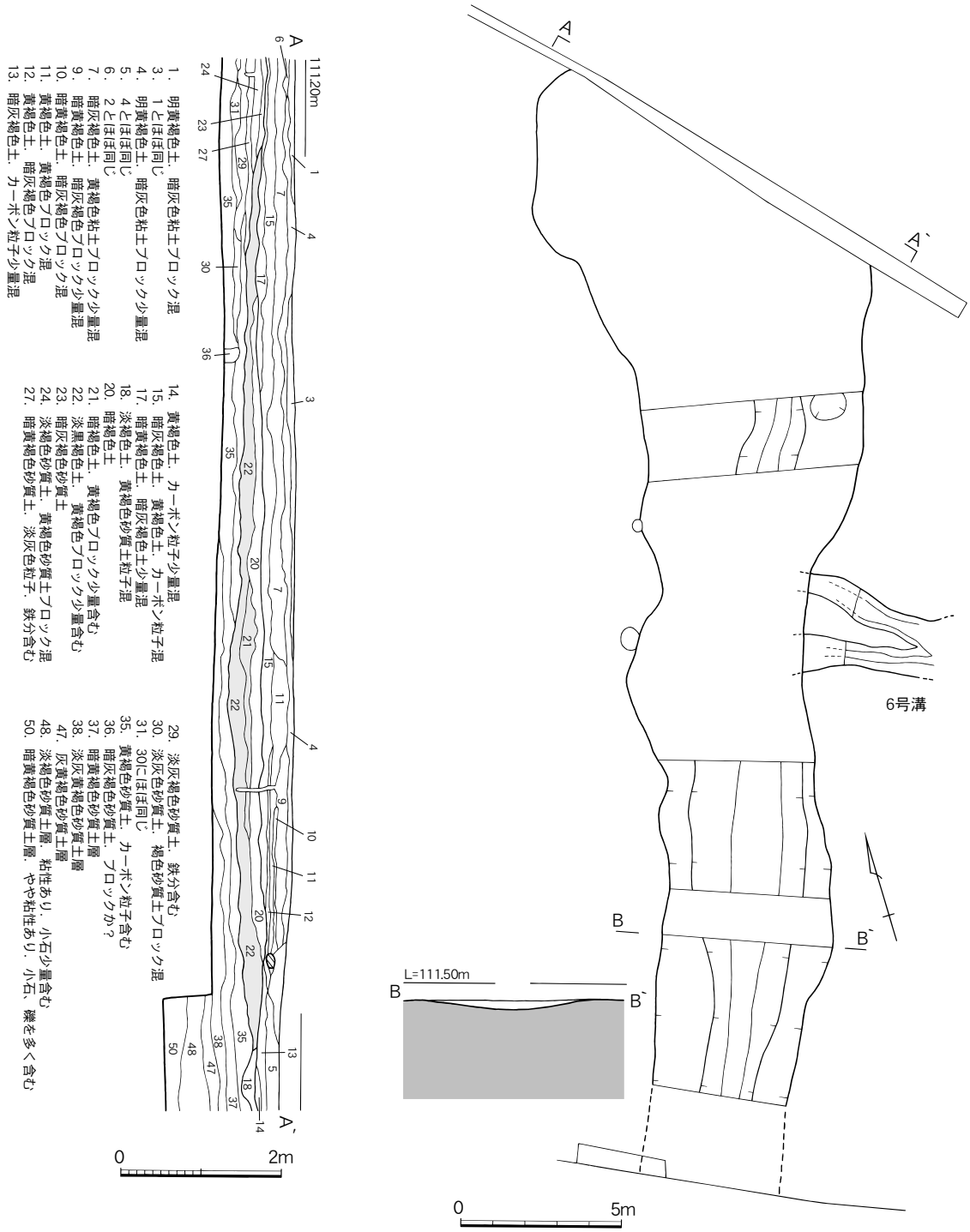
調査区北西側にて検出された溝である。６号溝より１mほど離れて南北方向に流れる。調査区内での長さ約6.6m、検出面での幅は大きなところで約２m、深さは約20㎝を測る。断面形は浅いU字形を呈し、埋土はしまりの薄い砂質土であることから流路と思われる。遺物の出土はなかった。



第100図　９、10号溝実測図（1/80）

10号溝（第100図）

調査区北西側にて検出された溝である。6号溝に切られ、南北方向に流れる。調査区内での長さ約6.3m、検出面での幅は大きなところで約3.3m、深さは約30㎝を測る。断面形は浅い逆台形状を呈し、埋土はしまりの薄い砂質土であることから流路と思われる。



第101図　11号溝実測図（1/40、1/200）

出土遺物（第102図、図版59）

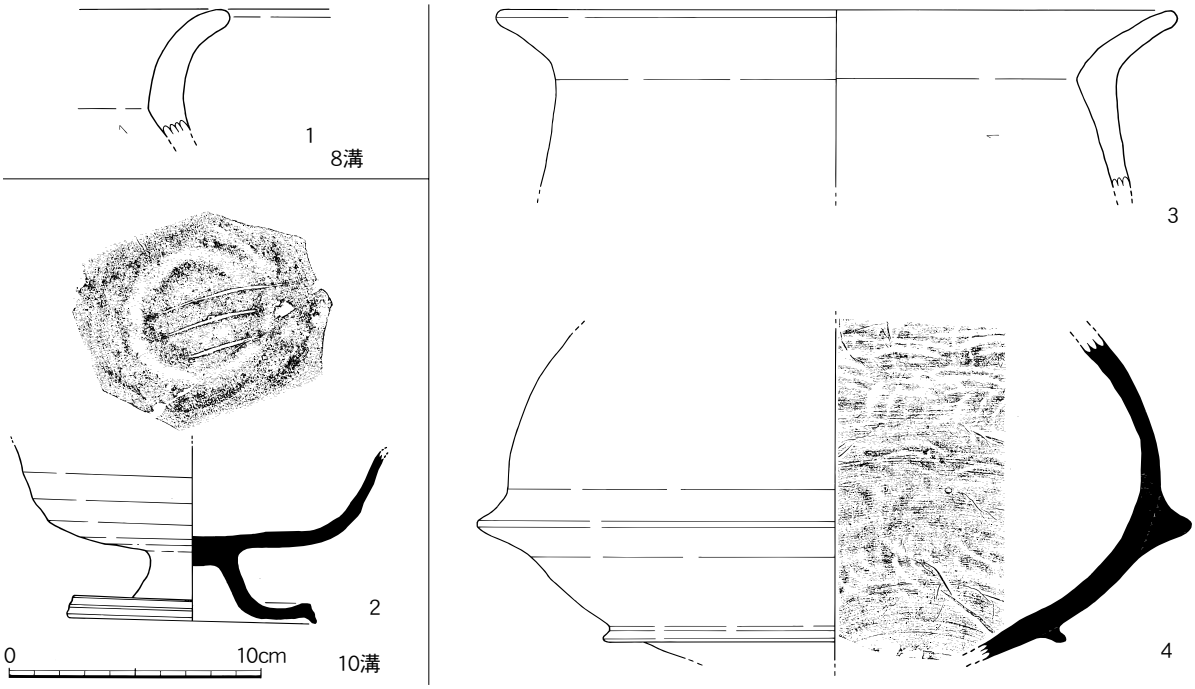
２は須恵器高坏である。口縁部は体部でやや外に開きながら立ち上がる。脚部は短く、大きく外に開き、口縁端部を下方に折れ曲げる。坏部内面にはヘラ記号が施される。やや浮いた状態で出土したことから流れ込みの可能性が考えられる。

11号溝（第101図、図版33）

調査区北西側にて検出された溝である。調査時には大流路と仮称していた。調査区を南北に流れる大きな溝で、６号溝を切っている。この一帯からが盛り土保存されるとのことから、確認調査に留め、溝をトレンチ状に掘り下げ、掘方を確認した。なお、６号溝との切り合いは検出面にて確認した。調査区内での長さ約32m、検出面での幅は大きなところで約12m、深さは約40㎝を測る。断面形は幅の広いU字形を呈し、埋土は暗褐色土である。全体形状から考えられる浅さから流路と考えられる。この11号溝一帯から西側では砂質層が何枚にも渡って堆積し、それらの層から流れ込みの遺物の出土などがみられることから、大肥川が氾濫を繰り返していた証と考えられる。

出土遺物（第102図、図版59）

３は須恵器の壺である。胴部に中位に断面三角形状の凸帯、下位に断面逆台形状の突帯が巡る。内面には青海波状のタタキが残る。４は土師器甕で、頸部は明瞭に屈曲し、口縁部は外に開く。



第102図　８、10、11号溝出土遺物実測図（1/3）

４．竪穴状遺構

住居跡群の近辺より方形を呈する竪穴の遺構が検出された。ここでは竪穴状遺構として報告する。全部で７基確認されているが、そのうち１～４号は長方形状のプランを呈しており、その規格性が窺える。また、７号竪穴は頭初小型住居跡として仮称していたが、ここでは７号竪穴状遺構とする。

特に１～４号はその軸が南北方向と東西方向と建物群の軸と一致しており、１号からは瓦、４号からは瓦塔の破片と思われる遺物が出土している点で非常に注目される。

１号竪穴状遺構（第103図、図版34）

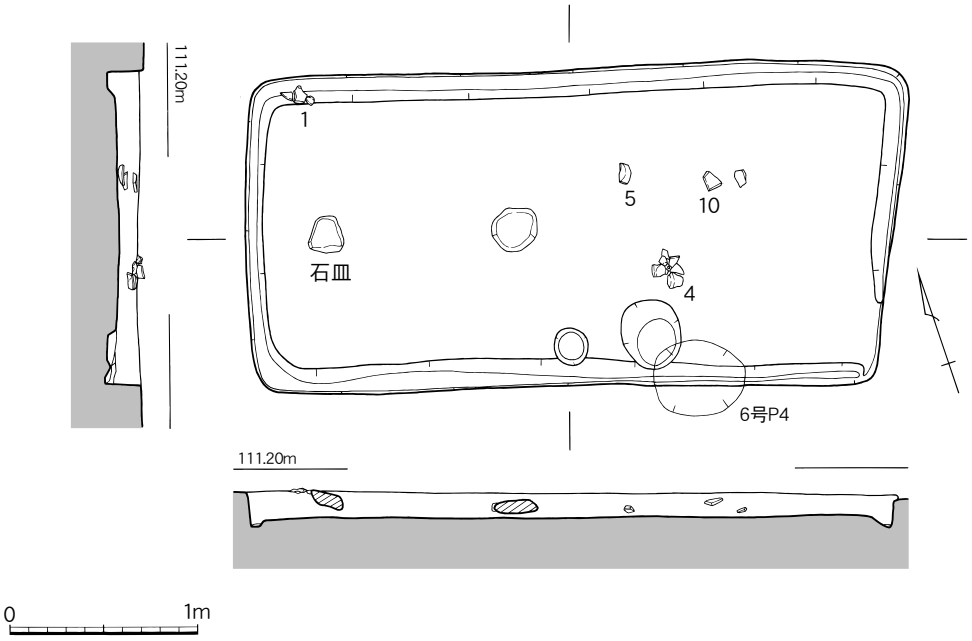
調査区中央より北側にて検出され、6 号建物を切っている。確認面での規模は東西長軸で約3.5m、南北短軸で1.7m、床面までの深さ約15㎝を測る長方形プランを呈している。壁面の立ち上がりも垂直で床面も平坦に仕上げられている。壁面には深さ約７㎝ほどの周溝がほぼ全周している。床面には遺物の散乱が確認され、埋土は暗褐色土であった。

出土遺物（第104図、図版59）

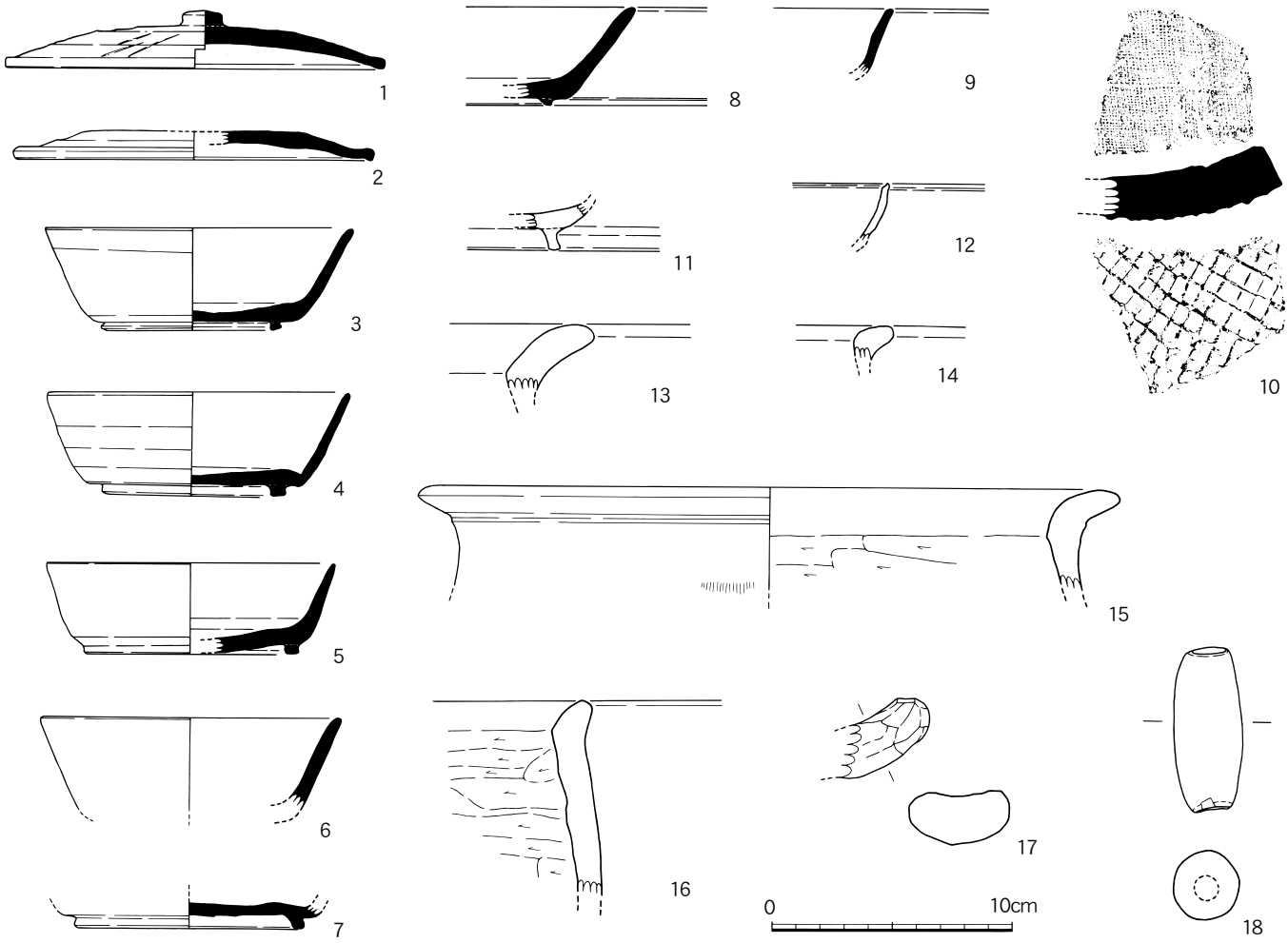
１、２は須恵器坏蓋である。口縁部は三角形状を呈している。２はやや下方にツマミ下げる。３～６は須恵器坏蓋である。４～６は口縁部があまり開かず、3、8 は外に開く。底部は明瞭に屈曲し、高台を持つ。９は須恵器皿である。口縁部は外に開く。10は平瓦である。外面には格子目タタキ、内面には布痕が残存する。11は土師器坏身である。高台はやや長く、外に開く。12は土師器坏の口縁部か、端部を平坦に仕上げ、やや窪ませる。13～16は土師器甕である。13、15は口縁部を外反させる。14、16は口縁部を小さく外に張り出す。17は土師器把手である。やや平坦なつくりである。18は土錘である。

２号竪穴状遺構（第105図、図版34）

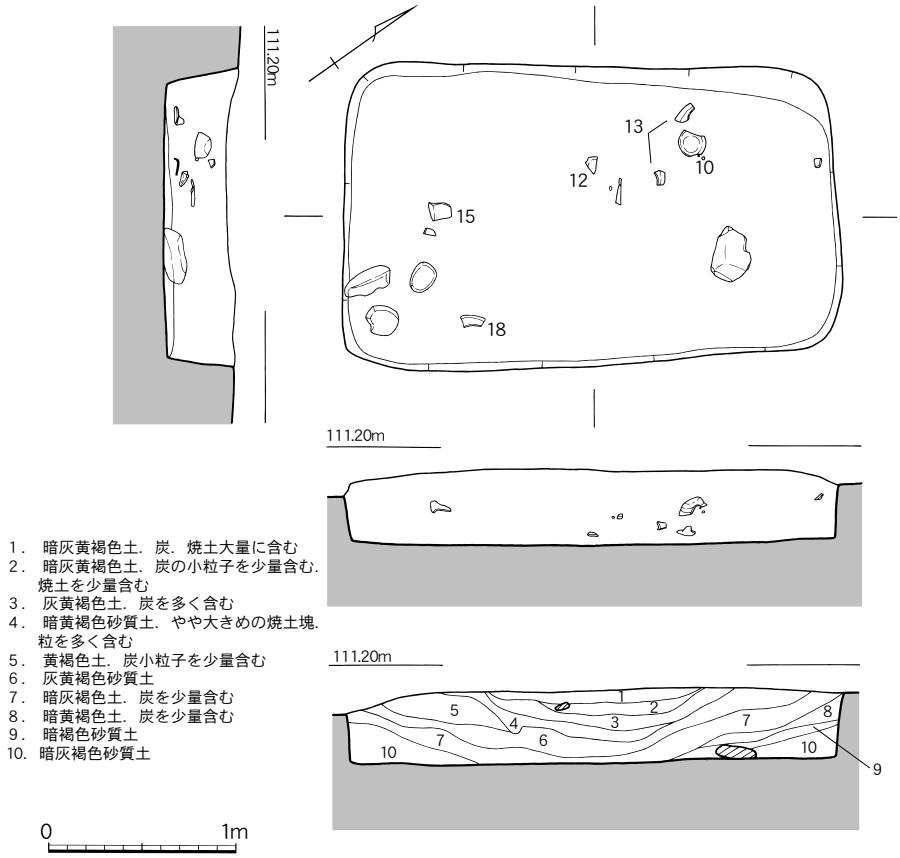
調査区中央より西側にて検出され、７号溝、５号竪穴を切っている。確認面での規模は東西長軸で約2.6m、南北短軸で1.6m、床面までの深さ約40㎝を測る長方形プランを呈している。壁面の立ち上がりも垂直で床面も平坦に仕上げられている。床面には遺物の散乱が確認された。埋土は暗褐色土で、レンズ状堆積を示しており、自然廃棄により堆積した状況を示している。



第103図　１号竪穴遺構実測図（1/40）



第104図　１号竪穴遺構出土遺物実測図（1/3）

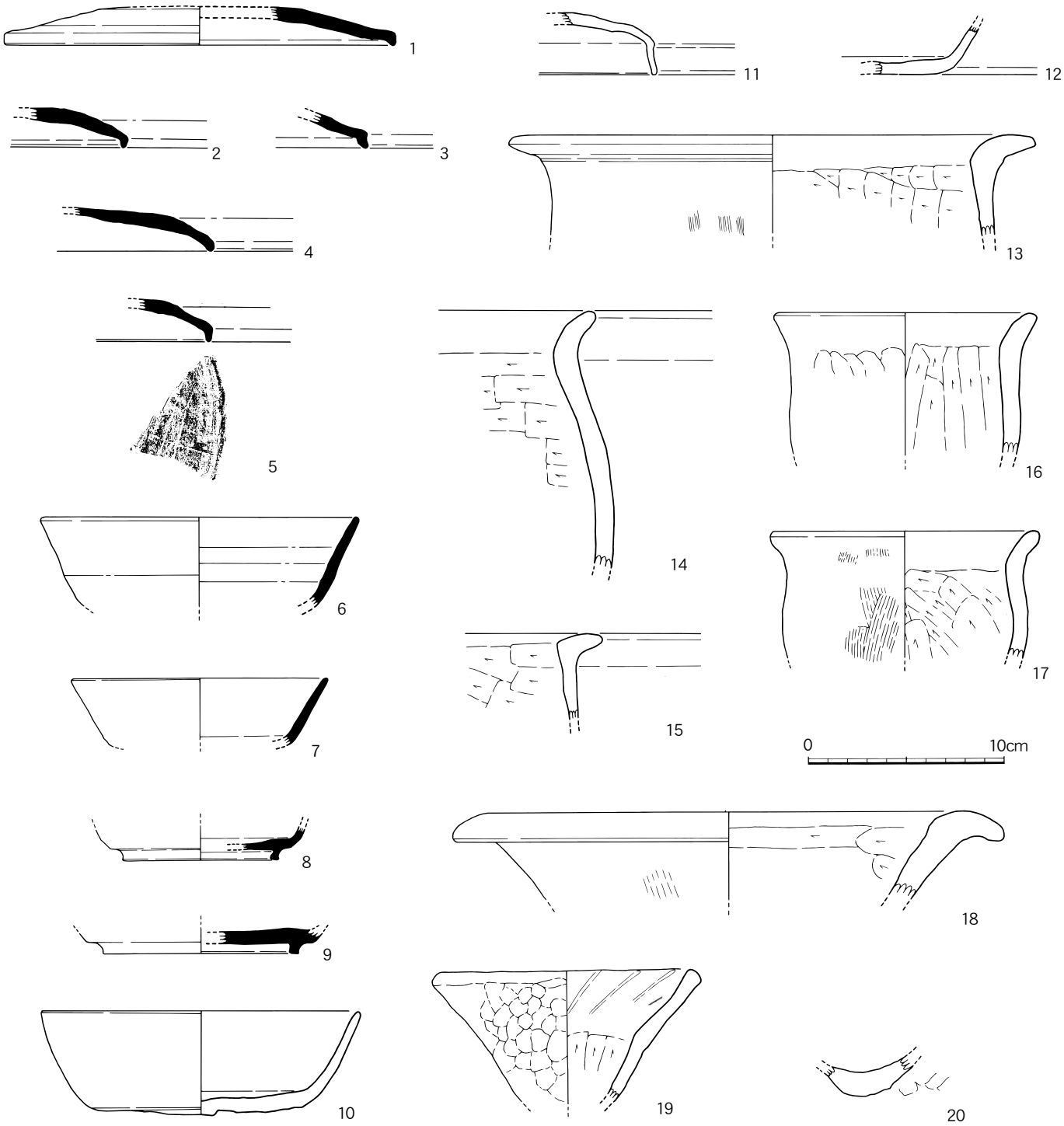


1．暗灰黄褐色土．炭．焼土大量に含む
2．暗灰黄褐色土．炭の小粒子を少量含む．焼土を少量含む
3．灰黄褐色土．炭を多く含む
4．暗黄褐色砂質土．やや大きめの焼土塊．粒を多く含む
5．黄褐色土．炭小粒子を少量含む
6．灰黄褐色砂質土
7．暗灰褐色土．炭を少量含む
8．暗黄褐色土．炭を少量含む
9．暗褐色砂質土
10．暗灰褐色砂質土

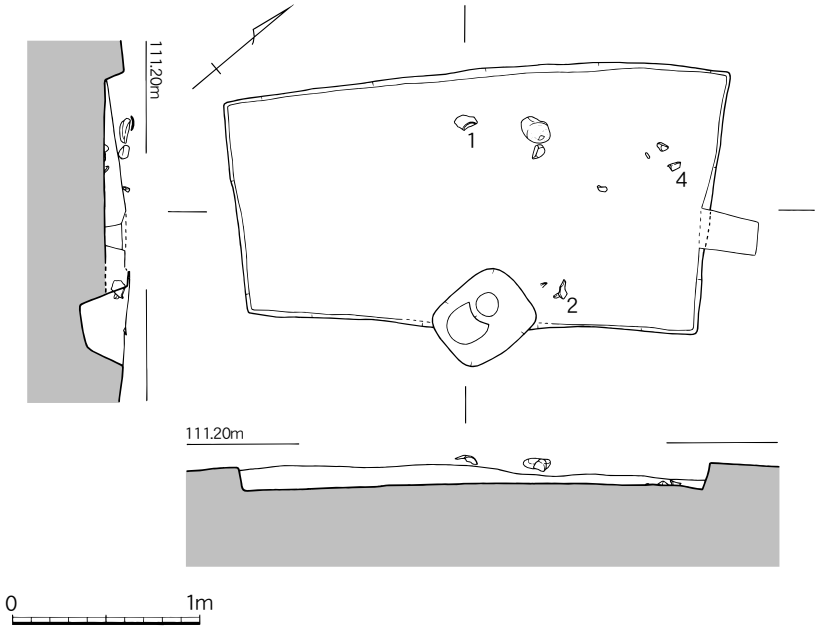
第105図　２号竪穴遺構実測図（1/40）

出土遺物（第106、図版60）

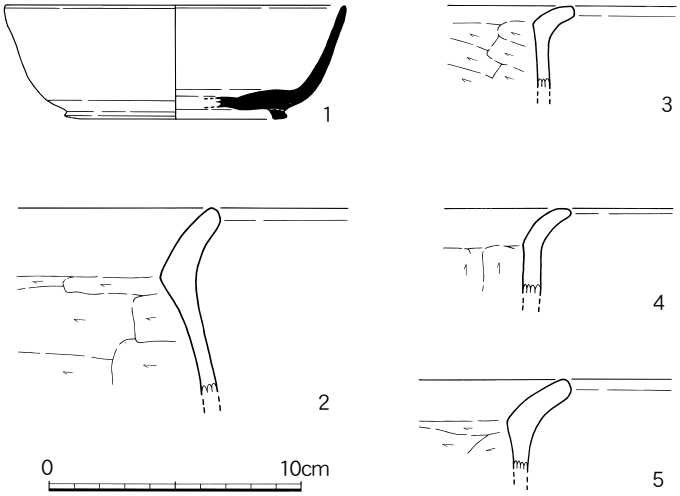
１～５は須恵器坏蓋である。口縁部を下方に折り曲げている。５には内面にヘラ記号が施される。６～９は須恵器坏身である。口縁部はやや外に開く。底部は明瞭に屈曲し、高台がつく。10は土師器坏身である。底部は緩やかに屈曲して立ち上がる。11は土師器坏蓋である。明瞭に屈曲して段を持ち、口縁部を下方に下げる。12は土師器坏である。13～17は土師器甕である。13、14はやや大きめの甕で、口縁部をやや外に張り出す。15～17は小甕で、15、16は口縁部をやや外に張り出し17は大きく外に曲げる。18は土師器鉢である。大きく外に開き、口縁部を下方に垂れ下げる。19、20は土師器手捏ね土器である。



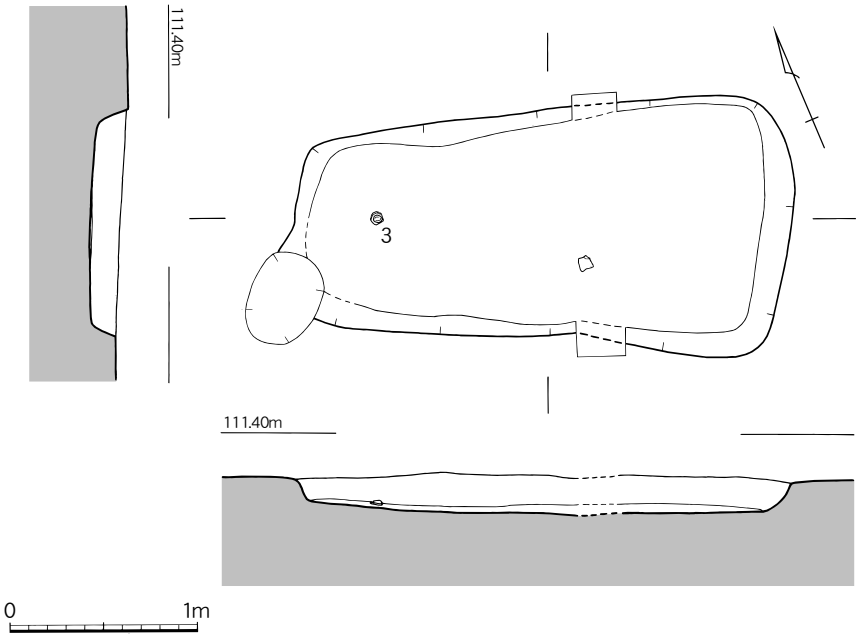
第106図　２号竪穴遺構出土遺物実測図（1/3）



第107図　３号竪穴遺構実測図（1/40）



第108図　３号竪穴遺構出土遺物実測図（1/3）



第109図　４号竪穴遺構実測図（1/40）

３号竪穴状遺構

（第107図、図版35）

調査区中央より西側にて検出され、７号掘立柱建物、２号溝を切っている。確認面での規模は南北長軸で約2.7m、南北短軸で1.4m、床面までの深さ約10㎝を測り、南側にすぼまる長方形プランを呈している。壁面の立ち上がりも垂直で床面も平坦に仕上げられている。

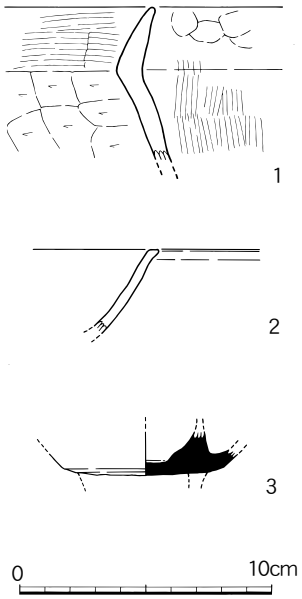
出土遺物（第108図、図版61）

１は須恵器坏身である。底部は緩やかに屈曲する。２～５は土師器甕である。口縁部はやや外に開く。

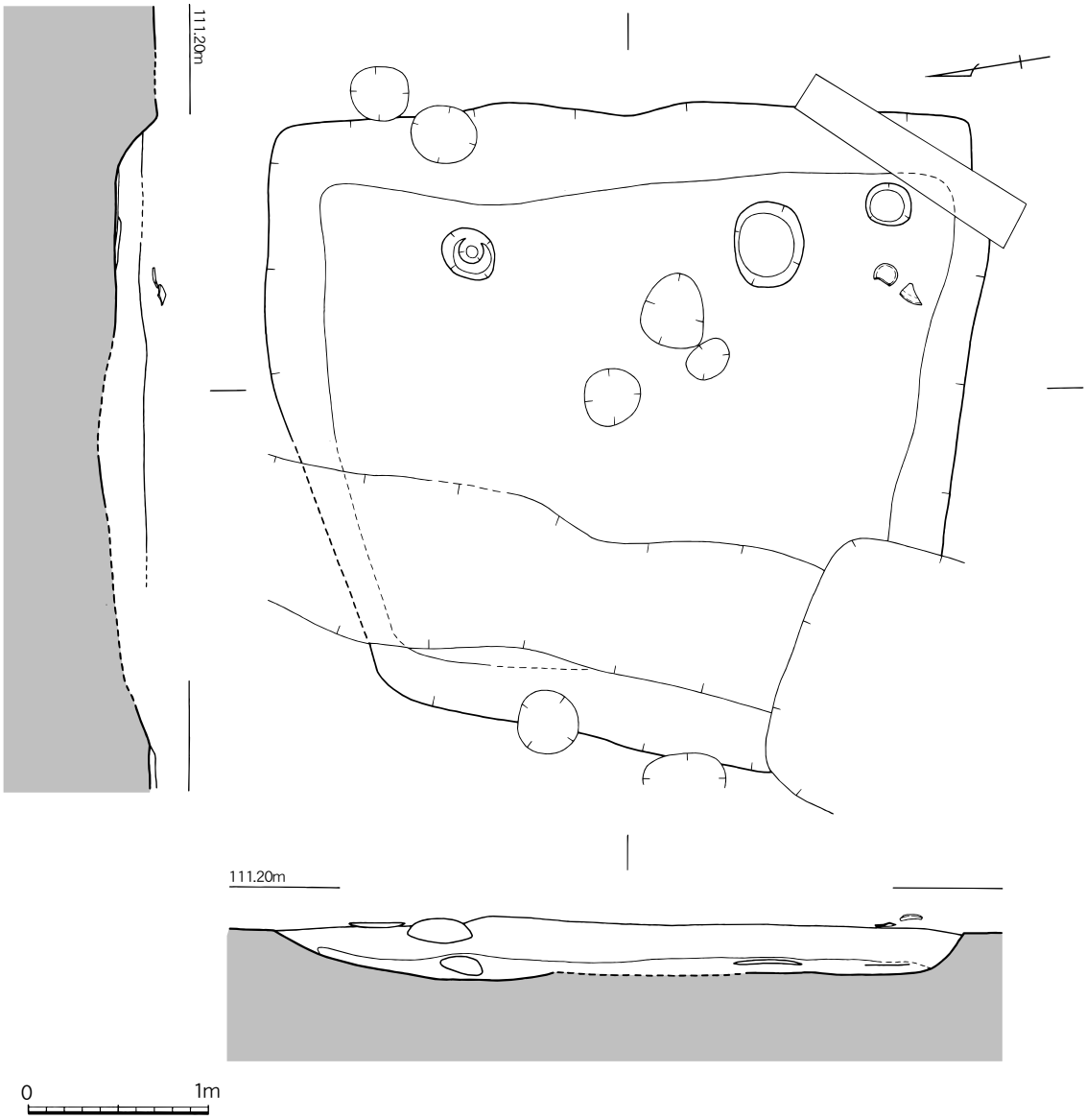
４号竪穴状遺構

（第109図、図版35）

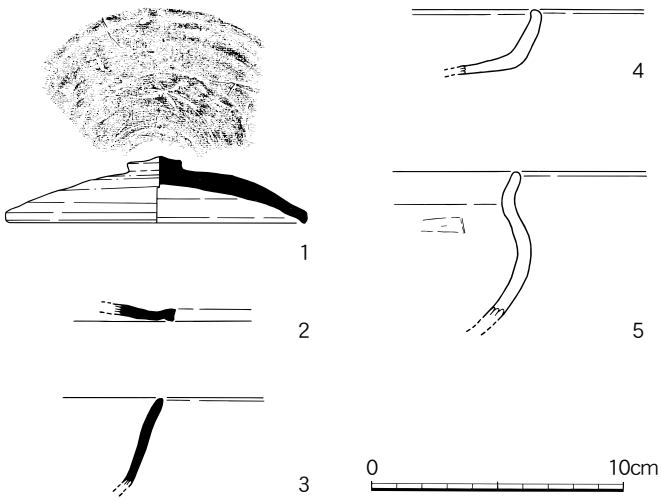
調査区中央より西側にて検出された。確認面での規模は東西長軸で約2.6m、南北短軸で1.4



第110図　４号竪穴遺構出土遺物実測図（1/3）



第111図　５号竪穴遺構実測図（1/40）



第112図　５号竪穴遺構出土遺物実測図（1/3）

第113図　6号竪穴遺構実測図（1/40）

m、床面までの深さ約20㎝を測り、西側にすぼまる長方形プランを呈している。壁面の立ち上がりはやや斜め広がり、床面は平坦に仕上げられている。

出土遺物（第110図、図版61）

１は土師器甕である。口縁部は頸部にて屈曲し、口縁部先端部を尖らせる。２は土師器碗である。口縁部がやや外に開く。３は瓦塔の破片か。内面に逆刺を持ち立ち上がり、底面には接合痕が残存する。

５号竪穴状遺構（第111図、図版36）

調査区中央より西側にて検出され、17、24号竪穴住居跡、７号溝、２号竪穴に切られる。確認面での規模は東西軸で約3.6m、南北短軸で4.0m、床面までの深さ約35㎝を測り、西側にすぼまる方形プランを呈している。壁面の立ち上がりは斜めに広がり、床面はやや平坦に仕上げられている。

出土遺物（第112図、図版61）

１は須恵器坏蓋である。口縁部はやや下方に折り曲げる。外面にはヘラ記号が施される。２は須恵器坏蓋である。３は須恵器坏身の口縁部である。４は土師器皿である。５は土師器鉢である。

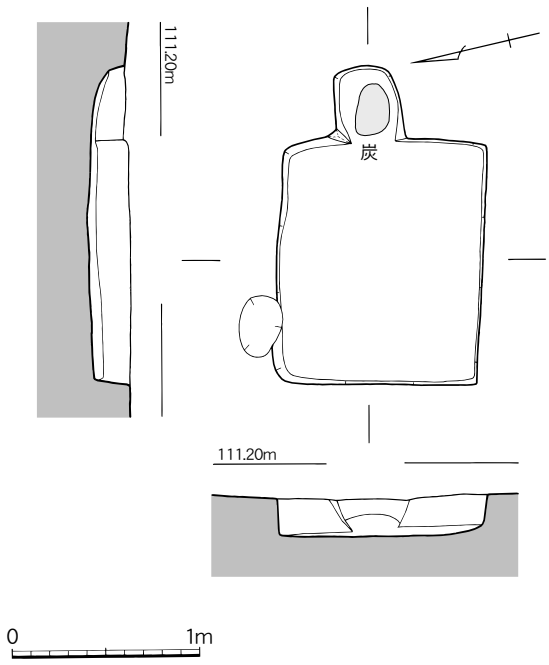
６号竪穴状遺構（第113図、図版37）

調査区中央より西側にて検出され、14、15、16、24号竪穴住居跡に切られる。確認面での規模は東西軸で約6.0m＋α、南北短軸で4.6m、床面までの深さ約10㎝を測り、不整方形プランを呈している。壁面の立ち上がりは緩やかに斜めに広がり、床面はやや平坦に仕上げられている。遺物の出土は見られなかった。

７号竪穴状遺構（第114図、図版37）

調査区中央にて検出された遺構で、頭初小型竪穴住居跡として仮称していた遺構である。東側にはピット状の張り出しがあり、その中心部には炭の飛散が確認された。ただ住居とするにはあまりに小さくカマドとするには明確な焼土痕跡も確認できなかったため、竪穴として報告する。

確認面での規模は東西軸で約1.3m、南北短軸で1.1m、床面までの深さ約20㎝を測り、方形プランを呈している。壁面の立ち上がりは垂直に立ち上がり、床面は平坦に仕上げられている。張出しは約40㎝、幅は約35㎝である。遺物の出土は見られなかった。



第114図　７号竪穴遺構実測図（1/40）

５．土坑

土坑は無数に検出され、調査区のほぼ全面で確認され、特に調査区中央から東側に多く見られた。不整形のプランや深さのまちまちなものなどが多く、なかには近年の攪乱と考えられるものも見られた。また、不整形で深さ１m以上のものなどが多く見られ、層の反転具合から風倒木痕と考えられた。これらの多くは１号溝より東側に多く確認された。

以上のことから、遺構埋土が住居跡などと類似する暗褐色土であるもの、埋土中より遺物の出土が見られたものに関して土坑として報告することとする。

１号土坑（第115図、図版37）

調査区東側にて検出され、確認面での規模は南北幅約1.4m、東西幅約1.1m、深さ約25㎝を測る不整方形を呈する。底面は比較的平坦で立ち上がりはやや斜めである。土師器の破片が出土した。

２号土坑（第115図、図版38）

調査区東側にて検出され、確認面での規模は南北幅約4.7m、東西幅約0.6m、深さ約10㎝を測るひょろ長い溝形を呈する。底面には無数の穴状の落ち込みがあり、立ち上がりは斜めに開く。遺物の出土は見られなかった。

３号土坑（第115図、図版38）

調査区東側にて検出され、確認面での規模は南北幅約1.7m、東西幅約0.6m、深さ約60㎝を測る楕円形を呈する。底面は比較的平坦でやや段落ち状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

４号土坑（第116図、図版38）

調査区中央にて検出され、確認面での規模は幅約0.9m、深さ約50㎝を測る不整円形を呈する。ピット状を呈するがピットとするにはかなり大きいため土坑として報告する。遺物の出土は見られなかった。

５号土坑（第116図、図版39）

調査区東側にて検出され、２号溝を切っている。確認面での規模は幅約1.1m、深さ約10㎝を測る不整円形を呈する。底面は比較的平坦で立ち上がりはやや斜めである。遺物の出土は見られなかった。

６号土坑（第116図、図版39）

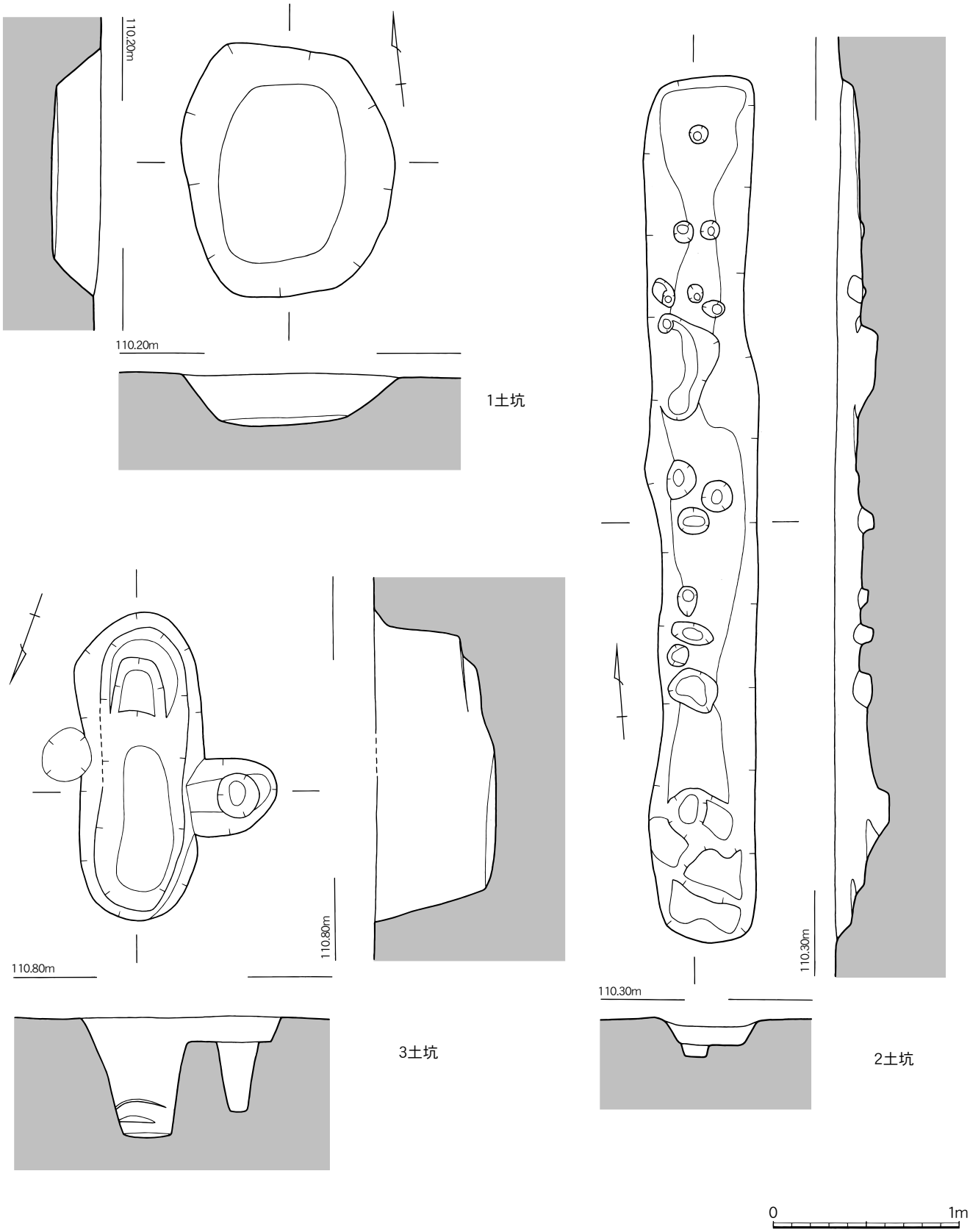
調査区中央より南側にて検出され、確認面での規模は南北幅約1.1m、東西幅約0.9m、深さ約15㎝を測る不整円形を呈する。底面は比較的平坦で立ち上がりはやや斜めである。土師器の破片が出土した。

７号土坑（第116図、図版39）

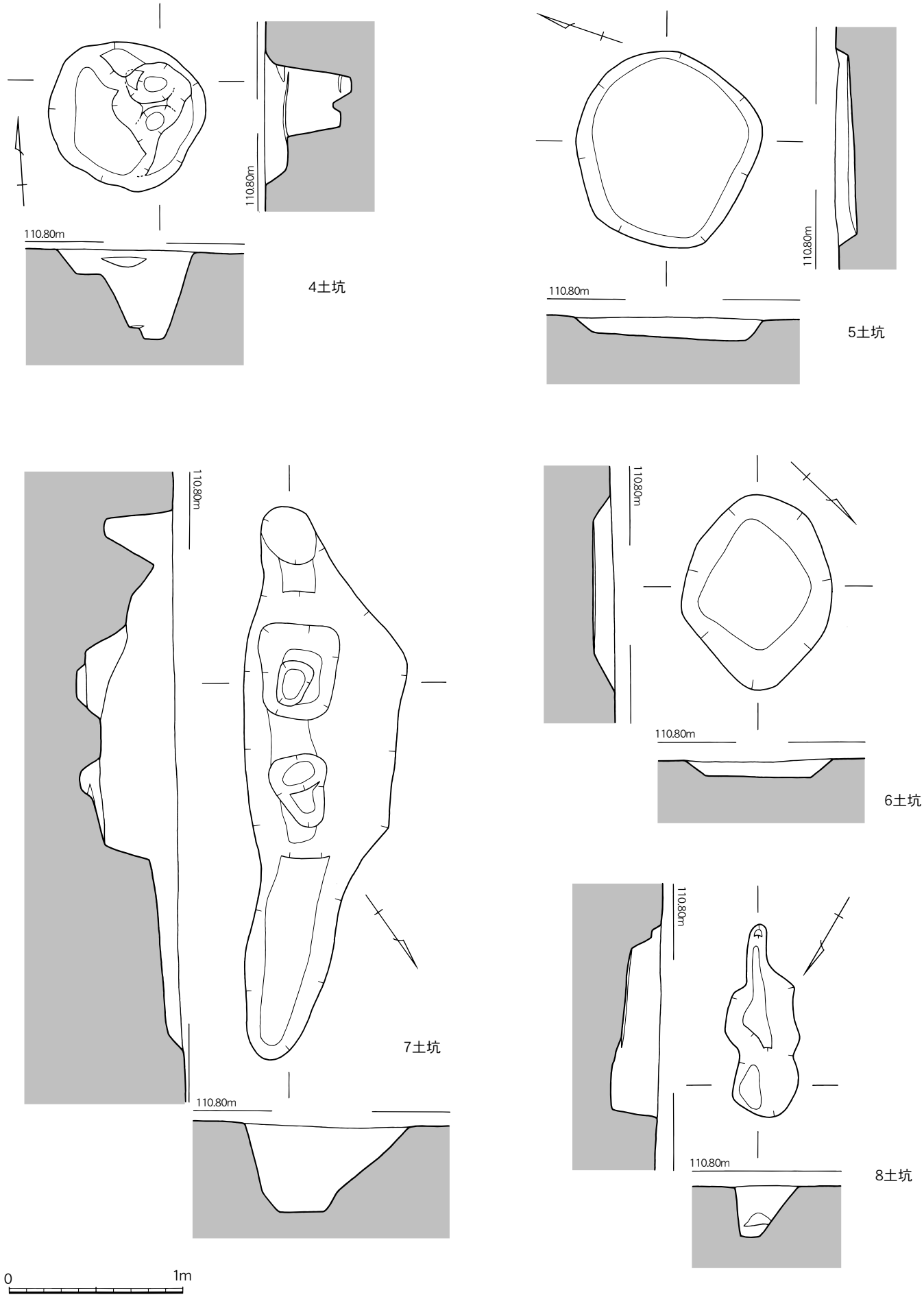
調査区東側にて検出され、８号掘立柱建物の中に位置する。埋土も暗褐色土を呈し、あるいは伴うものか。確認面での規模は南北幅約3.2m、東西幅約0.9m、深さ約45㎝を測る不整形を呈する。底面は段落ち状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

８号土坑（第116図、図版40）

調査区東側にて検出され、８号掘立柱建物の側に位置する。確認面での規模は南北幅約1.1m、東西幅約0.4m、深さ約30㎝を測る不整形を呈する。底面は比較的平坦な段落ち状を呈する。遺物の出土は見られなかった。



第115図　1、2、3号土坑実測図（1/30）



第116図　4、5、6、7、8号土坑実測図（1/30）

９号土坑（第117図、図版40）

調査区東側にて検出され、１号掘立柱建物より北側に位置する。確認面での規模は南北幅約1.0m、東西幅約0.8m、深さ約10㎝を測る不整形を呈する。底面は比較的平坦である。須恵器土師器の片が出土した。

10号土坑（第117図、図版40）

調査区東側にて検出され、１号溝に切られる。確認面での規模は幅約1.5m、深さ約30㎝を測る不整形を呈する。底面は比較的平坦で立ち上がりはやや段落ち状を呈する。土師器の破片が出土した。

11号土坑（第117図、図版41）

調査区東側にて検出され、８号掘立柱建物の中に位置する。確認面での規模は東西幅約1.6m、南北幅約１m、深さ約45㎝を測る不整形を呈する。底面は段落ち状を呈し、中心が下がっており、立ち上がりはやや斜めである。土師器の破片が出土した。

12号土坑（第117図、図版41）

調査区中央にて検出され、４号住居の側に位置する。確認面での規模は東西幅約1.6m、南北幅約0.3m、深さ約15㎝を測る不整形を呈する。底面は段落ち状を呈している。遺物の出土は見られなかった。

13号土坑（第117図、図版41）

調査区中央にて検出され、４号住居の側に位置する。確認面での規模は東西幅約2.9m、南北幅約1.2m、深さ約50㎝を測る不整形を呈する。底面は段落ち状を呈する。須恵器、土師器の破片が比較的多く出土した。

14号土坑（第118図、図版42）

調査区中央にて検出され、４号住居の側に位置する。確認面での規模は東西幅約1.3m、南北幅約0.6m、深さ約15㎝を測る不整方形を呈する。底面は比較的平坦で立ち上がりはやや斜めである。須恵器、土師器の破片が出土した。

15号土坑（第118図、図版42）

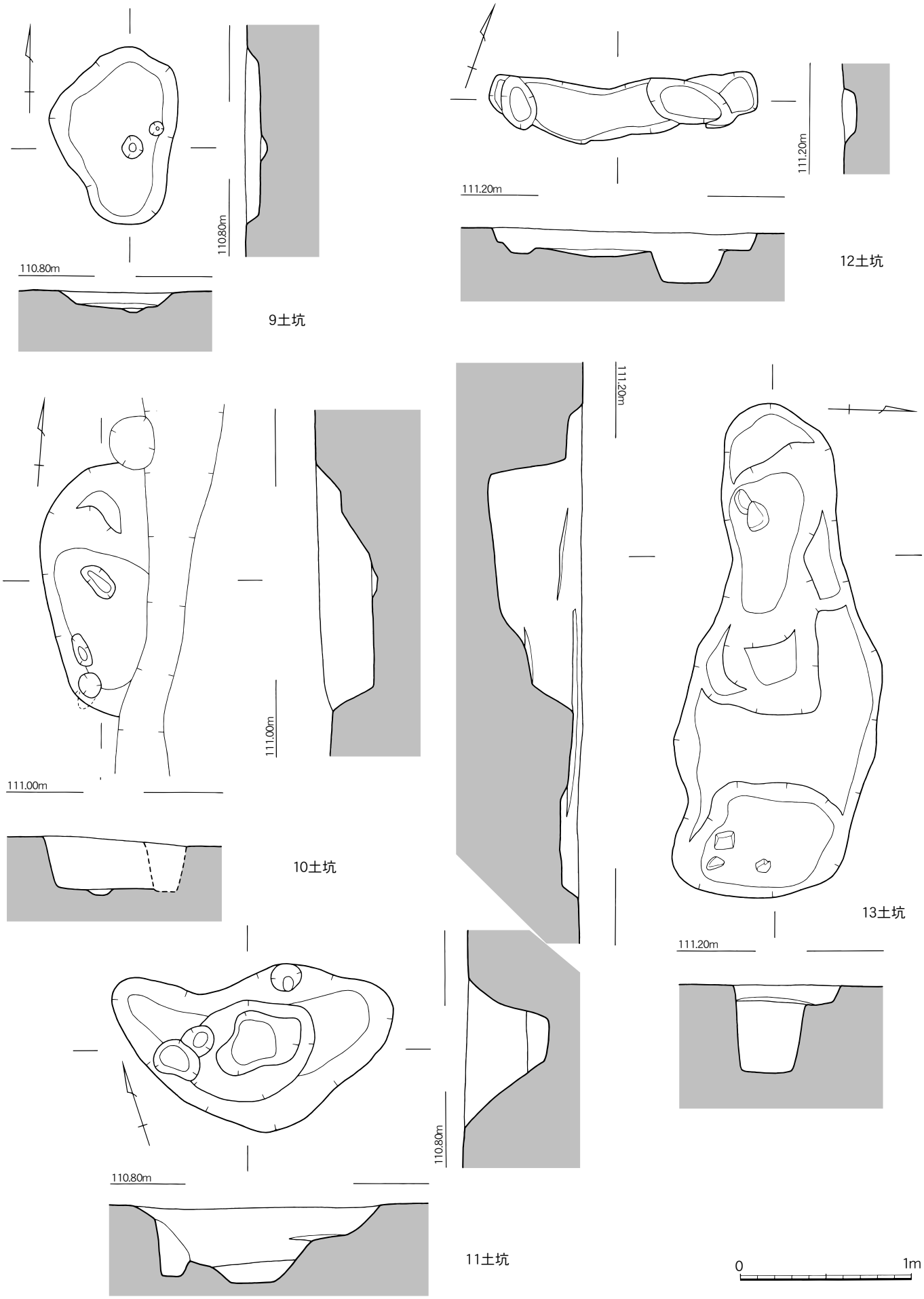
調査区東側にて検出された、この遺跡唯一の縄文時代の土坑である。確認面での規模は南北幅約2.1m、東西幅約1.7m、深さ約10㎝を測る不整方形を呈する。埋土は暗黄褐色土を呈し、底面は比較的平坦で立ち上がりはやや斜めである。同一個体になるものと考えられる縄文土器の破片が出土した。埋甕等となる可能性も考えられたが、検出の際に多数の土器を取り上げてしまったため詳細は不明である。

16号土坑（第118図、図版42）

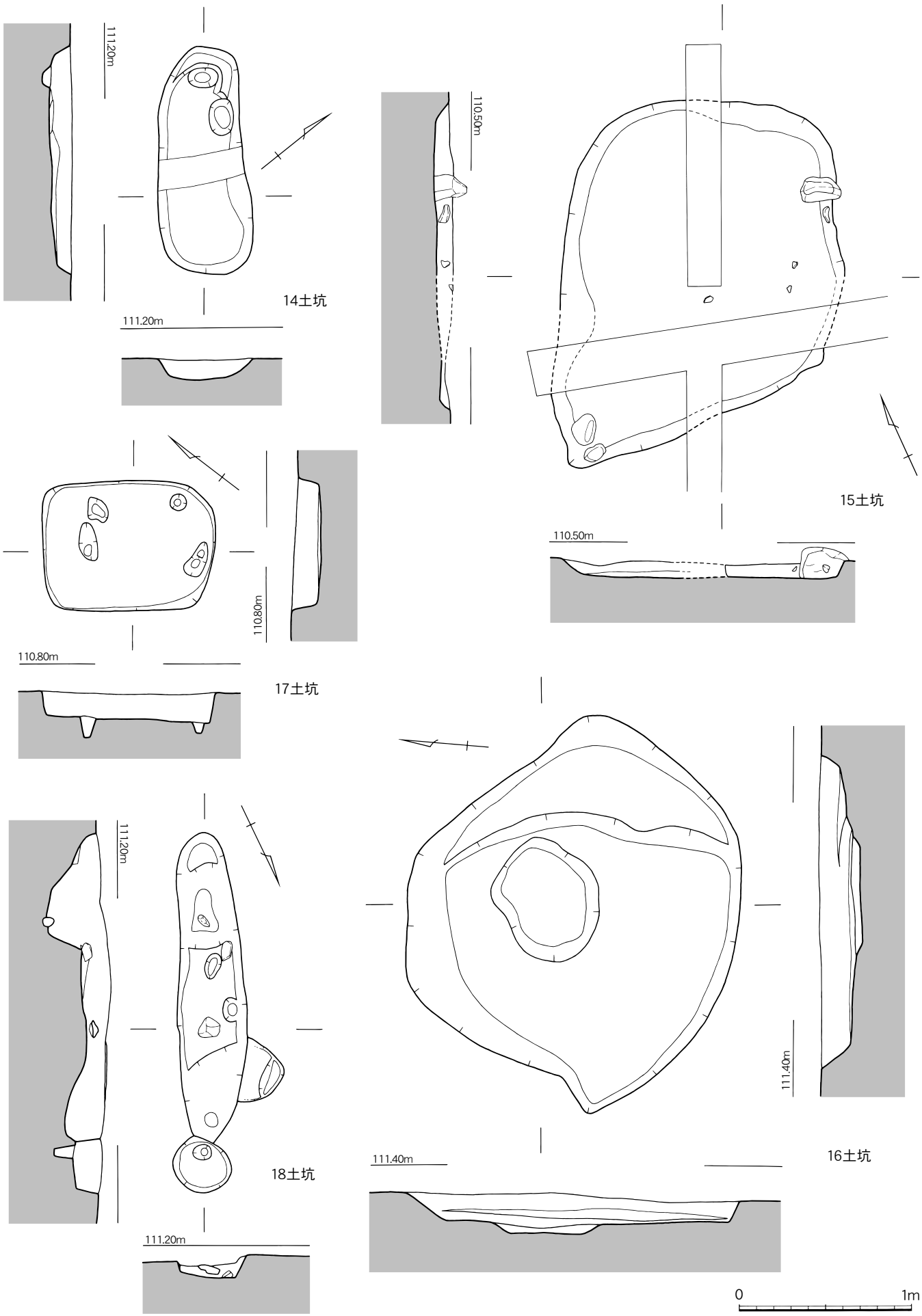
調査区中央よりやや北側にて検出され、18号住居の側に位置する。確認面での規模は南北幅約２m、東西幅約2.2m、深さ約20㎝を測る不整円形を呈する。底面は段落ち状を呈し立ち上がりはやや斜めである。須恵器の破片が出土した。

17号土坑（第118図、図版43）

調査頭初30号土坑として仮称していた。調査区中央より西側にて検出され、14～16、25号住居の一群の側に位置する。確認面での規模は南北幅約１m、東西幅約75㎝、深さ約15㎝を測る不整方形を呈する。底面は比較的平坦で、埋土内には炭が多く含まれていた。あるいは焼成土坑の可能



第117図　9、10、11、12、13号土坑実測図（1/30）



第118図　14、15、16、17、18号土坑実測図（1/30）

性が考えられる。遺物の出土は見られなかった。

18号土坑（第118図、図版43）

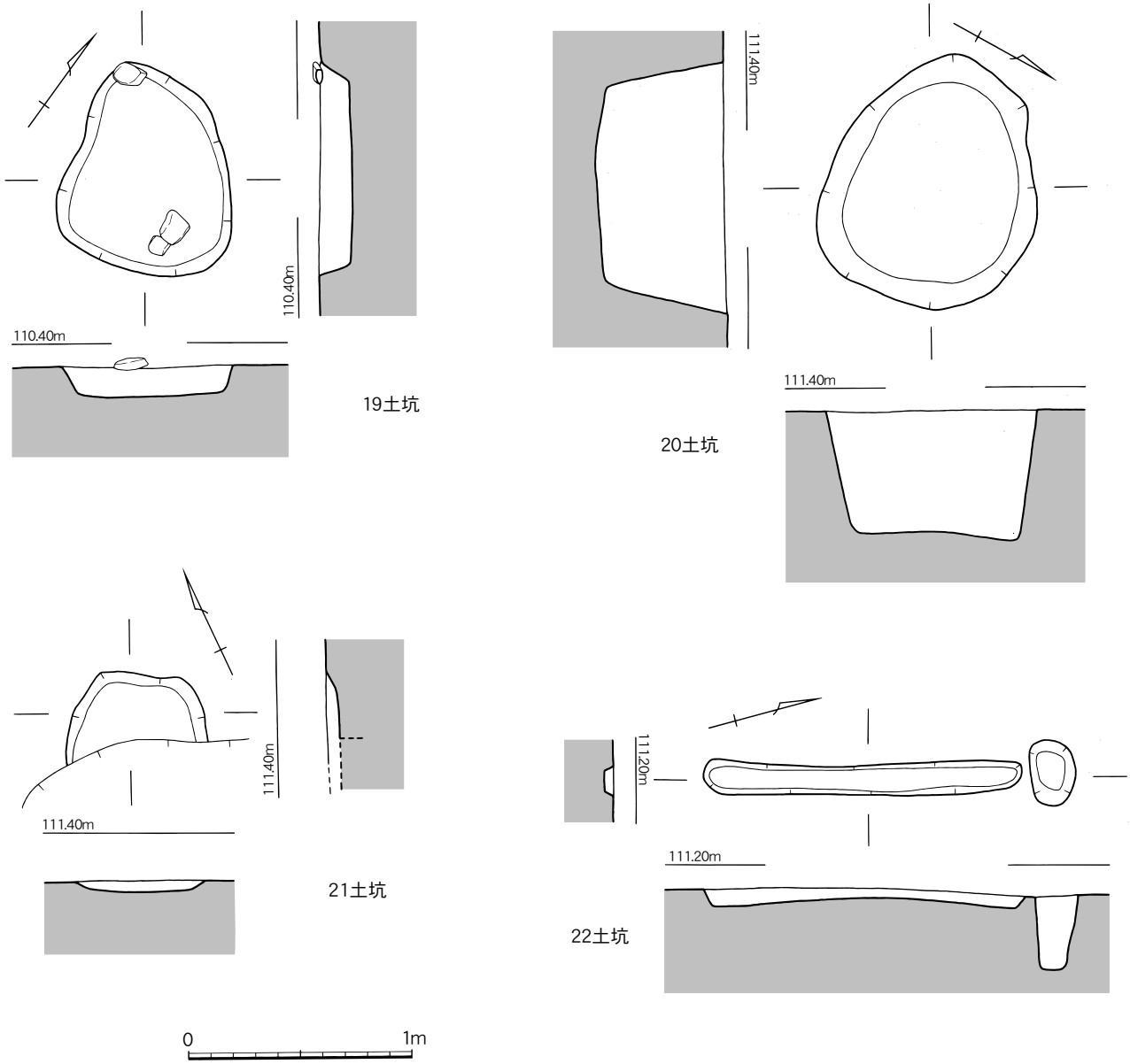
調査区東側にて検出され、確認面での規模は南北幅約1.8m、東西幅約0.4m、深さ約15㎝を測る不整形を呈する。底面は段落ち状を呈し立ち上がりはやや斜めである。土師器の破片が出土した。

19号土坑（第119図）

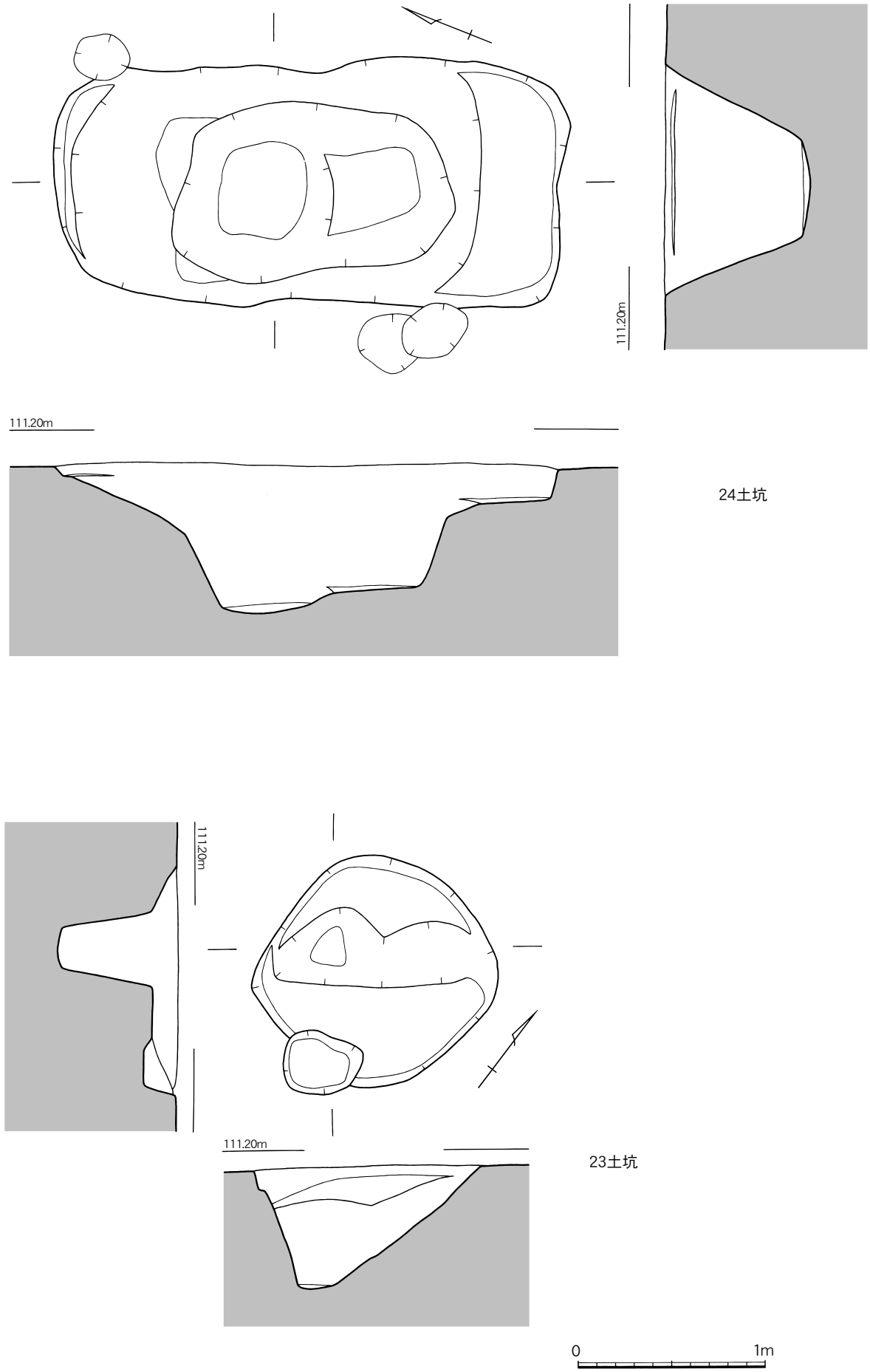
調査区中央より北側にて検出され、２号溝を切っている。確認面での規模は南北幅約0.9m、東西幅約0.6m、深さ約15㎝を測る不整方形を呈する。底面は比較的平坦で立ち上がりはやや斜めである。遺物の出土は見られなかった。

20号土坑（第119図）

調査区中央より北側にて検出され、２号溝と６号溝の間に位置する。確認面での規模は南北幅約1.0m、東西幅約1.1m、深さ約60㎝を測る不整円形を呈する。底面は比較的平坦である。土師器の破片が出土した。



第119図　19、20、21、22号土坑実測図（1/30）



第120図　23、24号土坑実測図（1/30）

21号土坑（第119図）

調査区東側にて検出され、４号竪穴に切られる。確認面での規模は東西幅約0.6m、深さ約５㎝を測る不整方形を呈する。底面は比較的平坦で立ち上がりはやや斜めである。土師器の破片が出土した。

22号土坑（第119図）

調査区東側にて検出され、確認面での規模は南北幅約1.4m、東西幅約1.5m、深さ約５㎝を測る溝状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

23号土坑（第120図）

調査区東側にて検出され、確認面での規模は南北幅約1.2m、深さ約65㎝を測る不整円形を呈する。真ん中に向かって緩やかに下がる。遺物の出土は見られなかった。

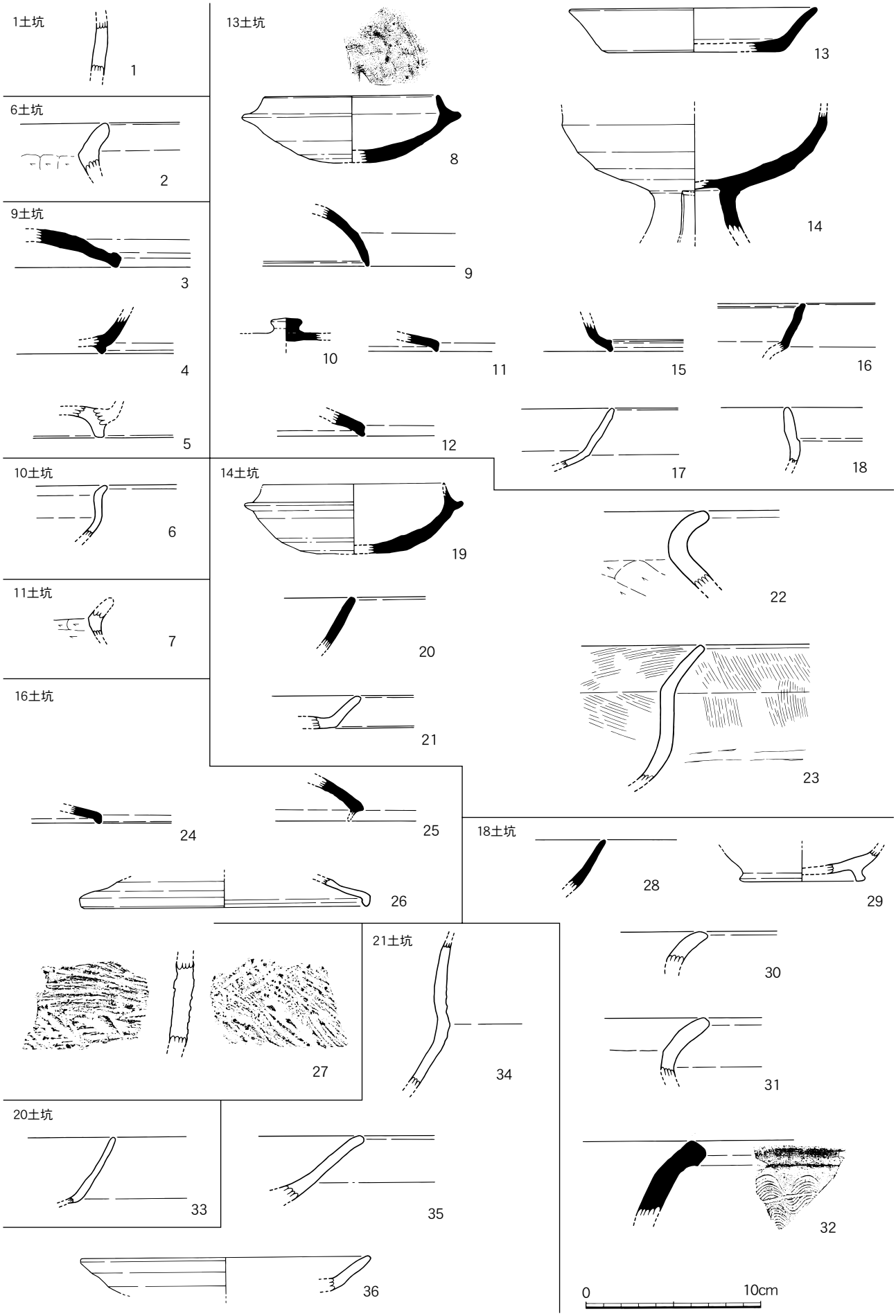
24号土坑（第120図）

調査区東側にて検出され、確認面での規模は南北幅約1.4m、東西幅約1.1m、深さ約25㎝を測る方形を呈する。底面は真ん中が大きく下がる段落ち状を呈する。遺物の出土は見られなかった。

土坑出土遺物（第121、122図、図版62）

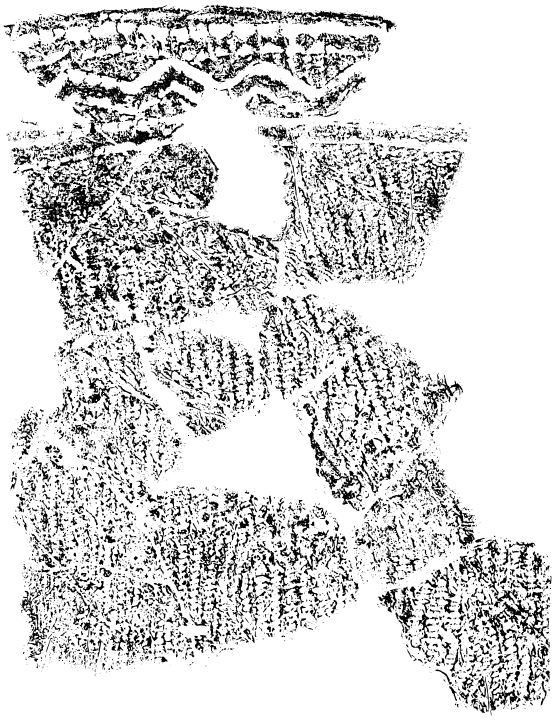
１は１号土坑より出土した縄文土器の胴部破片である。２は６号土坑より出土した土師器甕の口縁部である。３～５は９号土坑より出土した。３は須恵器坏蓋である。口縁部端部を平坦に仕上げる。４は須恵器坏の底部である。５は土師器坏の底部である。６は10号土坑より出土した土師器椀である。７～17は13号土坑より出土した。７は須恵器坏身、あるいは蓋である。逆刺をもち、口縁部はやや内傾する。内面にはヘラ記号が施される。８は須恵器坏蓋である。９は須恵器坏蓋の宝珠状ツマミ、10、11は須恵器坏蓋である。口縁部を下方に折れ曲げる。12は土師器坏身である。口縁部を外に開く。13は須恵器高坏である。脚部にスカシ穴が施される。14は須恵器高坏の脚部である。端部を下方に折れ曲げる。15は須恵器高坏の口縁部である。口縁下部に段を形成する。16は土師器高坏である。17は土師器椀である。18～22は14号土坑より出土した。14は須恵器坏身である。逆刺を持つ。19は須恵器坏身である。20は土師器皿である。21は土師器甕である。口縁部を外湾させる。22は土師器鉢である。口縁部を外反させる。23～26は16号土坑より出土した。23は須恵器坏蓋である。口縁部を下方に折れ曲げる。24は須恵器坏蓋である。逆刺を持つ。25は土師器坏蓋である。口縁部を下方に折れ曲げる。26は須恵器甕の胴部である。27～31は18号土坑より出土した。27は須恵器坏である。28は土師器坏である。29、30は土師器甕である。32は20号土坑より出土した土師器高坏である。33～35は21号土坑より出土した。33は縄文土器の深鉢である。船元式か。34は土師器高坏の口縁部である。大きく外に開く。35は土師器皿である。

36は15号土坑より出土した。船元式の深鉢と考えられる。口縁部はキャリパー状に屈曲し、胴部はやや張り出す。口縁部には２条の刺突沈線文で文様帯を形成し、その間にヘラによる連続山形文を施す。体部には縄文が施され、単節ＬＲの撚糸をやや斜め上方方向に刷り上げたものと考えられる。やや荒い縄文目であり、文様帯まで残存し、文様帯はすり消されてはいなかった。文様帯下半部からは斜め方向に沈線文が施され、胴部中位までのびている。内面は条痕文のちにナデで仕上げられており、一部工具痕が残存する。



第121図　土坑出土遺物実測図①（1/3）

37



0 10cm

第122図　土坑出土遺物実測図②（1/3）

６．柱穴（第8図）

調査区内より柱穴は多数出土した。建物を確認出来ず、遺物の含まれる柱穴が多数ここでは見られたことから、主なものについて報告する。

出土遺物（第123、124図、図版63）

それぞれの出土柱穴番号についてはここで逐一記載すると混乱をきたすため、観察表を参照していただきたい。

１～12は須恵器坏蓋である。１～４は体部から口縁部にかけて緩やかに湾曲する。５～12は口縁部をやや下方に折り曲げる。13～20は須恵器坏身である。13、14は口縁部には逆刺を持つ。15～20は須恵器坏身である。口縁部はやや外に開き、底部は明瞭に屈曲する。21は須恵器皿である。口縁部がやや外に開く。22～26は須恵器高坏である。22は口縁下部に沈線をめぐらせる。25にはスカシ孔が施される。27は須恵器甕の口縁部である。29～30は土師器高坏である。31は土師器蓋、32は坏身である。33～35は土師器坏身である。36、37は土師器皿か。38～43は土師器椀である。38、40は口縁部下部に段を形成し、やや内傾させる。39、41、43は口縁部をやや外に開き、41は口縁部を大きく外に開く。42は土師器鉢である。口縁部は外に開く。44～64は土師器甕である。44～59は頸部で明瞭に屈曲し、口縁部が外に開く。60～64は頸部をやや肥厚させ、口縁部を外反させる。65は土師器甑である。66は土師器の大椀から。67は土師器手捏ね土器である。

７．遺物包含層（第125、126図、図版64）

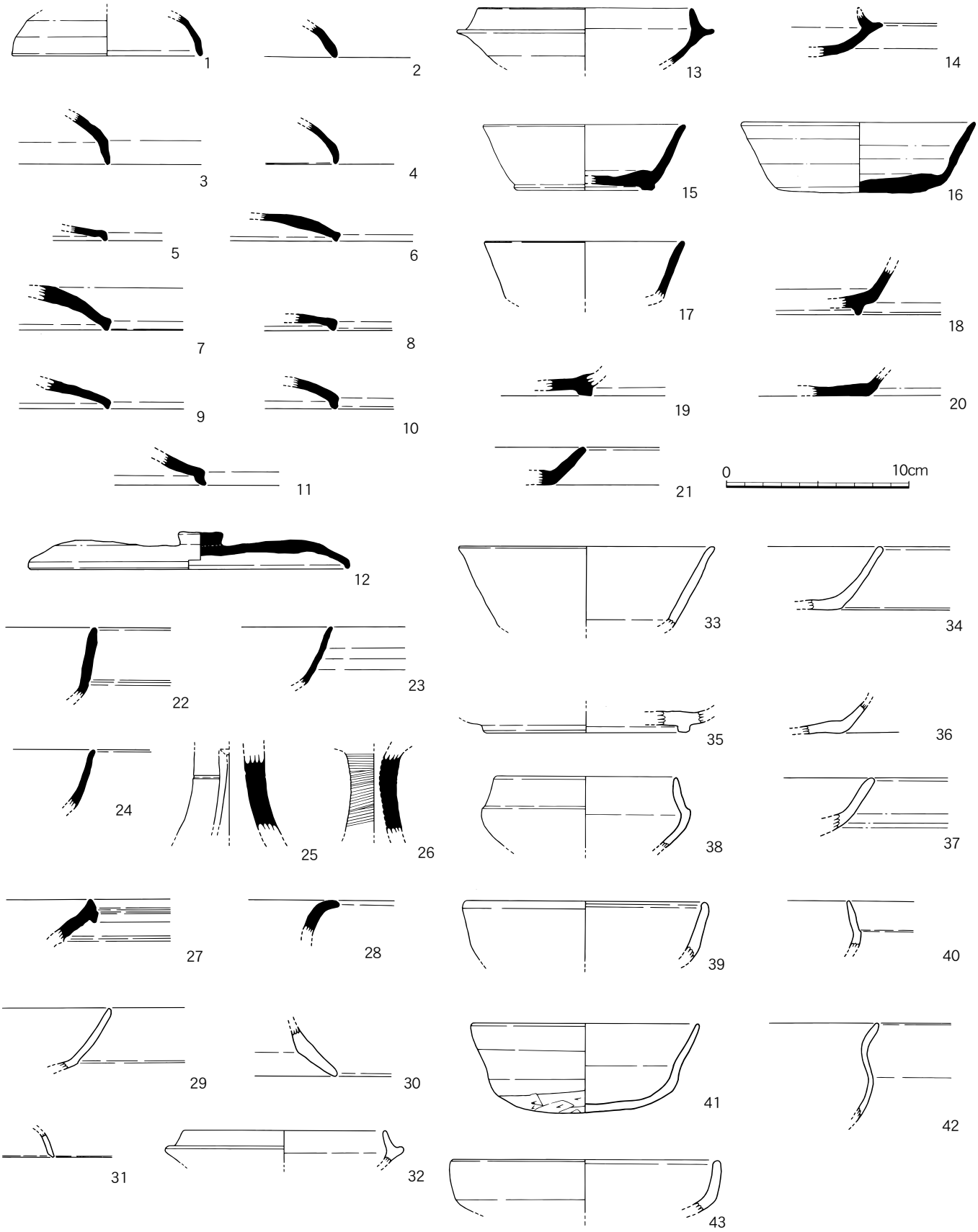
調査区西側、11号溝より西側にて確認された包含層で、遺物が地山中に少量散乱していることが確認されたため、11号溝より西側に向かって長さ13mのトレンチを設定し、土層の堆積状況を確認した。その結果、１～３層の堆積が西側に向かって次第に下がり、これらの層に遺物が少量確認された。おそらく、ある段階の大肥川の氾濫により堆積した層と考えられる。その下層の４層には一部ピット状の落ち込みと思われる層位があることから、この面が氾濫前の堆積層と考えられる。ただ、この１層の表面には住居跡等の遺構の存在が認められたことから、大肥川の氾濫の後にこの位置で生活を営んでいたものと考えられる。

また、特に遺物の包含が調査区南西側にて多く確認されたことから、この位置に約12m×12mの任意のグリットを設定して掘り下げを行った。トレンチの１～３層に対応する土層の掘り下げを行った時点で遺構らしきプランが幾つか確認され、また遺物の散乱状況も確認された。おそらく氾濫時に大量に流れ込んだのではないかと考えられる。

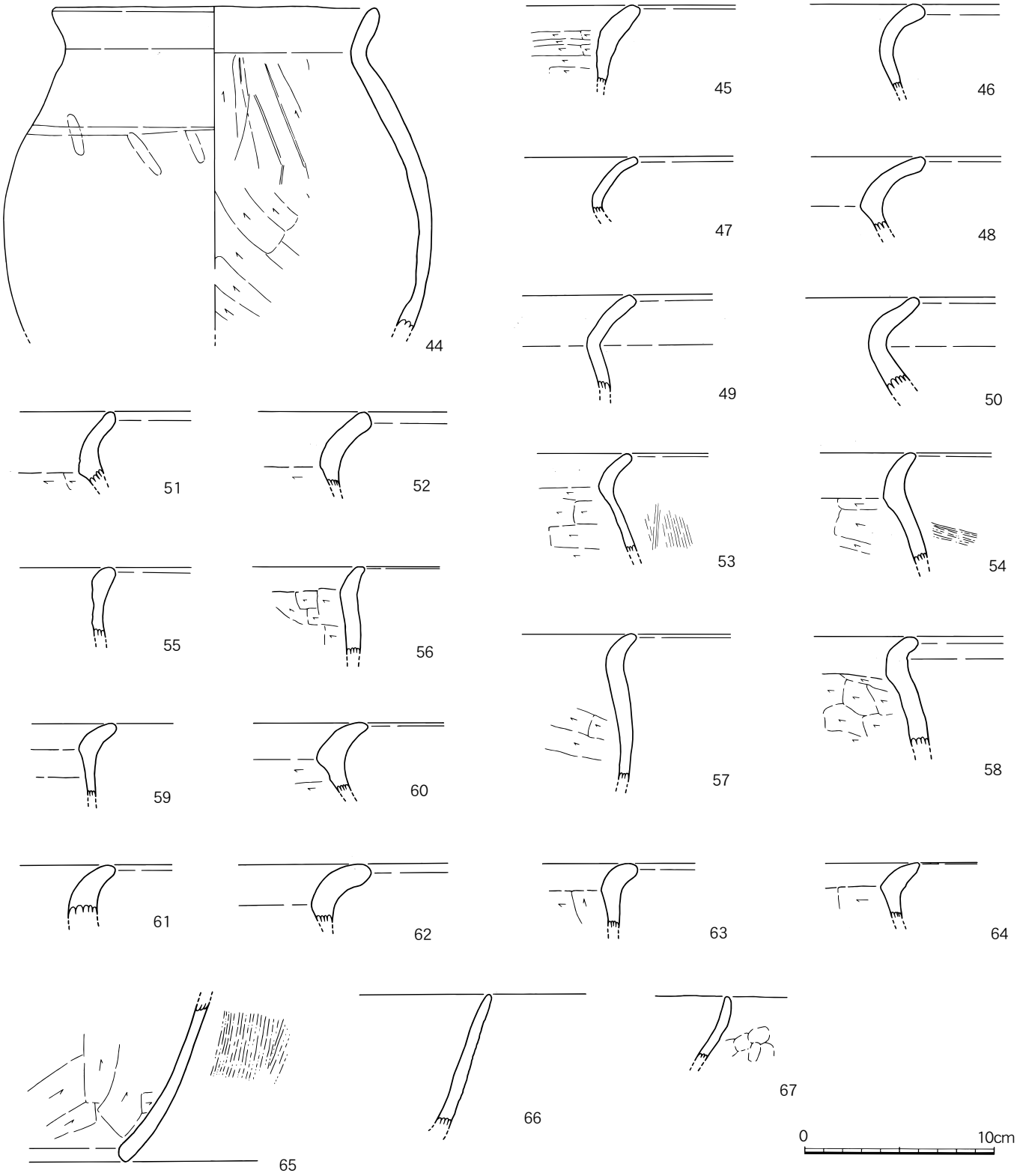
なお、この一帯に関しては盛り土保存されるとのことから、遺構の確認に留めている。

出土遺物（第127、128図、図版64、65）

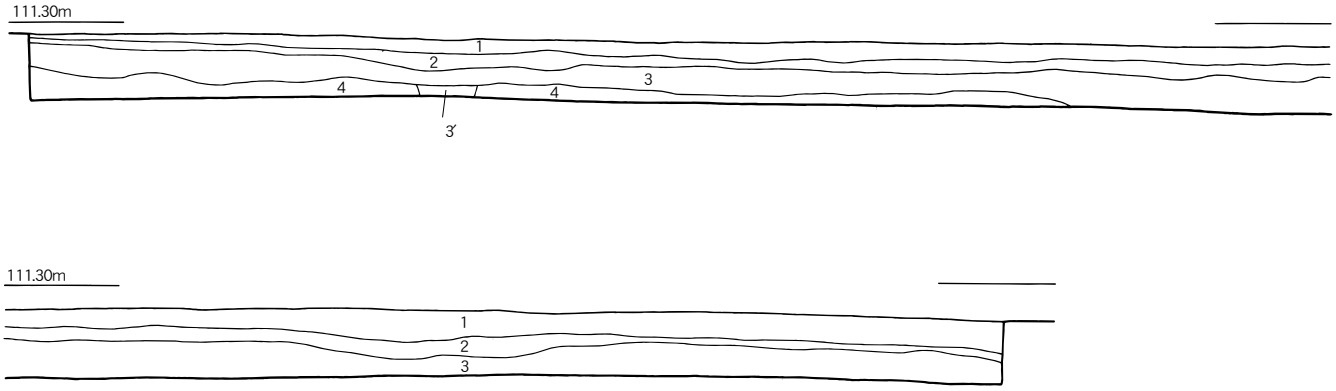
１～５は須恵器坏蓋である。１～４は体部を緩やかに湾曲させる。１～３には体部外面にヘラ記号が施される。５は口縁部に逆刺を持ち、口縁部はかなり内傾する。６は須恵器坏身である。底部にはヘラ記号が施される。７は須恵器坏身である。逆刺を持ち口縁部はやや内傾し、体部内面にはヘラ記号が施される。８は須恵器椀である。９は土師器椀である。口縁部は底部で明瞭に屈曲し外反しながら立ち上がる。10は土師器椀である。口縁部は緩やかに立ち上がり外に開く。11は土師器高坏である。口縁部は外に開き、脚部はやや外に広がる。12は土師器高坏の脚部である。脚部は明瞭に屈曲し大きく外に開く。13～16は土師器甕である。頸部で明瞭に屈曲し、外に開く。17



第123図　柱穴出土遺物実測図①（1/3）



第124図　柱穴出土遺物実測図②（1/3）



５０トレンチ土層
１．　黄灰褐色砂質土層（遺物を含む）包含層と考えられる。
２．　黄褐色砂質土層．カーボン、遺物を含む
３．　褐色砂質土．炭、遺物を含む
３′褐色砂質土．炭、遺物を含む（ピットか？）
４．　淡灰褐色砂質土、少量の遺物を含む

0　1m

第125図　トレンチ土層実測図（1/40）

※ドットは土器の出土位置を示し、
ラインは遺構と想定された線を示す。

第126図　遺物包含層グリット実測図（1/100）

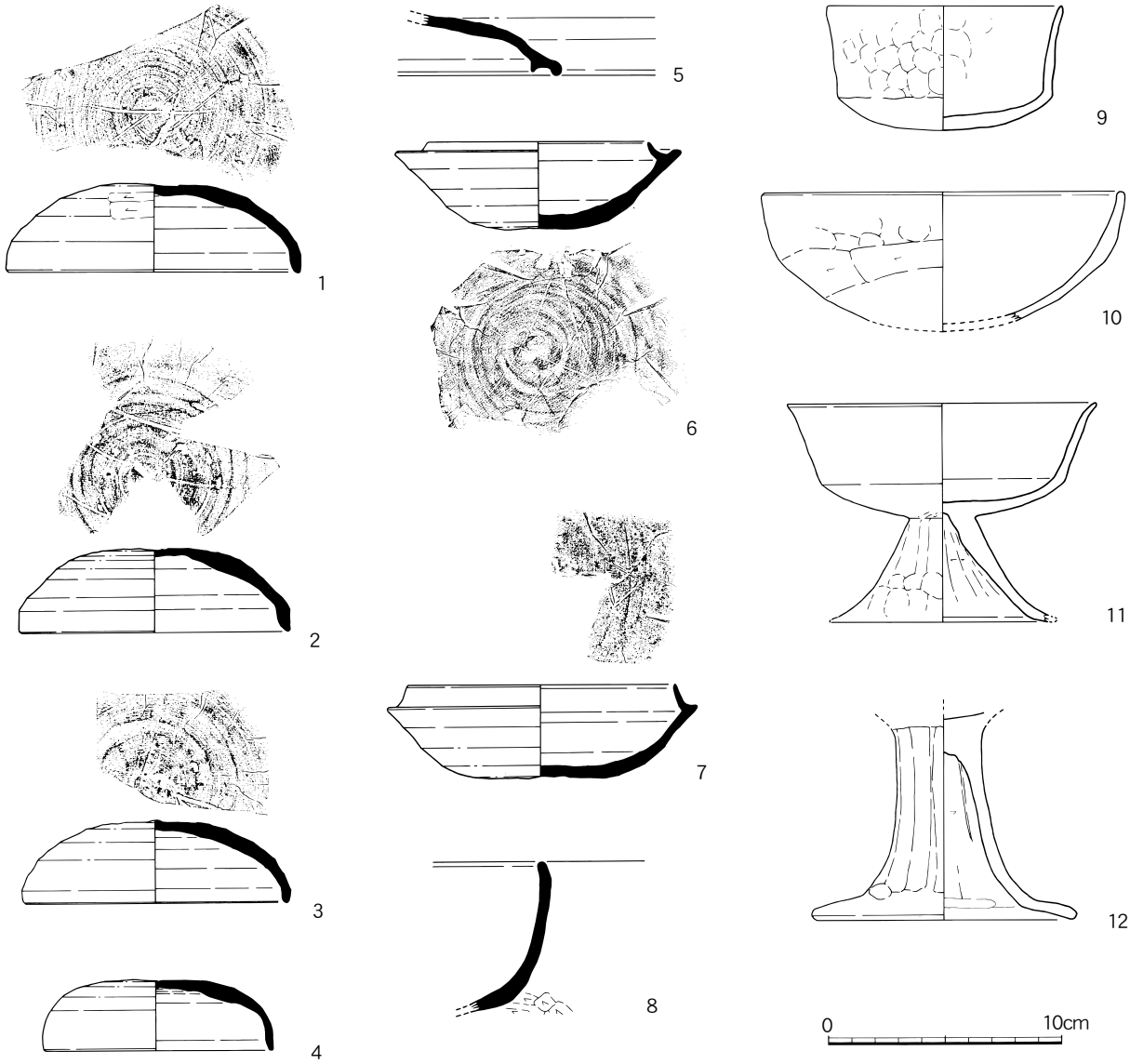
～18は土師器甑である。17は口縁部をやや肥厚させ緩やかに外に開く。18は端部を平坦に仕上げる。

８．その他の遺物

ここでは各遺構、包含層等より出土した各遺物について個別に概説する。

鉄製品（第129図、図版65）

１は２号竪穴状遺構より出土した平根斧箭式の鏃で、先端と基部を欠損している。２は５号住居跡より出土した平根斧箭式の鏃で、先端と基部を欠損している。３は24号住居跡より出土した鏃の基部である。４は11号住居跡より出土した鏃の基部である。５は表土中より出土した鏃の基部である。６は９号住居跡より出土した刀子の刃部片で、基部を欠いている。７は３号掘立柱建物P-５より出土した槍鉋であろうか。断面形が三角形状に折り曲がり、基部にかけてやや張り出し、すぼまる。８は６号住居跡より出土した器種不明の鉄製品である。径5.5㎝ほどの輪に厚さ4㎜程度の棒を折り曲げて通している。当初馬具の類かと思われたが、馬具とはやや異なるようである。９は６号住居跡より出土した用途不明の鉄製品である。真ん中ほどを張り出させ、左側はやや下方に曲



第127図　遺物包含層グリット出土遺物実測図①（1/3）

げている。10はP214より出土した釘状の鉄製品である。断面は４㎜程度の方形を呈し、ひょろ長く伸びる。

鉄生産関連遺物（第130図、図版66）

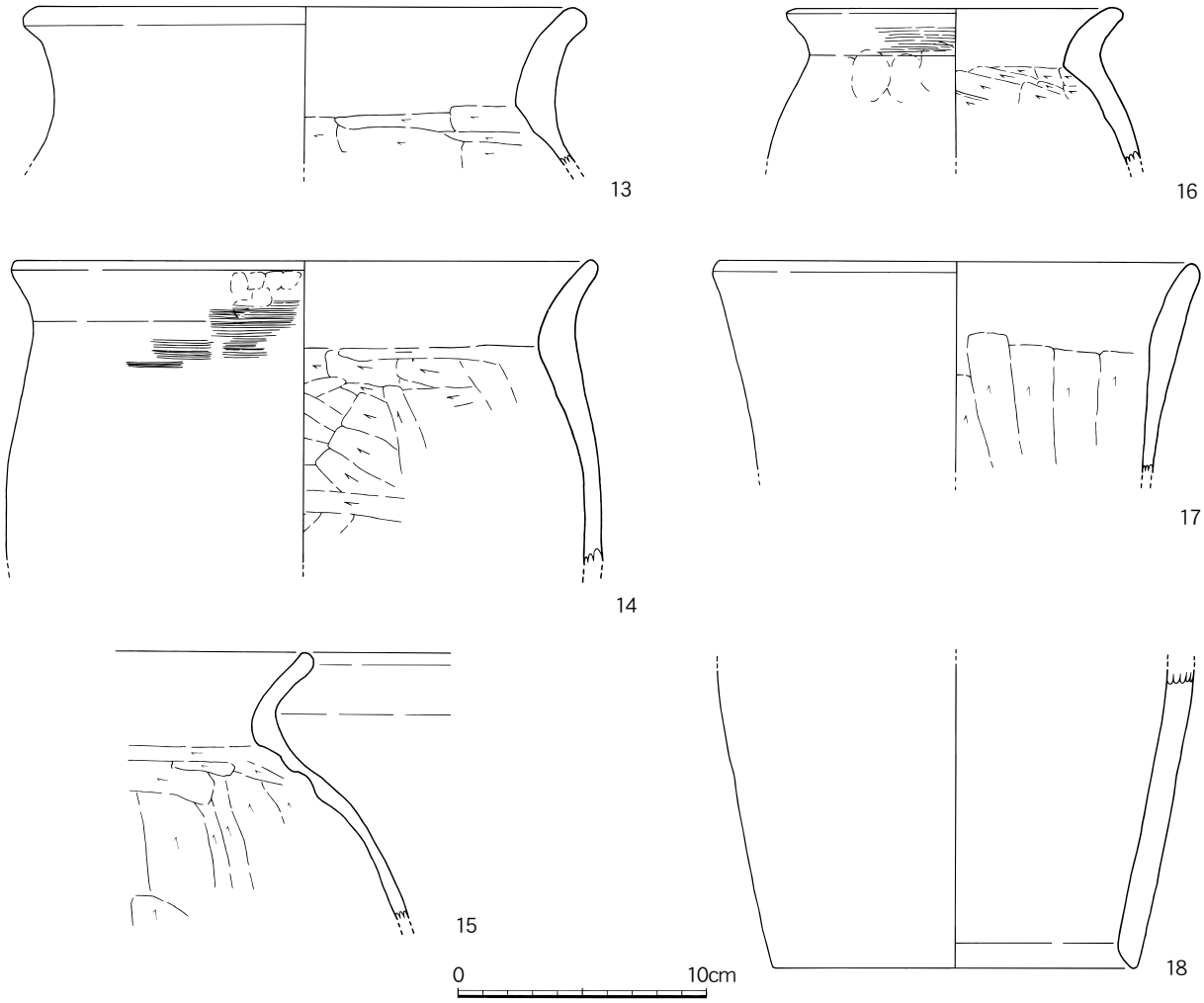
１～３は表土中より出土し、４は６号住居跡より、５はP59より出土した。

１～４は椀型滓である。底面に椀状の湾曲部が残存する。５は鞴羽口の破片か。円形の穴があき、外面には鉄が溶着している。全体に被熱のため赤くなっている。

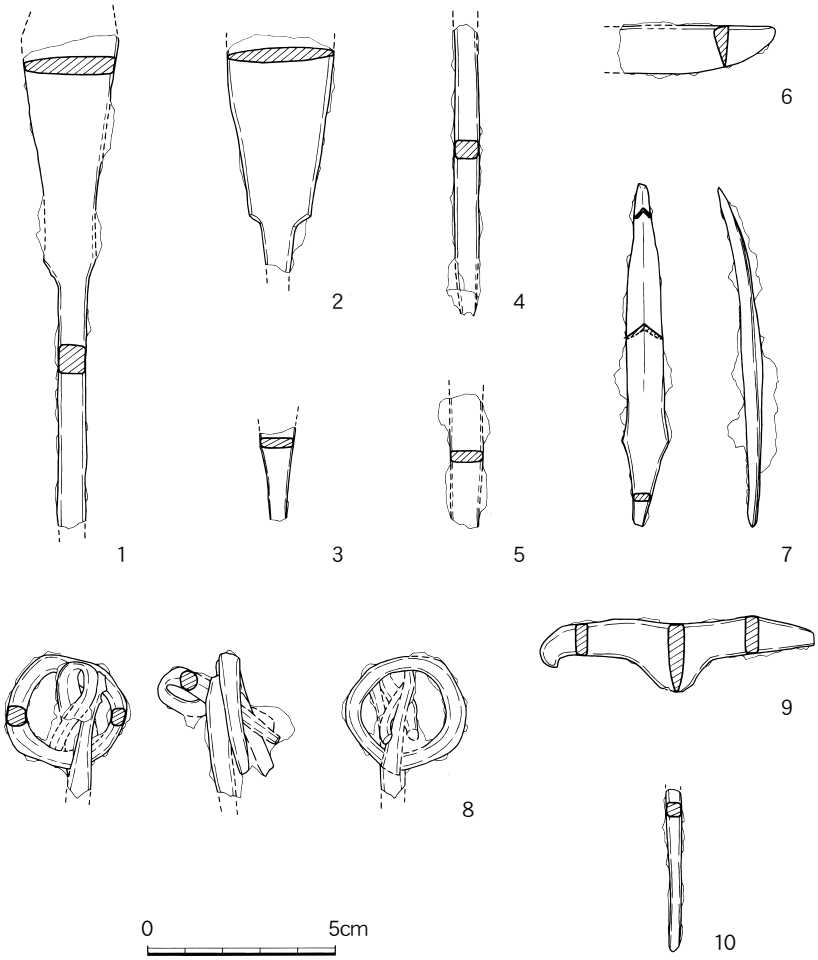
石器（第131、132図、図版66、67）

１は４号住居跡より出土した紡錘車である。緑泥片岩製で径は約7.1㎝の円形で中央に６㎜程度の穿孔が施される。２は24号住居跡より出土した紡錘車である。緑泥片岩製で径は約4.1㎝の円形で中央に８㎜程度の穿孔が施される。３はP-４より出土した紡錘車である。滑石製で径は約3.7㎝の円形で中央に８㎜程度の穿孔が施される。４はP-131より出土した紡錘車である。滑石製で径は約4.9㎝の円形で中央に８㎜程度の穿孔が施される。５は表土中より出土した紡錘車である。安山岩製で径は約５㎝の円形で中央に８㎜程度の穿孔が施される。

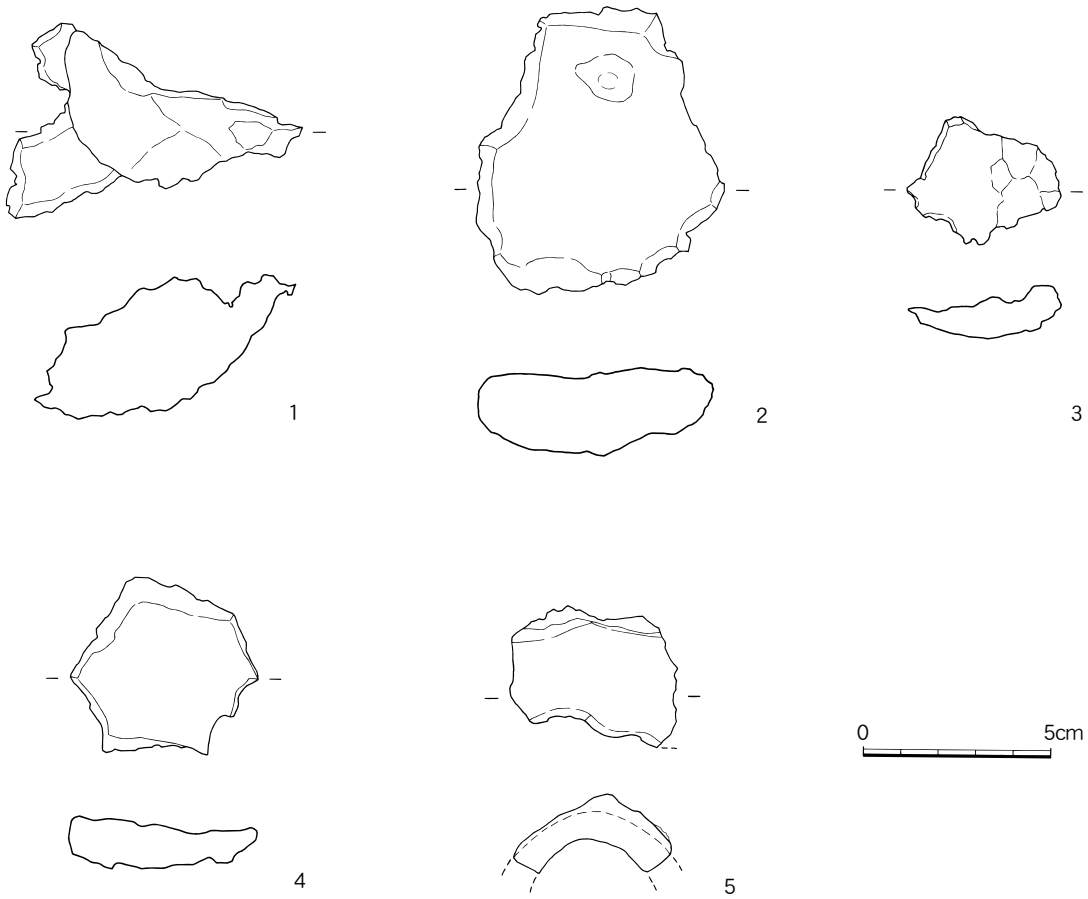
６～８は砥石である。６は２号竪穴状遺構より出土した砂岩製の砥石である。上面に縦方向の擦り痕跡が残存する。７は表土中より出土した泥岩製の砥石である。縦方向の擦り痕跡と斜め方向の



第128図　遺物包含層グリット出土遺物実測図②（1/3）

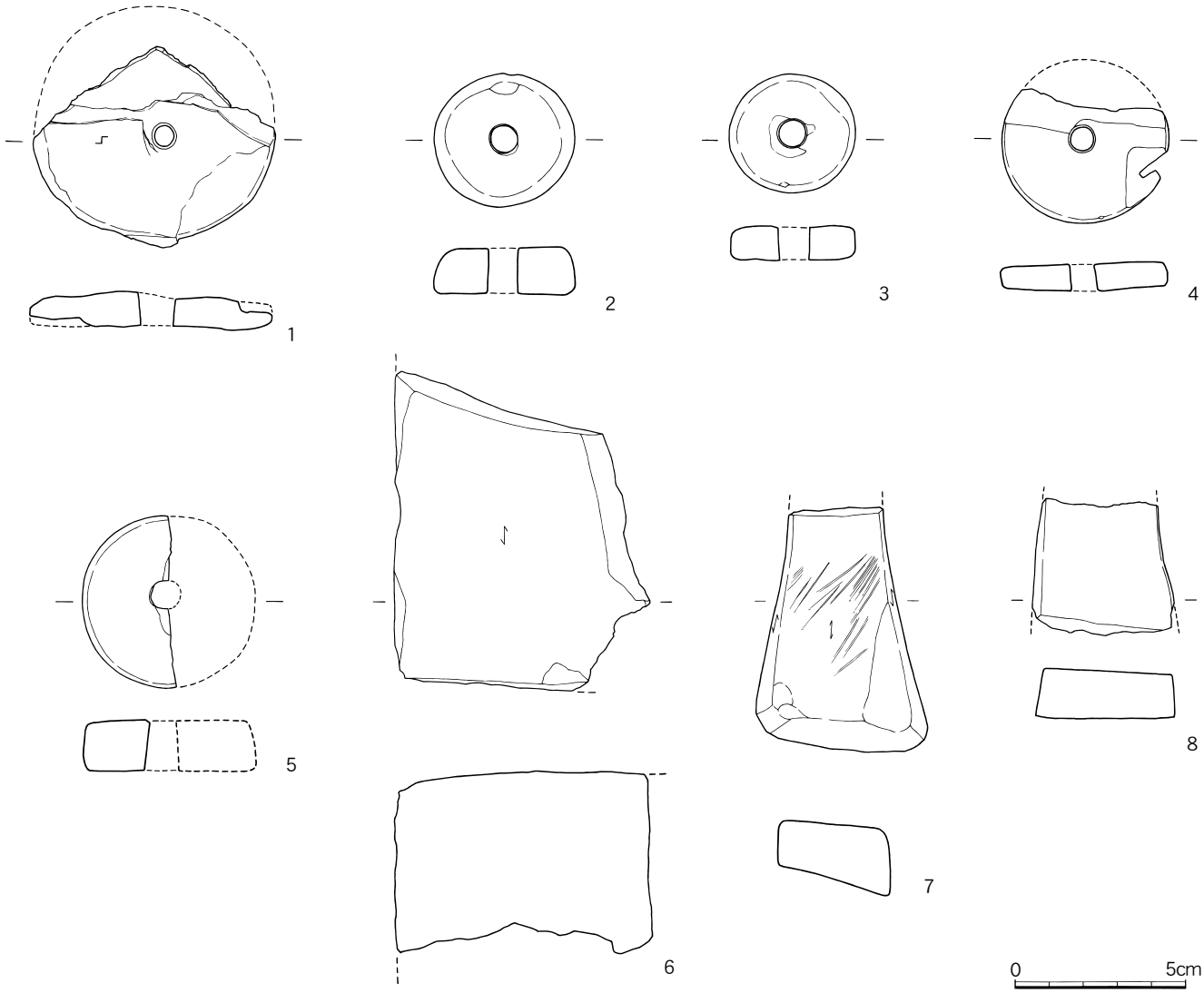


第129図　鉄器実測図（1/2）



第130図　鉄生産関連遺物実測図（1/2）

擦過痕が残存する。８は２号竪穴状遺構より出土した砂岩製の砥石である。縦方向の擦り痕が残存する。９～16は打製石器である。遺構に伴っているものもあるが、いずれも流れ込みの可能性が高い。９は25号住居跡より出土した腰岳産黒曜石製の石鏃である。基部を窪ませる。10は風倒木痕より出土した腰岳産黒曜石製の石鏃である。２等辺三角形状を呈する。11は３号溝より出土した腰岳産黒曜石製の剥片鏃である。縦方向の剥片を加工しており、刃部と基部に加工を施す。12はＰ267より出土した安山岩製の剥片鏃である。横方向の剥ぎ取り痕跡を残す。13は表土中出土の黒曜石製の２次加工剥片である。一部欠損しており、上面には打面が残存する。黒曜石はやや粒子の入りが多い。14は１号溝より出土した安山岩製の石匙である。２次整形時の剥離面が残存する。左部分を欠損し、刃部には丁寧に加工が施される。15は安山岩製の石匙で、両面ともに丁寧なつくりである。一方の刃部を欠損する。16安山岩製のスクレイパーである。表面には打瘤が残存し、刃部には加工が施される。17～18は装飾品と考えられる遺物である。17はＰ236より出土した不明石製品である。玦状耳飾が欠損したものを再加工したものと考えられる。上面には穿孔痕跡が半月状に残存し、折れ面と考えられるその両側には研磨されている。上面には２箇所３㎜程度の穿孔が施される。表面には縦方向の擦過痕が残存しており、なんらかの使用の痕跡とも考えられる。18は表土中より出土した不明石製品である。結晶片岩製で、径３㎝程度の円盤状に仕上げられ、中央には１㎜程度の孔が施される。

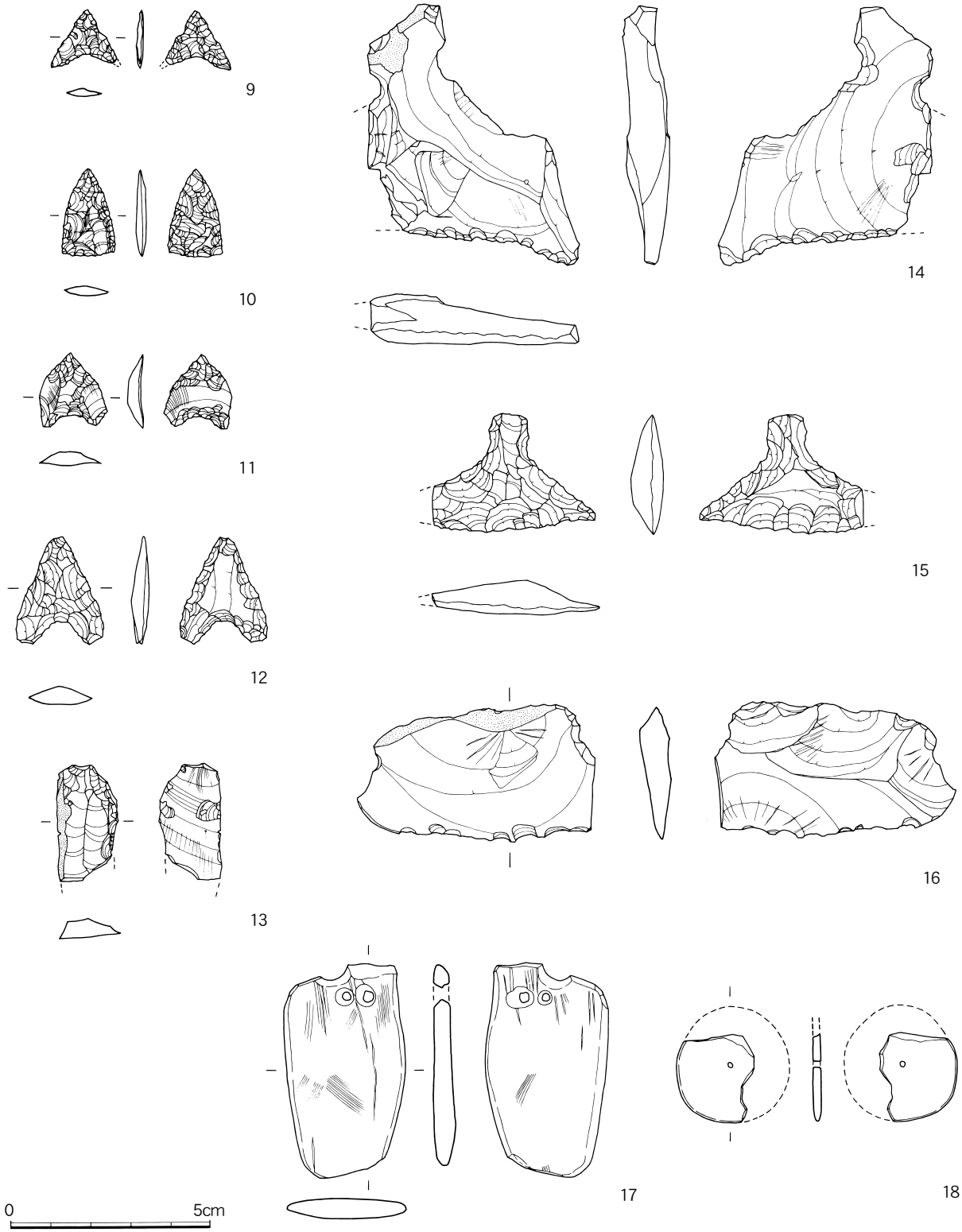


第131図　石器実測図①（1/3）

その他の遺構出土遺物（第133図、図版67、68）

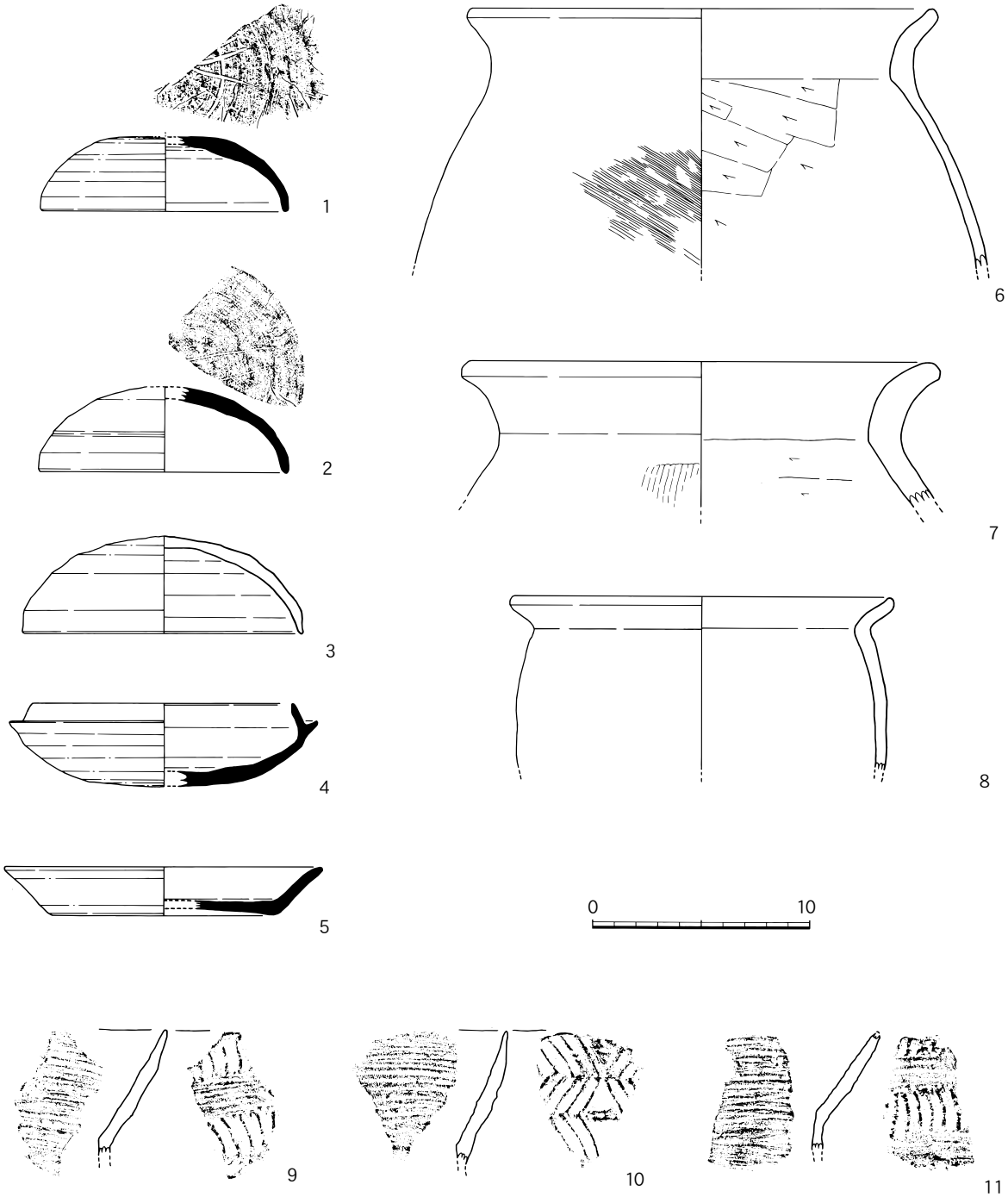
各遺構に伴わない表土中などから出土した遺物について説明を加える。

１は表土中出土の須恵器坏蓋である。体部から口縁部にかけて緩やかに湾曲する。天上部にはヘラ記号が施される。２は表土中出土の須恵器坏蓋である。天上部にはヘラ記号が施される。３は土師器蓋である。体部から口縁部にかけて緩やかに湾曲する。４は表土中出土の須恵器坏身である。逆刺を持ち、口縁部はやや内傾する。５は表土中出土の須恵器皿である。口縁部は外に開く。６は



第132図　石器実測図②（1/3）

表土中より出土した土師器甕である。頸部がややすぼまり口縁部は外湾する。７は表土中より出土した土師器甕である。口縁部は外に開く。８は風倒木痕より出土した土師器甕である。口縁部は小さく外に開く。９は縄文土器の深鉢である。頸部にて屈曲させ、口縁部は外に開く。外面には縦方向の凹線による文様が施され、刺突文によって区分けされた間には条痕が残る。内面は２枚貝条痕が施される。10は縄文土器の深鉢である。頸部にて屈曲させ、口縁部は外に開く。外面には縦方向の凹線による文様が施され、刺突文によって区分けされた間には条痕が残る。内面は２枚貝条痕が施される。９とほぼ同様な文様である。11は縄文土器の深鉢である。頸部にて屈曲させ、口縁部は外に開く。外面には縦方向の連続山形文が凹線により作出され、文様の折れ曲がる部分に刺突が加えられている。



第133図　その他の遺構出土遺物実測図（1/3）

Ⅳ　考察

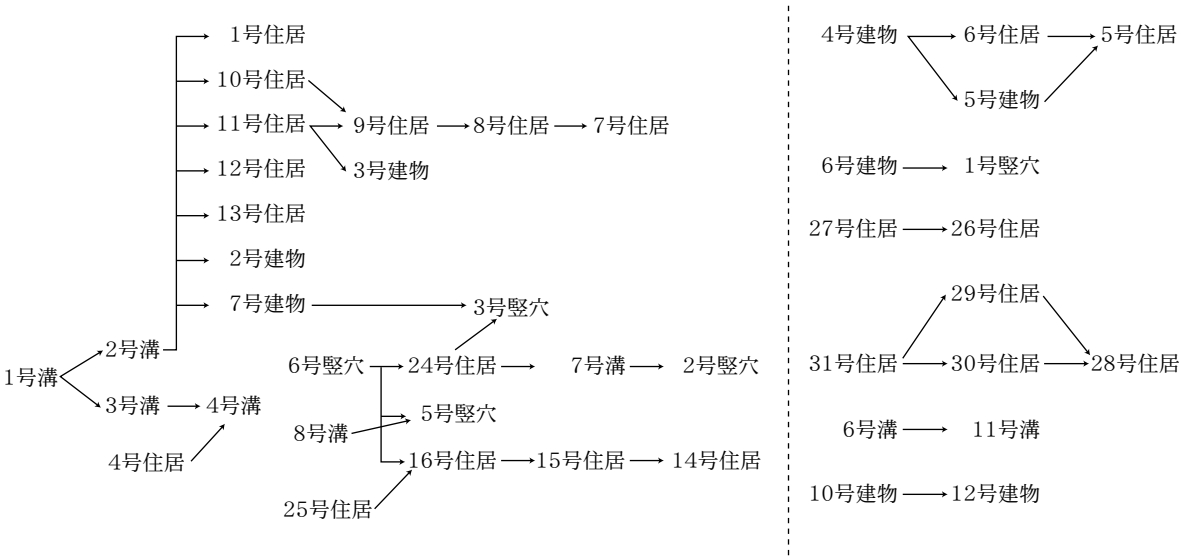
⑴　各遺構の番号の対照と切り合い関係図

前章において各遺構の概要について概説をしてきたが、欠番の存在や遺構名称の変更などの理由から、本報告において遺構番号などを変更しており、以下にその対照表をつけるので参照していただきたい。なお、過去日田市の年報等にて概要を報告した際にはすべて調査時の遺構番号を元に報告している。

表２　遺構番号対応表

調査時遺構番号	本報告時の遺構番号	調査時遺構番号	本報告時の遺構番号	調査時遺構番号	本報告時の遺構番号
32号竪穴住居跡	22号竪穴住居跡	P15	9号掘立柱建物	P91	11号掘立柱建物
P210	7号掘立柱建物	P16	9号掘立柱建物	P90	11号掘立柱建物
P362	7号掘立柱建物	P17	9号掘立柱建物	P89	11号掘立柱建物
P367	7号掘立柱建物	P22	9号掘立柱建物	P88	11号掘立柱建物
P366	7号掘立柱建物	P18	9号掘立柱建物	P87	11号掘立柱建物
P309	7号掘立柱建物	P109	9号掘立柱建物	P95	11号掘立柱建物
P310	7号掘立柱建物	P23	9号掘立柱建物	P94	11号掘立柱建物
P298	7号掘立柱建物	P20	9号掘立柱建物	P93	11号掘立柱建物
P297	7号掘立柱建物	P101	10号掘立柱建物	P125	12号掘立柱建物
P286	7号掘立柱建物	P104	10号掘立柱建物	P121	12号掘立柱建物
P47	8号掘立柱建物	P107	10号掘立柱建物	P126	12号掘立柱建物
P48	8号掘立柱建物	P106	10号掘立柱建物	P132	12号掘立柱建物
P49	8号掘立柱建物	P109	10号掘立柱建物	P231	12号掘立柱建物
P43	8号掘立柱建物	P134	10号掘立柱建物	P234	12号掘立柱建物
P40	8号掘立柱建物	P160	10号掘立柱建物	P235	12号掘立柱建物
P41	8号掘立柱建物	P93	11号掘立柱建物	大流路	11号溝
P254	8号掘立柱建物	P92	11号掘立柱建物	1号小竪穴住居	7号竪穴状遺構
				30号土坑	17号土坑

また、前章において記述した遺構の切り合い関係を整理すると以下のとおりである。



⑵　遺構の時期について

前章において報告した内容をもとに、本節では各遺構の時期について検討を加えた上で、次節に於いて遺跡の変遷過程について述べたいと思う。

縄文時代

遺構は15号土坑出土土器（第122図37）が該当するものと考えられる。約１個体分の深鉢が出土しており、ややキャリパー形口縁の退化した形態をとり、粗い縄文の上にヘラ状（おそらく半竹管状工具）の刺突を用いて平行沈線により文様帯を区画し、さらに、三角文をモチーフとしている点などから、田中氏の新延Ⅶ期（註１）に相当するものと考えられ、中期前葉後半に相当するものと考えられる。ほかにも表土中より出土した土器（第133図９～11）には半竹管状の工具にて凹線文、刺突文が施されるなど、類似する文様構成などからほぼ同時期の年代が想定される。

さて、縄文時代の遺物としては、ほかにも石器類の出土が見られる。そのほとんどが古墳時代や古代の遺構に伴って出土しており、当該時期の混入の可能性が高い。第132図９～12は石鏃であるが剥片鏃も見られ、大きさもやや小ぶりである。これらの特徴から中期後期の可能性が考えられる。なお、石材については石鏃や剥片類には黒曜石が用いられ、縞状の模様が見られることから、佐賀県伊万里の腰岳産のものと考えられる。やや大ぶりの石匙等にはサヌカイト質の硬質安山岩が用いられており、これらの流通がこの地域まで及んでいたことを物語っている。さらに、特徴的な遺物として、第132図17、18の装飾遺物の存在があげられる。特に17は碧玉製の玦状耳飾の再利用品と考えられ、また18は円盤状の加工が施されるなど首飾りなどに用いられていた可能性が考えられる。玦状耳飾が破損したものとしてはやや細長いことから、前期後半以降の特徴を示している（註２）。これら装飾品の存在はこの近辺に集落が所在した可能性を示しているものと考えられる。

弥生時代

弥生時代の遺構は今回の調査ではまったく確認できなかったものの、９号竪穴住居跡、11号竪穴住居跡中より弥生時代中期のものと考えられる土器が出土している。おそらく混入遺物と考えられるが、流れ込みとするとしても周辺には当該時期の遺構が存在していた可能性が考えられる。

古墳時代

遺構は４、10、11、13、23、24、25、28～31号竪穴住居跡、１、８号建物１～３、５、10号溝が該当する。

４、25号竪穴住居跡、３号溝は須恵器坏蓋内面に形骸化した段を持つなどの特徴から陶邑編年のMT85期（註3）の範疇に収まるものと考えられ、土師器甕などは重藤編年８期（註4）に相当する。１、２号溝は出土した遺物の量が少ないことから時期を明確に確定しえないが、切り合い関係や２、３号溝が並行するようにつくられていること、埋土の状況などから３号溝とほぼ同時期の所産の可能性が考えられる。また、５号溝は埋土の類似性や２、３号溝と直交している点などから、ほぼ同時期の範疇に収まるものと思われる。

10、11、13、23、24、28～31号竪穴住居跡と10号溝は出土した須恵器坏蓋や坏身などの特徴などから、陶邑編年のTK43～TK209の時期に該当するものと考えられ、土師器甕などの特徴は

重藤編年の９期にあたるものと考えられる。１、８号建物は遺物の出土量は少なく小破片であるものの、１号建物より出土した土師器高坏（第90図１）は重藤編年８～９期、９号建物より出土した須恵器坏蓋（第90図25）は陶邑編年TK209期の範疇にほぼおさまると考えられる。また他の建物群とは主軸方向を違え、その軸方向が住居跡や溝と類似することなどからもこれらの建物群も上記の遺構群と同時期の範疇に収まるものと思われる。

また、10号溝などは流路と考えられ、遺物包含層グリットには陶邑編年MT85～TK209や山本編年ＩB期(註5)の範疇に収まる須恵器などの遺物が多数含まれることなどから、10号溝周辺から28～31号住居跡周辺はやや窪んだ地形を呈し、吉竹１～２期以降、大肥川の氾濫により埋没していった可能性が考えられる。これらを示すように６～９号溝などはそのほとんどが古墳時代の遺構を切って流れ、その上面に古代の遺構が形成されていることなどからも６世紀末～７世紀後半の間に大肥川が氾濫した可能性が考えられる。

以上の点からこれらの遺構は６世紀中頃から後半、６世紀末～７世紀後半時期に該当するものと考えられ、中頃と後半、６世紀末～７世紀後半の３時期に区分されるものと考えられる。中頃を１期、後半を２期、６世紀末～７世紀後半を３期と区分して以下に古墳期の遺構を説明する。

１期

当初１号溝が用水路として構築される。おそらくこの溝は４、25号竪穴住居跡とほぼ同時期に構築され、生活水路として機能していたと考えられるが、その後これら住居跡と並行するように２、３号溝へと改変され、住居跡を区切るようにしていることから、区画も意図された溝であったものと考えられる。また、ほぼ同時期と考えられる５号溝の存在は、これらの溝が集落を区画する目的が非常に高かったことを示している。

２期

１期に構築された溝、特に２号溝は機能しなくなり、その上面に住居跡が構築されるようになる。10、11、13号住居などは２号溝を切って構築されており、また、24号溝は住居跡と溝の位置が１m程度と非常に近接した位置に構築されるなど、この溝が埋没していたことを示している。ただ、切り合い関係から判断し得ない３号溝や５号溝が埋没していたかどうかは不明であり、あるいは集落域の拡大に伴い２号溝が廃絶された可能性も考えられる。また、住居跡群は10、11、13、23、24号住居跡と28～31号住居跡の２グループに別れ、それぞれの住居跡は切り合いながら近接した位置に所在している。カマド方向もやや異なる方向を向くものが見られることなどから、建替えの可能性が考えられる。また、建物もやや離れた位置に立替を行って所在していることから、同時期には数軒程度の単位で集落が存在していたものと考えられる。

３期

古墳期に構築された集落は大肥川の氾濫によって流され、特に遺物包含層グリット付近に流された遺物が堆積する。その後次第に安定を取り戻し、６～９号溝などの小川状の流路が流れるようになる。

古代

遺構は１～３、５～９、14～18、26、27号竪穴住居跡、１～12号建物、１～５号竪穴、１、９、13、14、16、18、20、21号土坑、11号溝が該当する。

26、27号竪穴住居跡は古墳時代の遺物の混入も見られるが、出土した須恵器坏蓋などの特徴から山本編年のⅡ期に該当するものと考えられる。同様に土師器の甕の特徴も田崎編年のⅡ期(註6)に相当するものと考えられることから、７世紀末～８世紀初頭の年代が考えられる。

２、９、15、16、17号竪穴住居跡、５、９号建物、２、３、５号竪穴、９、10、13、14、16号土坑から出土した須恵器坏蓋の端部をやや下方に折り曲げるようなつくりを呈するものが見られ、坏身は高台の位置もやや内側に付いており、底部と体部の境がやや不明瞭なもの見られることから、山本編年Ⅱ～Ⅲ期に該当するものと考えられる。また、土師器甕や鉢などの特徴から田崎編年のⅢ期に該当するものと考えられる。以上の点からこれらの遺構の時期は８世紀前半～中頃に相当するものと考えられる。また、これらの遺構の切り合い関係から７号建物もほぼ同時期の所産であると考えられる。また、５号建物周辺の２～４号建物は８世紀後半と考えられる住居跡群に切られていることから８世紀前半の年代の可能性が考えられる。また、１、３号竪穴住居は主軸方向がそれぞれ２、９号竪穴住居と同じであり、近接して建てられていることから、同時期の可能性が考えられる。さらに11号溝は土師器甕の特徴などからこの時期以降には流れていたものと考えられる。

５、６、７、８、14、18号竪穴住居跡、９号建物、１、４号竪穴から出土した須恵器坏蓋の端部が丸みを帯びやや下げるような退化したつくりのものが見られ、坏身は底部と体部の境が明瞭なものが見られることから、山本編年Ⅳ～Ⅴ期に該当するものと考えられる。また、土師器甕や鉢などの特徴は田崎編年のⅣ期に該当するものと考えられる。以上の点からこれらの遺構の時期は８世紀後半に相当するものと考えられる。また、切り合い関係から６号建物はこの時期よりも古くなるが、その主軸が直交する点などからほぼ同時期の可能性が考えられる。また、その時期が不明であるが、10～12号建物は住居群との切り合いもなく、６号と並列する位置関係にあることなどからここでは同時期として考えたい。

以上の点からこれらの遺構は７世紀末から８世紀後半に該当するものと考えられ、７世紀末から初頭、８世紀前半から中頃、後半の３時期に区分されるものと考えられる。それぞれ４期、５期、６期として区分し以下に古代の遺構について説明する。

４期

調査区西端で26、27号住居が確認されるのみである。３期の大肥川の氾濫が落ち着きを取り戻し、再び集落が営まれ始めたものと考えられる。

５期

調査区中央付近に住居跡や建物群が営まれ始める。中央に建物が４棟、その周辺に１～３、９号住居が配置され、やや離れた位置に７号建物、15、16、17号建物、２、３、５号竪穴などが構築される。前者と後者で２グループに分けられていたものと考えられ、それぞれ２～３軒単位にて生活が営まれていたものと考えられる。建物は住居の主軸とほぼ一致し、この建物を囲むように住居が構築されるなどかなり規格性をもって集落の配置が行われるようになったことを物語っている。また、この時期にはやや離れた西側に11号溝が流れていたものと考えられ、この溝の性格から小川のような状況を呈していたものと考えられる。おそらく、この溝が集落の西の端にあたり、これより東側に集落が展開するものと考えられる。逆に東側はやや離れた位置に９号建物が建てられ、これより東側にはほとんど当該時期の遺構が確認されないことから、集落の東端は９号建物より以西に限られていたものと考えられる。

６期

５期よりもやや北側にずれたようにして住居跡と建物が構築される。集落の範囲は５期とほぼ同様で11号溝～９号溝までの間に限られ、住居群は５、６号竪穴住居、７、８号竪穴住居がそれぞれ切りあって構築され、ほかにも14、18号住居がやや離れた位置に構築されるなど、住居跡は同時期には３～４軒程度が営まれていたものと考えられる。建物は３棟ほどが並行して建てられており、建替えにて10号建物が構築されていた可能性が考えられる。ただし、この内６号建物は本遺跡内でもっとも大きいことから、通常の建物とはその機能が異なっていた可能性も考えられる。また、この建物群の周囲に住居が建てられることは５期と同様の傾向を示している。

以上古代の遺構について概観してきたがこの時期の特殊な遺構として１～４号竪穴遺構の存在が上げられる。そのほとんどが用途不明であるが、規格性が非常に類似しており、１、３号のように建物の近辺に構築され、主軸方向が建物軸と直交している点などが注目される。切り合い関係が確認されてはいるものの、建物の施設に付随する可能性も考えられ、今後の調査での類例の増加に期待したい。

また、16、18号住居跡より朱墨土器が出土し、15号住居からは円面硯の破片と考えられる須恵器などが出土している。さらには、１号竪穴より瓦の破片が、４号竪穴より瓦塔の破片と考えられる破片などが出土するなど、この集落が一般の古代集落とは趣を異にしていることを示している。また、７号住居跡からは明確な痕跡の残る製塩土器が出土しており、その流通にも注目される。柱穴等からの出土であるが、鉄滓や鞴羽口が出土している点はこの集落内にて鍛冶が行われていた可能性を示している。集落内鍛冶の可能性も考えられる。

中世

この時期の遺構は本調査区内では確認できていない。基本層序にて確認されている水田層から出土した土師器坏があり、内黒の土器で、器形の特徴などから森編年(註8)の九州系Ⅳ類Ⅶ～Ⅷ期に該当するものと考えられる。また、試掘調査では調査区北側にて中世の水田層が発見され、陶磁器が出土している。これらはその特徴から11世紀から12世紀に該当するものと思われる。すなわち、本調査区周辺では８世紀代に集落が最盛期を迎えた後、10世紀後半にはこの一帯が廃絶され水田化されたものと考えられる。その後この水田は中世期を通じて水田として営まれていたものと考えられる。これらの時期を７期として考えることとする。

(3) 大肥吉竹遺跡の集落変遷

さて、前節において検討してきたが本遺跡では大まかに縄文時代、古墳時代、古代の集落の存在、中世の水田層の存在が確認された。以下、各時期の変遷と特徴について概観する。なお、古墳時代中世に関しては前節において時期区分を行っていることから、この時期区分を元に解説し、縄文時代と古墳時代～中世に分けて説明することとする。

縄文時代

この遺跡で最初に生活の痕跡が確認されるのは縄文時代で、中期の船元式土器を伴う遺構の存在が確認された。この時期、西九州では並木・阿高式土器が盛行しているのであるが、東九州は船元式土器の分布範囲に含まれる。(註8) このなかで、両者の分布範囲の中間にあたり、筑後平野の最奥

第134図　遺構変遷図（1/1000）

にあたる本遺跡において船元式土器が発見されていることは非常に注目される。豊前、豊後の瀬戸内海側から有明海へと抜ける際、日田市はこの交通ルート上に位置しており、縄文時代においても同様な状況であったものと考えられる。本遺跡出土の船元式土器はこのルートに乗って西九州へと伝播していったことを物語っており、阿高式土器が伴っていないことなども両者の伝播の範囲を考える上で重要な問題を提起している。

また、遺跡の所在する大肥川一帯からは近年の調査により縄文時代の遺跡が数多く所在することが明らかとなってきており、大肥条里下河内地区(註9)、古屋敷遺跡(註10)では縄文時代前期の遺構や包含層などが確認されており、大肥祝原遺跡(註11)では縄文時代後期から晩期を中心とした集石などが確認されている。これらの遺跡の多くは大肥川沿岸の河岸段丘上に位置しており、河川沿いに集落が点々と所在していた可能性を物語っている。本遺跡では確認できた遺構は15号土坑のみであるが、15号土坑周辺が近年の削平を受けており、古墳や古代の遺構面より下がっていたことから確認されたものと考えられ、本来は縄文時代の遺構面は検出された古墳時代の遺構面の下層に広がっていた可能性が高い。なお、この時期以降の生活の痕跡は確認されず、弥生時代の遺物なども見つかるものの、流れ込みであることから、古墳時代に至るまで大肥川の氾濫源であったものと思われる。

古墳時代～中世

古墳時代の６世紀中頃～後半の１～２期に至るとこの一帯で本格的に集落が営まれ始める。区画の意味も持つ水路が伴うなど非常に高い計画性が感じられる。この時期は数軒の住居が単位をなして存在していたものと考えられ、大規模な水路の存在などからもやや規模の大きな集落であった可能性が考えられる。同時期の集落では、周辺には大肥遺跡B、C区(註12)、大肥中村遺跡(註13)などで住居跡が確認されており、周辺部に集落が点在

していたことがわかっている。

その後、７世紀に至る３期において大肥川の氾濫により遺跡一帯が流され、氾濫が安定するにしたがって、７世紀の末の４期に再び集落が営まれるようになる。４期では２軒程度の住居が確認されるのみで、集落が大規模化するのは８世紀代に至る５、６期である。調査区の中央部付近に数軒の住居グループが建物を中心として集落が構築される。これらの住居、建物群は非常に近接し、さらに幾度かの建替えにおいても５期と６期とでは非常に近接した位置、あるいは切り合う位置に建てられる。しかも、その居住範囲は厳密に決められていたものと考えられ、調査区西側の11号溝と東側の９号建物周辺までの範囲に限られ、この範囲を外れる場所に当該時期の遺構がほとんど存在していないのである。この居住範囲の西側は大肥川より流れる水が流れていることから居住域として利用されなかったとしても、東側に遺構が広がらない点は注目される。この東側一帯には時期は不明であるが、風倒木痕と考えられる不整形の掘り込みが多数見られた。時期を確定できていないことなどから推測の域を出ないが、この一帯が集落に近接する森林域であった可能性が考えられる。このことから、推測される本遺跡の集落範囲は非常に限定されており、この範囲を拡大することなく集落域が保たれていたことを示している。同時期の集落は大肥中村遺跡でも確認されており、古墳期とほぼ同地域に集落が展開していたことを示している。このような状況が、大宝律令の制定の影響を受けていたものであるのか今後検討する必要がある。ただ、本遺跡の北側は未調査であり、試掘調査ではこの地域まで遺跡の存在が確認されていることから、集落がこの一帯まで広がっていた可能性は高いが、どの程度の広さであったのかは推測の域を出ない。

その後、古代末期に至る10世紀末から11世紀代以降の７期にはこの集落は廃絶され、水田化される。『豊後国田図帳』によれば大肥川流域は「大肥の荘」と呼ばれる荘園があり、大宰府天満宮『天満宮安楽寺草創日記』によれば1032年には安楽寺領となっていたとされている。(註14) 本遺跡の水田化は大肥の荘の成立前後の時期と緊密に関係している可能性が高いと言える。

⑷　朱墨土器について

16号住居跡と18号住居跡より２点の朱墨土器が出土している。16号住居出土の朱墨は３文字が書かれており、「□度太」あるいは「□度大」と書かれている。最初の文字が不明瞭であるが、くさかんむりが残っていることから、“花”の可能性が高く、「花度太（大)」とかかれていたと推測される。この「花度太」は万葉仮名による当て字であり、「門田」を意味すると考えられる。(註15)

18号住居より出土した朱墨土器はその文字が不明瞭であるが、３文字が書かれていたようであり、その真ん中の文字は「度」に非常に類似している。あまりに不明瞭であるため断言することはできないが、「□度□」と書かれていた可能性が考えられ、16号出土の朱墨土器と類似する文字の可能性が考えられる。さらにこの18号住居出土の朱墨土器は内面に朱が残存し、転用硯としても利用されていたと思われる。また、16号住居跡と隣接する15号住居跡からは円面硯の破片と思われる須恵器が出土しており、硯とセットになっていた可能性が考えられる。

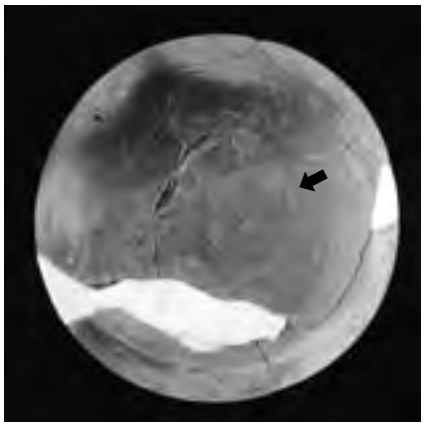
市内での文字資料の出土は現在のところ、大波羅遺跡(註16) にて「山」「田」、小迫辻原遺跡(註17) では「大領」、慈眼山瀬戸口遺跡(註18) からは「門」「林」と書かれた墨書土器、上野第１遺跡(註19) からは「豊馬豊馬」と書かれた刻書石製品が見つかっている。「山」「田」は山部、田部を意味するものの、ウジ名ではなく山に生活の糧を求める民・水田民を意味するものと考えられる。(註20)「大

領」は郡司の内上位の外従八位上に位置する大領を意味している。「門」「林」については不明であるが、「門」は公的施設に関連する地名に用いられることが非常に多い。(註21) また、大波羅遺跡では区画溝を伴う建物、小迫辻原遺跡ではコの字形に巡る建物群、慈眼山瀬戸口遺跡では官人クラスの居住区に限られる横板井桁組の井戸、上野第１遺跡からは住居跡群や道路状遺構などが確認されるなど、公的施設との強い関連が想定されており、上野第１遺跡は石井駅、小迫辻原遺跡、慈眼山瀬戸口遺跡は官衙関連施設の可能性が推定されている。

また、朱書きの文字である点に関しては、現在周辺遺跡での類例がなく、大宰府条坊跡77次調査(註22) SB100より朱書きで記号が施された土器が確認されている程度である。類例も少なく朱墨であることに何か特別な意味があったかどうかについては現在判断することはできない。

さて、本遺跡より出土した朱墨土器であるが、市内での類例などから判断すると、文字の出土する遺跡は公的施設と非常に関連する可能性が高いようである。本遺跡では瓦の出土も見られ、計画的な集落の配置が見られること、また前述しているように「門」の文字が書かれていることなどからも公的施設との関連が高いと判断される。また、硯とセットになっている点も非常に注目され、恒常的な文字の使用が行われていた可能性も考えられる。ただし、書かれた文字が集落内の一般民衆にどのように受容されていたかは推測の域を出ないが、18号住居跡出土土器がカマド祭祀に伴っている点は注目される。

本遺跡の住居の多くでカマド祭祀の痕跡が確認されている。『日本書紀』や『古事記』によれば火の神「カグツチ」、二神「オキツヒコ・オキツヒメ」がカマドの神として登場しており、本来カマドは家の神として神聖化されていたことを物語っている。(註23) 今回確認されたカマド祭祀の多



「山」銘墨書土器

「田」銘墨書土器

「大領」銘墨書土器

「豊馬豊馬」銘刻石製品

「門」銘墨書土器

くは廃棄時の祭祀であり、18号住居出土の朱墨土器も同様な例を示すものと考えられる。平川氏はカマド祭祀に伴う墨書土器の出土類例から墨書土器をカマドに伏せて置き、カマドを廃棄する際にカマド神を封じ込める目的があったのではないかと解釈している。18号住居朱墨土器の出土状況も同様に坏を伏せて置かれていることなどから、同様の意味を持つ可能性が考えられる。この文字の書かれている土器は祭祀形態に付随する信仰の対象である可能性が高く、文字そのものが祭祀の対象として捉えられていた可能性が高いと考えられる。(註24)

以上、本遺跡の文字資料について検討してきたが、出土量も少ない上に墨書土器が見られないなど、現時点でこの文字にどのような意味があったのか断定することはできない。前述したような例などは一つの可能性として今後の検討課題といえる。

(5) 大肥吉竹遺跡の位置付け

さて、前節までの検討において、本遺跡の集落変遷と特徴について述べてきた。ここではそれらを踏まえて、特に古代の集落の歴史的位置付けについて検討したいと思う。

前節までの検討の古代の特徴は

① 8世紀代になって集落が大規模化する。

② 集落域が厳密に決められていた。

③ 朱墨土器や硯、瓦などの特殊な遺物を持つ。

といった点があげられる。さらに、もう一点として

④ 本遺跡が大肥川流域の沖積地の最奥部に位置している

と言う特徴があげられる。現在の県境、江戸期においては郡境に隣接している。このような特徴から、本遺跡の持つ意義を検討するには、古代の郷制との関連を検討する必要がある。『豊後国風土記』『倭名類聚集』によれば、律令期の日田郡には「在田、日理、父連、石井、夜開」の５つの郷があり、１つの駅があったとされる。(註25) このうち、前４つの郷は市内の有田、亘理、刃蓮、石井と現在の地区に比定されており、駅に関しても石井に推定されている。上野第１遺跡の発掘調査で発見された「豊馬豊馬」銘の刻書土器はこの駅関連の施設であることを示している。ともあれ、残る「夜開郷」はその比定地が確定しておらず、現在の“夜明”の地名が残ることから、大肥川流域とされる見解(註26)や日田盆地北部の花月川流域とする見解(註27)などがある。

さて、今回の調査成果はこの郷の比定地と非常に関連するものと考えられる。①、②の調査成果は律令期になって本遺跡に比較的大きな集落が作られたとを示しており、③の調査成果よりこの集落が通常の集落とは異なった意味を持っていたことを示している。このような一般集落とは異なる本遺跡は、郷の中心的存在として位置付けることが可能ではないかと考えられる。ただ、郷は50の郷戸からなっていたとされ、現在確認されているその他の古代の集落は大肥中村遺跡に見られるのみであることから、周辺集落の展開が不明瞭である。本遺跡の調査成果をもってただちに「夜開郷」の比定地を確定することは難しいが、多分にその可能性を秘めているといえる。

次に④であげている本遺跡の所在する位置である。本遺跡の所在する場所は大肥川流域に展開する沖積地の最奥にあたり、それより上流は次第に険しい谷地が形成されている。郷の中心として所在するにしても、やや下流に発達した沖積地に比べると奥地に位置している点が注目される。この箇所は江戸期には筑前と豊後の国境となっており、現在福岡県宝珠山村と日田市の境に国境石が残

されている。上座郡と日田郡との国境であるため、「従是北筑前国」「上座郡福井村口」と刻まれ、天保５年の銘が刻まれている。これを以てこの箇所が古代の郷境であったかどうかを判断することはできないが、そのことを示すように中世期には宝珠山村は筑前国上座郡、豊前国田川郡の地頭職となる大蔵姓宝珠山一族が居住するようになるなど、郡が宝珠山から大肥一帯にかけて複雑に入り組み、変更されていた可能性が考えられる。(註28) また、福岡県杷木町には上座郡杷木郷が置かれ、豊前との国境に近い要所であることから杷木駅が置かれていた。この内、杷木郷の範囲がどこまでなのかは確定し得ないが、宝珠山村や小石原村は上座郡の別の郷、壬生や何束等の郷名に該当する可能性が考えられている。(註29) さらに、日野氏の研究によれば、筑前国嘉麻郡には網別駅とともに大隈付近に駅家が置かれていた可能性が高く、日田郡司日下部氏との関係も深く、日田との連絡を重視していた可能性があると推測されている。(註30)

このようにこの一帯は古代の文献上では空白地帯となっており、さまざまな解釈が行われている。このような文献上の解釈に一石を投じる貴重な資料として本遺跡の調査成果は非常に大きなものである。ただ、少なくとも上座郡や嘉麻郡と日田郡との交通要所としての可能性が高いこと、何らかの公的施設として使用されていた可能性は高いことを考えると、郷の中心となる集落であり、交通においても拠点となる集落であった可能性は十分に考えられる。

Ⅴ　終わりに

今回の調査は、２月の厳冬の時期に始まり５月中旬までの３箇月半と短い期間で終了する必要があるにもかかわらず、予想以上の遺構密度に悩まされるなど非常に困難を極めた。圃場整備事業ということもあり、調査期間の大幅な延長もままならず、地元の方々にも多大な協力をいただきながら調査を実施した。特に調査作業員には大変に苦労を強いることとなり、冬は雪の降り積もる中、谷間を抜ける小石原おろしの強風にさらされながらの調査となった。また、春に入ると雨も多く、調査期間がないことから、休日・天候関係なく調査を実施するなど苦労に耐えていただいた作業員の皆様には感謝してやまない。また、調査は時間を短縮して行うことを前提として行い、また激しい遺構の密集度のため十分な遺構の確認が出来ていない点が多かったことは大変反省している。

発掘調査に参加された皆さん

註１）田中良之　「Ⅵ　考察　１．新延貝塚の所属年代と地域相」『新延貝塚』鞍手町埋蔵文化財調査会　1980

註２）鈴木道之助　「Ⅵ　装飾品としての石器　(2) 耳飾り」『石器入門辞典―縄文』柏書房　1991

註３）田辺昭三　『陶邑古窯跡群Ⅰ』平安学園考古学クラブ　1966

註４）重藤輝行　「Ⅳ　おわりに　１．仁右衛門畑遺跡を中心とした浮羽郡の古墳時代土師器編年」『仁右衛門畑遺跡Ⅰ』福岡県教育委員会　2000

註５）山本信夫　「北部九州の７―９世紀中頃の土器」『古代の土器研究―律令的土器様式の西東―』古代の土器研究会第１回シンポジウム資料集　1992

山本信夫　「4. まとめ　(1)型式の設定と編年」『宮ノ本遺跡　Ⅱ』太宰府市教育委員会　1992

山本信夫　「統計上の土器―歴史時代土師器の編年研究によせて」『九州上代文化論集』乙益重隆先生古希記念論文集刊行会　1990

註６）田崎博之　「Ⅲ　干潟遺跡出土土器の編年―特に土師器を中心として―」『干潟遺跡Ⅰ』福岡県文化財調査報告書59集　福岡県教育委員会　1980

註７）森　隆　「西日本の黒色土器生産（上・中・下)」『考古学研究』第37巻第２、３、４号　1990、1991

森　隆　「Ⅲ　土器・陶磁器　2.黒色土器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社　1995

註８）田中良之　「中期・阿高式系土器の研究」『古文化談叢』第6集1979

註９）行時志郎　「大肥条里下河内地区」『平成12年度（2000年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001

註10）平成15年度に日田市教育委員会が発掘調査を実施した。

註11）若杉竜太　「大肥条里祝原地区」『平成11年度（1999年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2001

若杉竜太　『大肥祝原遺跡・大肥上村遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第45集　日田市教育委員会　2003

註12）渡邉隆行　「大肥条里大肥地区」『平成14年度（2002年度）日田市埋蔵文化財年報』日田市教育委員会　2003

渡邉隆行　『大肥遺跡Ⅰ』日田市埋蔵文化財調査報告書第50集　日田市教育委員会　2004

註13）行時志郎　『大肥中村遺跡―発掘調査概報』日田市教育委員会　2003

註14）西別府元日　「第Ⅱ編　古代・中世　第Ⅰ章古代　第４節　大開発時代の日田」『日田市史』1990

註15）平川南先生（国立歴史民俗博物館副館長）のご教授による。

註16）渡邉隆行編　『大波羅遺跡』日田市埋蔵文化財調査報告書第29集　日田市教育委員会　2001

註17）行時志郎編　『小迫辻原遺跡発掘調査概報』日田市教育委員会　1990

註18）坂本嘉弘　『慈眼山瀬戸口遺跡―平成３年度国家公務員合同宿舎日田住宅２号棟建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告概報―』大分県教育委員会　1992

註19）田中裕介　『上野第１遺跡―日田市高瀬遺跡群の調査３』一般国道210号バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ　大分県教育委員会2001

註20）平川南　「第４章　墨書土器と古代の村落」『墨書土器の研究』吉川弘文館　2000

註21）平川南先生（国立歴史民俗博物館副館長）のご教授によれば、「門」が含まれる墨書土器が出土する遺跡は官衙関連施設が多く見られ、地名などに用いられることが多かったとのことである。

註22）中島恒次郎　「条坊跡77次調査」『大宰府条坊跡ＸＩＶ』太宰府市の文化財第48集　太宰府市教育委員会　2000

註23）　宮田浩之　「第３編第３章第２節１　かまどのまつり」『小郡市史』第１巻通史編　地理・原始・古代　小郡市史編集委員会　1996

註24）平川南　「第４章　墨書土器と古代の村落」『墨書土器の研究』吉川弘文館　2000

註25）西別府元日　「第Ⅱ編　古代・中世　第Ⅰ章古代　第２節　律令制制度下の日田」『日田市史』1990

註26）日野尚志　「日田周辺における古代の歴史地理学的研究」『九州文化史研究所紀要』第16号

註27）後藤宗俊　「先史・古代の日田地方の開発と交通」『大分県日田盆地における開発史的総合研究』別府大学2001

飯沼賢司　「古代から中世における日田盆地の自然環境と開発」『大分県日田盆地における開発史的総合研究』別府大学2001

これらの中、２説の存在について語っており、中・近世では大肥川流域は亘理、三和町、財津町が夜開郷とされており、夜明の地名は明治に入ってから作られた地名であるとされる。

註28）『宝珠山村史資料』宝珠山村教育委員会

註29）『杷木町史』杷木町市史編纂委員会　1981

註30）日野尚志　「日田周辺における古代の歴史地理学的研究」『九州文化史研究所紀要』第16号

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第2図-1	2トレンチ	土師器	杯					回転ナデ	回転ナデ	A・B	良	灰赤褐色	灰赤褐色	
第2図-2	2トレンチ	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第2図-3	2トレンチ	青磁	碗					回転ナデ	回転ナデ	精良	良	緑灰色	緑灰色	
第2図-4	3トレンチ	青磁	碗					回転ナデ	回転ナデ	精良	良	緑灰色	緑灰色	
第2図-5	27トレンチ	白磁	碗					回転ナデ	回転ナデ	精良	良	灰色	灰色	
第6図-1	北壁トレ	土師器	坏			7.7		回転ヘラケズリ・回転ナデ	黒色・ミガキ	A・B・C	良	淡黄褐色	黒色	
第13図-1	2号住居	須恵器	蓋	13.3			2.7	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ・回転ナデ後ナデ	B	良	灰色	灰白色	墨付着？・板状圧痕
第13図-2	2号住居	須恵器	蓋	(12.9)			2.2	回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第13図-3	2号住居	須恵器	蓋	(14.3)			1.5	回転ヘラ切り・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第13図-4	2号住居	須恵器	蓋	(15.3)			2.0	回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第13図-5	2号住居	須恵器	蓋	(12.5)			1.5	回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第13図-6	2号住居	須恵器	蓋	(13.8)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第13図-7	2号住居	須恵器	蓋							B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第13図-8	2号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第13図-9	2号住居	須恵器	坏	(9.6)						B・C	良	青灰色	青灰色	
第13図-10	2号住居	土師器	坏					回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	淡赤橙色	淡赤橙色	
第13図-11	2号住居	土師器	高坏							B・C	良	淡赤橙色	淡赤橙色	
第13図-12	2号住居	土師器	甕	(13.6)				ナデ・ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	A・B・C・D	良	橙色	にぶい橙色	黒班
第13図-13	2号住居	土師器	甕	(25.8)				ヘラケズリ	ヘラケズリ	B・C・D	良	浅黄橙色	浅黄橙色	
第15図-1	3号住居	土師器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C・G	良	淡灰褐色	淡灰褐色	
第15図-1	3号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C・D	良	赤褐色	赤褐色	
第18図-1	4号住居	須恵器	蓋	(12.8)				回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第18図-2	4号住居	須恵器	坏				4.7	回転ナデ	回転ナデ	C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第18図-3	4号住居	須恵器	坏	11.0				回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・回転ナデ後ナデ	C	良	灰白色	灰白色	
第18図-4	4号住居	須恵器	坏身	(10.4)						B・C	良	淡青灰褐色	淡青灰褐色	
第18図-5	4号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第18図-6	4号住居	須恵器	壷					回転ナデ	回転ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第18図-7	4号住居	須恵器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第18図-8	4号住居	須恵器	高坏	(13.3)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第18図-9	4号住居	須恵器	甕					波状文・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	波状文
第18図-10	4号住居	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第18図-11	4号住居	土師器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第18図-12	4号住居	土師器	高坏	(14.4)				ナデ・接合用の工具痕	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	接合用の工具痕
第18図-13	4号住居	土師器	高坏	(15.0)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第18図-14	4号住居	土師器	高坏					ハケ後ナデケシ・ケズリ	ナデ・ケズリ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第18図-15	4号住居	土師器	高坏					ケズリ	ケズリ後ナデ	A・B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第18図-16	4号住居	土師器	高坏					ケズリ	ケズリ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第18図-17	4号住居	土師器	高坏					ケズリ	ケズリ	A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第18図-18	4号住居	土師器	壷	(12.2)				ミガキ	ミガキ・ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	丹塗り
第18図-19	4号住居	土師器	鉢	(22.9)				ヨコナデ・ケズリ	－		良	橙色	橙色	指頭圧痕・一部工具痕
第19図-20	4号住居	土師器	甕	(15.7)				ヨコナデ・ハケ後ナデ	ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	A・B・C・D・G	良	にぶい橙色	灰黄褐色	黒班・指頭圧痕
第19図-21	4号住居	土師器	甕	(14.6)				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗黄褐色	
第19図-22	4号住居	土師器	甕	(20.6)				ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C・D	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第19図-23	4号住居	土師器	甕	(17.6)				ヨコナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	B・C・G	良	にぶい橙色	にぶい橙色	黒班
第19図-24	4号住居	土師器	甕	(17.4)				回転ナデ	回転ナデ・ケズリ		良	淡黄褐色	暗褐色	
第19図-25	4号住居	土師器	甕					ヨコナデケシ・ハケ	ヨコナデケシ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第19図-26	4号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第19図-27	4号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第19図-28	4号住居	土師器	甕					ナデ・ハケ後ナデ	ナデ・ケズリ	B・C	良	淡褐色	淡褐色	
第19図-29	4号住居	土師器	小甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第19図-30	4号住居	土師器	甕					ナデ？	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡褐色	淡褐色	
第19図-31	4号住居	土師器	甑					ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	赤褐色	赤褐色	
第19図-32	4号住居	土師器	小甕					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ？	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第19図-33	4号住居	土師器	小甕					ハケ後ナデ	ケズリ	A・H	良	にぶい橙色	にぶい橙色	黒班・指頭圧痕
第19図-34	4号住居	土師器	小甕					ハケ後ナデ	ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗黄褐色	２次焼成煤付着
第19図-35	4号住居	土師器	甕					ナデ・ハケ後ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第22図-1	5号住居	須恵器	蓋	(15.6)				回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第22図-2	5号住居	須恵器	坏	(7.8)				回転ナデ	回転ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第22図-3	5号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第22図-4	5号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第22図-5	5号住居	須恵器	皿	(17.8)			1.6	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第22図-6	5号住居	須恵器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗青灰色	暗青灰色	
第22図-7	5号住居	須恵器	甕					ナデ	ナデ	C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第22図-8	5号住居	須恵器	壷					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第22図-9	5号住居	須恵器	壷					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	暗赤灰色	
第22図-10	5号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡赤褐色	褐色	
第22図-11	5号住居	土師器	甑					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C	良	淡黄褐色	暗褐色	
第22図-12	5号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第22図-13	5号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	褐色	
第22図-14	5号住居	土師器	手捏					指頭圧痕	指頭圧痕	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第25図-1	6号住居	須恵器	蓋	(12.8)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第25図-2	6号住居	須恵器	蓋	(13.2)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第25図-3	6号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C・G	良	淡青灰色	淡青灰色	
第25図-4	6号住居	須恵器	坏	11.0			3.6	回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ後ナデ	B・C	良	灰色	灰色	板状圧痕
第25図-5	6号住居	須恵器	皿	15.3		11.8	2.1	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ・ナデ	C	良	灰白色	灰白色	
第25図-6	6号住居	須恵器	坏	(17.8)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第25図-7	6号住居	土師器？	杯	18.2			3.3	回転ナデ・回転ヘラケズリ	－	B・C	不良	灰黄色	灰黄色	
第25図-8	6号住居	土師器	坏	(19.0)			6.85	回転ナデ	回転ナデ	B・C・G	良？	灰黄褐色	にぶい黄橙色	
第25図-9	6号住居	土師器	甑					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	暗赤褐色	淡褐色	
第25図-10	6号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第25図-11	6号住居	須恵器	大甕	(43.8)				ハケ・ナデ	ハケ	A・B・C	良	青灰色	青灰色	
第27図-1	7号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第27図-2	7号住居	土師器	坏					ナデ	ナデ	A ・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第27図-3	7号住居	土師器	甕	(15.5)				ハケ後ヨコナデ・ハケ	ケズリ後ナデ	B・C・D・G	良	にぶい赤褐色	にぶい褐色	
第27図-4	7号住居	土師器	甕	(25.5)				ハケ	ヨコナデ・ﾊｹ後ｹｽﾞﾘ	B・C・D	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第27図-5	7号住居	土師器	甕					ハケ後ナデ	ケズリ	B・C・G	良	淡褐色	暗褐色	
第27図-6	7号住居	土師器	製塩土器					指頭圧痕	布目痕	B・C	やや不良	赤褐色	赤褐色	指頭圧痕・布目痕
第31図-1	8号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第31図-2	8号住居	土師器	坏					回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C・G	良	淡灰褐色	暗灰褐色	
第31図-3	8号住居	土師器	皿					ナデ	ナデ	B・C・G	良	黄褐色	黄褐色	
第31図-4	8号住居	土師器	甕	(15.4)				ハケ目後ナデ？	ヨコナデ・ヘラケズリ	B・C・D	良	明赤褐色	にぶい黄橙色	指頭圧痕・黒班・煤付着
第31図-5	8号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	A ・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第31図-6	8号住居	土師器	甕		(22.7)			ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	A・B・C・D	良	にぶい赤褐色	赤褐色	煤付着・指頭圧痕
第31図-7	8号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	指頭圧痕

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第31図-8	8号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第34図-1	9号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第34図-2	9号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	淡灰色	淡灰色	
第34図-3	9号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	淡灰色	淡灰色	
第34図-4	9号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第34図-5	9号住居	須恵器	坏			8.4		回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第34図-6	9号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第34図-7	9号住居	土師器	坏			9.8				B・C・D	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第34図-8	9号住居	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	C	やや不良	淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	
第34図-9	9号住居	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第34図-10	9号住居	土師器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第34図-11	9号住居	土師器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第34図-12	9号住居	土師器	甕					ハケ後ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	暗灰褐色	淡赤褐色	
第34図-13	9号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡褐色	暗褐色	
第34図-14	9号住居	土師器	甕					ナデ	ケズリ	A・B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第34図-15	9号住居	土師器	甕					ナデ	ケズリ	B・C	良	赤褐色	淡褐色	
第34図-16	9号住居	須恵器	蓋					回転ヘラケズ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第34図-17	9号住居	弥生	甕					ー	ー	A・B	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第36図-1	10号住居	須恵器	蓋					回転ヘラ・ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡黄灰色	淡黄灰色	
第36図-2	10号住居	土師器	甕					ハケ後ナデ	ケズリ	B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	ハクラクのため復元
第38図-1	11号住居	須恵器	坏身	(11.35)			4.2	ヨコナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	H	良	灰白色	灰白色	ヘラ記号
第38図-2	11号住居	須恵器	坏					ナデ	ナデ	B・C	良	淡白灰色	淡白灰色	
第38図-3	11号住居	土師器	坏					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第38図-4	11号住居	土師器	高坏					ケズリ	ケズリ	A・B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第38図-5	11号住居	土師器	甕	(14.4)				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第38図-6	11号住居	土師器	甕	(16.4)				ヨコナデ	ヨコナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第38図-7	11号住居	土師器	小甕	(12.2)				ナデ・ハケ後ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第38図-8	11号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第38図-9	11号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・D	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第38図-10	11号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第38図-11	11号住居	土師器	甑					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C	良	明黄褐色	明黄褐色	
第38図-12	11号住居	弥生	甕					ナデ	ナデ	B		淡黄褐色	淡黄褐色	
第40図-1	12号住居	土師器	甕					ハケ	ケズリ	B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第43図-1	13号住居	土師器	小甕					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第43図-2	13号住居	土師器	鉢					ケズリ後ナデ・ヘラケズリ	ナデ・ヘラケズリ	B・C	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	黒班
第46図-1	14号住居	須恵器	蓋	(16.5)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第46図-2	14号住居	須恵器	蓋					ケズリ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第46図-3	14号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第46図-4	14号住居	須恵器	坏	(9.0)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第46図-5	14号住居	須恵器	坏	9.7			3.0	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・回転ナデ後ナデ	B	良	灰白色	灰色	自然釉付着
第46図-6	14号住居	須恵器	皿					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第46図-7	14号住居	須恵器	皿					回転ナデ	回転ナデ	C	不良	淡緑灰色	淡緑灰色	
第46図-8	14号住居	須恵器	壷					回転ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	ヘラ記号・沈線文
第46図-9	14号住居	土師器	皿	(14.8)				ナデ・ヘラ切り	ナデ	B・C・G	良	赤褐色	赤褐色	
第46図-10	14号住居	土師器	坏					回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C・G	良	明赤褐色	明赤褐色	化粧土残る
第46図-11	14号住居	土師器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第46図-12	14号住居	土師器	高坏					ナデ	ナデ	C・D	良	明黄褐色	明黄褐色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第46図-13	14号住居	土師器	皿	(27.4)				回転ナデ	回転ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	明赤褐色	内面化粧土残る
第46図-14	14号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第46図-15	14号住居	土師器	甕					ナデ	ケズリ	B・C・G	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第46図-16	14号住居	土師器	小甕					ナデ	ナデ	B・C	良	暗灰黄褐色	暗灰黄褐色	
第49図-1	15号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第49図-2	15号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第49図-3	15号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第49図-4	15号住居	須恵器	蓋						ナデ	C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第49図-5	15号住居	須恵器	坏	(12.8)				回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第49図-6	15号住居	須恵器	坏	(12.8)		(8.2)		回転ナデ	回転ナデ	B・C・F	良	淡青灰色	淡青灰色	
第49図-7	15号住居	須恵器	坏	(12.5)		7.6		ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	B・C	良	灰白色	灰白色	
第49図-8	15号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第49図-9	15号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第49図-10	15号住居	須恵器	皿	(13.1)		11.6		ヨコナデ・ヘラ切り	ヨコナデ・ヨコナデ後ナデ	B・C	良	灰色	灰色	
第49図-11	15号住居	須恵器	皿					回転ナデ	回転ナデ	C	不良	淡白灰色	淡白灰色	
第49図-12	15号住居	須恵器	壷					回転ナデ	回転ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第49図-13	15号住居	須恵器	壷					カキ目	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第49図-14	15号住居	須恵器	円面硯					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	明青灰色	明青灰色	一部赤色個所有り
第49図-15	15号住居	須恵器	坏	(9.8)				回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第49図-16	15号住居	土師器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C・G	良	明赤褐色	明赤褐色	
第49図-17	15号住居	土師器	甕					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	明赤褐色	明赤褐色	
第49図-18	15号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第49図-19	15号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第49図-20	15号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第49図-21	15号住居	土師器	手捏					指頭圧痕	ナデ	A・B・C	良	褐色	褐色	
第51図-1	16号住居	須恵器	坏	13.75		9.7		回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ・回転ナデ後ナデ	H	良	灰色	灰色	朱文字有り
第51図-2	16号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	A・B・C・G	良	青灰色	青灰色	
第51図-3	16号住居	須恵器	蓋					回転ナデ		B・C	良	青灰色	青灰色	
第51図-4	16号住居	須恵器	壷					回転ナデ	回転ナデ	C	良	淡灰色	淡灰色	ヘラ記号
第51図-5	16号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第51図-6	16号住居	土師器	甕					ハケ	ケズリ	B・C・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第51図-7	16号住居	土師器	把手					ケズリ	ケズリ？	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第54図-1	17号住居	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C・G	良	明赤褐色	明赤褐色	
第54図-2	17号住居	土師器	皿					回転ナデ	回転ナデ	B・C・D	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第54図-3	17号住居	土師器	皿	(15.2)				ヨコナデ・ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	B・C・D	良	灰褐色	にぶい橙色	着付煤
第54図-4	17号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第54図-5	17号住居	土師器	甕					ナデ	ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第54図-6	17号住居	土師器	手捏	(9.7)				指頭圧痕	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第54図-7	17号住居	製塩土器	手捏	12.1				ナデ	ナデ	D	良	橙色	橙色	指頭在痕
第54図-8	17号住居	土師器	手捏					指頭圧痕	ナデ	B・C	やや不良	淡白黄色	淡白黄色	
第57図-1	18号住居	須恵器	坏	(14.0)				回転ナデヘラ切り	回転ナデ・ナデ	H	良	灰白色	灰白色	朱文字
第57図-2	18号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第57図-3	18号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第57図-4	18号住居	土師器	坏	(15.1)		(9.8)		回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ・ナデ	B・C・D	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	赤彩
第57図-5	18号住居	土師器	坏					ナデ	ナデ	B・C	良	淡緑灰色	淡緑灰色	
第57図-6	18号住居	土師器	坏					ナデ・ヘラ切り	ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	化粧土残る
第57図-7	18号住居	土師器	皿					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡灰褐色	淡灰褐色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第57図-8	18号住居	土師器	壷					ナデ	ナデ	B・G	良	褐色	褐色	
第57図-9	18号住居	土師器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C・D	良	明赤褐色	明赤褐色	化粧土残る
第57図-10	18号住居	土師器	甕	(15.4)				ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ後ナデ	B・C・D	良	にぶい黄橙色	明赤褐色	黒斑・煤付着
第57図-11	18号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第57図-12	18号住居	土師器	甕					ナデ	ケズリ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第60図-1	20号住居	土師器	甑					ハケ	ナデ	B・C・G	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第60図-2	20号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	褐色	褐色	
第63図-1	23号住居	土師器	鉢	(17.7)				ヨコナデ	ー	B・C・D	良	橙色	橙色	指頭圧痕・黒斑
第63図-2	23号住居	土師器	椀	(15.8)				ナデ	ナデ	B	不良	明赤橙色	明赤橙色	
第63図-3	23号住居	土師器	甕	(15.5)				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第63図-4	23号住居	土師器	甕	(13.6)				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第66図-1	24号住居	土師器	甑	(26.0)				ヨコナデ	ヘラケズリ	A・B・C・D・G	良	明褐色	明赤褐色	黒斑
第66図-2	24号住居	土師器	甕	(15.8)	18.4		18.8	ヨコナデ・ハケメ後ナデ	ハケ後ナデ・ヘラケズリ	A・B・C・G	良	明赤褐色	明褐色	煤付着・黒斑
第66図-3	24号住居	土師器	甕	(17.4)				ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ヘラケズリ	A・B・C・D・G	良	浅黄橙色	浅黄橙色	煤付着
第66図-4	24号住居	土師器	甕	(17.2)				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	明赤褐色	明赤褐色	
第66図-5	24号住居	土師器	甕	(15.6)			5.4	ナデ・ケズリ・タテハケ	ナデ	A・B・C・G	良	赤褐色	黒褐色	摩耗が激しい
第66図-6	24号住居	土師器	甕	(15.0)				ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第66図-7	24号住居	土師器	甕	(14.0)				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第66図-8	24号住居	土師器	甕	(16.8)				ナデ・ハケ後ナデ	ナデ	B・C・G	良	明赤褐色	明赤褐色	
第66図-9	24号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C	良	黒褐色	淡黄褐色	
第66図-10	24号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第66図-11	24号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第66図-12	24号住居	土師器	甕					ハケ後ナデ	ケズリ	A・B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第66図-13	24号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第66図-14	24号住居	土師器	鉢	(17.0)			11.45	ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ・ナデ	B・C・D・G	良	橙色	浅黄橙色	黒斑・煤付着？
第66図-15	24号住居	土師器	鉢	12.8			8.15	ナデ	ナデ	B・C・D・G	良	浅黄橙色	浅黄橙色	赤彩・指頭圧痕
第66図-16	24号住居	土師器	椀					ナデ	ナデ	C	良	黄褐色	黄褐色	
第66図-17	24号住居	土師器	椀					ケズリ	ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第69図-1	25号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第69図-2	25号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第69図-3	25号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第69図-4	25号住居	須恵器	ﾊｿｳ	(7.1)				回転ナデ・ｶｷ目	回転ナデ	B。C	良	灰色	灰色	自然釉付着
第69図-5	25号住居	須恵器	壷	(8.8)				回転ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第69図-6	25号住居	須恵器	高坏	9.3			11.0	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	B・C	良	灰色	灰色	ヘラ記号・シボリ痕
第69図-7	25号住居	土師器	椀					ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第69図-8	25号住居	土師器	椀	(11.9)				回転ナデ	回転ナデ	B・C・D	やや不良	淡赤灰褐色	淡赤灰褐色	
第69図-9	25号住居	土師器	高坏					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第69図-10	25号住居	土師器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第69図-11	25号住居	土師器	高坏					ナデ	ナデ	B・C	やや不良	赤褐色	赤褐色	
第69図-12	25号住居	土師器	甑					ナデ	ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第69図-13	25号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第69図-14	25号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第69図-15	25号住居	土師器	甑				11.3			B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第69図-16	25号住居	土師器	小甕	(9.8)	11.0			ヨコナデ・ナデ	ヘラケズリ・ナデ	A・B・C・D・G	良	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	指頭圧痕・煤付着・黒斑
第69図-17	25号住居	土師器	甕	21.3	(25.35)		1.9	ー	ヘラケズリ	A・B・C・D・G	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	黒斑
第72図-1	26号住居	須恵器	坏蓋	(11.0)				回転ヘラ切り・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第72図-2	26号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第72図-3	26号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	A・B・G	良	淡緑灰色	淡緑灰色	
第72図-4	26号住居	須恵器	蓋							B・C	良	暗青灰色	暗青灰色	
第72図-5	26号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第72図-6	26号住居	須恵器	壷					回転ナデ	回転ナデ	A・B	良	淡青灰色	淡青灰色	
第72図-7	26号住居	須恵器	壷	(7.6)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第72図-8	26号住居	土師器	坏	(17.3)				ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第72図-9	26号住居	土師器	椀					ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第72図-10	26号住居	土師器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	黄褐色	黄褐色	
第72図-11	26号住居	土師器	高坏					ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第72図-12	26号住居	土師器	高坏					ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第72図-13	26号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第72図-14	26号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第72図-15	26号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第72図-16	26号住居	土師器	甕							A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第75図-1	27号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第75図-2	27号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第75図-3	27号住居	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第75図-4	27号住居	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第75図-5	27号住居	土師器	壷	(7.6)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第75図-6	27号住居	土師器	壷					ナデ	ナデ	C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第75図-7	27号住居	土師器	椀					ナデ	ナデ	C	良	淡赤橙色	淡赤橙色	
第75図-8	27号住居	土師器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第75図-9	27号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第75図-10	27号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第75図-11	27号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第75図-12	27号住居	土師器	甕					回転ナデ	回転ナデ	B・C・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第75図-13	27号住居	土師器	甕					回転ナデ	回転ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第75図-14	27号住居	土師器	甕					回転ナデ	回転ナデ	A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第75図-15	27号住居	土師器	甕	(14.8)				ナデ・ハケ後ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第75図-16	27号住居	土師器	甕	(22.8)				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第78図-1	28号住居	土師器	高坏					ナデ	ナデ	C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第78図-2	28号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第78図-3	29号住居	土師器	甕	(17.3)	(17.8)			ヨコナデ・ナデ？	ヨコナデ・ヘラケズリ	A・B・C・D	良	にぶい赤褐色	にぶい橙色	煤付着
第78図-4	29号住居	土師器	甕	(18.9)	(21.0)			ヨコナデ・ハケ目	ヨコナデ・ヘラケズリ	A・B・C・G	良	にぶい橙色	にぶい橙色	指頭圧痕
第78図-5	30号住居	土師器	甕					タタキ後ケズリ後ナデケシ	ケズリ後ナデケシ	B・C	良	淡赤黄褐色	淡赤黄褐色	
第78図-6	30号住居	須恵器	蓋	(10.7)				ヨコナデ・ケズリ・ヘラ切り	ヨコナデ・ナデ	B・C	良	灰色	灰色	自然釉付着
第78図-7	31号住居	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C・D・F	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第78図-8	31号住居	土師器	把手							A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第78図-9	28・29住	土師器	椀					ミガキ後ナデ・ナデ	ミガキ後ナデ	B・C	良	暗赤褐色	淡赤褐色	
第78図-10	28・29住	須恵器	蓋					回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	暗灰褐色	暗灰褐色	
第78図-11	28・29住	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第78図-12	28・32住	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第78図-13	28・32住	土師器	椀					ナデ	ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第90図-1	1号建物	土師器	高坏					ナデ	ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第90図-2	1号建物	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第90図-3	2号建物	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第90図-4	2号建物	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第90図-5	2号建物	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第90図-6	2号建物	土師器	坏							B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第90図-7	3号建物	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第90図-8	3号建物	弥生	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	明黄褐色	明黄褐色	化粧土
第90図-9	3号建物	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第90図-10	3号建物	土師器	坏					ナデ	ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第90図-11	3号建物	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B	良	青灰色	青灰色	
第90図-12	4号建物	土師器	坏							B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第90図-13	5号建物	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第90図-14	5号建物	須恵器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第90図-15	5号建物	土師器	手捏					ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第90図-16	5号建物	土師器	皿					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第90図-17	5号建物	土師器	小甕					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第90図-18	6号建物		坏	(13.8)		(9.2)	4.1	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	不良	白灰色	白灰色	
第90図-19	6号建物	土師器	坏			(5.4)		回転ヘラ切り・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第90図-20	6号建物	土師器	皿					ナデ・ヘラ切り	ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第90図-21	6号建物	土師器	皿					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第90図-22	7号建物	土師器	坏					ナデ	ナデ	B・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第90図-23	7号建物	土師器	坏					ナデ	ナデ	B・C	不良	淡灰黄褐色	淡灰黄褐色	
第90図-24	7号建物	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C・G	良	淡褐色	淡褐色	
第90図-25	8号建物	須恵器	坏蓋							B・C	良	青灰色	青灰色	
第90図-26	8号建物	土師器	高坏					ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第90図-27	9号建物	須恵器	坏	(12.2)			3.7	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	B・C	やや不良	白灰色	白灰色	
第90図-28	9号建物	土師器	坏					回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第90図-29	9号建物	須恵器	坏身					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第90図-30	9号建物	土師器	甕					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C・D・G	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第90図-31	9号建物	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第90図-32	9号建物	土師器	甕					ヨコナデ・ナデ	ヨコナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第90図-33	9号建物	土師器	甕					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	明赤褐色	淡黄褐色	
第90図-34	9号建物	土師器	鉢							B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第91図-35	10号建物	須恵器	蓋					回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第91図-36	10号建物	土師器	椀					ナデ・手持ちヘラケズリ後ナデ	ナデ	B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	墨付着
第91図-37	10号建物	土師器	甕					ナデ		B・C	良	黄赤褐色	黄赤褐色	
第91図-38	11号建物	須恵器	坏身					回転ナデ	回転ナデ	A・C	良	暗灰色	暗灰色	
第91図-39	11号建物	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第91図-40	11号建物	須恵器	坏							B	良	淡青灰色	淡青灰色	
第91図-41	11号建物	土師器	皿					回転ナデ	回転ナデ	C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第91図-42	11号建物	土師器	甕							C	良	赤褐色	赤褐色	
第91図-43	12号建物	土師器	皿							B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第91図-44	12号建物	須恵器	壺					ナデ	ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第91図-45	12号建物	須恵器	甕					ナデ	ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第91図-46	12号建物	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第91図-47	12号建物	土師器	甕					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C	良	黄褐色	黄褐色	
第94図-1	1号溝	縄文	深鉢					擬条痕	ナデ	A・B・C	良	暗褐色	暗褐色	
第94図-2	1号溝	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第95図-1	2号溝	土師器	甕					ナデ・ハケ		B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第95図-2	2号溝	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第96図-1	3号溝	須恵器	蓋	(12.2)			3.5	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・ナデ	C	良	灰白色	灰白色	ヘラ記号？
第96図-2	3号溝	須恵器	坏蓋	(10.4)			3.1	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	ヘラ記号
第96図-3	3号溝	須恵器	蓋	(9.5)				回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ後ナデ	C	良	灰色	灰白色	
第96図-4	3号溝	須恵器	坏蓋	(12.8)			4.3	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡緑灰色	淡緑灰色	
第96図-5	3号溝	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第96図-6	3号溝	須恵器	蓋					回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	灰褐色	灰褐色	
第96図-7	3号溝	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第96図-8	3号溝	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第96図-9	3号溝	須恵器	坏	(10.4)			3.55	回転ナデ・ヘラケズリ・ヘラ切り	回転ナデ・回転ナデ後ナデ	C	良	灰白色	灰白色	
第96図-10	3号溝	須恵器	坏身					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗青灰色	暗青灰色	
第96図-11	3号溝	須恵器	坏					回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第96図-12	3号溝	須恵器	高坏	(16.0)				回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ・回転ナデ後ナデ	B・C	良	灰色	灰色	スカシ痕跡
第96図-13	3号溝	須恵器	ﾊｿｳ					ナデ・タタキ後ハケ	ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第96図-14	3号溝	土師器	坏身	(12.2)				ナデ	ナデ・ミガキ？	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第96図-15	3号溝	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第96図-16	3号溝	土師器	坏					ナデ	ナデ	C・G	良	赤褐色	赤褐色	
第96図-17	3号溝	土師器	坏	(12.5)			4.4	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	B・D・G	良	浅黄橙	浅黄橙	黒班？
第96図-18	3号溝	土師器	椀	(13.0)			3.9	―	―	C・D	やや不良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第96図-19	3号溝	土師器	鉢	(12.8)			5.0	ヨコナデ・ハラケズリ後ナデ	―	C	良	橙色	橙色	
第96図-20	3号溝	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	A・B・C	良	灰褐色	灰褐色	
第96図-21	3号溝	土師器	高坏	(13.6)				ハケ後ナデ・ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ・ナデ	D・H	良	にぶい橙色	浅黄橙色	
第96図-22	3号溝	土師器	高坏	(13.8)				ハケ後ナデ・ヘラケズリ	ヨコナデ・ナデ	B・D・G	良	橙色	浅黄橙色	黒班・赤彩？
第96図-23	3号溝	土師器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第96図-24	3号溝	土師器	高坏					ナデ	ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第96図-25	3号溝	土師器	高坏							B・C・D	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第96図-26	3号溝	土師器	高坏					ケズリ	ケズリ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第96図-27	3号溝	土師器	椀					ナデ	ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第96図-28	3号溝	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・D	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図-29	3号溝	土師器	甕	(19.8)				ナデ・ハケ後ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図-30	3号溝	土師器	甕					ナデ	ケズリ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第97図-31	3号溝	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第97図-32	3号溝	土師器	甕					ナデ	ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図-33	3号溝	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡褐色	淡褐色	
第97図-34	3号溝	土師器	甕					指頭圧痕・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	指頭圧痕
第97図-35	3号溝	土師器	把手							B・C・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第97図-36	3号溝	土師器	甕	(13.0+a)				―	ナデ・ケズリ	B・C	良	淡黄灰褐色	淡黄灰褐色	
第97図-37	3号溝	土師器	甕					ハケ後ヨコナデ・ハケ	ヨコナデ・ケズリ	A・B・C・D	良	橙色	にぶい橙色	黒班
第97図-38	3号溝	土師器	甑	(11.8)			9.1	タテハケ		A・G	良	黄褐色	黄赤褐色	
第102図-1	8号溝	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第102図-2	10号溝	須恵器	高坏			9.75		回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	B・C	良	灰色	青灰色	ヘラ記号
第102図-3	11号溝	須恵器	壷					回転ナデ		B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第102図-4	11号溝	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	褐色	
第104図-1	1号竪穴	須恵器	坏蓋	(15.8)			2.6	回転ヘラ切り・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良好	青灰色	青灰色	一部工具痕
第104図-2	1号竪穴	須恵器	蓋	(15.0)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第104図-3	1号竪穴	須恵器	坏	12.7			4.25	回転ナデ	回転ナデ	C	良	灰色	灰色	板状圧痕？
第104図-4	1号竪穴	須恵器	坏	12.4			4.3	回転ナデ	回転ナデ	C	良	灰白色	灰白色	墨付着？・板状圧痕
第104図-5	1号竪穴	須恵器	坏	(11.9)			3.8	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	B・C	良	灰色	灰色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第104図-6	1号竪穴	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第104図-7	1号竪穴	須恵器	坏			(9.5)		ナデ	ヘラ切り	B・C	良	青灰色	青灰色	
第104図-8	1号竪穴	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第104図-9	1号竪穴	須恵器	皿					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第104図-10	1号竪穴	須恵器	瓦							C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第104図-11	1号竪穴	土師器	坏					ナデ	ナデ	B・C・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第104図-12	1号竪穴	土師器	皿					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗褐色	暗褐色	
第104図-13	1号竪穴	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	淡赤黄褐色	淡赤黄褐色	
第104図-14	1号竪穴	土師器	小甕					ナデ	ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第104図-15	1号竪穴	土師器	甕	(29.2)				ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第104図-16	1号竪穴	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第104図-17	1号竪穴	土師器	把手					ケズリ		B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第106図-1	2号竪穴	須恵器	蓋	(20.0)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第106図-2	2号竪穴	須恵器	蓋					回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第106図-3	2号竪穴	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第106図-4	2号竪穴	須恵器	蓋					回転ヘラケズリ・ナデ	ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第106図-5	2号竪穴	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	不良	白灰色	白灰色	ヘラ記号
第106図-6	2号竪穴	須恵器	坏	(16.2)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第106図-7	2号竪穴	須恵器		(13.1)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	やや不良	暗緑灰色	暗緑灰色	
第106図-8	2号竪穴	須恵器	坏	(8.0)				回転ナデ	回転ナデ	B	良	青灰色	青灰色	
第106図-9	2号竪穴	須恵器	坏	(9.9)				回転ナデ			良	白灰色	白灰色	
第106図-10	2号竪穴	土師器	坏	16.1		10.75	5.3	回転ナデ	ナデ	B・C・D	良	橙色	橙色	赤彩？
第106図-11	2号竪穴	土師器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	赤褐色	赤褐色	化粧土残る
第106図-12	2号竪穴	土師器	坏					回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第106図-13	2号竪穴	土師器	甕	(26.8)				ハケ後ナデ	ケズリ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第106図-14	2号竪穴	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第106図-15	2号竪穴	土師器	小甕	(13.4)				ナデ・指圧痕	ケズリ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第106図-16	2号竪穴	土師器	甕	(13.8)				ハケ後ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第106図-17	2号竪穴	土師器	小甕					ナデ	ケズリ	B・C・D・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第106図-18	2号竪穴	土師器	鉢					ナデ・ハケ後ナデ	ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第106図-19	2号竪穴	土師器	手捏	(13.7)					ヘラケズリ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第106図-20	2号竪穴	土師器	手捏							B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第108図-1	3号竪穴	須恵器	坏	(13.4)			4.5	回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗灰色	灰白色	自然釉付着
第108図-2	3号竪穴	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第108図-3	3号竪穴	土師器	小甕					ナデ	ケズリ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第108図-4	3号竪穴	土師器	甕					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第108図-5	3号竪穴	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第110図-1	4号竪穴	土師器	甕							A・B・C・G	良	赤褐色	赤褐色	
第110図-2	4号竪穴	土師器	椀					回転ナデ	回転ナデ	B	良	淡褐色	淡褐色	
第110図-3	4号竪穴	須恵器	瓦塔				2.6			B・C	良	緑灰色	緑灰色	
第112図-1	5号竪穴	須恵器	蓋	11.8				回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ・ナデ	B・C	やや不良	にぶい橙色	オリーブ灰	ヘラ記号？
第112図-2	5号竪穴	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第112図-3	5号竪穴	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第112図-4	5号竪穴	土師器	椀					回転ナデ	回転ナデ	C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第112図-5	5号竪穴	土師器	小壷					ナデ	ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第121図-1	1号土坑	縄文	鉢					縄文	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第121図-2	6号土坑	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第121図-3	9号土坑	須恵器	蓋					ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第121図-4	9号土坑	土師器	坏					ナデ	ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第121図-5	9号土坑	須恵器	坏					回転ナデ	ナデ	B・C	良	緑灰色	緑灰色	
第121図-6	10号土坑	土師器	椀					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第121図-7	11号土坑	土師器	小甕					ナデ	ケズリ	A・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第121図-8	13号土坑	須恵器	坏					回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡灰褐色	淡灰褐色	ヘラ記号
第121図-9	13号土坑	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第121図-10	13号土坑	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第121図-11	13号土坑	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第121図-12	13号土坑	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	淡灰色	淡灰色	
第121図-13	13号土坑	須恵器	皿					回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第121図-14	13号土坑	須恵器	高坏					回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第121図-15	13号土坑	須恵器	高坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第121図-16	13号土坑	須恵器	ﾊｿｳ					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第121図-17	13号土坑	土師器	高坏					ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第121図-18	13号土坑	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第121図-19	14号土坑	須恵器	坏					回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第121図-20	14号土坑	土師器	皿					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第121図-21	14号土坑	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第121図-22	14号土坑	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第121図-23	14号土坑	土師器	甕					ハケ・ナデ	ハケ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第121図-24	16号土坑	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第121図-25	16号土坑	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡灰色	淡灰色	
第121図-26	16号土坑	土師器	蓋	(16.1)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡黄橙褐色	淡黄橙褐色	
第121図-27	16号土坑	縄文	深鉢					条痕	条痕	C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第121図-28	18号土坑	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第121図-29	18号土坑	土師器	坏			7.2		回転ナデ		B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第121図-30	18号土坑	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第121図-31	18号土坑	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第121図-32	18号土坑	須恵器	甕					波状文	ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第121図-33	20号土坑	土師器	高坏					ナデ	ナデ	B・C・G	良	赤褐色	赤褐色	
第121図-34	21号土坑	縄文	鉢					条痕・ナデ	ナデ	B・C・G	良	赤褐色	赤褐色	
第121図-35	21号土坑	土師器	大坏					回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第121図-36	21号土坑	土師器	皿	(16.6)				回転ナデ	回転ナデ	B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第122図-37	15号土坑	縄文	深鉢											
第123図-1	P−315	須恵器	蓋	(10.3)				ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第123図-2	P−114	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第123図-3	P−347	須恵器	蓋					ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第123図-4	P−323	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	淡灰色	淡灰色	
第123図-5	P−45	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	C	良	青灰色	青灰色	
第123図-6	P−144	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第123図-7	P−198	須恵器	蓋					ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡灰色	淡灰色	
第123図-8	P−287	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡灰色	淡灰色	
第123図-9	P−289	須恵器	蓋					ナデ	ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第123図-10	P−313	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡灰色	淡灰色	
第123図-11	P−328	須恵器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡灰色	淡灰色	
第123図-12	P−321	須恵器	蓋	(17.4)			2.1	回転ヘラ切り・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第123図-13	P−54	須恵器	蓋	(11.7)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	不良	淡灰色	淡灰色	
第123図-14	P−172	須恵器	蓋					回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第123図-15	P−24	須恵器	坏	(11.1)		7.4	3.6	回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	暗青灰色	暗青灰色	
第123図-16	P−364	須恵器	坏	(12.8)			3.9	回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ・不定方向ナデ	B・C・G	不良	淡灰色	淡灰色	
第123図-17	P−282	須恵器	坏							B・C	良	青灰色	青灰色	
第123図-18	P−260	須恵器	坏					回転ナデ	ナデ	B・C	不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第123図-19	P−25	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ後不定方向ナデ	C	良	淡灰色	淡灰色	
第123図-20	P−163	須恵器	坏					回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第123図-21	P−331	須恵器	皿					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第123図-22	P−293	須恵器	ﾊｿｳ					ナデ	ナデ	B・C	良	淡灰色	淡灰色	
第123図-23	P−292	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗赤灰褐色	暗赤灰褐色	
第123図-24	P−98	須恵器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第123図-25	P−5	須恵器	高坏					回転ナデ	ヘラケズリ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第123図-26	P−119	須恵器	高坏					カキ目		B・C	良	青灰色	青灰色	
第123図-27	P−145	須恵器	甕					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	
第123図-28	P−184	須恵器	壺					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第123図-29	P−244	土師器	高坏					ナデ	ナデ	C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第123図-30	P−81	土師器	高坏					ナデ	ナデ	C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第123図-31	P−114	土師器	蓋					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第123図-32	P−68	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第123図-33	P−144	土師器	坏	(13.8)				回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第123図-34	P−194	土師器	坏					回転ナデ・ヘラ切り	回転ナデ	C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第123図-35	P−169	土師器	坏					ナデ	ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第123図-36	P−16	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	B・C	やや不良	淡灰色	淡灰色	
第123図-37	P−32	土師器	坏					回転ナデ・ヘラケズリ	回転ナデ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第123図-38	P−175	土師器	坏	(10.0)				ナデ	ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第123図-39	P−313	土師器	椀	(13.0)				ナデ	ナデ	C	やや不良	明赤褐色	明赤褐色	
第123図-40	P−42	土師器	坏					回転ナデ	回転ナデ	C	良	赤褐色	赤褐色	
第123図-41	P339	土師器	鉢	12.3			4.9	ヨコナデ・ヘラケズリ	ー	B・C・D	良	橙色	橙色	煤付着
第123図-42	P−81	土師器	椀					ナデ	ナデ	B・C	良	赤褐色	赤褐色	
第123図-43	P−290	土師器	坏	(14.5)				ナデ	ナデ	B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第124図-44	P8	土師器	甕	16.8				ヨコナデ・ナデ	ヘラケズリ	A・B・C	良	黒褐色	黒褐色	工具痕？
第124図-45	P−111	土師器	甕							B・C	良	暗褐色	暗褐色	
第124図-46	P−187	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第124図-47	P−246	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第124図-48	P−275	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第124図-49	P−295	土師器	甕					ナデ	ナデ	B	不良	明赤褐色	明赤褐色	
第124図-50	P−319	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C	良	淡褐色	淡褐色	
第124図-51	P−321	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	淡褐色	淡褐色	
第124図-52	P−342	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第124図-53	P−324	土師器	甕					ハケ	ハケ・ケズリ	A・B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第124図-54	P−345	土師器	甕					ナデ・ハケ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	明赤褐色	明赤褐色	
第124図-55	P−31	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ？	A・B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第124図-56	P−96	土師器	小甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C	良	暗褐色	暗褐色	
第124図-57	P−284	土師器	甕					ナデ	ケズリ	A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第124図-58	P−81	土師器	小甕					ナデ	ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第124図-59	P−37	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表２　出土土器観察表

挿図番号	遺構名	種別	器種	法量				調整		胎土	焼成	色調		備考
				口径	胴部径	底径	器高	外面	内面			外面	内面	
第124図-60	P－320	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第124図-61	P－369	土師器	甕					ナデ	ナデ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第124図-62	P－327	土師器	甕					ナデ	ナデ	B・C・G	良	明赤褐色	明赤褐色	
第124図-63	P－170	土師器	甕					ナデ	ケズリ	B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第124図-64	P－188	土師器	甕							A・B・C	良	淡赤褐色	淡赤褐色	
第124図-65	P－56	土師器	甑					ハケ目	ケズリ	A・B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第124図-66	P－31	土師器	大椀					回転ナデ	回転ナデ	B・C・G	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第124図-67	P－233	土師器	手捏					ナデ	ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	指頭圧痕
第127図-1	包層ｸﾞﾘｯﾄ	須恵器	蓋	(11.6)			3.8	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	暗青灰色	暗青灰色	ヘラ記号
第127図-2	包層ｸﾞﾘｯﾄ	須恵器	蓋	(11.4)			3.6	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第127図-3	包層ｸﾞﾘｯﾄ	須恵器	蓋	11.2			3.45	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡青灰色	淡青灰色	ヘラ記号
第127図-4	包層ｸﾞﾘｯﾄ	須恵器	蓋	(9.7)			3.05	回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ後ナデ	C・G	不良	灰黄色	灰白色	
第127図-5	包層ｸﾞﾘｯﾄ	須恵器	蓋				3.6	ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第127図-6	包層ｸﾞﾘｯﾄ	須恵器	蓋	(12.2)			4.0	回転ヘラケズリ後ナデ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	ヘラ記号
第127図-7	包層ｸﾞﾘｯﾄ	須恵器	坏	11.4			5.3	回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	ヘラ記号
第127図-8	包層ｸﾞﾘｯﾄ	須恵器	坏	(10.0)			9.3	回転ナデ・手持ヘラケズリ	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第127図-9	包層ｸﾞﾘｯﾄ	土師器	坏					指頭圧痕・ナデ	ナデ		やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	指頭圧痕
第127図-10	包層ｸﾞﾘｯﾄ	土師器	坏	(13.2)				ナデ・ヘラケズリ	ナデ	B・C	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第127図-11	包層ｸﾞﾘｯﾄ	土師器	高坏					回転ナデ・ケズリ	回転ナデ	B・C・D・G	良	淡赤褐色	淡赤褐色	指頭圧痕
第127図-12	包層ｸﾞﾘｯﾄ	土師器	高坏	(22.6)		11.3		ケズリ・ナデ		B・C	良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第128図-13	包層ｸﾞﾘｯﾄ	土師器	甕	(23.4)				ナデ	ナデ・ケズリ	B・C・G	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第128図-14	包層ｸﾞﾘｯﾄ	土師器	甕					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C	良	黄褐色	黄褐色	
第128図-15	包層ｸﾞﾘｯﾄ	土師器	甕	(13.6)			3.4	ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	暗赤黄褐色	暗赤黄褐色	
第128図-16	包層ｸﾞﾘｯﾄ	土師器	甕	(19.6)			4.5	ナデ後ヨコハケ・ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	淡褐色	淡褐色	指頭圧痕
第128図-17	包層ｸﾞﾘｯﾄ	土師器	甑					ナデ	ナデ・ケズリ	A・B・C・G	良	暗赤褐色	暗赤褐色	
第128図-18	包層ｸﾞﾘｯﾄ	土師器	甑			(14.4)	2.2	ナデ	ナデ	B・C	良	明赤褐色	明赤褐色	
第133図-1	表土中	須恵器	蓋	(11.4)				回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ・回転ナデ後ナデ		良	灰色	灰白色	ヘラ記号
第133図-2	表土中	須恵器	蓋	(12.8)				回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C	良	淡灰色	淡灰色	ヘラ記号
第133図-3	トレンチ	土師器	蓋	(11.8)				回転ヘラケズリ・回転ナデ	回転ナデ	B・C・D	やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第133図-4	表土中	須恵器	坏	(14.6)				回転ナデ・回転ヘラケズリ	回転ナデ	C・G	やや不良	灰白色	灰白色	工具痕？
第133図-5	表土中	須恵器	皿	(21.2)				回転ナデ・回転ヘラ切り	回転ナデ	B・C	良	青灰色	青灰色	
第133図-6	表土中	土師器	甕	(22.0)				ヨコナデ・ハケ後ナデ	ヘラケズリ	A・B・C・D・G	良	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	
第133図-7	表土中	土師器	甕	(27.6)				ナデ・ハケ目	ナデ・ケズリ	B・C	良	暗黄褐色	暗黄褐色	
第133図-8	風倒木	土師器？	甕					ー	ー		やや不良	淡黄褐色	淡黄褐色	
第133図-9	表土中	縄文	深鉢							B・C	良	暗褐色	暗褐色	貝がら条痕
第133図-10	表土中	縄文	深鉢							B・C	良	淡黄褐色	暗褐色	貝がら条痕
第133図-11	表土中	縄文	深鉢							B・C	良	褐色	褐色	

法量の単位はcm。（　）は残存と復原を表す。
胎土：A角閃石　B石英　C長石　D赤色粒子　E白色粒子　F黒色粒子　G雲母　H砂粒

表３　出土石類観察表

挿図番号	遺構名	器種	石材	長（ ）	幅（ ）	厚さ（ ）	重さ（ ）	備　　考
第104図-18	1号竪穴	土錘		４．６	１．９		１３．０	
第129図-1	2号竪穴	鏃		１３．０	２．５＋α	０．８	２８．７	
第129図-2	5号住居	鏃		６．０＋α	２．８＋α	０．４	１９．９	
第129図-3	24号住居	鏃		２．５＋α	０．９５	０．２５	０．８	
第129図-4	11号住居	鏃		７．７	０．８		７．１	
第129図-5	表土中	鏃		３．５＋α	０．８＋α	０．３	３．１	
第129図-6	9号住居	鏃		４．２＋α	１．３	０．４	５．３	
第129図-7	3号建物	槍鉋		９．１	１．３	０．４	１０．３	
第129図-8	6号住居	不明鉄器		３．７	３．２	０．５	１３．３	
第129図-9	6号住居	不明鉄器		２．０	７．３	０．４５	９．１	
第129図-10	P-214	鏃？		４．３	０．４５	０．４	１．８	
第130図-1	トレンチ	碗形滓					７５．９	
第130図-2	トレンチ	碗形滓					１３３．９	
第130図-3	トレンチ	碗形滓					８．０	
第130図-4	6号住居	鉄滓					４２．６	
第130図-5	P-59	鞴羽口		３．７	４．３		２３．９	トーンは鉄滓付着
第131図-1	4号住居	紡錘車	緑泥片岩（結晶片岩）	約５．１		１．２	４８．５	
第131図-2	表土中	紡錘車	珪質安山岩	５．０		１．４５	１９．８	
第131図-3	P-4	紡錘車	滑石製	３．４～３．７		１．０	２４．０	
第131図-4	24号住居	紡錘車	緑泥片岩（結晶片岩）	３．９～４．１		１．４	４１．７	
第131図-5	P-131	紡錘車	滑石製	４．９		７．５	２４．２	
第131図-6	2号竪穴	砥石	花崗岩	９．３＋α	７．５＋α	５．３＋α	４９４．８	
第131図-7	トレンチ	砥石	花崗岩	７．１＋α	５．０	４．５	１３８．６	
第131図-8	2号竪穴	砥石	花崗岩	４．０＋α	４．２＋α	１．５	３９．５	
第132図9	25号住居	石鏃	黒曜石	１．５	１．６	０．１８	０．３	
第132図10	風倒木痕	石鏃	黒曜石	２・１５	１．３	０．２５	０．８	
第132図11	3号溝	石鏃	黒曜石	１．８５	１．７	０．３５	０．８	
第132図12	P-267	石鏃	硬質安山岩	２．６５	２．１５	０．４５	２．０	
第132図13	表土中	2次加工薄片	黒曜石	２．９	１．５５	０．５	３．１	
第132図14	1号溝	石匙	硬質安山岩	５．７	６．１＋α	１．１	２１．０	
第132図15	9号住居	石匙	硬質安山岩	３．０	４．１＋α	０．８５	７．０	
第132図16	トレンチ	スクレイパー	硬質安山岩	３．４	６．０	０．８	１６．１	
第132図17	P236	石製品	碧玉	５．３	３．１	０．５	１３．８	
第132図18	表土中	石製品	結晶片岩	２．２＋α		０．２	１．６	

調査区全景（真上から）

調査区東側（真上から）

写真図版 2

調査区中央（真上から）

調査区西側（真上から）

1号竪穴住居跡（東から）

1号竪穴住居跡カマド

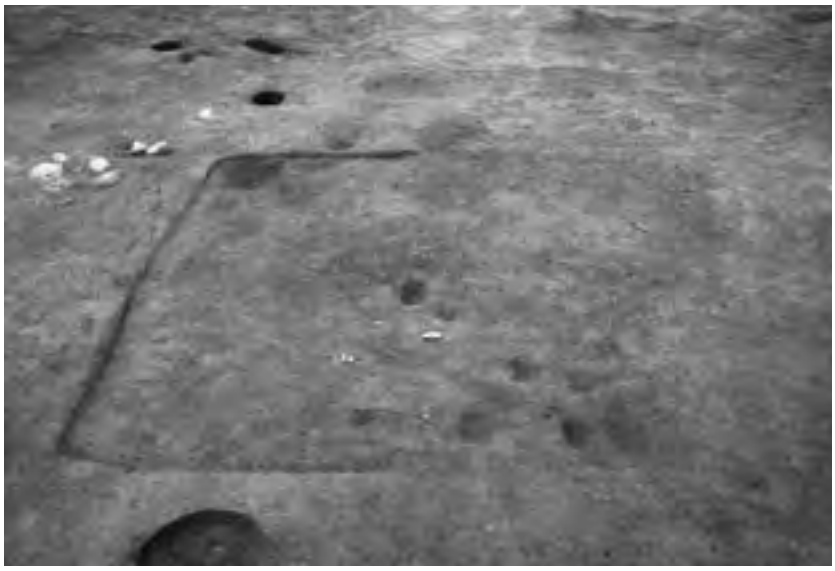
2号竪穴住居跡（東から）

写真図版４

２号竪穴住居跡カマド

２号竪穴住居跡カマド縦土層

２号竪穴住居跡カマド横土層

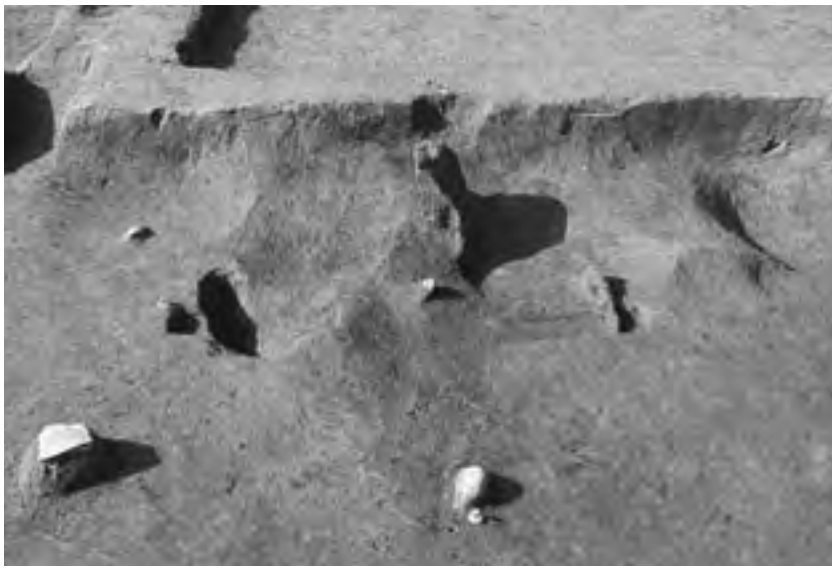


３号竪穴住居跡（北から）

４号竪穴住居跡（東から）

４号竪穴住居跡遺物出土状況

写真図版 6



4 号竪穴住居跡カマド

4 号竪穴住居跡カマド縦土層

4 号竪穴住居跡カマド横土層

５号竪穴住居跡（西から）

５号竪穴住居跡カマド

５号竪穴住居跡カマド縦土層

写真図版８

５号竪穴住居跡カマド横土層

５号竪穴住居跡（南から）

６号竪穴住居跡カマド

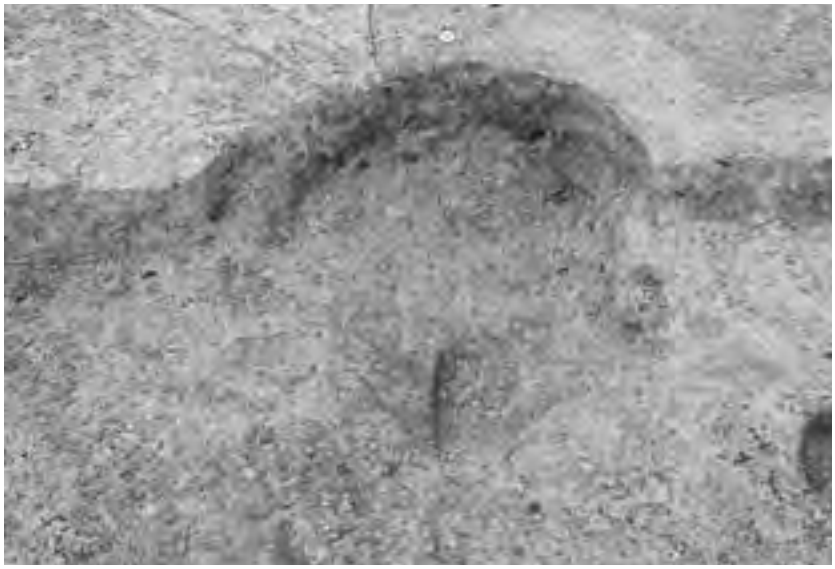
6号竪穴住居跡遺物出土状況

7 号竪穴住居跡（東から）

7 号竪穴住居跡カマド

写真図版10

8号竪穴住居跡（東から）



8号竪穴住居跡カマド

8号竪穴住居跡カマド土層

9号竪穴住居跡（北から）

9号竪穴住居跡カマド

9号竪穴住居跡カマド縦土層

写真図版12

9 号竪穴住居跡カマド横土層

10号竪穴住居跡（南から）

10号竪穴住居跡カマド

11号竪穴住居跡（北から）

11号竪穴住居跡遺物出土状況

13号竪穴住居跡（南から）

写真図版14

14号竪穴住居跡カマド土層

14号竪穴住居跡（東から）

14号竪穴住居跡カマド

14号竪穴住居跡カマド縦土層

14号竪穴住居跡カマド横土層

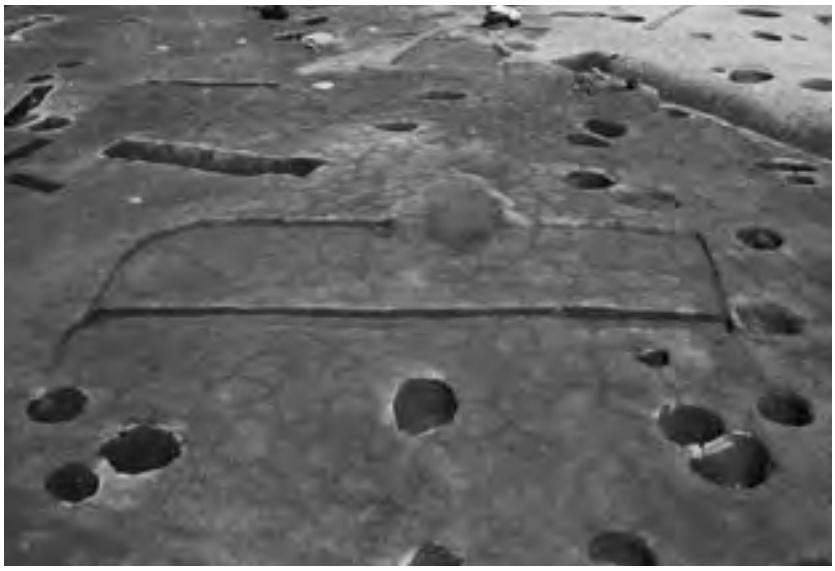
15号竪穴住居跡（東から）

写真図版16

15号竪穴住居跡カマド

16号竪穴住居跡（南から）

16号竪穴住居跡遺物出土状況



17号竪穴住居跡（南から）

17号竪穴住居跡カマド

17号竪穴住居跡カマド縦土層

写真図版18

17号竪穴住居跡カマド横土層

18号竪穴住居跡（南から）

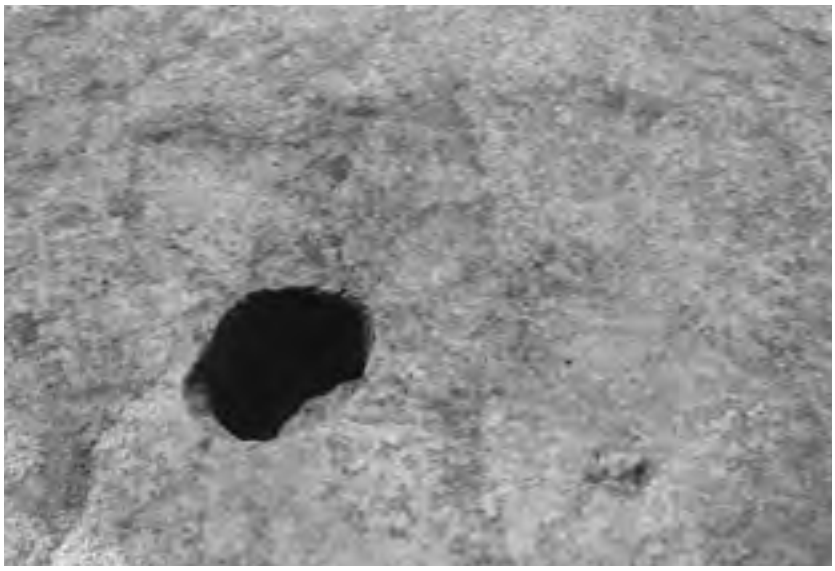
18号竪穴住居跡カマド

18号竪穴住居跡カマド横土層

18号竪穴住居跡カマド横土層

19号竪穴住居跡（北から）

写真図版20



20号竪穴住居跡（南から）

21号竪穴住居跡（南から）

23号竪穴住居跡（北から）

24号竪穴住居跡（東から）

24号竪穴住居跡カマド

24号竪穴住居跡遺物出土状況

写真図版22

25号竪穴住居跡（南から）

25号竪穴住居跡カマド

25号竪穴住居跡カマド近景

25号竪穴住居跡
カマド崩落石除去後

25号竪穴住居跡遺物出土状況

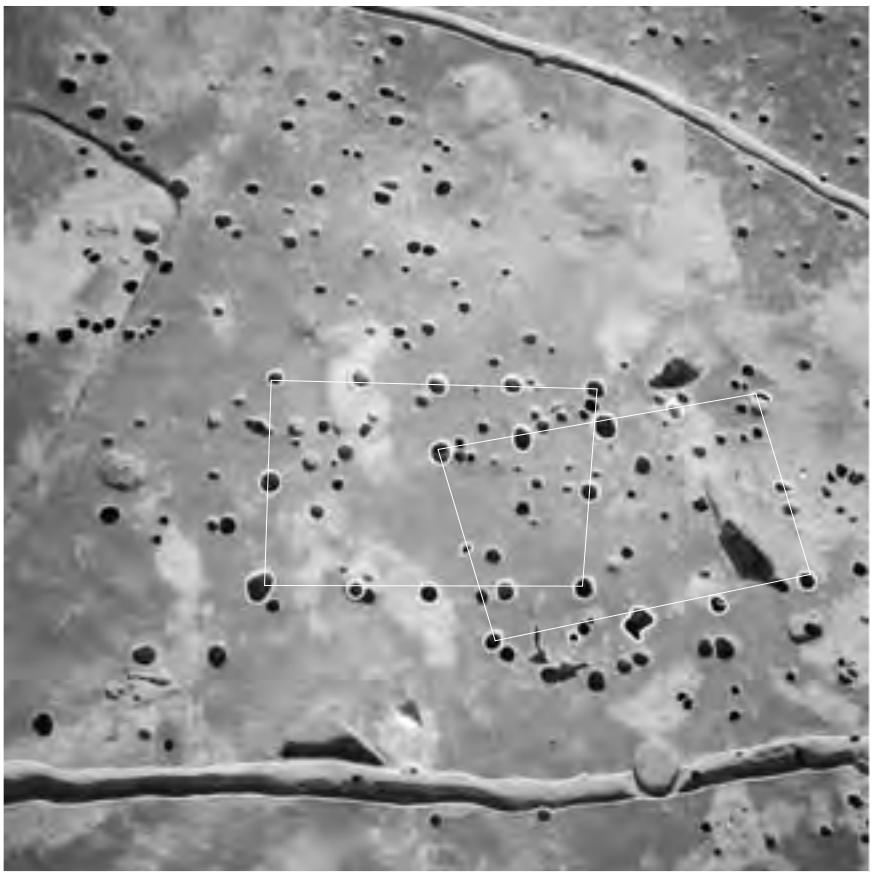
26号竪穴住居跡（東から）

写真図版24

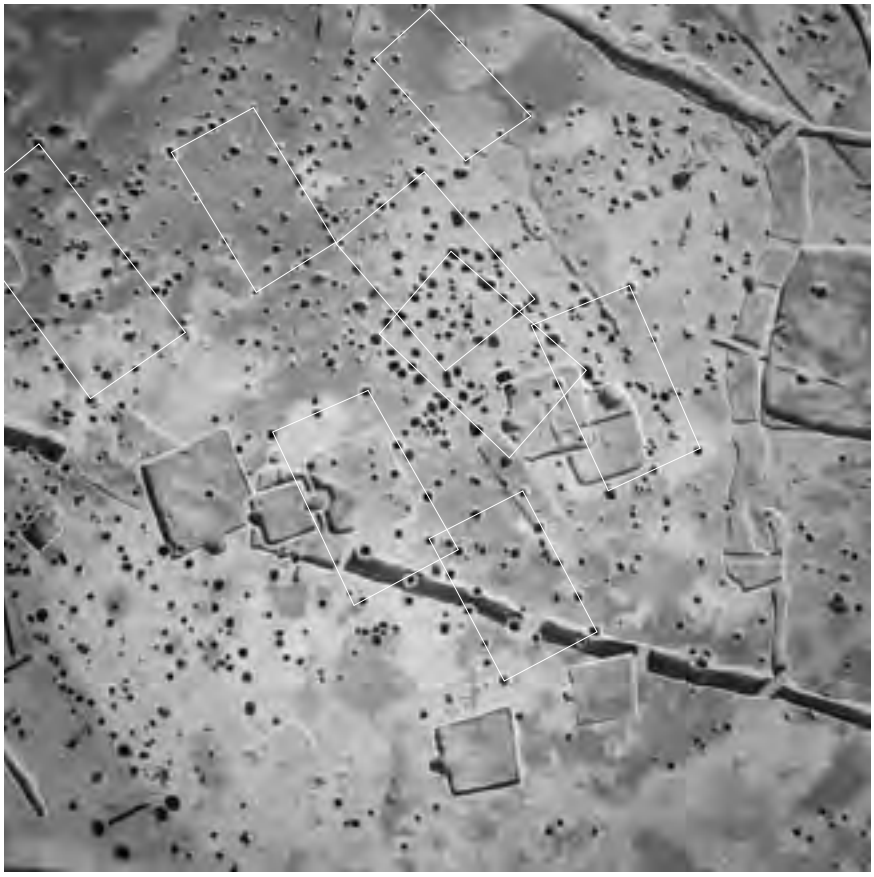
26、27号竪穴住居跡（東から）

27号竪穴住居跡カマド

22、28～31号竪穴住居跡
（北から）

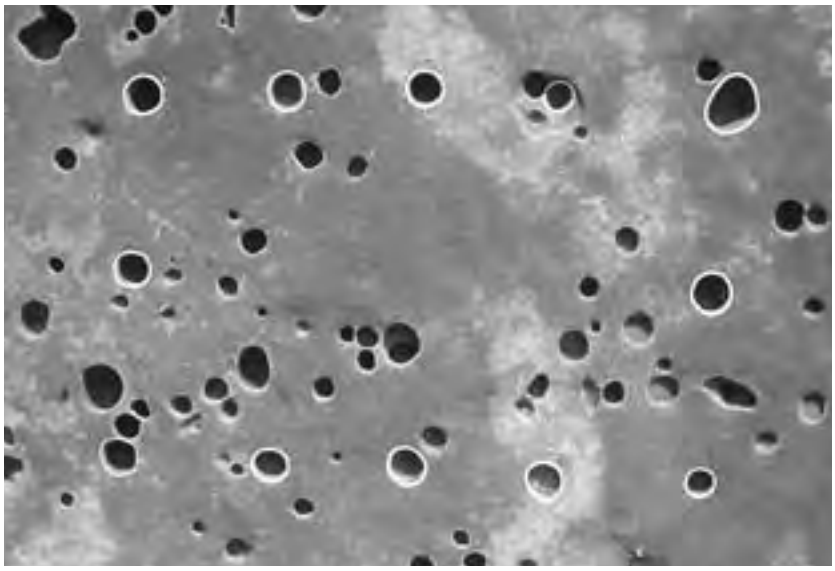


西側掘立柱建物群（1、8号）

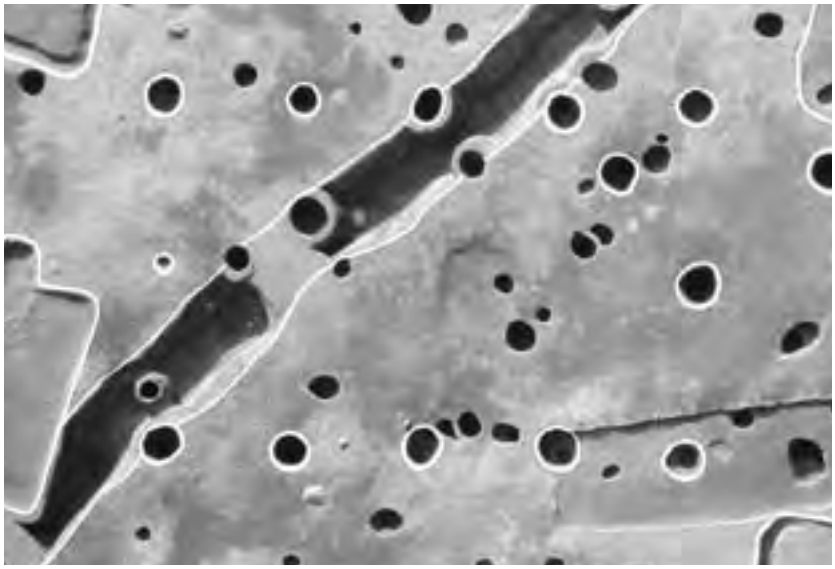


中央掘立柱建物群（２～６、10～12）

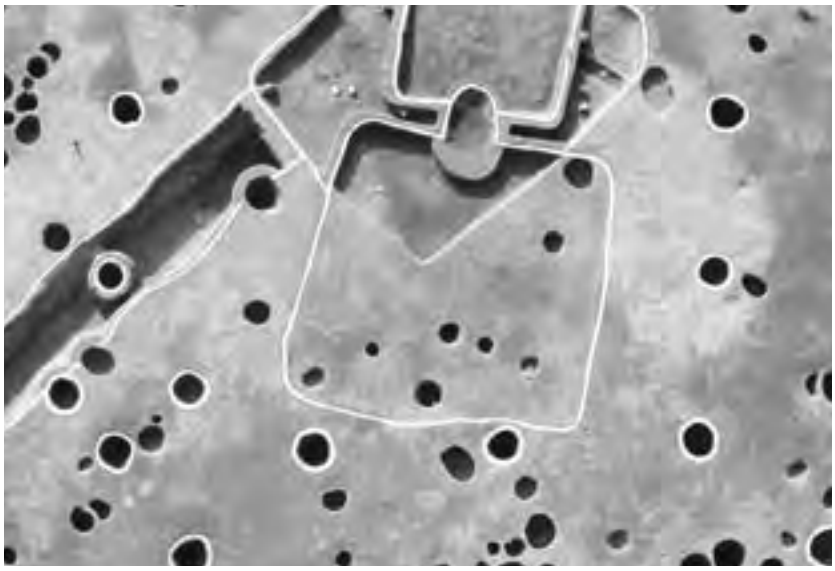
写真図版26



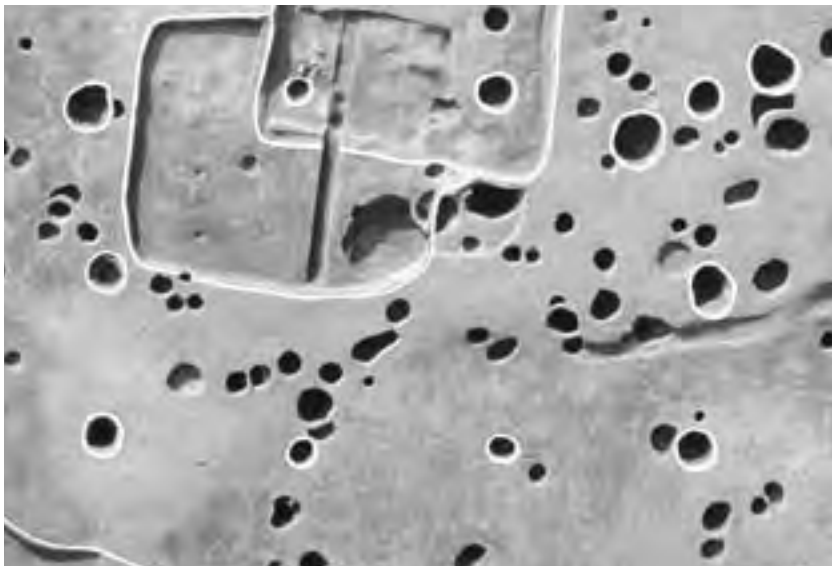
1号掘立柱建物（真上から）



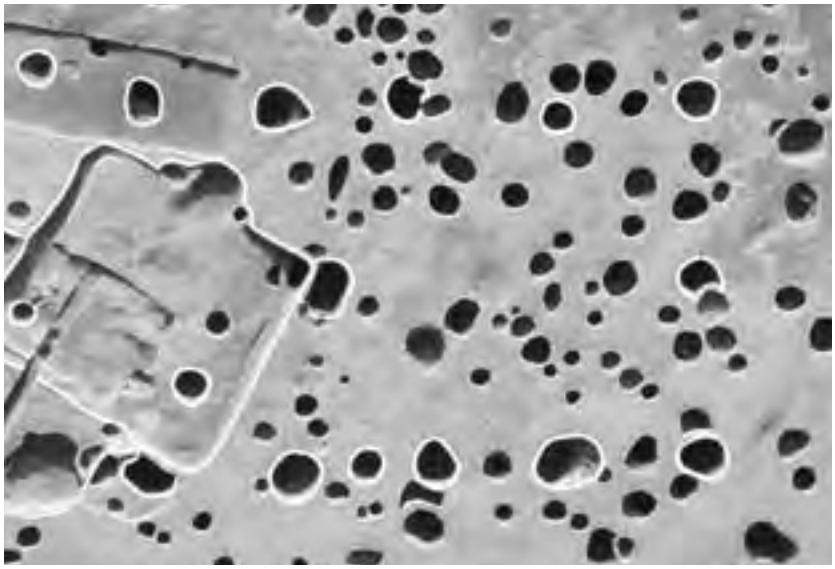
2号掘立柱建物（真上から）



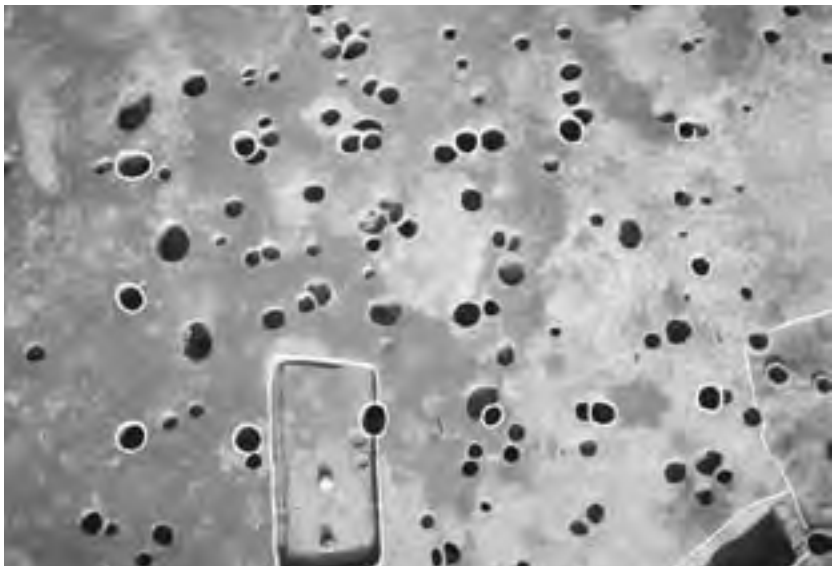
3号掘立柱建物（真上から）



4号掘立柱建物（真上から）

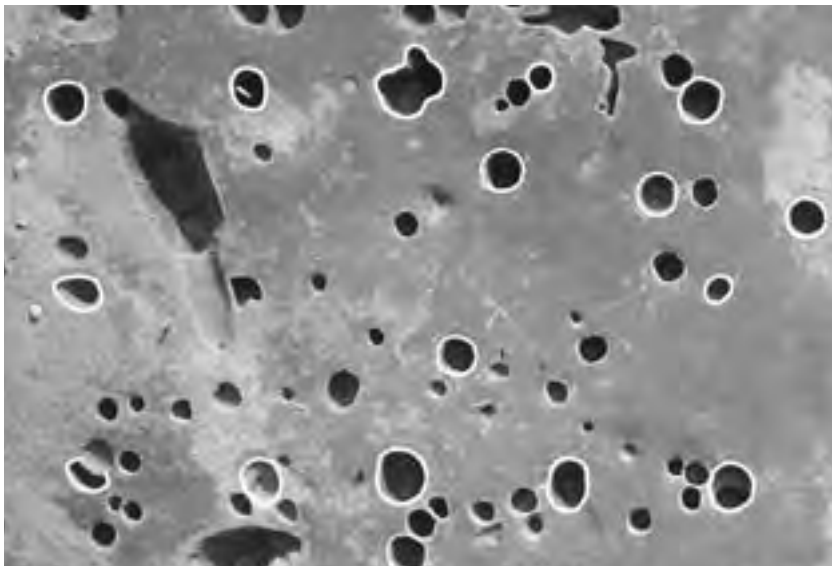


5号掘立柱建物（真上から）

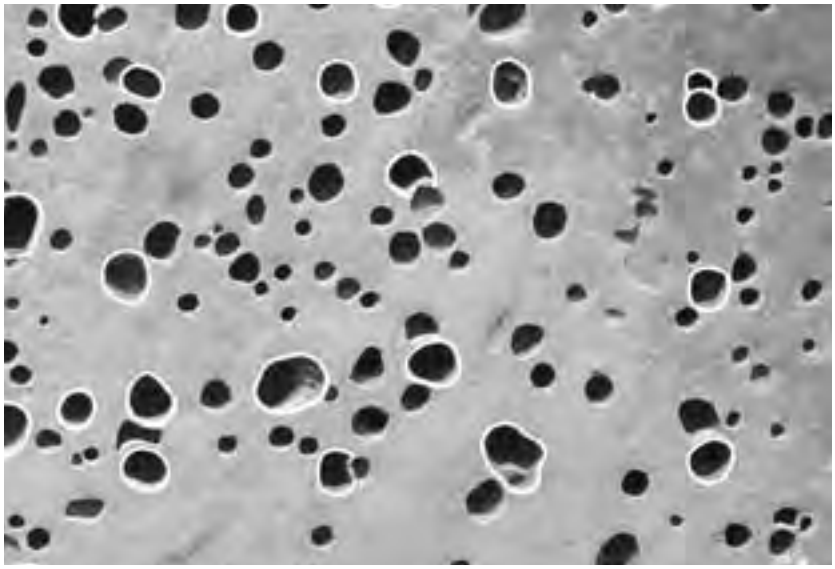


6号掘立柱建物（真上から）

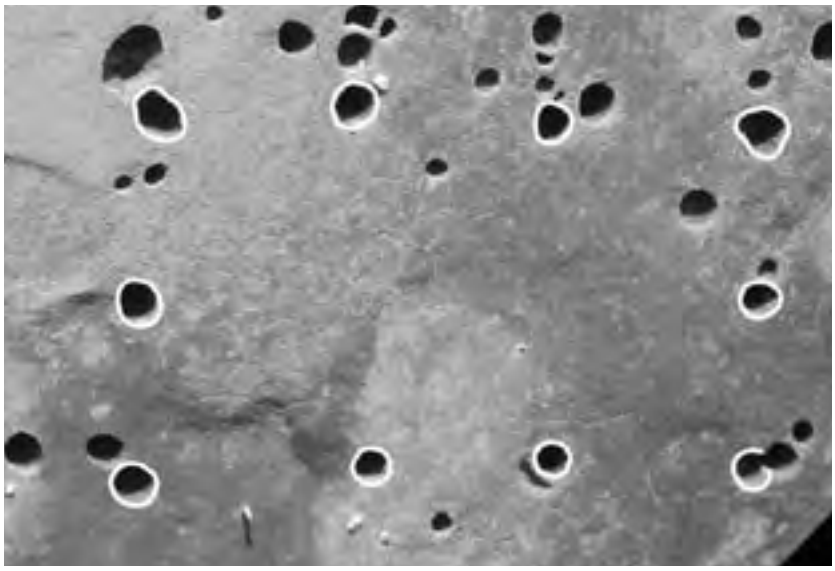
写真図版28



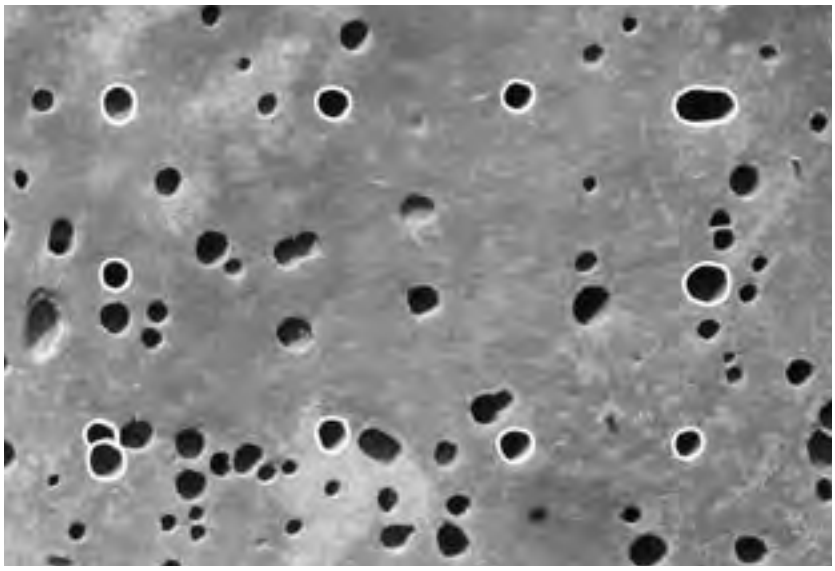
8 号掘立柱建物（真上から）



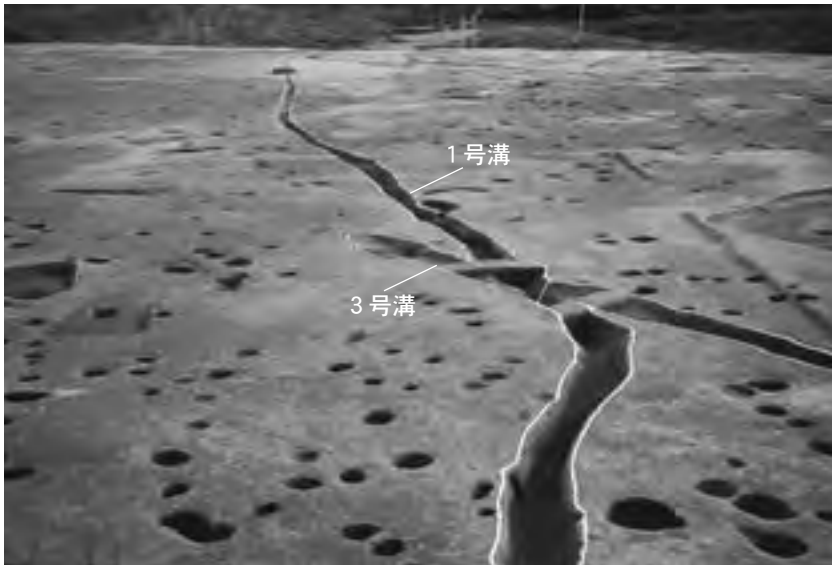
10号掘立柱建物（真上から）



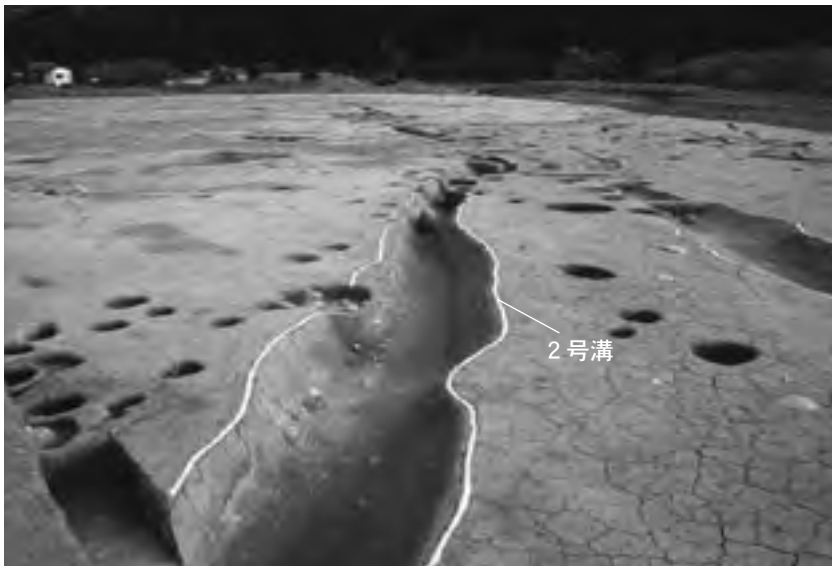
11号掘立柱建物（真上から）



12号掘立柱建物（真上から）

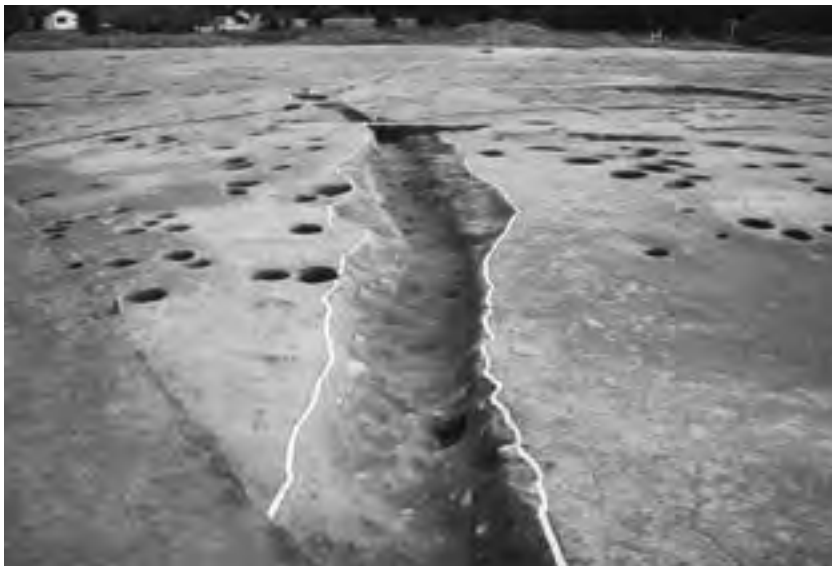


1号溝（北から）



2号溝（北から）

写真図版30



3 号溝（北から）

3 号溝土器出土状況

4 号溝（北から）

① 1、2号溝土層

② 1、3号溝土層①

③ 1、3号溝土層②

④ 3、4号溝土層

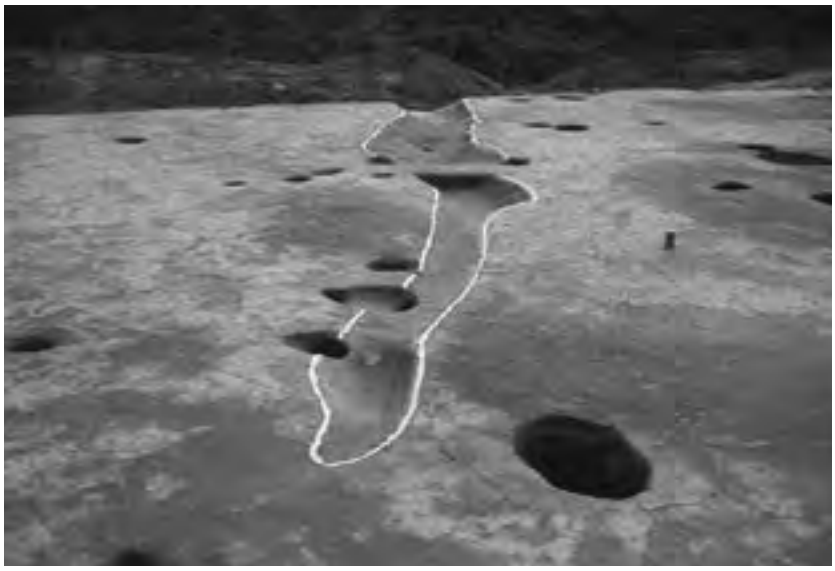
⑤ 2号溝土層

⑥ 2号溝土層①

⑦ 2号溝土層②

⑧ 3号溝土層

写真図版32



5号溝（北から）

6号溝（北から）

6号溝土層

8号溝（北から）

9号溝（北から）

11号溝（北から）

写真図版34

1号竪穴状遺構（南から）

2号竪穴状遺構（東から）

2号竪穴状遺構土層

2 号竪穴状遺構遺物出土状況

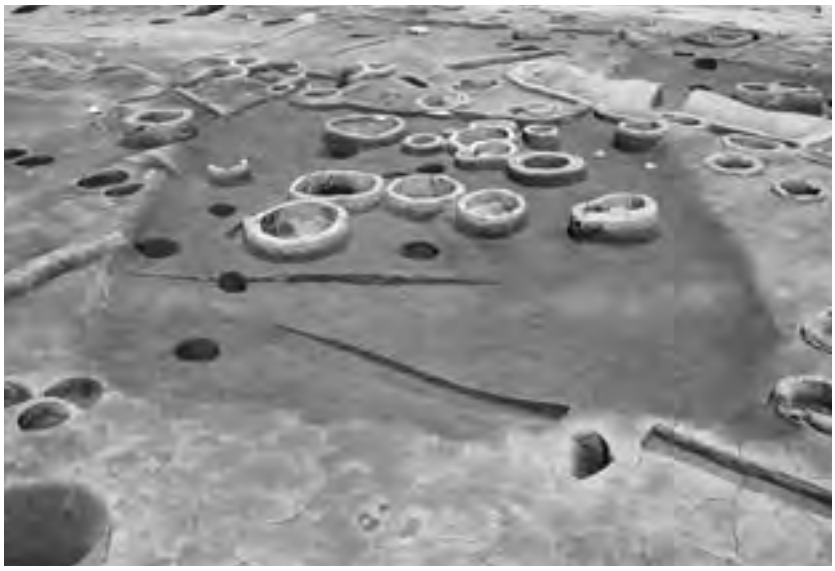
3 号竪穴状遺構（東から）

4 号竪穴状遺構（南から）

4号竪穴状遺構遺物出土状況
（瓦塔？）

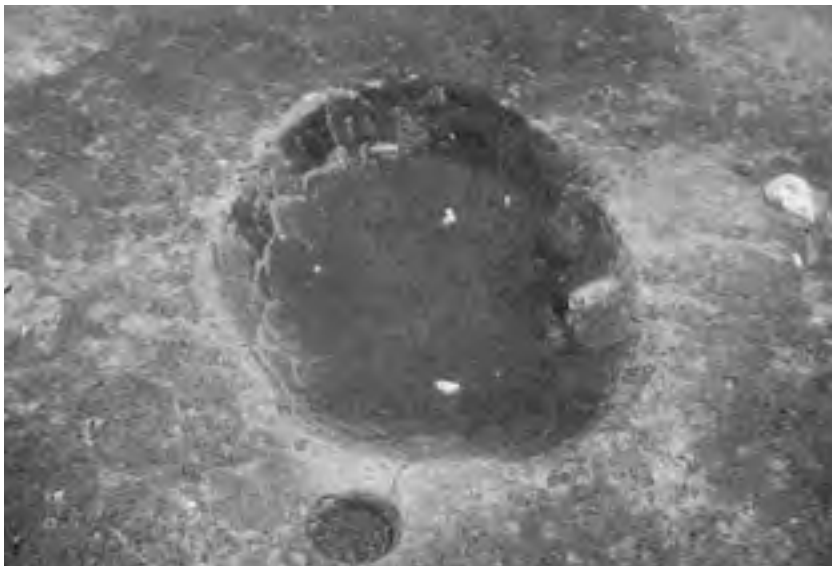
5号竪穴状遺構（南から）

5号竪穴状遺構遺物出土状況



6号竪穴状遺構（南から）

7号竪穴状遺構（西から）



1号土坑（南から）

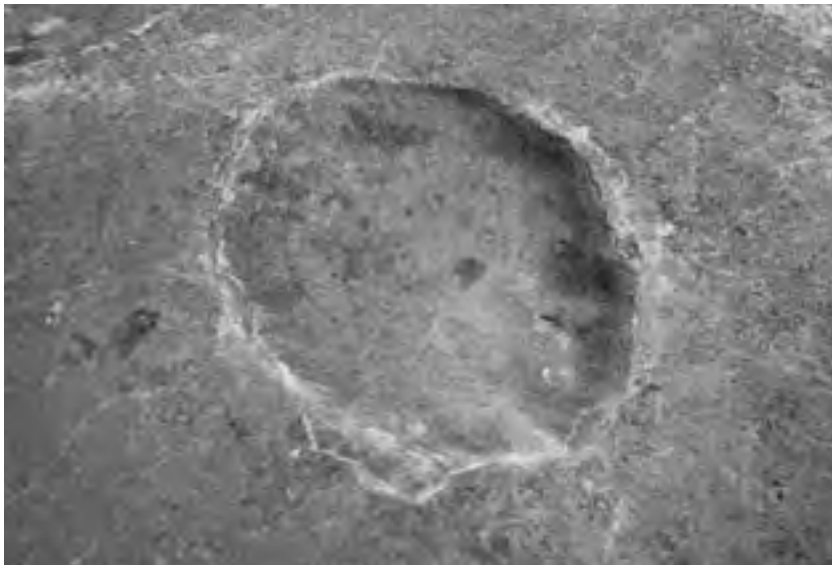
写真図版38

2号土坑（西から）

3号土坑（東から）

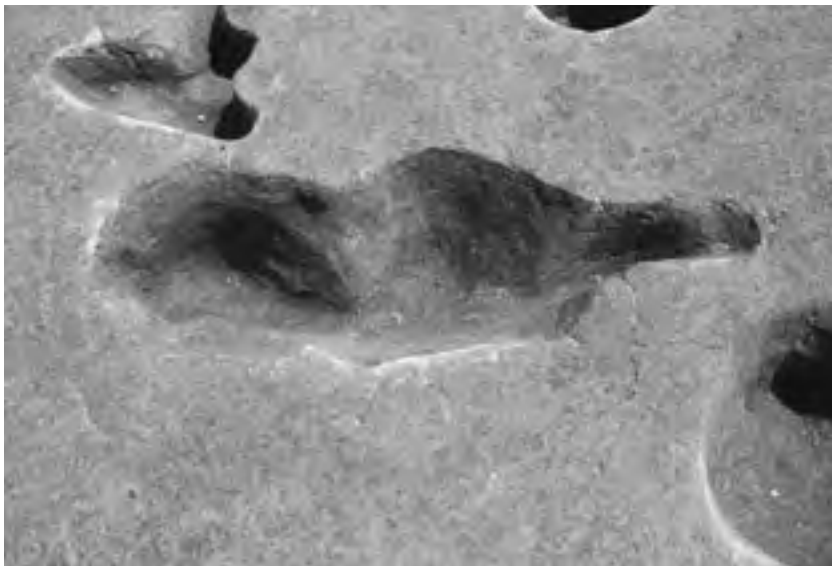
4号土坑（東から）

5号土坑（東から）



6号土坑（南から）

7号土坑（南から）



8 号土坑（南から）

9 号土坑（東から）

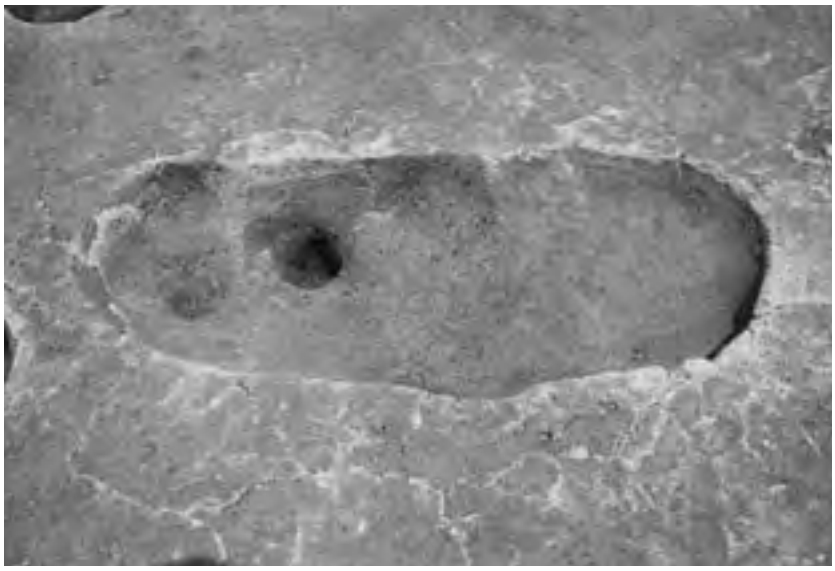
10号土坑（東から）

11号土坑（南から）

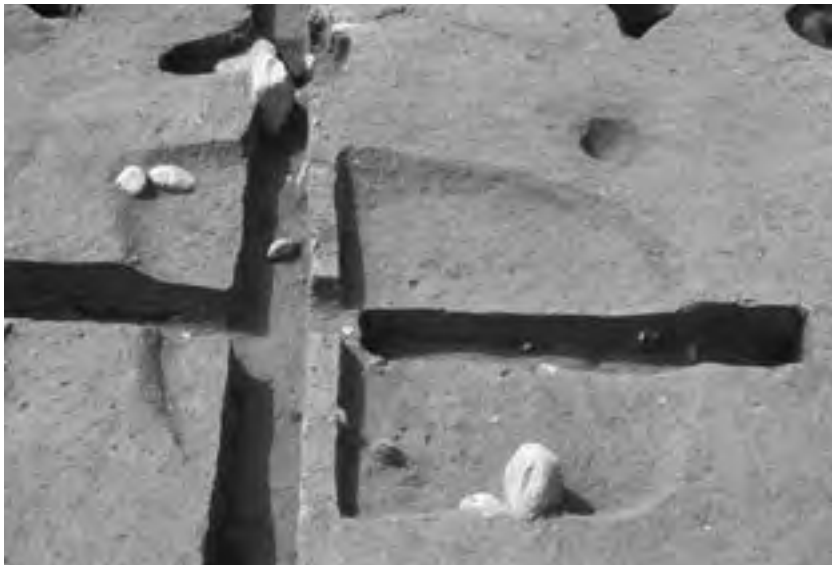
12号土坑（東から）

13号土坑（東から）

写真図版42



14号土坑（東から）



15号土坑（東から）

16号土坑（東から）

17号土坑（南から）

18号土坑（東から）

包含層グリット遺物出土状況
（北から）

写真図版44

① 包含層土層トレンチ

② 水田層土器出土状況

③ 北壁土層①

④ 北壁土層②

⑤ 北壁土層③

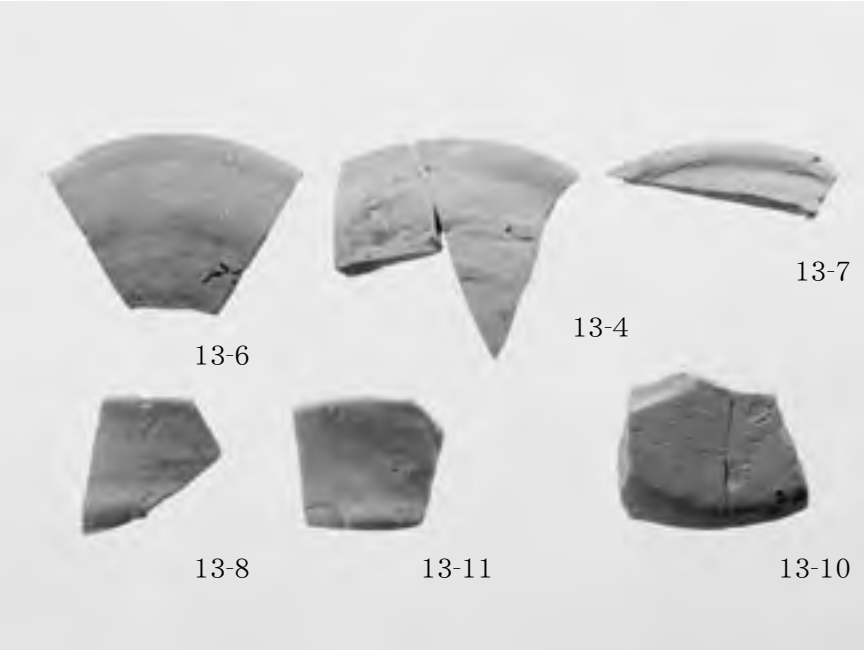
⑥ 北壁土層④

⑦ 北壁土層⑤

⑧ 北壁土層⑥

13-1

13-2


13-6 13-4 13-7 13-8 13-11 13-10

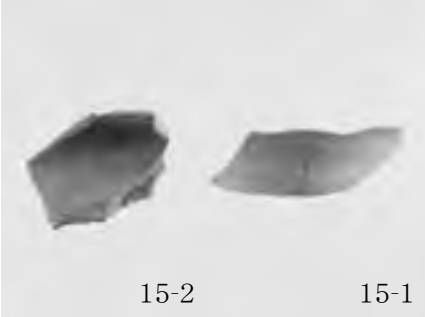
13-3

13-5

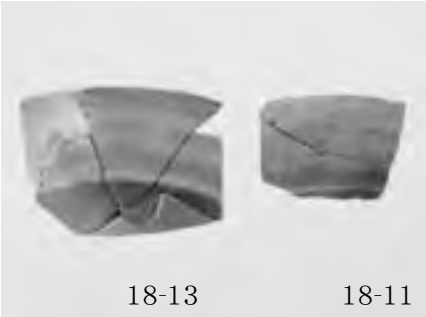
13-9

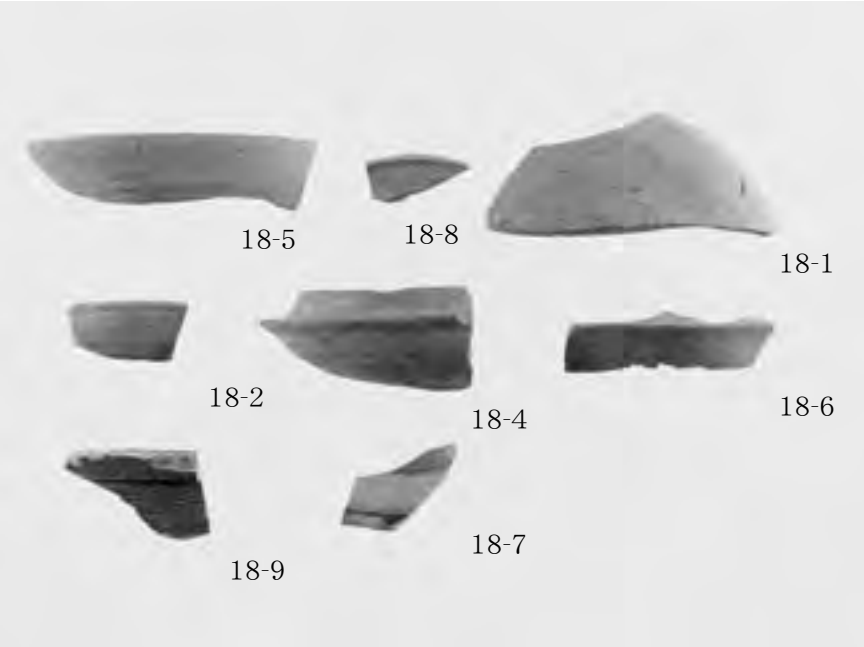
13-12

13-13


15-2 15-1

18-3

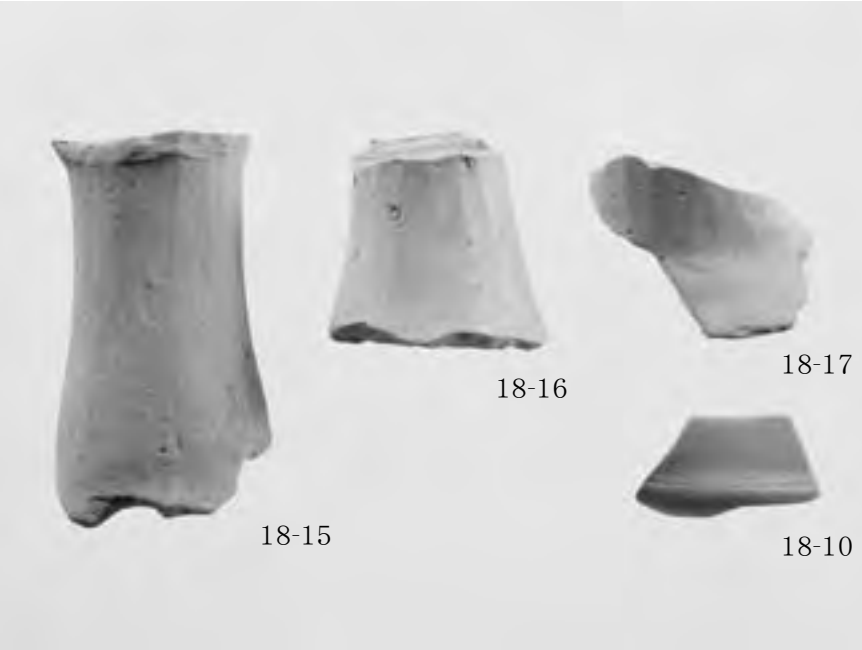

18-13 18-11


18-5 18-8 18-1 18-2 18-4 18-6 18-9 18-7

写真図版46

18-12

18-14

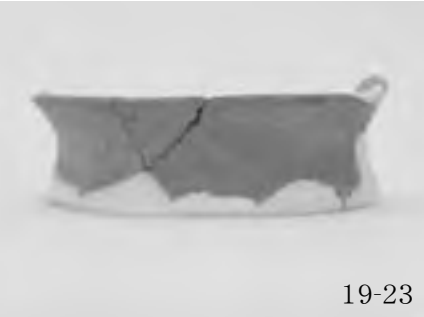

18-15
18-16
18-17
18-10

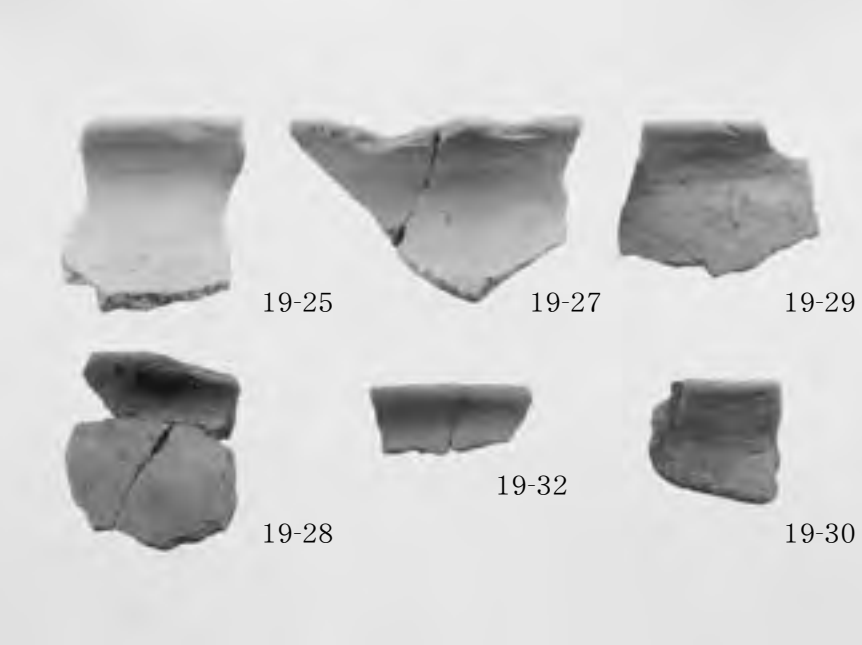
18-18

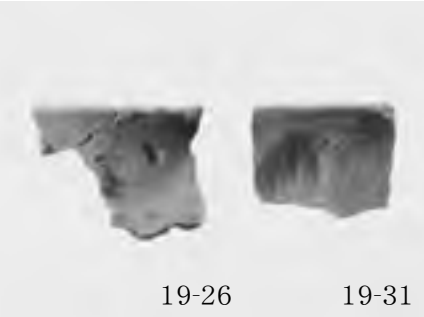
18-19

19-20

19-24
19-21


19-23

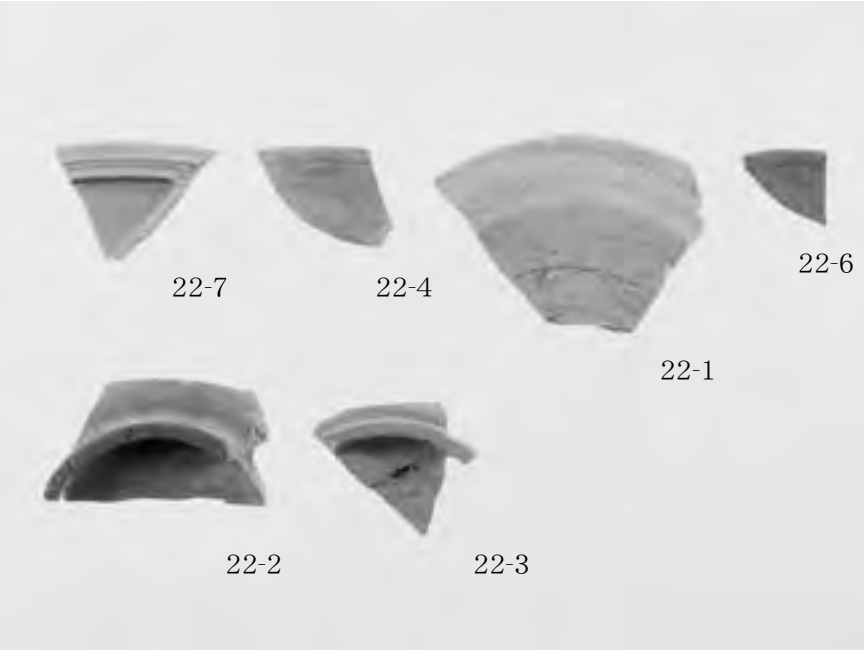

19-25
19-27
19-29
19-32
19-28
19-30

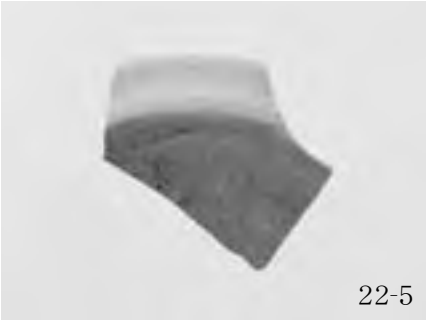

19-26
19-31

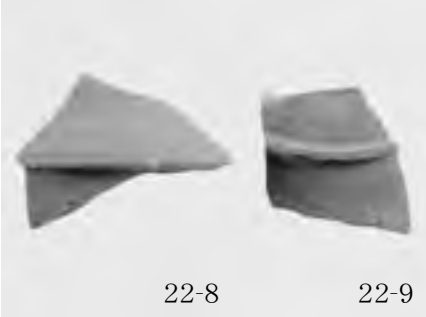
19-33

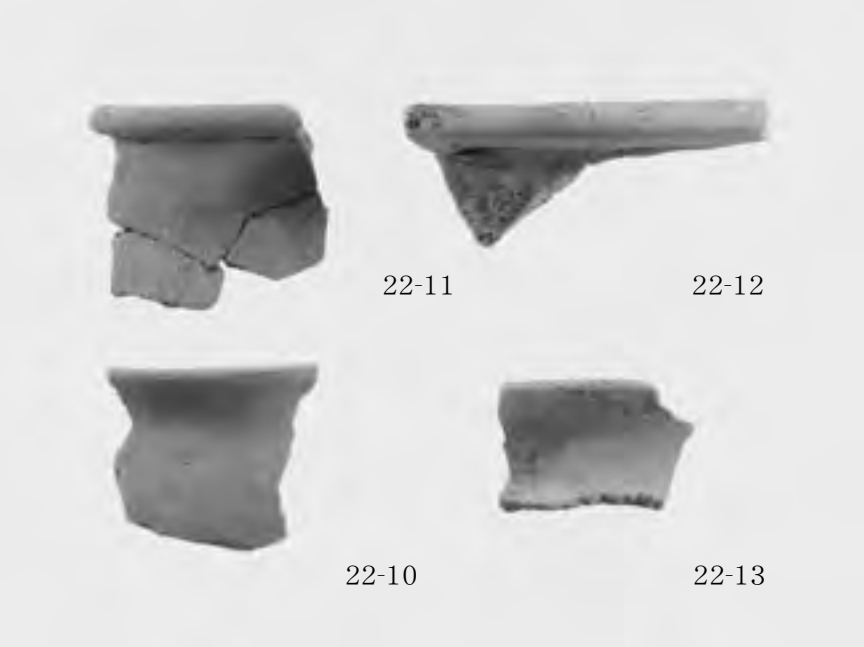
19-34

19-35

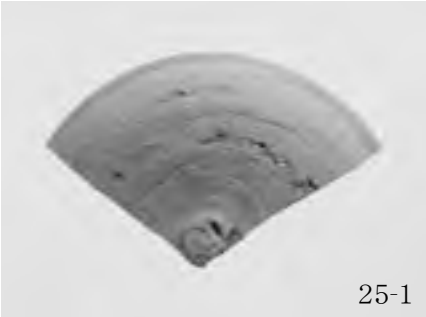

22-7 22-4 22-6 22-1 22-2 22-3

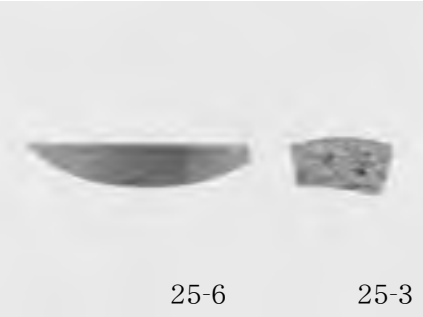

22-5


22-8 22-9

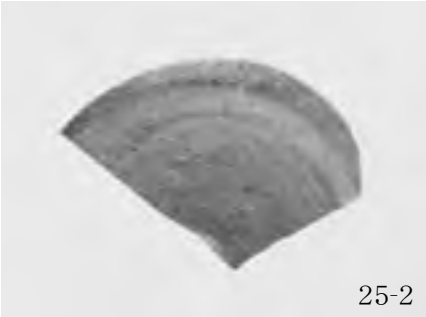

22-11 22-12 22-10 22-13

22-14


25-1


25-6 25-3

25-5

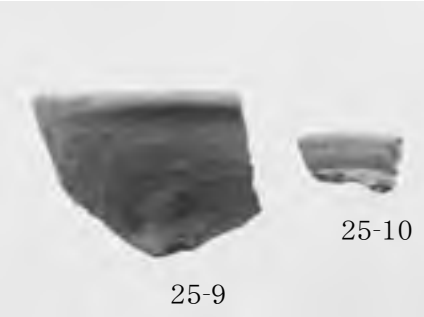

25-2

25-4

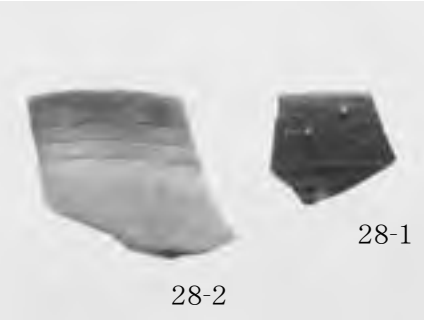
25-7

写真図版48

25-8


25-10
25-9

25-11


28-1
28-2

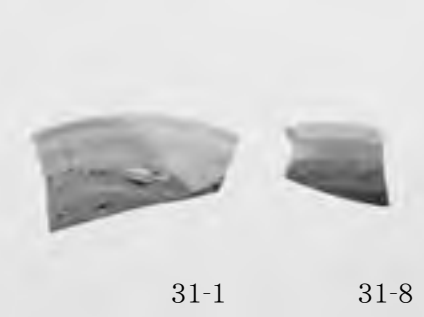
28-3

28-4

28-5

28-6(表)

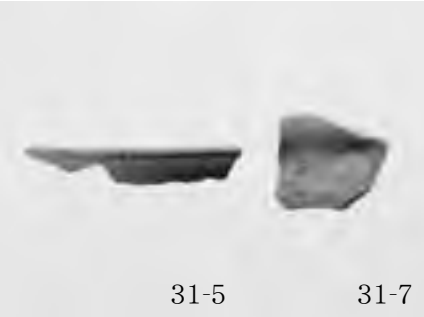
28-6(裏)


31-1
31-8

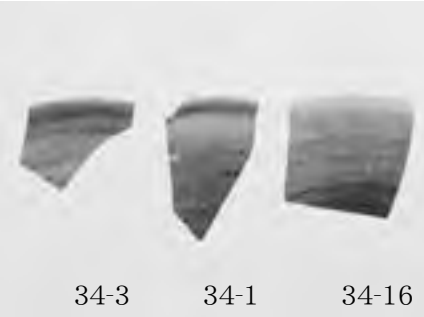
31-2

31-3

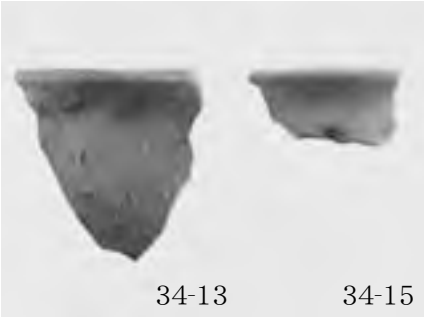
31-4

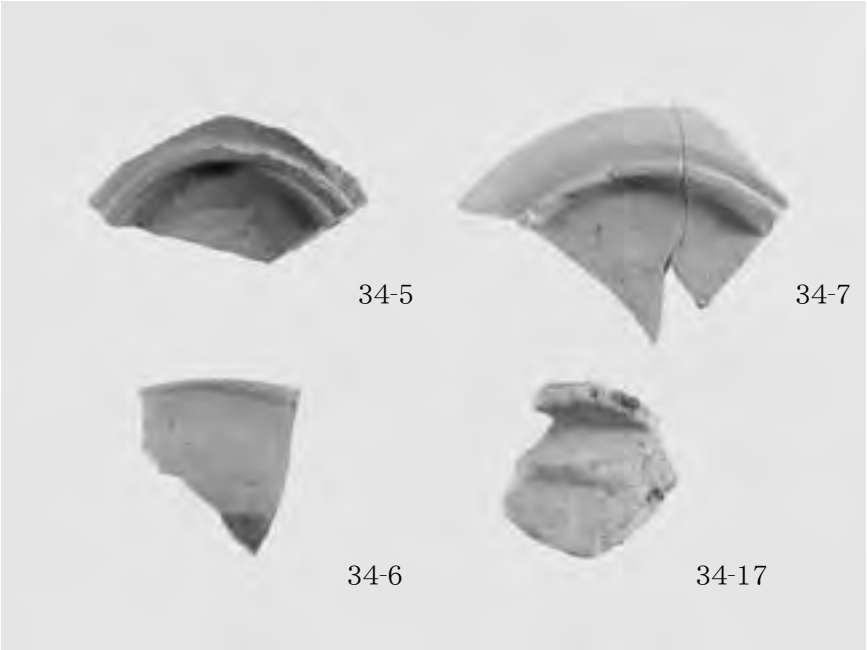

31-5
31-7

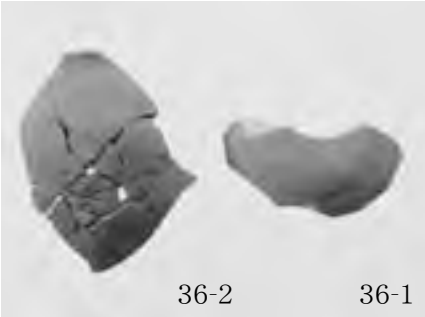
31-6


34-3
34-1
34-16

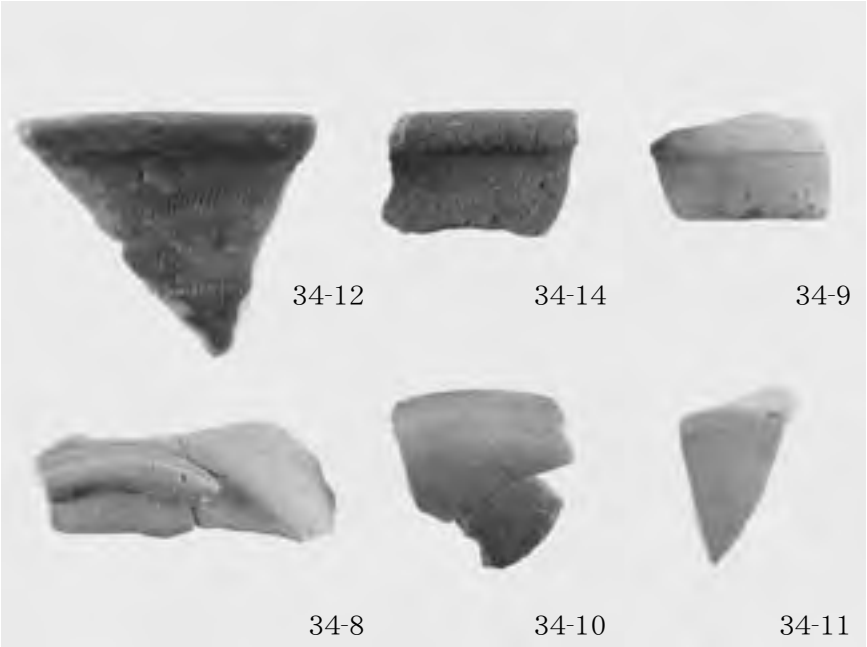
34-4


34-13
34-15

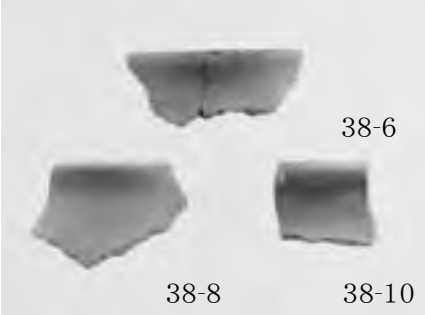

34-5
34-7
34-6
34-17

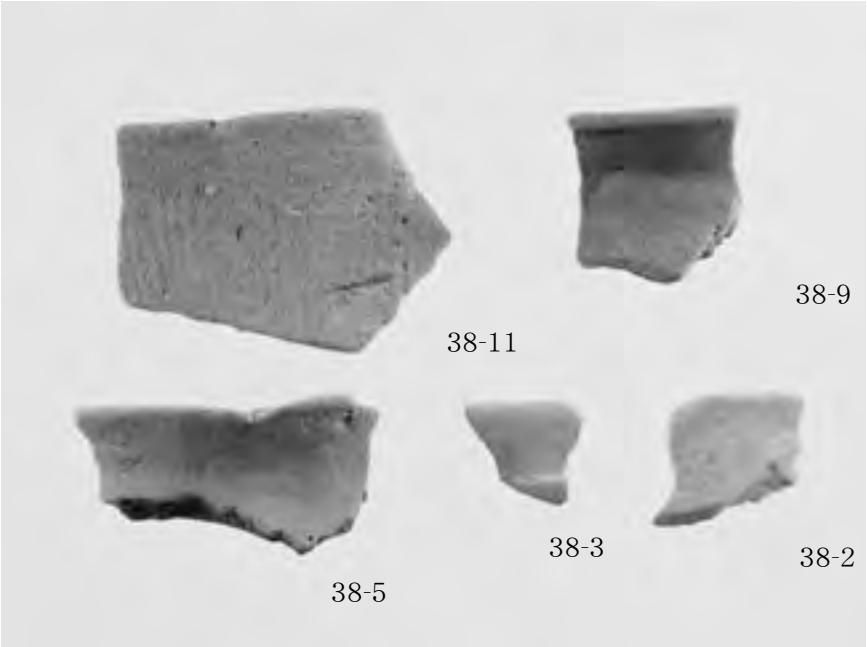

36-2
36-1

38-1


34-12
34-14
34-9
34-8
34-10
34-11

38-4


38-6
38-8
38-10


38-9
38-11
38-3
38-2
38-5

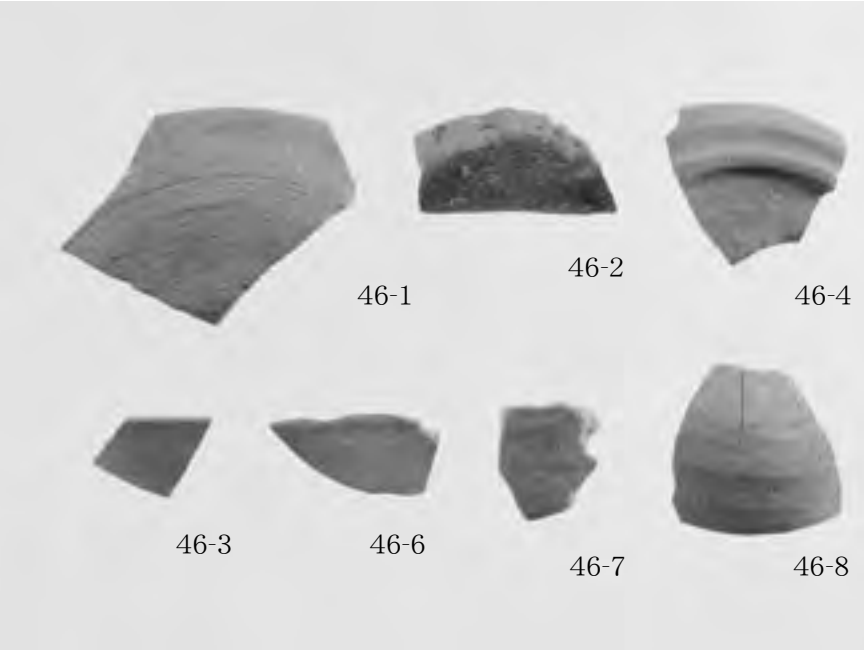
38-7

38-12

40-1

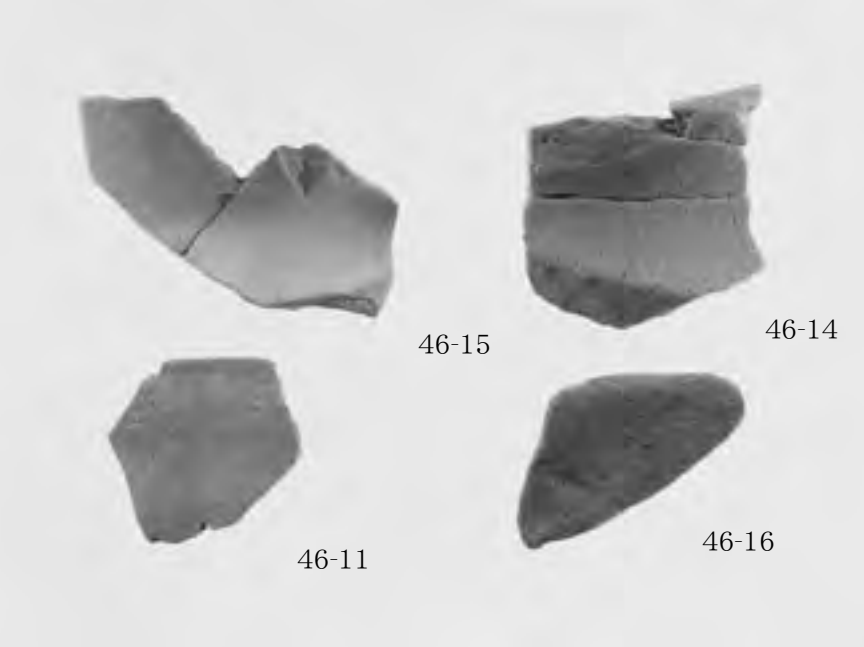
43-1

43-2


46-1 46-2 46-4 46-3 46-6 46-7 46-8

46-5

46-9

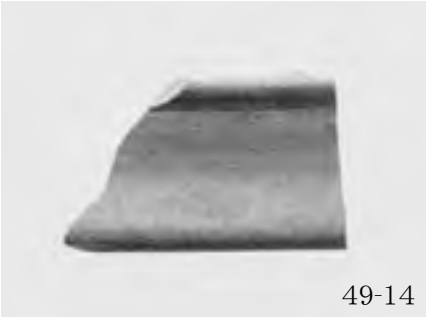

46-15 46-14 46-11 46-16

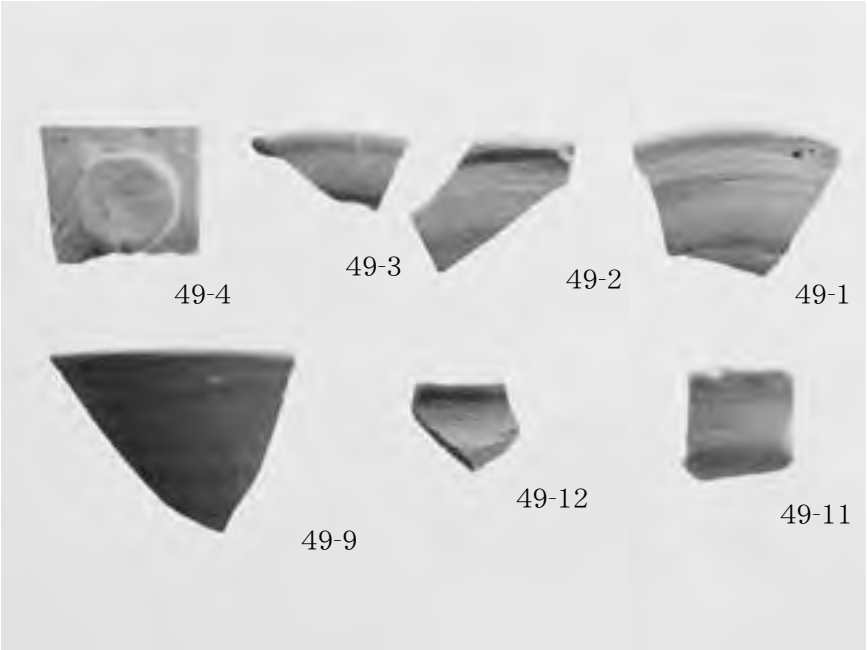
46-10

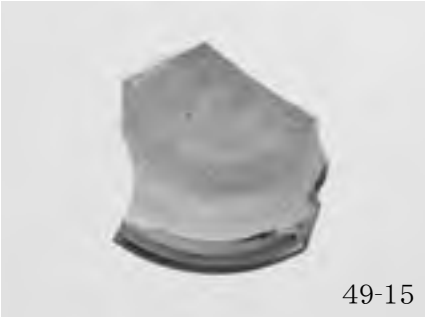
46-13

49-7

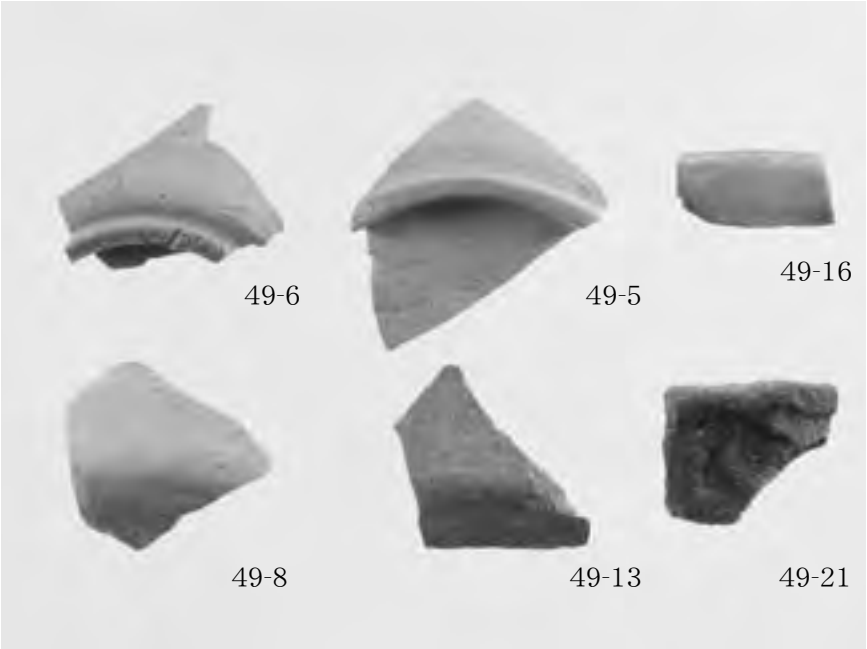
49-10


49-14


49-4
49-3
49-2
49-1
49-9
49-12
49-11

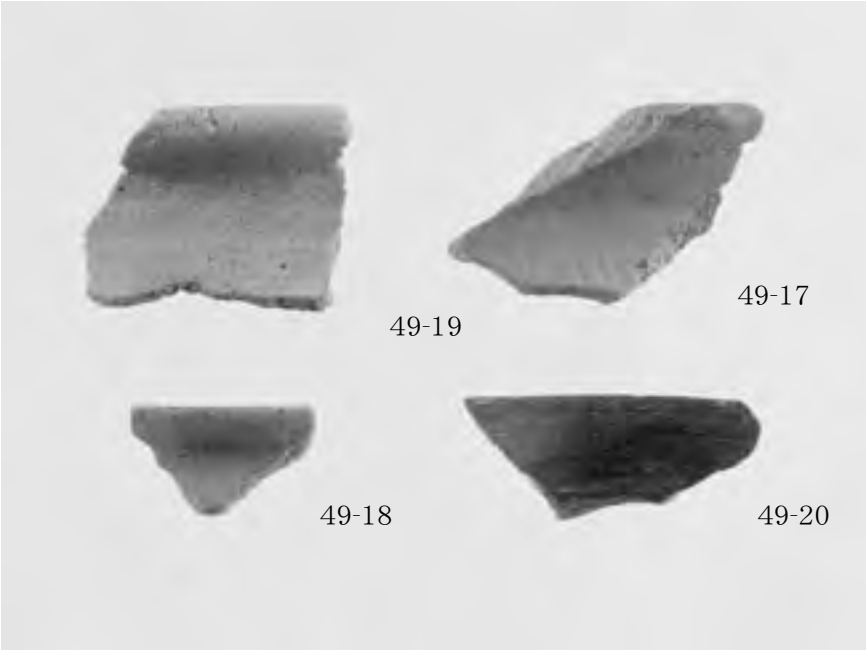

49-15

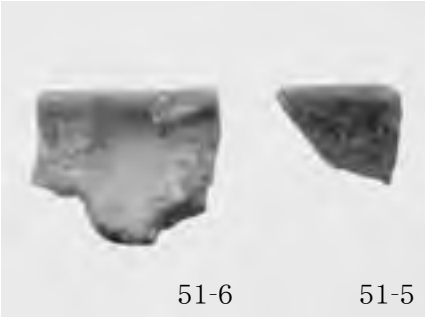
51-1


49-6
49-5
49-16
49-8
49-13
49-21

51-2

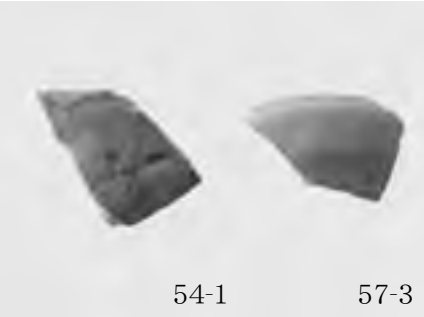
51-4
51-3


49-17
49-19
49-18
49-20

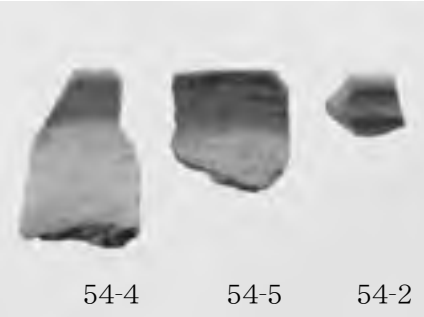

51-6
51-5

51-7

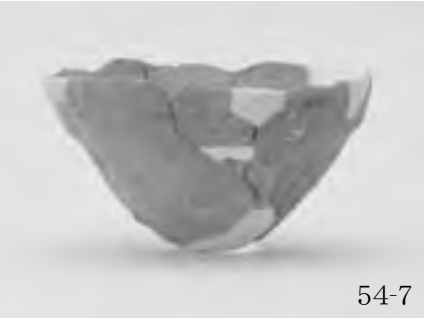
写真図版52


54-1 57-3

54-3

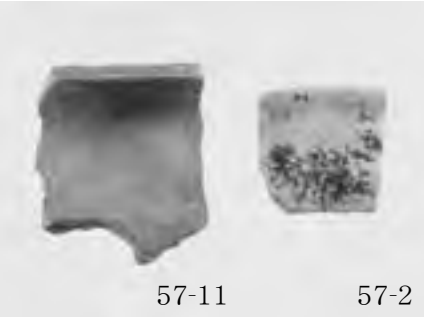

54-4 54-5 54-2

54-6


54-7

54-8

57-1


57-11 57-2

57-4

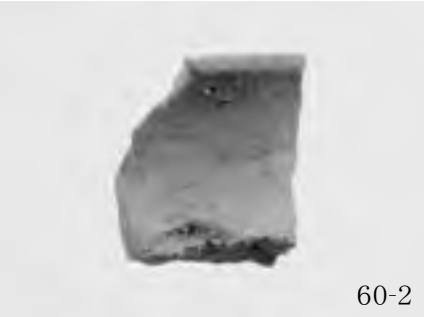
57-6 57-7 57-5 57-8

57-9

57-10

57-12

60-1


60-2

63-1

63-2

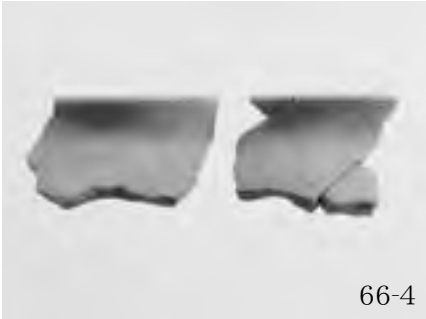
63-3

63-4

66-1

66-2

66-3

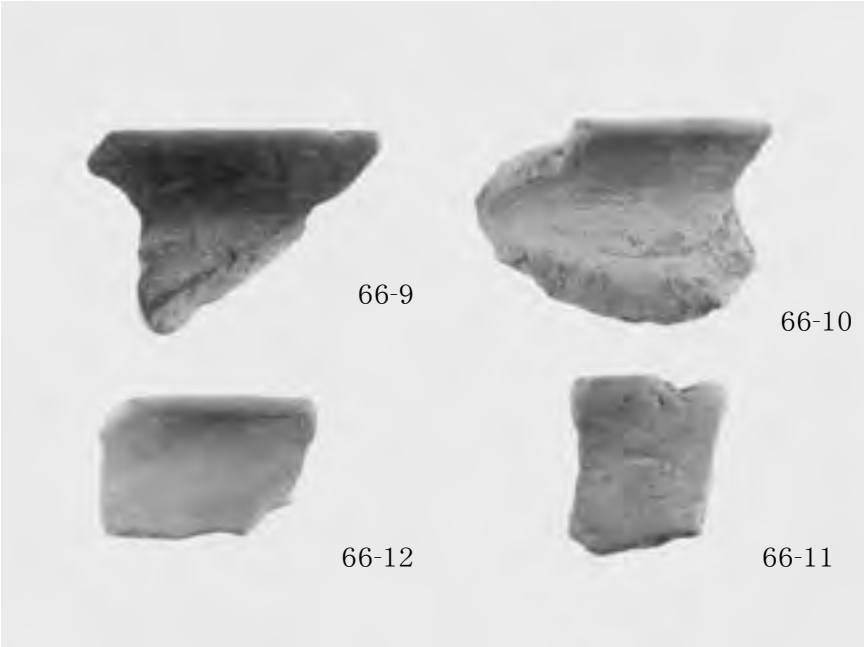

66-4

66-5

66-6

66-7

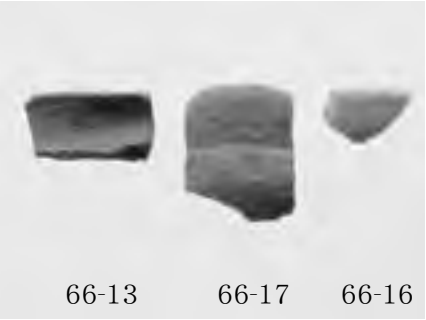
66-8

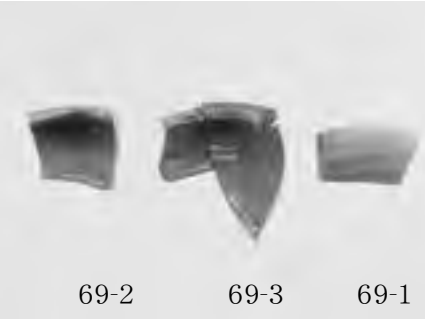

66-9
66-10
66-12
66-11

66-14

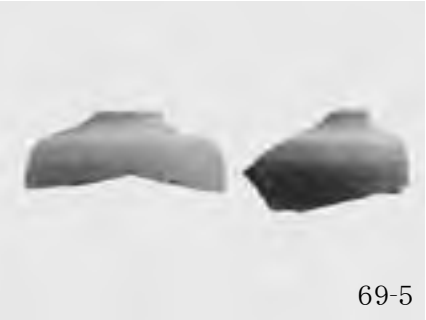
66-15

写真図版54


66-13
66-17
66-16

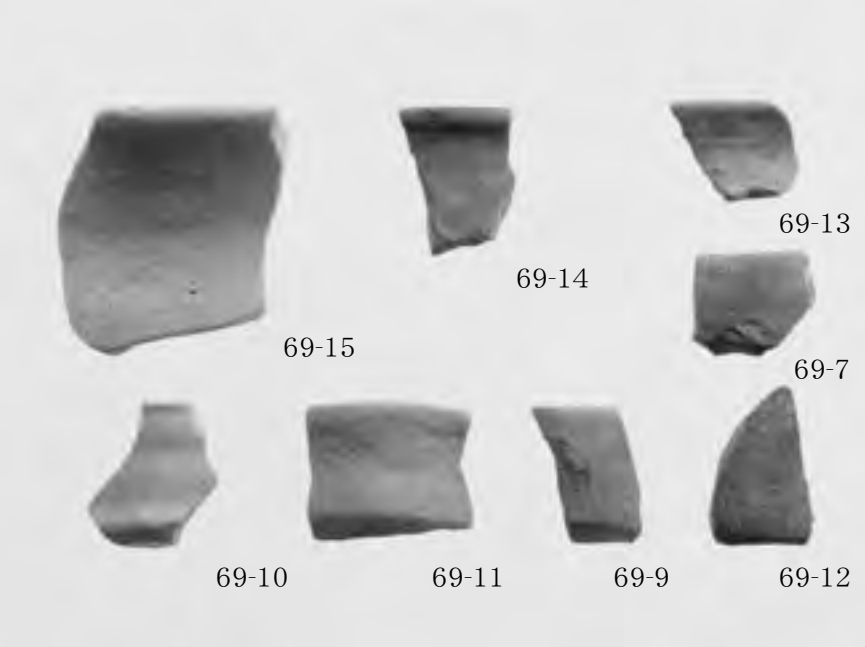

69-2
69-3
69-1

69-4


69-5

69-6

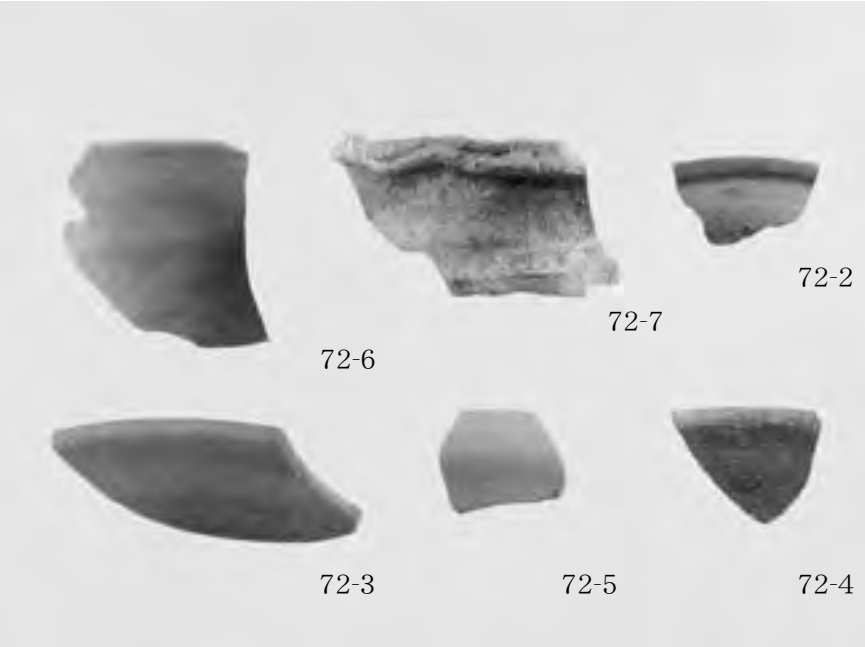
69-8

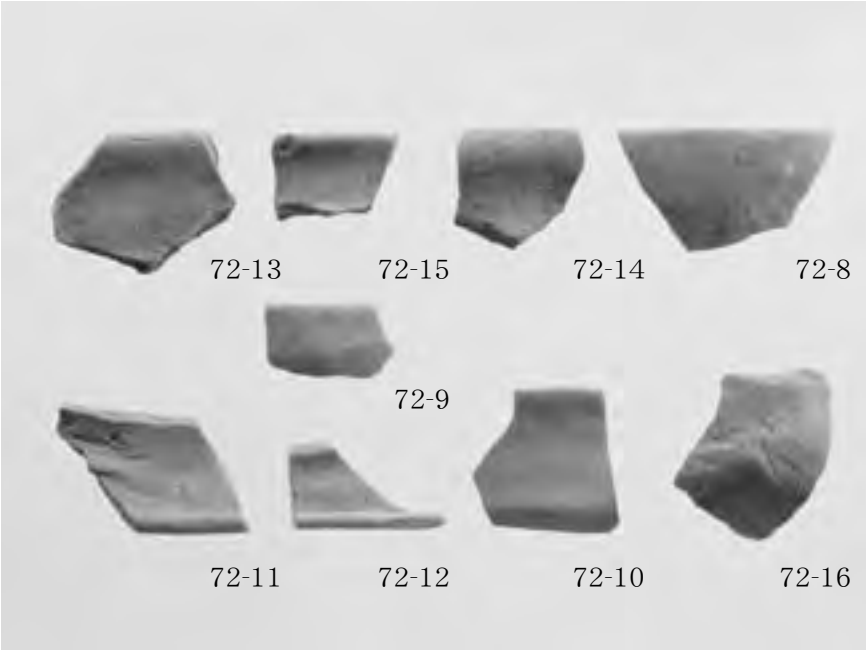

69-13
69-14
69-15
69-7
69-10
69-11
69-9
69-12

69-16

69-17

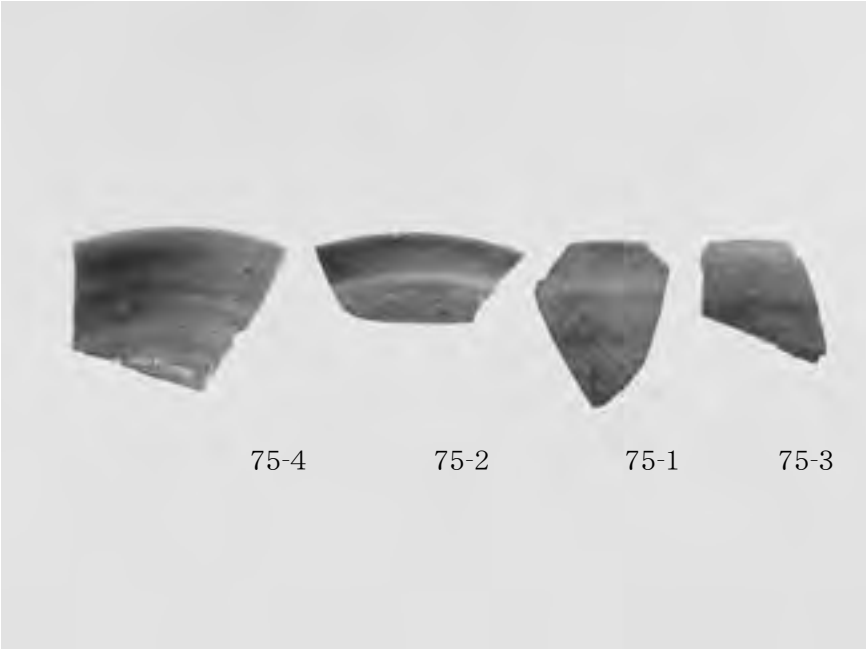
72-1

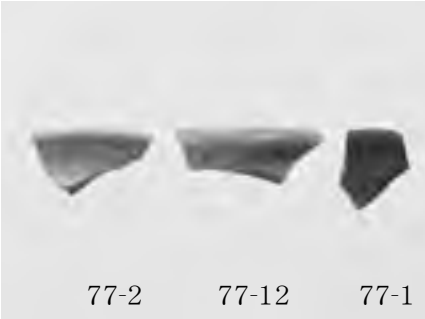

72-2
72-7
72-6
72-3
72-5
72-4


72-13
72-15
72-14
72-8
72-9
72-11
72-12
72-10
72-16

75-15

75-16


75-4
75-2
75-1
75-3


77-2
77-12
77-1

77-3

75-9
75-13
75-12
75-11
75-14
75-6
75-5
75-7
75-8

77-4

77-5

写真図版56

77-11
75-10
77-10
77-9
77-13

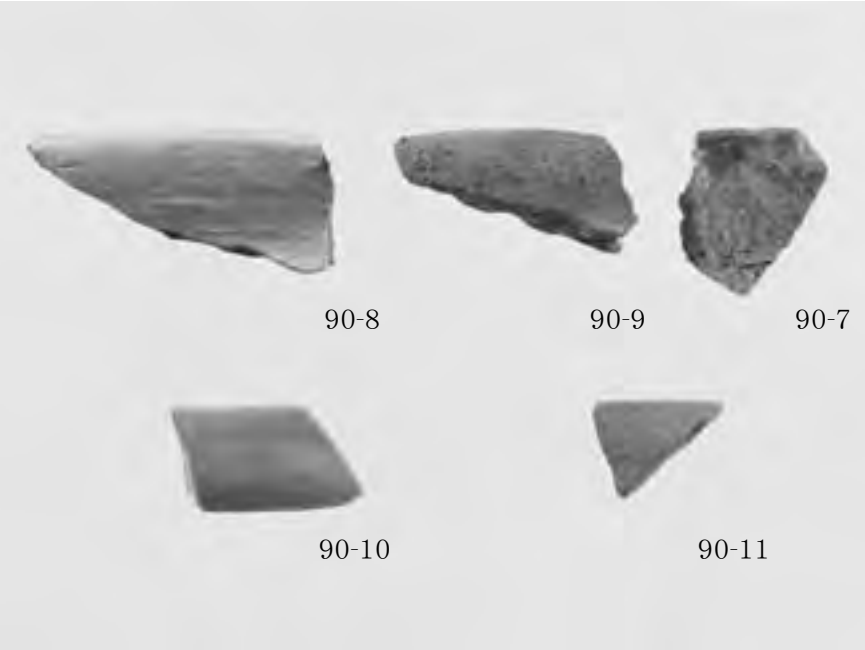
77-6

77-8

90-5
90-4
90-6
90-3

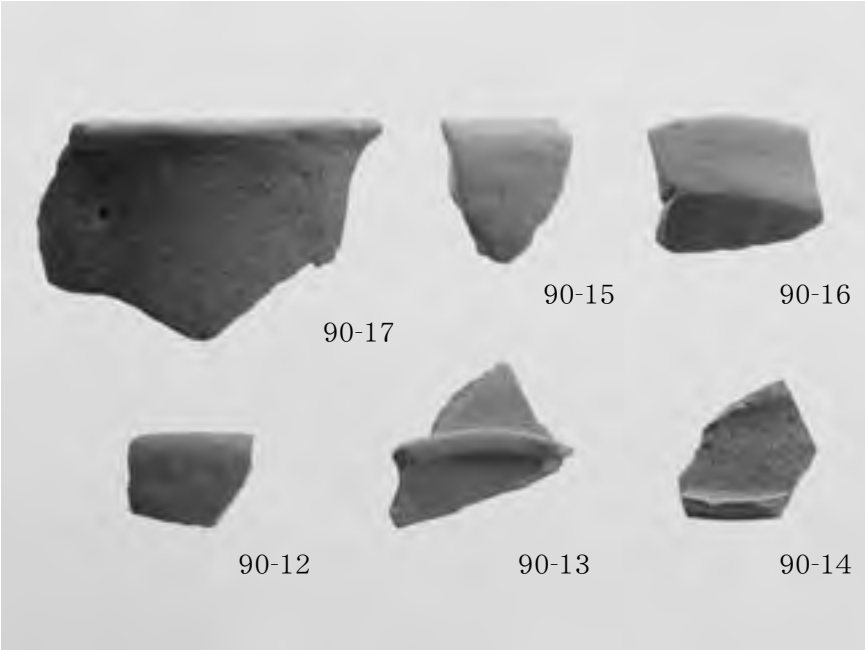
77-7

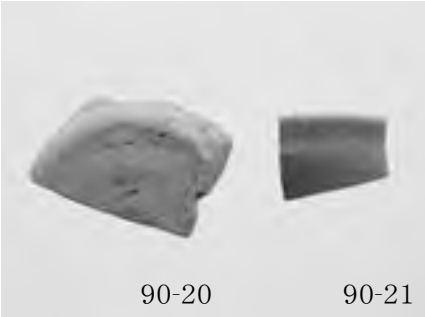
90-1
90-2


90-8
90-9
90-7
90-10
90-11

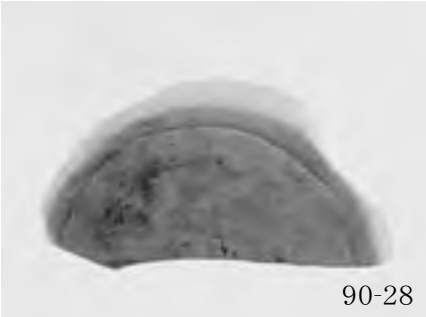
90-18

90-19


90-15
90-16
90-17
90-12
90-13
90-14


90-20
90-21

90-27


90-28

90-30

90-32

90-33

90-34

90-35

90-36

94-2

95-1
95-2

96-1

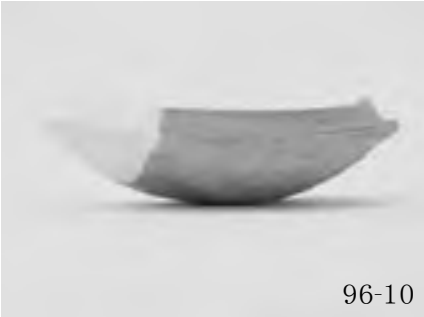
96-2

96-3

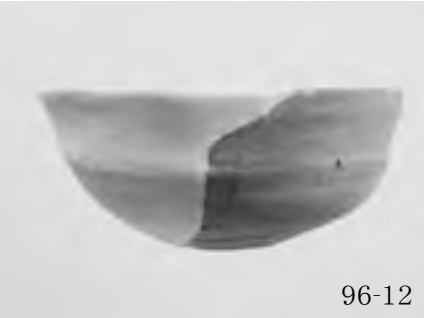
写真図版58

96-4

96-9


96-10

96-11


96-12

96-13

96-14

96-17

96-18

96-19

96-21

96-22

96-23

96-24

96-25

96-26

96-27

97-29

97-31

97-34

97-35

97-36

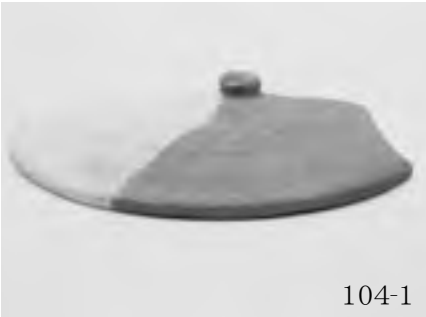
97-37

97-38

102-2

102-3

102-4


104-1

104-2

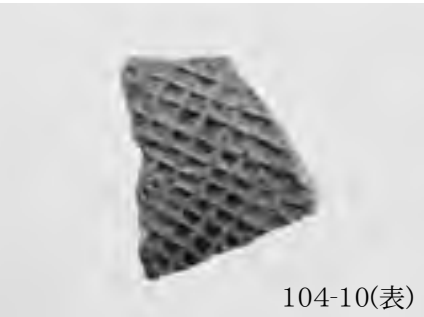
104-3

104-4

104-5

104-6

104-7


104-10(表)

104-10(裏)

写真図版60

104-8

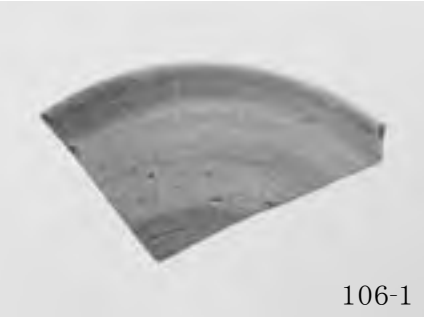
104-11

104-13

104-15

104-16

104-18


106-1

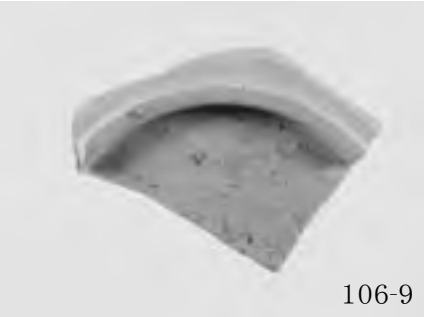
106-2

106-4

106-5

106-6

106-8


106-9

106-10

106-11

106-12

106-13

106-14

106-15

106-16

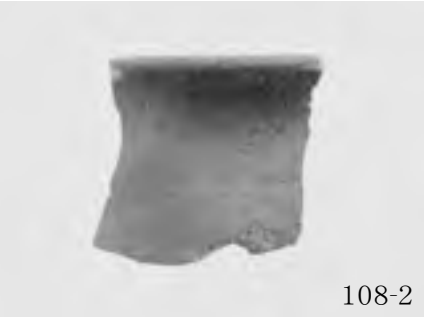
106-17

106-18

106-19

106-20

108-1

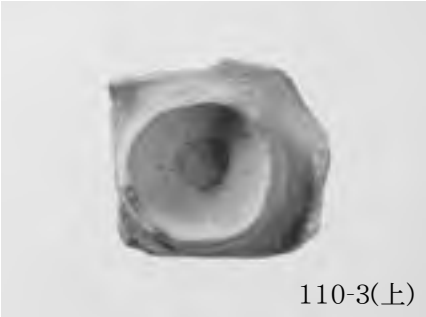

108-2

108-3

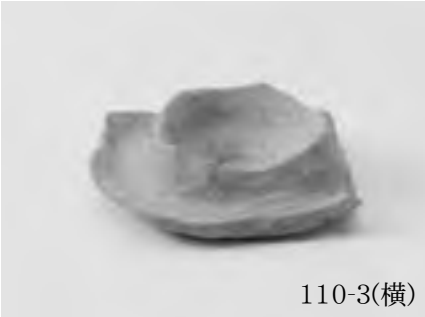
108-4

108-5

110-1


110-3(上)

110-3(下)


110-3(横)

112-1

112-3

112-4

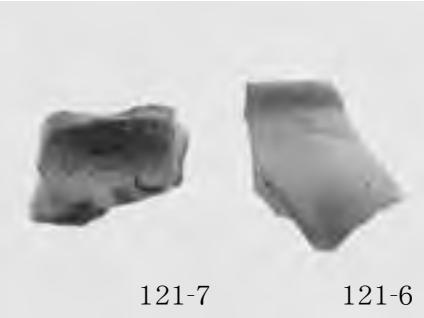
写真図版62

112-5

121-1

121-2

121-3

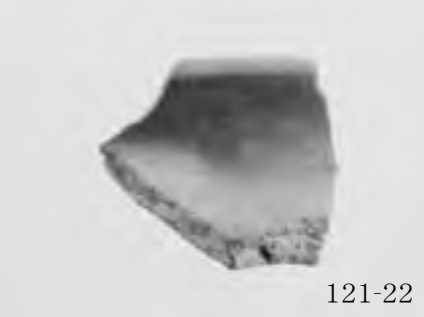

121-7 121-6

121-8

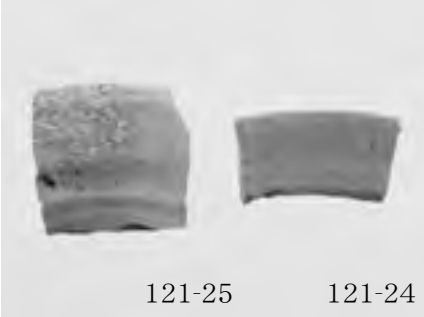
121-13

121-14

121-19


121-22

121-23


121-25 121-24

121-26

121-28

121-29

121-33

121-34

123-37

123-3

123-12

123-13

123-15

123-16

123-17

123-21

123-25

123-26

123-27

123-29

123-33

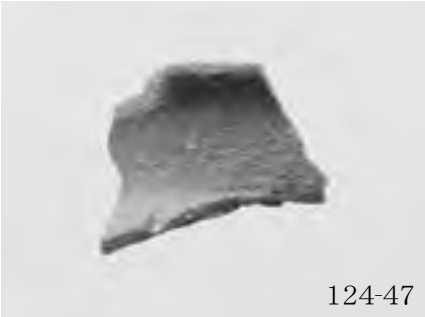
123-38

123-41

123-43

124-44

124-46


124-47

写真図版64

124-49

124-50

124-52

124-53

124-54

124-56

124-57

124-58

124-60

124-62

124-66

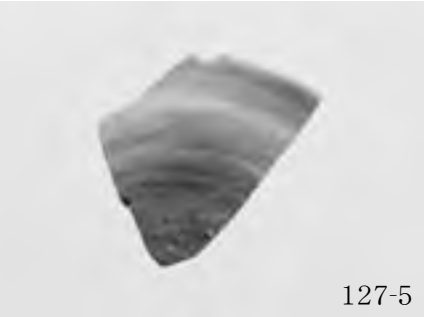
124-67

127-1

127-2

127-3

127-4


127-5

127-6

127-7

127-8

127-9

127-10

127-11

127-12

128-13

128-14

128-15

128-16

128-17

128-18

129-1

129-2

129-3

129-4

129-5

129-6

写真図版66

129-7

129-8(表)

129-8(裏)

129-9

129-10

130-1

130-2

130-3

130-4

表土中

P44

130-5(横)

130-5(上)

131-1

131-2

131-3

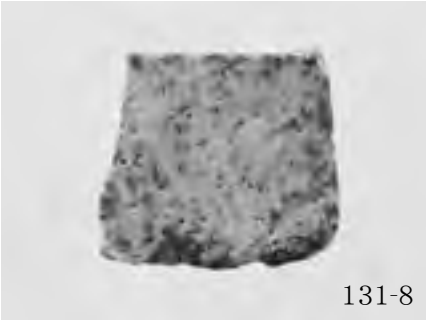
131-4

131-5

131-6(表)

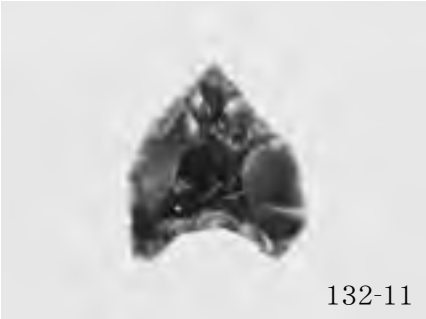
131-6(横)

131-7


131-8

132-9

132-10


132-11

132-12

132-13

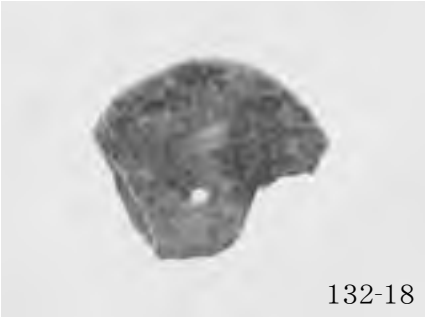
132-14

132-15

132-16

132-17(表)

132-17(裏)


132-18

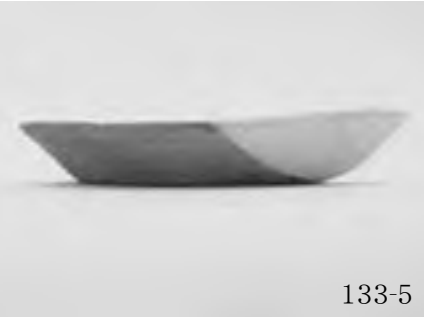
133-1

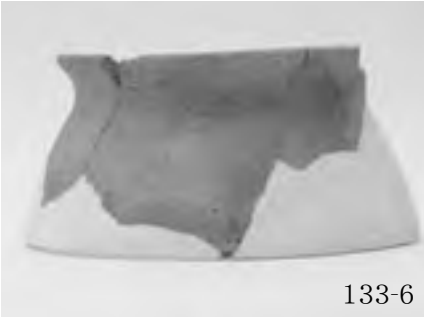
133-2

133-3

写真図版68

133-4


133-5


133-6

133-7

133-8

6-1

133-9 133-10 133-11

報　告　書　抄　録

ふりがな	おおひよしたけいせき
書名	大肥吉竹遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	日田市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第48集
編著者名	渡邉隆行
編集機関	日田市教育委員会文化課
所在地	〒877-0077　日田市南友田町516-1
発行機関	日田市教育委員会
所在地	〒877-8601　日田市田島2－6－1
発行年月日	2004年３月19日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（しょざいち）	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
大肥吉竹遺跡（おおひよしたけいせき）	大分県日田市（おおいたけんひたし）大字大肥字榎町（おおあざおおひあざえのきまち）ほか	44204-6	651004	33°22‘26.52”	130°52‘52.80”	20010129～20010521	8,270	ほ場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大肥吉竹遺跡	集落	古代 古墳	竪穴住居跡32軒 溝11条 土坑24基 竪穴状遺構７基 掘立柱建物12棟	縄文土器 石器、土師器、須恵器 朱墨土器、製塩土器 瓦、瓦塔	

大肥吉竹遺跡

日田市埋蔵文化財調査報告書第48集

2004年３月19日

発　行　　日田市教育委員会
大分県日田市田島2-6-1
印　刷　　尾花印刷有限会社
大分県日田市田島本町8-8